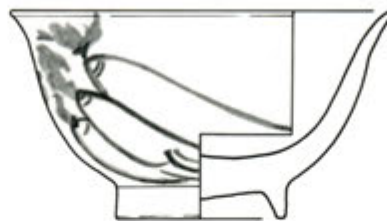


寿国寺跡 梅落遺跡



2002年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



寿国寺跡Ⅰ地区全景 ～過去と未来との共生～



染付燕子文中皿



褐釉貼付草花文植木鉢

序 文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、平成5年4月より西鹿児島駅緊急整備事業の一環として鹿児島市武遺跡から開始しました。途中、新幹線建設計画の都合により平成6年度から平成7年度までの2年間は発掘調査は中断されましたが、平成11年度からは調査体制規模を拡充し、本格的に緊急発掘調査を実施してきました。そして、平成13年5月末、川内市京田遺跡を最後に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う21か所の発掘調査の全てを終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち、鹿児島市及び伊集院町に所在する寿国寺跡・梅落遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

寿国寺跡は近世の寺院で、梯子胴木の上に切石を丁寧に築いた門前池が発見され、当時の石組技術の高さを垣間見ることができました。

今回、調査記録第IV集として発刊する本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

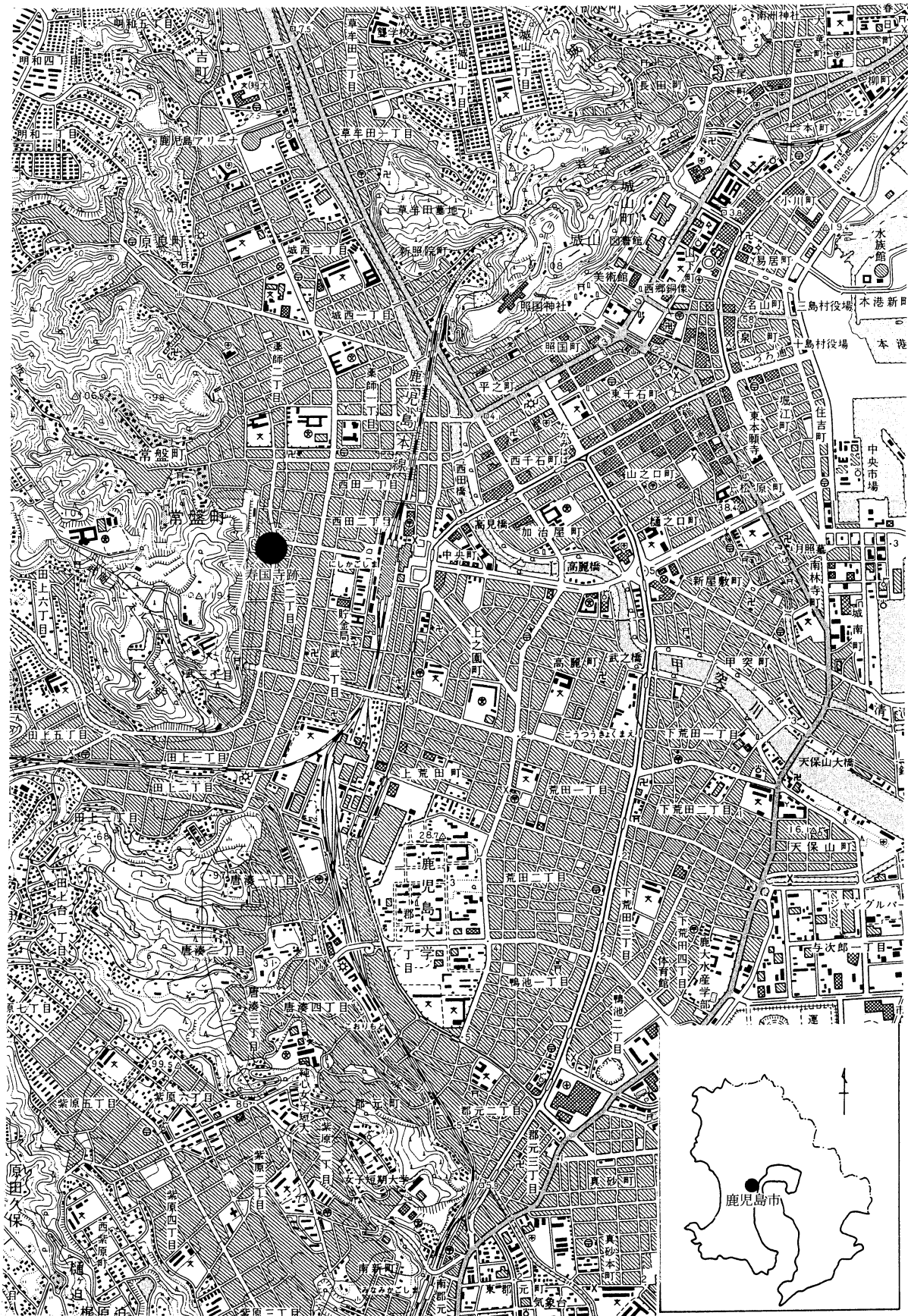
発刊にあたり、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ、ご協力をいただいた鹿児島市、伊集院町の関係部局、関係諸機関、そして、調査に参加された方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井上 明文

報告書抄録

書名	<small>じゅこくじあと ばいらくいせき</small> 寿国寺跡・梅落遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第4集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	40							
編著者名	<small>かみのそのけんじ やぎさわいちろう ひがしかずゆき せきあきえ まごめりょうどう みえひさし</small> 上之園 建二・八木澤 一郎・東 和幸・関 明恵・馬籠 亮道・彌榮久志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 始良郡始良町平松6252番地 電話0995-65-8787							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
<small>じゅこくじあと</small> 寿国寺跡	<small>かごしまけん かごしまし たけにちようめ</small> 鹿児島県 鹿児島市 武二丁目	46208	1-205	31° 34′ 52″	130° 30′ 19″	1999.5.24. ~6.11. 7.1~9.28. 2000.5.8. ~6.13.	2,100m ²	九州新幹線 鹿児島ルー ト建設に伴 う埋蔵文化 財発掘調査
<small>ばいらくいせき</small> 梅落遺跡	<small>ひおきぐん いじゅういんちよう こおり</small> 日置郡 伊集院町 郡	463639	30-58	31° 40′ 31″	130° 25′ 13″	1999.5.19 ~5.21. 6.14~6.17. 2000.6.19. ~7.14.	340m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
寿国寺跡	寺院跡	江戸時代	石組み遺構 井戸跡		陶磁器, 木製品 土製品, 金属製品			
梅落遺跡	散布地	縄文時代 中世	集石遺構		縄文土器, 石器 青磁, 土師器			



鹿児島市寿国寺跡位置図 (1/25,000)

例 言

- 1 本報告書は、平成11年度・平成12年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の受託事業として実施した「九州新幹線鹿児島ルート建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査の組織は、第Ⅰ章「発掘調査の経過」の中に記した。
- 3 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。陶磁器は2分の1、石製品は3分の1、瓦は5分の1、木製品・植物繊維製品・骨製品は3分の1、鉄製品は3分の2を原則とするが、大型鉄製品は3分の1、大型石製品は主に6分の1である。
- 6 遺構・遺物の実測や製図は主として上之園、八木澤、馬籠、東、関が行った。
ただし、遺構の実測、陶磁器・木製品の
実測・製図の一部については、(株)パスコ、
(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 7 本報告書に使用した写真図版のうち、遺構撮影は上之園・八木澤・馬籠が行い、遺物撮影については当センターの鶴田静彦・横手浩二郎が行った。
- 8 木製品の樹種同定については(株)古環境研究所に依頼し、その分析結果を掲載した。
- 9 人骨の分析については、鹿児島大学歯学部助手竹中正巳氏に依頼し、その分析結果を掲載した。
- 10 陶磁器については、鹿児島大学法文学部助教授渡辺芳郎先生の指導をうけた。
また、一部の陶磁器については、当センターの橋口亘の教示と、鹿児島陶磁器研究会の協力を受けた。以下の方々には報告書作成にあたり、有益な助言を頂いた。(敬称略)
鈴木裕子 出口浩 関一之 下鶴弘
東和幸 徳田優希乃
- 11 木製品の分類については、東京都立大学人文学部助教授山田昌久先生の指導をうけた。
- 12 鉄製品の保存処理については、当センターの三宅史子が行った。
- 13 出土した遺物は、報告書作成後、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。
- 14 本報告書の執筆・編集は上之園・八木澤が行った。
- 15 各章の執筆は、次のとおり分担して実施した。
寿国寺跡編
Ⅰ、Ⅱ章 上之園
Ⅲ章 上之園・八木澤
Ⅳ章 1節 1 馬籠, 2 関・東・彌榮,
2節 1 八木澤, 2 関・八木澤,
Ⅴ章 1 古環境研究所, 2 竹中正巳氏
Ⅵ章 1節 1・3節 馬籠, 2 八木澤
2節 関
梅落編
Ⅰ～Ⅴ章 上之園・彌榮

目次

巻頭図版 1、2	
序文	
報告書抄録	
鹿児島市寿国寺跡位置図(1/25,000)	
伊集院町梅落遺跡位置図(1/25,000)	
例言、凡例、目次、挿図目次、表目次、図版目次	
寿国寺跡	
第I章 調査の経過	12
第1節 調査に至るまでの経緯	12
第2節 調査の組織	12
第3節 調査の概要と調査経過	13
第4節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要	16
第II章 遺跡の位置と環境	19
第1節 地理的環境	19
第2節 歴史的環境	19
第III章 層位	26
第1節 I地区の層位	26
第2節 II地区の層位	26
第IV章 調査の成果	36
第1節 I地区の調査	36
第2節 II地区の調査	141
第V章 科学分析	186
第1節 寿国寺跡から出土した木製品の樹種同定	186
第2節 鹿児島市寿国寺跡出土の近世人骨	191
第VI章 まとめ	195
第1節 遺構	195
第2節 遺物	196
第3節 総括	197
図版	
梅落遺跡	
第I章 調査の経過	256
第1節 調査に至るまでの経緯	256
第2節 調査の組織	256
第3節 調査の概要と調査経過	257
第II章 遺跡の位置と環境	259
第1節 地理的環境	259
第2節 歴史的環境	259
第III章 調査概要	261
第1節 発掘調査の概要	261
第2節 層位	261
第3節 発掘調査の成果	265
第4節 まとめ	267
図版	

[寿国寺跡]挿図目次

鹿児島市寿国寺跡位置図(1/25,000)	
伊集院町梅落遺跡位置図(1/25,000)	
第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	21
第2図 寿国寺跡調査区全体図	22
第3図 薩藩沿革地図(鹿児島城下絵図)(天保年間)	23
第4図 三國名勝圖會(天保年間)	24
第5図 旧薩藩御城下絵図(安政年間)	25
第6図 I地区確認調査トレンチ土層断面図(1)	27
第7図 I地区確認調査トレンチ土層断面図(2)	28
第8図 I地区A地点西壁・南壁土層断面図	30
第9図 I地区A・B地点北壁土層断面図	31
第10図 II地区H・I-3区南壁土層断面図	32
第11図 II地区E・F-3区南壁土層断面図	33
第12図 II地区B-2・3・4区西壁土層断面図	34
第13図 II地区B・C-3区北壁土層断面図	35
第14図 I地区遺構配置全体図	37
第15図 I地区B地点遺構配置図および切石配石遺構	38
第16図 I地区B地点東側石列および方形石組み遺構断面図	39
第17図 I地区B地点方形石組み遺構実測図	41
第18図 I地区B地点石列遺構実測図1(東側・西側)	43
第19図 I地区B地点石列遺構実測図2(南側)	44
第20図 I地区B地点杭列遺構実測図1	46
第21図 I地区B地点杭列遺構実測図2(西側)	47
第22図 I地区B地点杭列遺構実測図3(東側)	49
第23図 I地区A地点遺構配置図	51
第24図 I地区A地点井戸遺構実測図	53
第25図 I地区A地点礎石遺構(1号~4号)実測図	54
第26図 I地区A地点ピット群遺構実測図	55
第27図 I地区出土遺物(1)碗(磁器)	59
第28図 I地区出土遺物(2)碗(磁器)	60
第29図 I地区出土遺物(3)碗(磁器)	61
第30図 I地区出土遺物(4)碗(磁器)	62
第31図 I地区出土遺物(5)碗(磁器)	63
第32図 I地区出土遺物(6)碗(磁器)	64
第33図 I地区出土遺物(7)碗(磁器)	65
第34図 I地区出土遺物(8)碗(磁器)	66
第35図 I地区出土遺物(9)碗(磁器)	67
第36図 I地区出土遺物(10)碗(陶器)	68
第37図 I地区出土遺物(11)碗(陶器)	69
第38図 I地区出土遺物(12)碗(陶器)	70
第39図 I地区出土遺物(13)皿(磁器)	74
第40図 I地区出土遺物(14)皿(磁器)	75
第41図 I地区出土遺物(15)皿(磁器)	76
第42図 I地区出土遺物(16)皿(磁器)	77
第43図 I地区出土遺物(17)皿(磁器)	78
第44図 I地区出土遺物(18)皿(磁器)	79
第45図 I地区出土遺物(19)皿(陶磁器)	80
第46図 I地区出土遺物(20)鉢(磁器)	83
第47図 I地区出土遺物(21)鉢(陶磁器)	84
第48図 I地区出土遺物(22)蓋(磁器)	86
第49図 I地区出土遺物(23)蓋(磁器)	87
第50図 I地区出土遺物(24)蓋(陶磁器)	88
第51図 I地区出土遺物(25)土瓶・酒注・薬缶(陶器)	90
第52図 I地区出土遺物(26)急須・瓶類(陶器)	91
第53図 I地区出土遺物(27)仏具(陶磁器)	93
第54図 I地区出土遺物(28)灯明具(陶器)	94
第55図 I地区出土遺物(29)陶磁器・土製品	96
第56図 I地区出土遺物(30)播鉢	97
第57図 I地区出土遺物(31)鉢	98
第58図 I地区出土遺物(32)鉢	99
第59図 I地区出土遺物(33)甕・壺	100
第60図 I地区出土遺物(34)植木鉢	101
第61図 I地区出土遺物(35)大鉢・大壺	102
第62図 I地区出土遺物(36)その他	103
第63図 I地区出土遺物(37)確認トレンチ	106
第64図 I地区出土遺物(38)確認トレンチ	107
第65図 I地区出土遺物(39)確認トレンチ4土坑	108
第66図 I地区出土遺物(40)碗(陶器)	110
第67図 I地区出土遺物(41)土製品	113

第68図	I地区出土遺物(42)瓦	114
第69図	I地区出土遺物(43)金属製品・鉄製品1	116
第70図	I地区出土遺物(44)金属製品・鉄製品2	117
第71図	I地区出土遺物(45)金属製品・銅製品	118
第72図	I地区出土遺物(46)井戸内出土銭貨	119
第73図	I地区出土遺物(47)銭貨	119
第74図	I地区出土遺物(48)石製品1	122
第75図	I地区出土遺物(49)石製品2	123
第76図	I地区出土遺物(50)石製品3	124
第77図	I地区出土遺物(51)漆製品	125
第78図	I地区出土遺物(52)木製品・杭状製品1	127
第79図	I地区出土遺物(53)木製品・杭状製品2	128
第80図	I地区出土遺物(54)木製品・杭状製品3	129
第81図	I地区出土遺物(55)木製品・棒状製品	130
第82図	I地区出土遺物(56)木製品・板状製品1	131
第83図	I地区出土遺物(57)木製品・板状製品2	132
第84図	I地区出土遺物(58)木製品・板状製品3	133
第85図	I地区出土遺物(59)木製品・雑器1-底板・ふた	135
第86図	I地区出土遺物(60)木製品・雑器2	136
第87図	I地区出土遺物(61)木製品・雑器3	137
第88図	I地区出土遺物(62) 木製品・雑器4-破魔・栓	138
第89図	I地区出土遺物(63) 木製品・雑器5-下駄・植物繊維製品/骨角製品	140
第90図	II地区遺構配置全体図(1) (H・I-2・3区、E・F-2・3区)	142
第91図	II地区遺構配置全体図(2)(A-C-2~5区)	143
第92図	II地区H・I-2・3区遺構配置図	144
第93図	II地区B・C-2・3区遺構配置図	146
第94図	II地区B・C-2・3区検出土坑実測図	148
第95図	II地区B-3・4区検出土坑配置図	149
第96図	II地区瓦廃棄土坑出土遺物(1)	151
第97図	II地区瓦廃棄土坑出土遺物(2)	152
第98図	II地区P-2出土遺物	153
第99図	II地区出土遺物(1)碗(磁器)	155
第100図	II地区出土遺物(2)碗(陶器)	156
第101図	II地区出土遺物(3)皿・鉢(陶磁器)	158
第102図	II地区出土遺物(4)陶磁器・土製品	159
第103図	II地区出土遺物(5)搦鉢	161
第104図	II地区出土遺物(6)鉢	162
第105図	II地区出土遺物(7)壺・壺・その他	163
第106図	II地区出土遺物(8)土師質土器	165
第107図	II地区出土遺物(9)瓦(1)	166
第108図	II地区出土遺物(10)メンコ(陶器)	168
第109図	II地区出土遺物(11)中世の遺物(青磁・搦鉢)	169
第110図	II地区出土遺物(12)確認トレンチ出土遺物	171
第111図	II地区出土遺物(13)瓦(2)	173
第112図	II地区出土遺物(14)瓦(2)	174
第113図	II地区出土遺物(15)金属製品(鉄製品・銅製品)	176
第114図	II地区出土遺物(16)金属製品・銭貨・石製品	177
第115図	II地区出土遺物(17)石製品(1)	178
第116図	II地区出土遺物(18)石製品(2)	179
第117図	II地区出土遺物(19)古代の遺物	180
第118図	II地区出土遺物(20)古墳時代の遺物(1)	182
第119図	II地区出土遺物(21)古墳時代の遺物(2)	183
第120図	II地区出土遺物(22)古墳時代の遺物(3)	184

表目次

第1表	周辺遺跡・寺院等地名表	20
第2表	I地区出土遺物一覧表・碗(磁器)1	70
第3表	I地区出土遺物一覧表・碗(磁器)2	71
第4表	I地区出土遺物一覧表・碗(陶磁器)3	72
第5表	I地区出土遺物一覧表・碗(陶器)4	73
第6表	I地区出土遺物一覧表・皿(磁器)1	81
第7表	I地区出土遺物一覧表・皿(陶磁器)2	82
第8表	I地区出土遺物一覧表・鉢(陶磁器)	85
第9表	I地区出土遺物一覧表・蓋(陶磁器)	89
第10表	I地区出土遺物一覧表・土瓶・酒注・薬缶(陶器)	92
第11表	I地区出土遺物一覧表・仏具・灯明具(陶磁器)	95
第12表	I地区出土遺物一覧表・その他(陶磁器・土製品)	99

第13表	I地区出土遺物一覧表・搦鉢・鉢・壺	104
第14表	I地区出土遺物一覧表・壺・鉢・土製品・碗	105
第15表	I地区出土遺物一覧表・確認トレンチ	109
第16表	I地区出土遺物一覧表・確認トレンチ4土坑	109
第17表	I地区出土遺物一覧表・碗・その他(陶磁器・土師質)	111
第18表	I地区出土遺物一覧表・土製品・瓦	112
第19表	I地区出土遺物一覧表・金属製品	118
第20表	I地区古銭一覧表	120
第21表	I地区出土遺物一覧表・石製品	121
第22表	I地区出土遺物一覧表・漆製品	125
第23表	I地区出土遺物一覧表・木製品	134
第24表	II地区出土遺物一覧表・瓦廃棄土坑1	153
第25表	II地区出土遺物一覧表・瓦廃棄土坑2・P2出土遺物	154
第26表	II地区出土遺物一覧表・碗(陶磁器)	157
第27表	II地区出土遺物一覧表・皿・鉢(陶磁器)・土製品・搦鉢	160
第28表	II地区出土遺物一覧表・鉢・壺・その他(陶器)	164
第29表	II地区出土遺物一覧表・その他(土師質土器・陶器)1	166
第30表	II地区出土遺物一覧表・灯明皿 その他(土師質土器・陶器)2	167
第31表	II地区出土遺物一覧表・メンコ(陶器)	167
第32表	II地区出土遺物一覧表・碗(磁器)・搦鉢	168
第33表	II地区出土遺物一覧表・確認トレンチ出土遺物	170
第34表	II地区出土遺物一覧表・瓦	172
第35表	II地区出土遺物一覧表・鉄製品	175
第36表	II地区出土古銭一覧表	185
第37表	II地区出土石製品一覧表	185
第38表	古代・古墳時代遺物観察表	185

図版目次

図版1	① I地区2T北壁土層断面状況	198
	② I地区9T北壁土層断面状況	198
図版2	① I地区B地点遺構検出状況	199
	② I地区B地点方形石組み遺構および下部胴木検出状況	199
図版3	I地区B地点方形石組み遺構下部胴木検出状況	200
図版4	① I地区B地点東側石列遺構下部胴木検出状況	201
	② I地区B地点南側石列遺構下部胴木検出状況	201
	③ I地区B地点西側石列遺構検出状況	201
図版5	① I地区B地点杭列遺構検出状況(杭2、14)	202
	② I地区B地点杭列遺構検出状況(杭4)	202
図版6	① I地区B地点杭列遺構検出状況(杭11)	203
	② I地区B地点杭列遺構検出状況(杭13)	203
	③ I地区B地点杭列遺構検出状況(杭7)	203
図版7	① I地区B地点杭列遺構検出状況(杭1)	204
	② I地区B地点杭列遺構検出状況(杭9)	204
	③ I地区B地点杭列遺構検出状況(杭10)	204
図版8	① I地区B地点杭列遺構検出状況(杭12)	205
	② I地区A地点ピット群遺構検出状況(ピット11)	205
図版9	① I地区A地点ピット群遺構検出状況(ピット3)	206
	② I地区A地点ピット群遺構検出状況(ピット4)	206
図版10	I地区A地点井戸検出状況	207
図版11	① I地区A地点礎石遺構検出状況(礎石3号)	208
	② I地区A地点礎石遺構完掘状況(礎石3号)	208
図版12	① I地区A地点礎石遺構検出状況(礎石1号)	209
	② I地区A地点礎石遺構完掘状況(礎石4号)	209
図版13	① II地区H・I-2・3区遺物出土状況(確認調査T3)	210
	② II地区H・I-2・3区遺物出土状況(確認調査T4)	210
	③ II地区H・I-2・3区北壁土層断面(確認調査T4)	210
	④ II地区H・I-2・3区南壁土層断面状況	210
図版14	① II地区H・I-2・3区完掘状況	211
	② II地区H・I-2・3区溝状遺構検出状況	211
図版15	① II地区H・I-2・3区遺構検出状況(西側)	212
	② II地区H・I-2・3区遺構検出状況(西側)	212
	③ II地区H・I-2・3区遺構検出状況(東側)	212
	④ II地区H・I-2・3区井戸跡検出状況	212
図版16	① II地区E・F-3区南壁土層断面状況	213
	② II地区E・F-2・3区北壁土層断面状況 (確認調査T7)	213
	③ II地区E・F-2・3区遺物出土状況(確認調査T7)	213
	④ II地区E・F-2・3区遺構検出状況	213
図版17	① II地区B-2区北壁土層断面状況(確認調査T8)	214

② II地区B-3・4区遺物出土状況	214
③ II地区B-3区北壁土層断面状況	214
④ II地区B・C-3区北壁土層断面状況	214
図版18 ① II地区B・C-3・4区遺構完掘状況(南側から)	215
② II地区B・C-3・4区遺構完掘状況(北側から)	215
図版19 ① II地区B・C-3・4区遺構完掘状況(南側から)	216
② II地区B・C-2・3区遺構完掘状況(南側から)	216
図版20 ① II地区B・C-3・4区土坑完掘状況(北側から)	217
② II地区B-5区土坑完掘状況(東側から)	217
③ II地区B-4区土坑内礎石検出状況	217
図版21 ① II地区B-2区土壌1半裁状況	218
② II地区B-2区土壌1人骨検出状況	218
図版22 ① II地区C-3区土壌1人骨検出状況	219
② II地区C-3区土壌2人骨検出状況	219
図版23 ① II地区C-3区土壌3半裁状況	220
② II地区C-3区土壌3人骨検出状況	220
図版24 II地区C-3区土壌3人骨検出状況	221
図版25 ① II地区B-3区土坑検出状況	222
② II地区B・C-3・4区土坑検出状況	222
図版26 ① 確認調査風景	223
② 緊急発掘調査風景(II地区H・I-2・3区)	223
図版27 ① I地区B地点土製品出土状況(445)	224
② I地区B地点木製品・横樋出土状況(395)	224
図版28 ① I地区B地点木製品・板状製品出土状況(374)	225
② I地区B地点木製品・雑器出土状況(375)	225
図版29 ① I地区B地点漆製品出土状況(340)	226
② I地区B地点木製品・下駄出土状況(414)	226
図版30 ① I地区B地点漆製品出土状況(339)	227
② I地区B地点陶磁器出土状況	227
図版31 I地区出土遺物(陶磁器・他)	228
図版32 I地区出土遺物(陶磁器・他)	229
図版33 I地区出土遺物(磁器)	230
図版34 I地区出土遺物(陶磁器)	231
図版35 I地区出土遺物(陶器・灯明具・鉢・その他)	232
図版36 I地区出土遺物(陶器・播鉢)	233
図版37 I地区出土遺物(陶磁器)	234
図版38 ① I地区出土遺物(土製井戸枠)	235
② I・II地区出土遺物(土製人形)	235
③ I・II地区出土遺物(瓦・平瓦・軒平瓦)	235
④ I・II地区出土遺物(瓦・軒平瓦)	235
図版39 ① I・II地区出土遺物(瓦・丸瓦)	236
② I地区出土遺物(瓦・軒丸瓦・軒棧瓦)	236
図版40 I・II地区出土遺物(金属製品1)	237
図版41 I・II地区出土遺物(金属製品2)	238
図版42 I・II地区出土遺物(銭貨)	239
図版43 ① I地区出土遺物(鋳物関係)	240
② I地区出土遺物(石製品1)	240
図版44 I地区出土遺物(石製品)	241
図版45 I地区出土遺物(木製品・杭状製品)	242
図版46 I地区出土遺物(木製品・棒状製品)	243
図版47 I地区出土遺物(木製品・板状製品)	244
図版48 ① I地区出土遺物(木製品・板状製品)	245
② I地区出土遺物(木製品・底板・蓋)	245
図版49 I地区出土遺物(木製品・板状製品・雑器)	246
図版50 ① I地区出土遺物(木製品・栓・破魔)	247
② I地区出土遺物(木製品・下駄)	247
③ I地区出土遺物(漆製品・植物繊維製品)	247
図版51 II地区出土遺物(磁器・碗)	248
図版52 ① I・II地区出土遺物(陶器・メソコ)	249
② II地区出土遺物(染付)	249
図版53 II地区出土遺物(陶器・薩摩焼・人形)	250
図版54 II地区出土遺物(陶器・播鉢・片口・土師鍋把手)	251
図版55 II地区出土遺物(陶器・鉢)	252
図版56 ① II地区出土遺物(土製品)	253
② II地区出土遺物(石製品)	253
図版57 II地区検出獣骨	254

第3図 梅落遺跡調査区全体図	262
第4図 1T・2T土層断面図	263
第5図 3T・4T土層断面図	264
第6図 集石遺構検出状況図(B-11区)	266
第7図 梅落遺跡出土遺物 土器・石器・陶磁器	268

表目次

第1表 周辺遺構地名表	259
第2表 梅落遺跡出土遺物観察表	267

図版目次

図版1 ① 1T土層断面状況	269
② 3T土層断面状況	269
図版2 ① 2T西壁土層断面状況	270
② 3T西壁土層断面状況	270
③ 3T遺物出土状況	270
④ 梅落遺跡完掘状況	270
図版3 ① 5T北壁土層断面状況	271
② 6T北壁土層断面状況	271
③ 6T西壁土層断面状況	271
④ 集石遺構検出状況(B-11区)	271
図版4 梅落遺跡出土遺物(石器・土器・陶磁器)	272

[梅落遺跡]挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	260
第2図 基本土層図	261

寿国寺跡

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は、九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業予定地内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。それを受けて文化課は、平成4年12月に予定地内の分布調査を実施し、21か所の遺跡を確認した。また、西鹿児島駅舎予定地内の武A・B・C遺跡については協議の結果、それぞれ確認調査、緊急発掘調査が進められた。

その後、分布調査に基づいて、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局、県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センターの三者で新幹線ルート内の各遺跡の取り扱いについて協議し、平成8年度から用地取得等条件の整った遺跡から確認調査、緊急発掘調査を実施することとなった。

平成8年度は、出水市鳥越平遺跡の確認調査と川内市大原野遺跡の確認調査を実施し、大原野遺跡では、上下2枚の遺物包含層が確認され、着工前に緊急発掘調査が必要となった。

平成9年度は、川内市大原野遺跡において緊急発掘調査を実施した後、川内市前畑遺跡の確認調査と部分的な緊急発掘調査とを実施した。

平成10年度は、川内市前畑遺跡では前年度未調査部分の緊急発掘調査と、ほか12か所の遺跡について確認調査及び緊急発掘調査を実施した。

平成11年度は、伊集院町の梅落遺跡ほか4遺跡と鹿児島市寿国寺跡の確認調査及び一部緊急発掘調査を実施した。

平成12年度は、前年度未調査であった部分と、新たに用地確保がなされた部分とについて緊急発掘調査を実施した。

平成13年度は、寿国寺跡・梅落遺跡の整理・報告書作成作業を県立埋蔵文化財センター内で実施した。

第 2 節 調査の組織

事業主体者 日本鉄道建設公団九州新幹線建設局

調査主体者 鹿児島県教育委員会

調査企画調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所	長	吉永 和人（平成11年度）
	々	所	長	井上 明文（平成12～13年度）
調査企画者	々	次	長	黒木 友幸（平成11～13年度）
	々		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋（平成11年度）
	々		主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一（平成12～13年度）
	々		課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一（平成11年度）
	々		主任文化財主事兼課長補佐	立神 次郎（平成12～13年度）
	々		主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎（平成11年度）
	々		主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志（平成12～13年度）

	々	主任文化財主事	彌榮 久志 (平成11年度)
調査担当者	々	文化財主事	上之園 建二 (平成11～13年度)
	々	文化財主事	八木澤 一郎 (平成11・13年度)
	々	文化財研究員	馬籠 亮道 (平成12年度)
	々	文化財調査員	徳田 有希乃 (平成12年度)
調査事務担当	々	総務係長	有村 貢 (平成11～12年度)
	々	総務係長	前田 昭信 (平成13年度)
	々	主査	今村 孝一郎 (平成11～13年度)
	々	主事	溜池 佳子 (平成11～12年度)
	々	主事	池 珠美 (平成13年度)
現地指導者	鹿児島大学工学部	教授	土田 充義 (平成12年度)
	鹿児島大学法文学部	教授	原口 泉 (平成12年度)
整理指導者	鹿児島大学法文学部	助教	渡辺 芳郎 (平成13年度)
	鹿児島大学歯学部	助手	竹中 正巳 (平成13年度)

第3節 調査の概要と調査経過

1 調査の概要

(1) 平成11年度の調査（確認調査及び寿国寺跡Ⅱ地区の緊急発掘調査）

5月6日より調査条件の整った伊集院町山ノ脇遺跡から確認調査を開始した。その後、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（以下公団）の要請により、山ノ脇遺跡の確認調査を一時中断して、緊急度の高い鹿児島市武二丁目のトンネル口付近（以下寿国寺跡Ⅱ地区）の確認調査を5月24日から6月11日にかけて実施した。その結果、埋蔵文化財の存在が確認されたため、公団・県文化財課・県立埋蔵文化財センターの三者間の協議により、7月1日から寿国寺跡Ⅱ地区の緊急発掘調査を実施した。その間、寿国寺跡Ⅱ地区東側から西鹿児島駅舎間（以下寿国寺跡Ⅰ地区）の確認調査も実施して、寿国寺跡Ⅰ地区での埋蔵文化財の存在を確認した。寿国寺跡Ⅱ地区の緊急発掘調査では、陶磁器類や仏具等が出土し、瓦廃棄土坑や柱穴、土壙、シラスを掘削し整地した道跡等を検出した。緊急発掘調査は9月28日に終了した。

(2) 平成12年度の調査（寿国寺跡Ⅰ地区の緊急発掘調査）

昨年度実施した確認調査の結果に基づき、埋蔵文化財を確認した2橋脚部分の緊急発掘調査を5月8日から伊集院町西原遺跡と同時並行の形で、作業班を2分して実施した。調査の結果、寿国寺に関係する門前池や井戸跡を検出した。また、池の周囲から木製品や金属製品、陶磁器類が多く出土した。遺構の検出状況から、当初設定した範囲を拡張しながら発掘調査を実施し、6月13日までに調査の全てを終了した。

(3) 平成13年度の調査（整理・報告書作成作業）

県立埋蔵文化財センター内において、4月から寿国寺跡・梅落遺跡の整理・報告書作成作業を実施し、3月末埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行した。

2 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄から略述する。

(1) 平成11年度の調査

a 寿国寺跡Ⅱ地区の確認調査 <5月25日(火)～6月11日(金)>

1～10トレンチ掘り下げ。瓦廃棄土坑検出。土層断面実測。トレンチ埋め戻し。

※ 寿国寺跡Ⅱ地区の確認調査終了後、調査結果に基づき、公団と県立埋蔵文化財センターとの協議により、緊急発掘調査を7月から開始することが決定する。

b 寿国寺跡Ⅱ地区の緊急発掘調査及び寿国寺跡Ⅰ地区の確認調査<7月1日(木)～9月24日(金)>

(7月) B～C-2～4区。ミニトレンチ設定、掘り下げ。

B-2区、B～C-3～4区黒色土掘り下げ。B-2～4区東壁土層状況写真撮影。

矢板①部分(F～G-2～3区)の造成面重機による掘り下げ。

矢板①部分の黒色土上面まで掘り下げ。B-3～4区遺構検出。

(8月) B-3～4区シラス上面精査。B-2区掘り下げ。

矢板②部分(H～I-2～3区)造成面重機による掘り下げ。

B-3～4区斜面部・矢板①部分掘り下げ。B～C-3～4区遺構掘り上げ。

矢板②部分掘り下げ。矢板①部分シラス上面で遺構検出。矢板①部分遺構検出。

矢板②部分土坑掘り上げ。B-4区石組周辺精査。B～C-3区北壁土層断面実測。

(9月) H～I-2～3区ベルト部掘り下げ。B-4区東側斜面の掘り下げ。

B-4区遺構掘り上げ。C-2区重機による表土掘り下げ。

B～C-3～4区シラス整地面検出。C-2区シラス整地面検出。土壌検出。

22日(水)人骨についての現地指導(鹿児島大学歯学部竹中正巳氏)。

寿国寺跡Ⅰ地区の確認調査トレンチ1～10の掘り下げ、トレンチ埋め戻し、発掘機材撤収

(2) 平成12年度の調査

a 寿国寺跡Ⅰ地区緊急発掘調査 <5月8日(月)～6月13日(火)>

(5月) A地点(N-2～3区)旧表土除去。Ⅱ層上面精査。Ⅱ層掘り下げ。1号礎石完掘。2号礎石が井戸跡と判明。井戸内底部より古銭出土。

B地点(P-2～3区)旧表土除去。Ⅳ層掘り下げ。石組遺構検出。石組付近掘り下げ。

木製櫛出土。池部(黒色粘質土)掘り下げ。池部より杭跡検出。組石下部より木材検出。

A・B地点間の表土除去(調査地区拡張のため)。石組遺構が寿国寺門前池の可能性大。

所長視察。池部掘り下げ。礎石状の石造物1対出土。A・B中間部分のⅡ層掘り下げ。

(6月) ピット半裁・完掘状況写真撮影。杭列・ピット配置図作成。県文化財課長視察。

県教育委員会教育長・教育次長視察。

現地指導(鹿児島大学工学部教授 土田充義氏・鹿児島大学法文学部教授 原口泉氏)

A地点 Ⅶ層掘り下げ。Ⅷ層上面でピット検出。井戸跡遺構掘り下げ、実測完了。

B地点 杭列写真撮影。組石取り上げ。胴木検出。方形石組み遺構完掘。胴木取り上げ。

土層断面図等実測終了。埋め戻し。発掘機材撤収。

3 発掘調査及び報告書作成作業従事者

(1) 発掘調査作業従事者（平成11年度, 平成12年度）

有村克己 有村ひろみ 池田伊智子 今村良子 川路秋江 楠原操 佐伯イツ子
坂田重盛 坂元みどり 芝原ハルエ 末吉裕子 瀬戸正文 武田末武 西ノブ子
田中真由美 永野里枝子 橋口晶子 花山尚子 原之園笑子 東絹子 東鶴子 平岡栄子
外園三千代 外園ミネ子 前村昭己 屋地暁子 山内正子 山口ふみ 増満みき子
益山ヨリ子 松岡三郎 弓削一枝 天野豊子 有馬幸子 今村妙子 吉富みどり
吉村より子 宇都妙子 仮屋郁夫 岸上正子 久保紀子 園田辰夫
尾堂佳代美 大内山秋子 高倉孝子 堀内朗子 松尾スミエ 南ノブ子 宮下巧
宮下マキ子 森田辰夫 山口節子 茶屋道良子 松山敬子 脇マス子 馬場園七百子

(2) 報告書作成作業従事者（平成13年度）

川畑明子 木佐貫いく子 久保マリ子 竹下美和子 藤田ひとみ 堀口由美子
福重恵子 山之内美和子 山下道代 大村彌紀 槐島洋子 児玉恭子 末原涼子
長井真理子 中野由美 丸野弥生 吉村昌子 湯之上さゆり 四元宏美 和田まり子

第4節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、平成5年5月12日より鹿児島市武遺跡から開始し、平成13年5月30日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、一覧表のとおりである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計5日間	240㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式、轟式、磨製石斧、黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日間	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鏡・安原	出水市安原町	H11.2.17, 18 H11.2.24, 25 H11.3.9 計5日間	60㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器、黒曜石、土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6 ～12.3.31 H12.5.1 ～13.3.27 計420日間	27,247㎡	彌榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基、平安期竈付竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡9棟、焼土遺構3基、溝状遺構30条、波板状遺構27条、上加世田式、入佐式、黒川式、土師器、須恵器、玉縁白磁、滑石製石鍋、鉄製品、刻書土器、石鏃、磨製石斧、打製土掘り具、石匙、石皿、磨石、凹石、異形石器、玉類(勾玉6、管玉25、丸玉5、平玉3、垂飾品1、剥片46、未製品30)
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12,5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期	土器、黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1 ～H10.3.31 H10.5.6 ～H12.12.24 H11.12.13 ～H12.2.24 計195日間	11,800㎡	長野真一 上床 真 彌榮久志 前田 誠 宮田榮二 平木場秀男	旧石器時代 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑25(陥し穴含)基、集石4基、竪穴状遺構1基、五輪塔、大型掘立柱建物跡7軒、ナイフ形石器、細石刃核、吉田式、石坂式、轟式、石鏃、石斧、石皿、磨石、敲石、土師器、青磁、白磁、染付薩摩焼。

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23 ～H13.3.26 計218日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡5棟、土坑墓3基、円形周溝状遺構1基、土坑5基、中世掘立柱建物跡2棟、古道、溝状遺構、早期押型文土器、後期の土器、磨製石鏃、打製石斧、石錐、ピエス、スクレイパー、磨石、石皿、石匙、石鏃、砥石、土師器、須恵器、瓦、青磁、白磁、滑石製品、刀子、青銅製品、紡錘車。
10	京田 (薩摩国分 寺下)	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～6.6 H12.9.4 ～H13.3.24 H13.4.9～5.31 計191日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡、土留め状遺構、杭列、ウケ跡、ドングリピット、古代水田跡、弥生土器、三又鍬、二又鍬、大足、一本梯子、横架材、網杵、曲物、土師器、須恵器、瓦。
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ～H12.3.24 H12.5.7 ～H13.3.19 計275日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒、土坑1基、古墳期竪穴住居跡1軒、平安期竪穴住居跡31軒(竈付2軒)、掘立柱建物跡2棟、土坑墓1、中世竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、畠跡、弥生期甕・壺、石包丁、磨製石鏃、古墳期成川式、須恵器、太刀、剣、鉄鏃、平安期土師器、須恵器、瓦、越州窯青磁、緑釉、陶器、転用硯、帯金具、石製丸柄、玉類、土錘、金環、青銅製鈴、鉄製品。
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1 ～12.27 計103日間	2,850㎡	彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基、土坑2基、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、畠跡、炉跡7基、越州窯系青磁、陶器壺、土師器、鉄滓、古銭、中世青磁、鉄製品(鎌、鋤先、紡錘車、鉄鏃)、近世薩摩焼、平佐焼、伊万里焼、土師器、羽口、鉄滓
13	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計209日間	1,800㎡	彌榮久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡2軒、炉跡2基、土坑12基、溝7条(杭列を伴う溝1条)縄文期押形文・市来式・西平式・北久根山式、弥生～古墳期土器、木製平鍬、又鍬、横鍬、鍬の柄、掘り棒、丸木弓、容器(未製品)、櫛状木製品。
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1 ～3.24 H12.5.1 ～H13.3.29 計316日間	19,400㎡	前田 誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟、土坑墓3基、方形竪穴建物跡5軒、溝4条、古道1条、畠跡、剥片尖頭器、ナイフ形石器、押形文、石坂式、阿高式、土師器、石皿、敲石、凹石、石鏃、土師器、須恵器、白磁、青磁、短刀、古銭、滑石製石鍋、中世陶器、鉄鏃

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生 誠 上床 真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器, 細石器, 吉田式, 石坂式, 条痕土器, 轟式, 石鏃, 石皿, 磨石, 敲石, 石斧
16	東下原	日置郡東市来 町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑, 細石刃核, 成川式, 土師器。
17	上ノ平	日置郡伊集院 町下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒, 集石4基, 中世溝1条, 細石刃核, 指宿式, 磨製石斧, 石鏃。
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院 町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1 ～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石:草創期1基, 早期3基, 中期3基, 中世溝, 農具埋納土坑, 掘立柱建物跡12棟, 縄文早期土器, 船元式, 成川式, 土師器, 陶磁器(中国南部), 滑石製石鍋。
19	梅落	日置郡伊集院 町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19 ～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石, 塞ノ神式, スクレイパー。
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
21	武ABC 寿国寺跡	鹿児島市武 一丁目 鹿児島市武 二丁目	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6 ～H6.2.21 H6.3.9～30 H11.5.24 ～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日間	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前期 縄文中期 弥生中期 近世	古墳住居跡27軒, 土坑18基, 溝2条ピット30, 近世溝9条, 轟式, 深浦式, 春日式, 船元式, 山之口式, 成川式, 陶器, 磁器, 瓦, 木製品, 金属製品, 寿国寺跡のはん池(門前池)跡, 土壇。
22	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日間	22㎡	彌榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回調査した寿国寺跡は鹿児島市武二丁目に所在する。

遺跡が所在する鹿児島市は鹿児島県本土の中心にあたり、50万都市の県都で九州南部の玄関口として発達している。

九州南部の鹿児島県は西の薩摩半島と東の大隅半島に分けられ、その間に鹿児島湾（錦江湾）が奥深く南北に入り込んだ地形をしている。鹿児島湾は、地質学上でいうカルデラ形成によってつくられている。南に位置する阿多カルデラ、北に位置する始良カルデラ等がその例である。

始良カルデラは約24,000年前にできたもので、大量の火山灰を吹き上げている。鹿児島によく見られるシラスはこの火山の火山灰で地質学的に火砕流と呼ばれるものである。シラスは標高約250～280mの台地を形成しているが、水には弱く浸食谷があちこち形成され、高い台地や低い台地がある。

鹿児島市街地は、北から稲荷川・甲突川・新川の3河川の複合平野の上に発達し、周囲のシラス台地が浸食を受け堆積物を供給してできたシラス低地の中に位置する。

寿国寺跡は、鹿児島市街地のほぼ中央部、武岡のシラス台地崖下の傾斜地から低地部へとつながる、標高約22mから9mの部分に位置する。

後年、遺跡周辺は宅地化により、造成が進んできている。

第2節 歴史的環境（第1表・第1図参照）

鹿児島市における先史時代の遺跡は、加栗山遺跡・加治屋園遺跡（旧石器時代）、前平遺跡（縄文時代早期）、草野貝塚（縄文時代後期）、釘田遺跡（古墳時代）など、多くが存在する。また、中世以降になると島津氏に関係する城や寺院が多く存在したが、現在ではその姿をとどめているものは少ない。

寿国寺跡周辺には、縄文時代から古墳時代にかけての遺物や集落跡が確認された武A・B・C遺跡や山城の武岡城跡がある。

天保14年『薩藩沿革地図』の鹿児島城下絵図（第3図参照）によると、当時、寿国寺の周辺には千眼寺をはじめとして、多くの寺院が立ち並び、いわゆる寺町通りを形作っていたことがわかる。また、寿国寺門前の記述が他の寺院と比べて多く見られることから、寺院の大きさが想像できる。

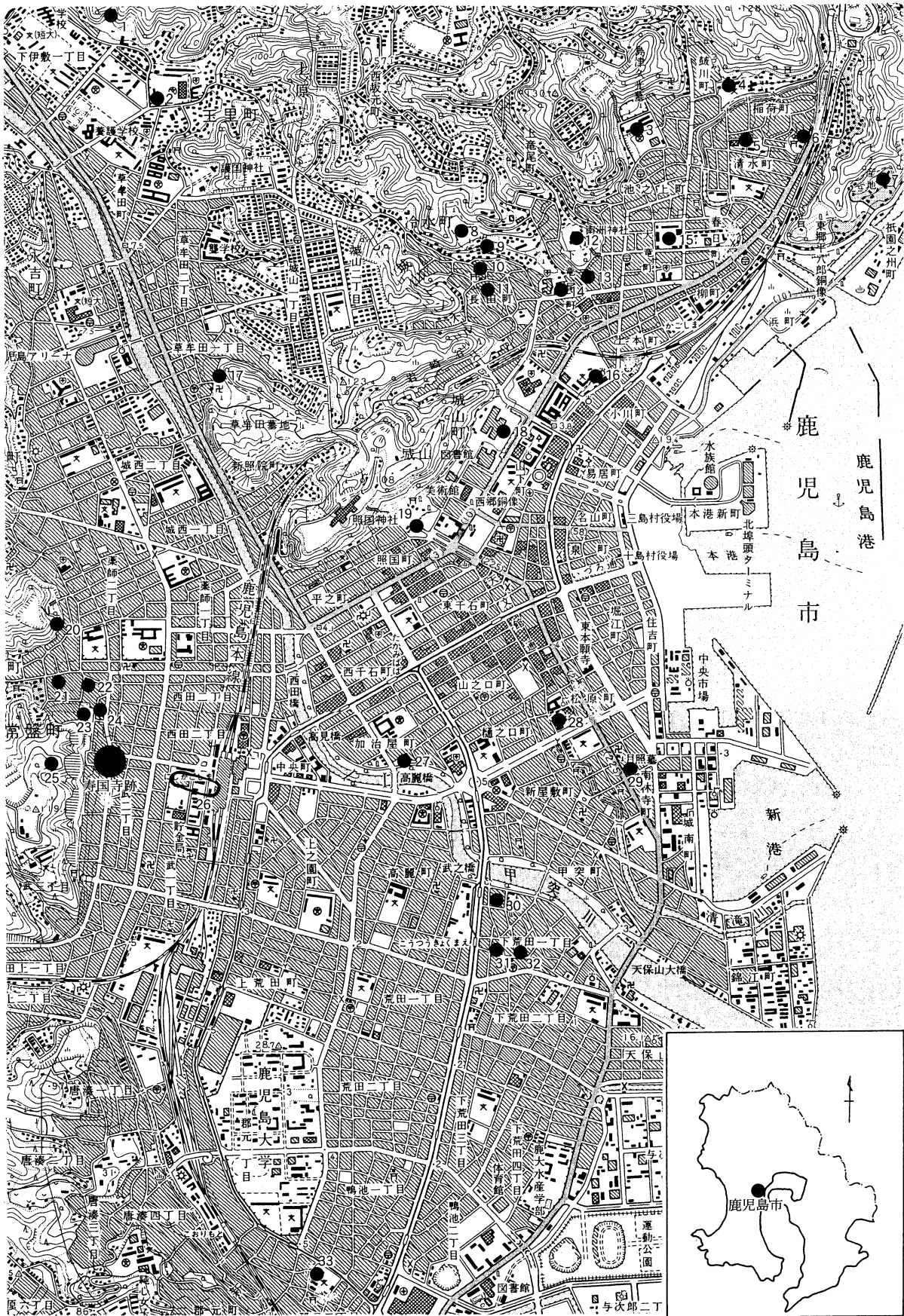
三國名勝図會（第4図参照）によると、享保14年、真言宗地蔵院を武に移し、寿国寺と改めたとある。寿国寺の本山は禅宗の一派、黄檗宗総本山「万福寺」で、中国的雰囲気溢れる大寺院であったという。

古地図や三國名勝図會など、どの図にも門前池の存在が記載（第3～5図参照）され、相当規模の寺院であったことがこのことから想像できる。

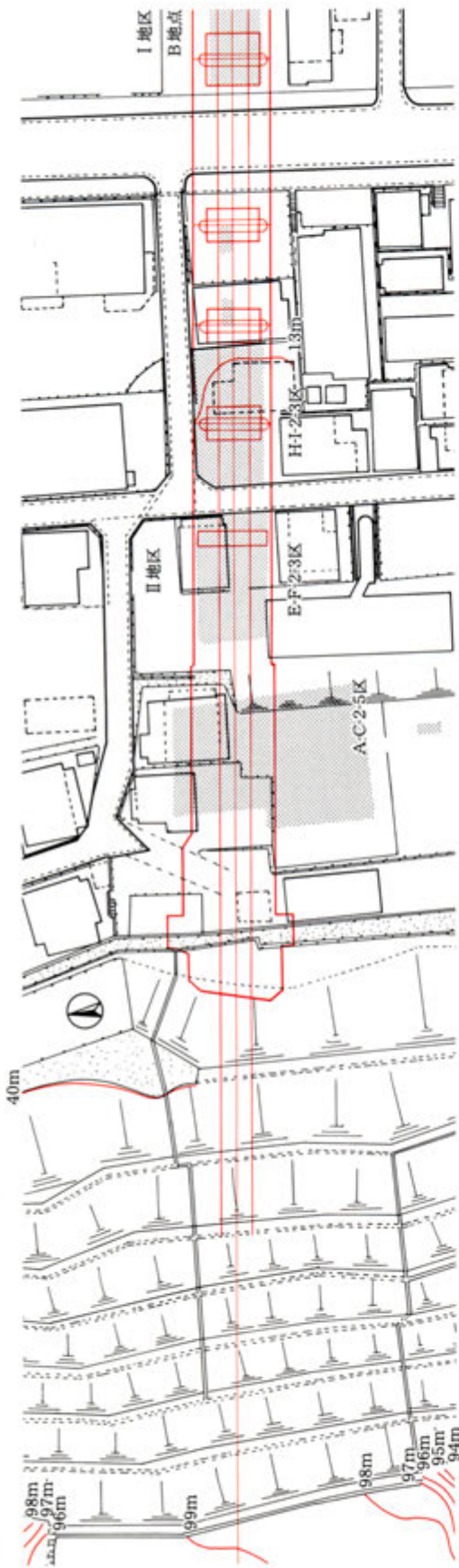
しかしながら、この大寺院も現在ではその姿をほとんど残していないのは非常に残念なことである。

第1表 周辺遺跡・寺院等地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考 (遺物他)
1	妙谷寺	下伊敷町	中世～近世	曹洞宗 本山福昌寺 (鹿児島市)
2	玉里邸	玉里町3382-1	近世	長屋門, 茶室, 池, 高枡
3	福昌寺跡	池之上町	中世～近世	曹洞宗 本山総持寺 (石川県)
4	大乘院跡	稲荷町	中世～近世	真言宗 本山三宝院・大覚寺 (京都市)
5	稲荷窯跡	稲荷町	近世	「薩摩焼の研究」1941
6	南方神社	清水町	近世	別名諏訪神社, 上町五社の一つ
7	田ノ浦窯	清水町	近世	薩摩焼, 窯道具, 「薩摩焼の研究」1941
8	興国寺跡	冷水町	中世～近世	曹洞宗 本山福昌寺 (鹿児島市)
9	堅野窯跡	冷水町	近世	「堅野 (冷水) 窯跡」1976
10	長田窯跡	長田町	近世	「薩摩焼の研究」1941
11	普賢院跡	長田町	近世	真言宗 本山大乗院 (鹿児島市)
12	浄光明寺跡	上竜尾町	中世～近世	時宗 本山清浄光寺 (神奈川県)
13	般若院跡	下竜尾町	近世	真言修験 本山三宝院 (京都市)
14	不断光院跡	下竜尾町14	中世～近世	浄土宗 本山知恩院 (京都市)
15	大龍寺跡	大竜町11-14	近世	臨濟宗 本山東福寺 (京都市)
16	琉球館跡	小川町	近世	
17	隆盛院跡	新照院町	近世	曹洞宗 本山福昌寺 (鹿児島市)
18	鹿児島城跡	城山町7番地	近世	「鹿児島 (鶴丸) 城本丸跡」1982
19	南泉院跡	照国町	近世	天台宗 本山寛永寺 (東京都)
20	千眼寺跡	常盤町	近世	藩内黄檗宗最大寺院本山万福寺 (京都府)
21	西田寺跡	常盤町	近世	黄檗宗 本山千眼寺 (鹿児島市)
22	了性寺跡	常盤町	近世	黄檗宗 本山千眼寺 (鹿児島市)
23	笑岳寺跡	西田三丁目	中世～近世	曹洞宗 本山梅岳寺 (伊集院町)
24	薬王寺跡	西田三丁目	近世	曹洞宗 本山福昌寺 (鹿児島市)
25	武岡城跡	田上町武岡	近世	詳細不明 団地化
26	武遺跡	武二丁目	縄文, 弥生, 古墳	古墳住居跡27軒, 轟式土器, 山之口式土器他
27	存龍院跡	加治屋町	近世	真言修験 日高山伏の寺
28	南林寺跡	松原町3-35	中世～近世	曹洞宗 本山福昌寺 (鹿児島市)
29	源舜庵跡	南林寺町	近世	曹洞宗 本山南林寺 (鹿児島市)
30	能学寺跡	下荒田一丁目17	近世	臨濟宗 本山大慈寺 (志布志町)
31	常楽院跡	下荒田一丁目	近世	天台盲僧 本山神徳院 (宮崎県高原町)
32	正建寺跡	下荒田一丁目	近世	法華宗 本山本能寺 (京都)・大興寺 (大阪)
33	延命院跡	郡元二丁目4-6	近世	黄檗宗 本山千眼寺 (鹿児島市)



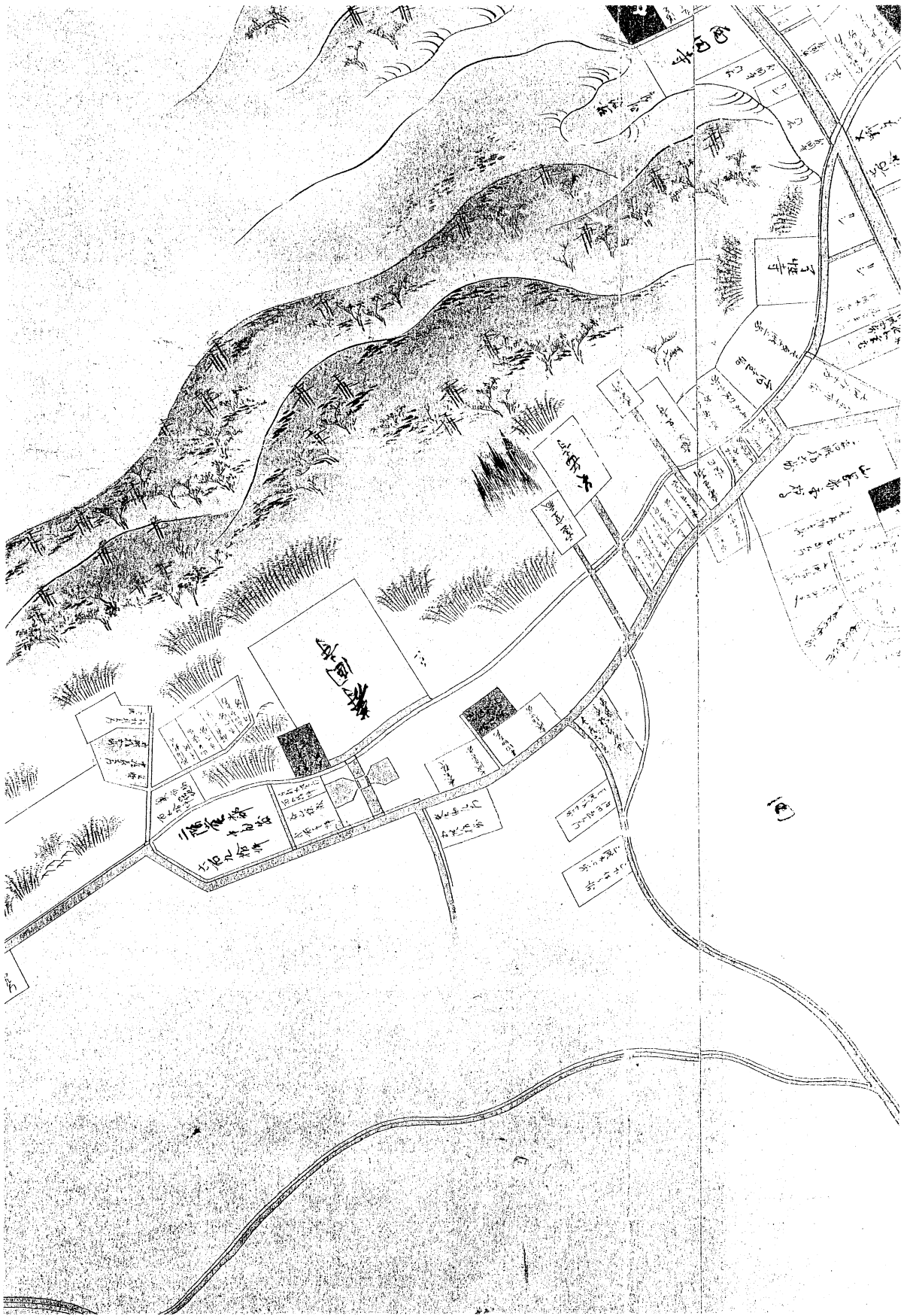
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 寿国寺跡調査区全体図



第3図 薩藩沿革地図(鹿兒島城下絵図)(天保年間)



第5図 旧薩藩御城下絵図（安政年間）

第三章 層位

第1節 I地区の層位（第6図～第9図）

I地区はシラス台地傾斜地が下りきったほぼ平坦部にあたり、西郷公園（西郷屋敷跡）前より西鹿兒島駅舎前までの約250mの長さで位置する。

I地区内に10か所のトレンチを設定して、確認調査を実施した（第2図参照）。

トレンチ内の土層堆積状況は、台地から海岸方向へ緩やかに傾斜しつつ、ほぼ水平堆積であった。

土層の様子を観察すると、表層はシラスを用いた近年の住宅造成面が、その下部に黒く焼けた土とレンガ等の瓦礫混在層（第7図I地区6トレンチ断面図）が見られる。これらの層は、近世以降の火災面とその後の住宅造成面であろうと考える。その下層は近世陶磁器類・瓦等を含む層や近世陶磁器類・瓦等の廃棄土坑がいくつか見られる。また、8トレンチ付近の土層状況（第6図6T～10T）から、数種類の水成砂質土が観察された。このことから、この近くに河川の存在が考えられる。

I地区で緊急発掘調査を実施した部分は、砂質土と腐植土とが互層をなしている（第8・9図参照）。これらの層の中から古墳時代の遺物が出土するものの、近世の陶磁器類が中心で、自然災害時の土砂流入等の影響による他地域からの混入物であると考えられる。

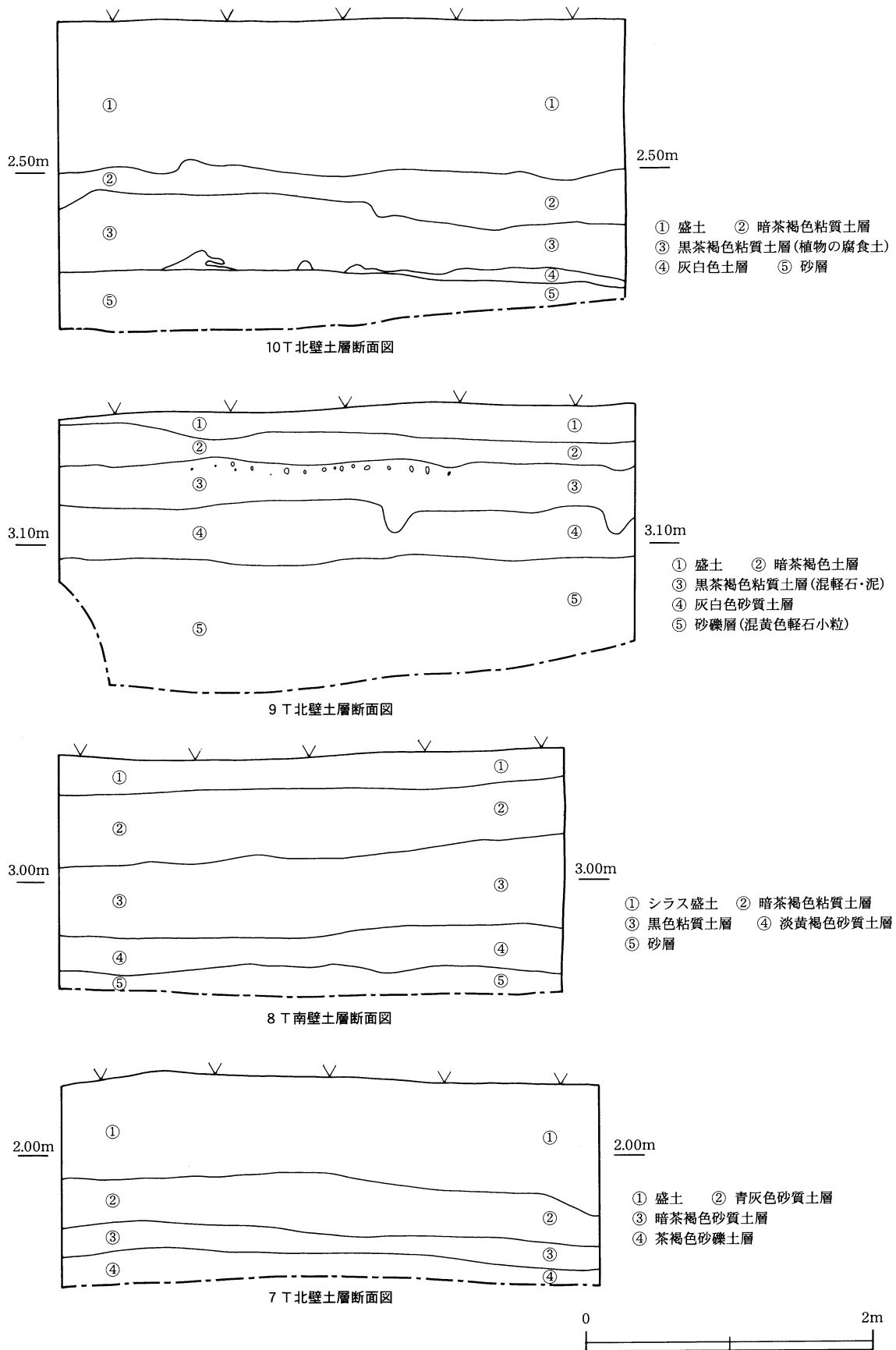
第2節 II地区の層位（第10図～第13図）

II地区は、シラス台地が切り立った急斜面部の直下から低地にかけての緩斜面に位置する。II地区内での比高差は10m以上にもなるため、緊急発掘調査では各地区間を結んだ連続的な調査を行わずに、3地点に分断した調査を行った（第2図参照）。そのため各地点間における地層の連続性については把握できていない。ただし発掘調査は各地点間の位置関係を把握するために、10mグリッド方眼を組んで行った。

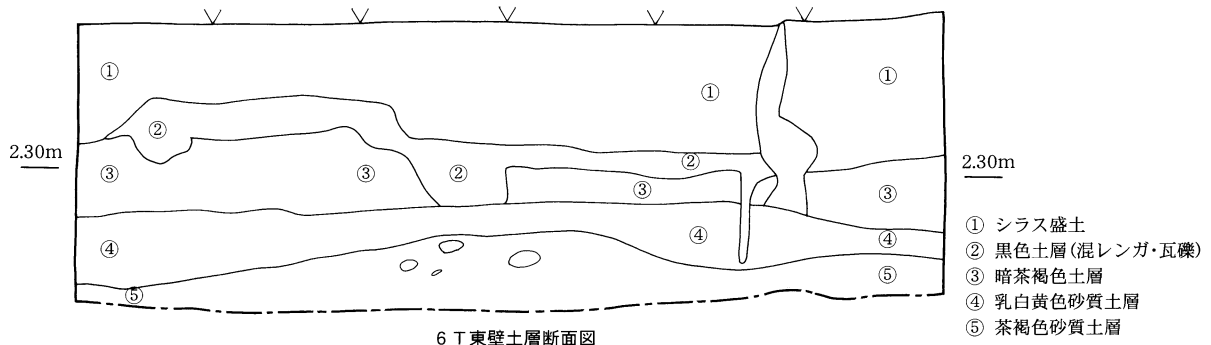
また基本的層位についても、標高が高い場所から低い場所へ流れ込んだ土層やブロックが多く、さらに各地点で土質が著しく変化しているため、共通化を図ることが出来なかった。そこで各地点の層位を個別に示すことにした。

各地点で共通していることは、傾斜地ではシラス土と考えられる砂質土層と、腐植土と考えられる粘質土層とが、互層に観察できることである。砂質土層は堆積している傾斜から見て、II地区西側に直立するシラス台地斜面部が崩落することにより流入したことは明らかである。

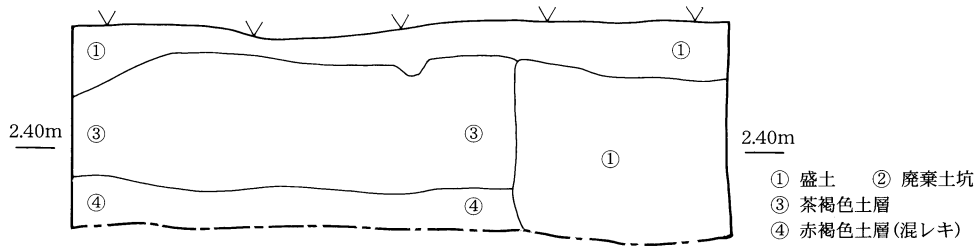
また、シラス台地が開析されてできた急斜面に近い場所にあるE・F-3区では、シラス整地面を含む粘質土層からは近世の時期に属する陶磁器が、砂質土層からは古墳時代に属する成川式土器や古代の時期に属する土器が多く出土した。このことでも、斜面部分が崩落することでシラス台地上に埋まった土器などが寿国寺跡の遺跡地内に流入した状況を示すものと判断できよう。このことは、シラス台地上には古墳時代から古代にかけての遺跡が形成されていることを示していると考えられる。



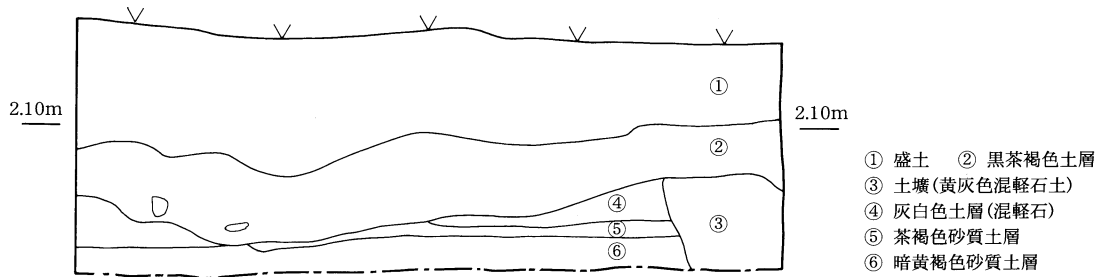
第6図 I地区確認調査トレンチ土層断面図(1)



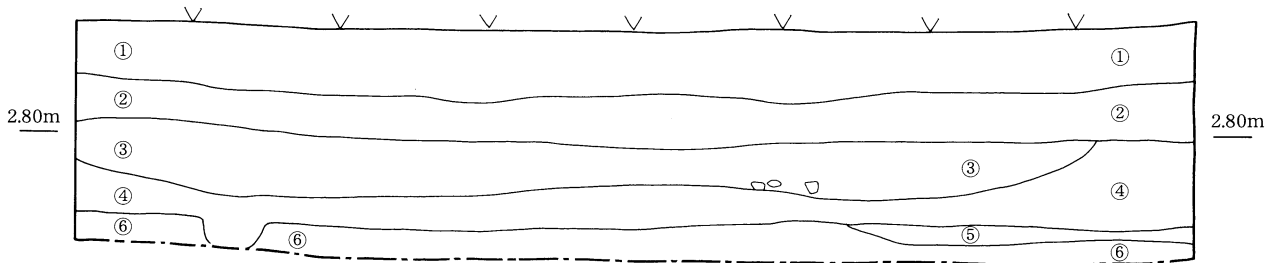
6 T 東壁土層断面図



6 T 北壁土層断面図

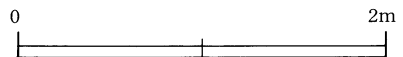


5 T 南壁土層断面図



4 T 北壁土層断面図

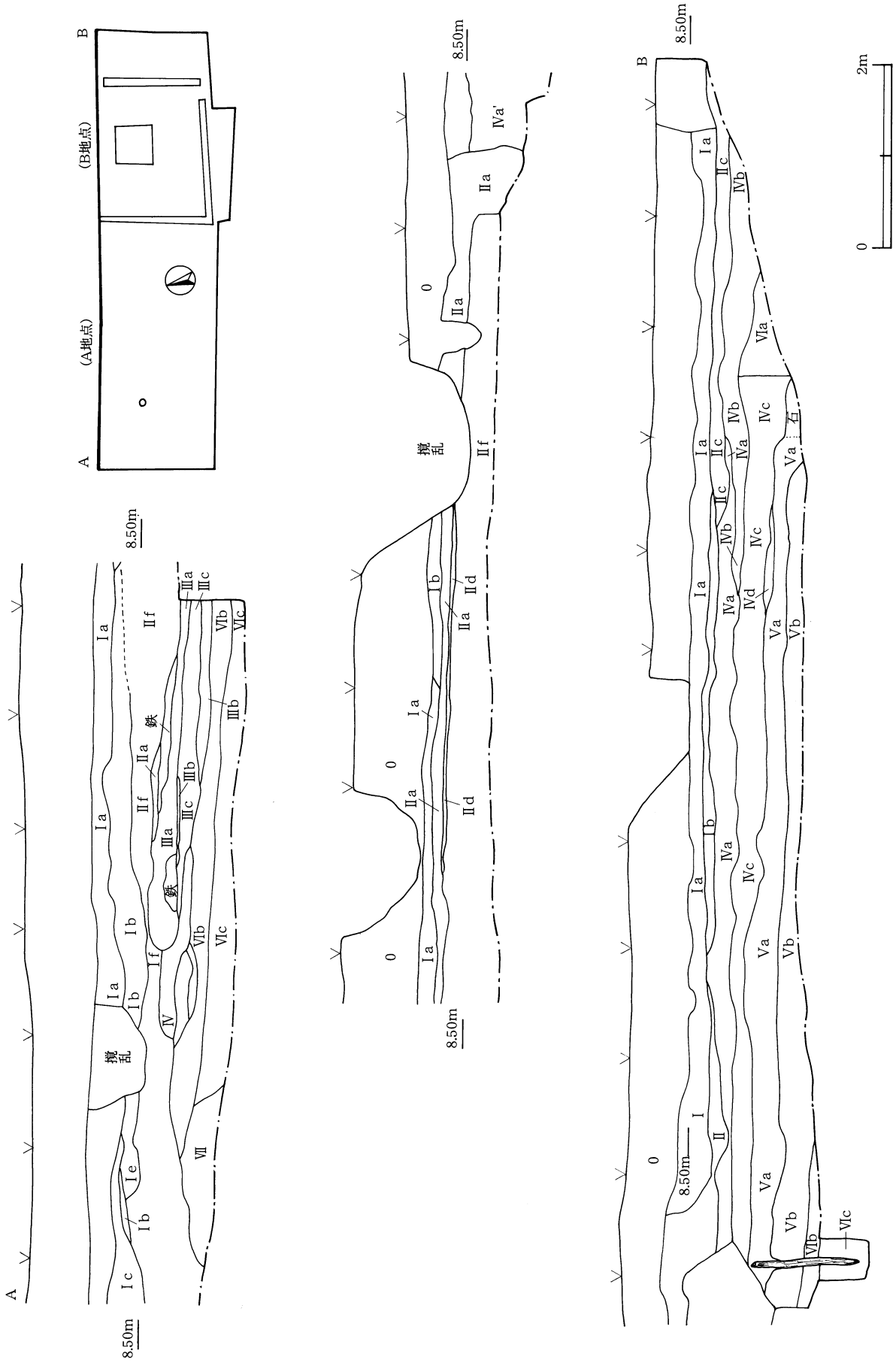
- ① 盛土 ② 黒茶褐色土層
③ 廃棄土坑(混瓦・陶磁器)
④ 淡茶褐色砂質土層 ⑤ 青灰色砂質土層
⑥ 茶褐色火山灰層(混軽石)



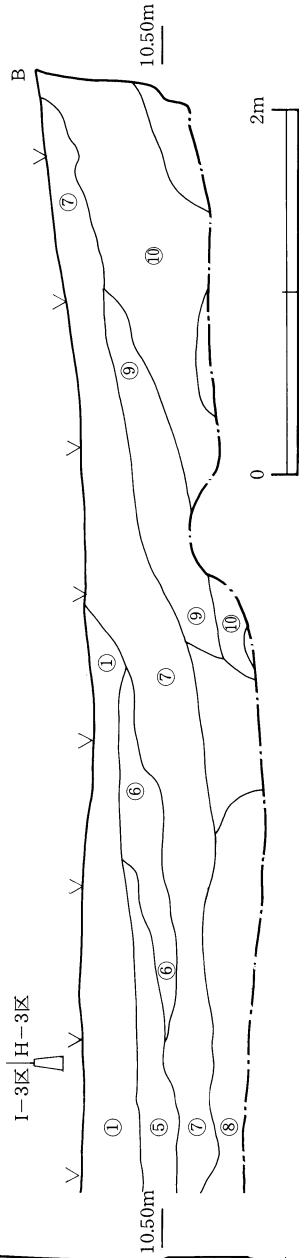
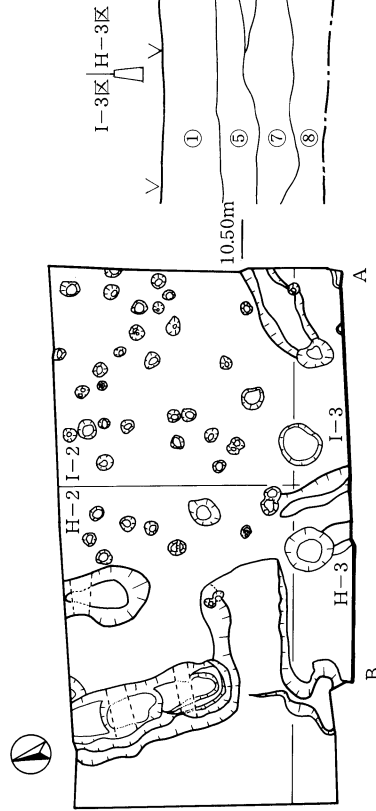
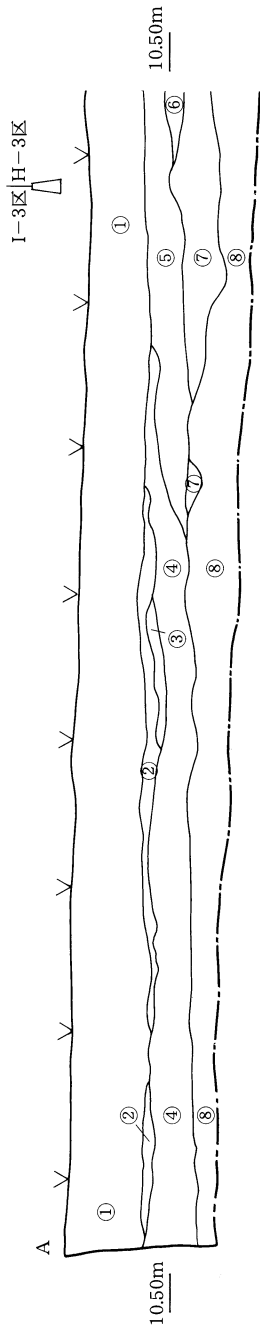
第7図 I地区確認調査トレンチ土層断面図(2)

寿国寺跡 I 地区分層基準（土層注記）

- 0 層：造成表土。バラス混じりのシラス層。
- I a 層：旧表土。灰褐色硬質土層。締まりが強いが粘性はない。直径1～3cm程度の軽石粒を含む。
- I b 層：灰褐色砂質土層。締まり・粘性共になし。I a層と比べると若干茶色味を帯び、軟らかい。
- I c 層：鉄分を含む、やや茶色がかった灰褐色砂質土層。締まり・粘性共になく、I b層よりさらに軟らかい。暗い焦げ茶色の鉄分を少し含む。
- I d 層：鉄分を含む灰褐色粘土質土層。締まりはないが粘性はある。II b層と特徴が類似するがかなり軟らかい。
- I e 層：鉄分を含む茶色がかった灰褐色砂質土層。締まり・粘性共になし。軽石を少量含む。
- I f 層：鉄分を若干含む灰褐色砂質土層。締まりはなく、軟らかい。I e層より鉄分が少ない。
- II a 層：鉄分を若干含む灰褐色硬質土層。締まりが強く、非常に堅いが粘性はない。1～3cm程度の軽石粒を含む。
- II b 層：鉄分を若干含む青灰色粘土層。締まり・粘性共に非常に強く、きわめて硬い。版築の可能性はある。
- II c 層：鉄分を若干含む灰褐色硬質土層。締まりはややあるが、粘性はあまりない。II a層と色調的に類似するが、II a層と比べるとやや締まりが弱く、軟らかい。軽石粒をわずかに含む。
- II d 層：鉄分を含む灰色がかった黄茶褐色軟質土層。砂質が強く、締まりはあるが粘性はない。大きな軽石粒を含む。
- II e 層：鉄分を含む茶褐色砂質土層。比較的きれいな砂で硬く、締まりがある。粘性はない。0.5～1cmの小さな軽石粒を含む。
- II f 層：茶色がかった灰褐色砂質土層。締まりがある、比較的きれいな砂。II e層と比べ、やや赤茶色が薄れ、若干軟らかい。0.5cm程度の軽石粒を含む。
- II g 層：灰褐色砂質土層。II f層と比べて軟らかく、鉄分も少ない。
- III a 層：明茶褐色砂質土層。0.5～1cm程度の軽石粒を含む。締まり・粘性共にややない。若干粘土質。
- III b 層：軽石粒堆積層。0.5～1cm程度の軽石が薄く堆積している。締まりがあり、硬い。
- III c 層：鉄分を多く含む暗茶褐色砂質土層。若干粘土質。締まりはややないが、III a層と比べると粘性はややある。軽石粒を多く含む。
- III d 層：軽石粒堆積層。III b層より若干粒子が粗い。締まりはあり、硬い。
- III e 層：黄褐色砂質土層。比較的汚い砂で締まりはあまりない。粘性もない。
- IV a 層：灰褐色砂質土層。締まりなし。粘性なし。軽石粒などの夾雑物を多く含む。投げ込み土か。
- IV b 層：灰色味を帯びた茶褐色砂質土層。締まりなし。粘性なし。瓦礫を多く含む。瓦には被熱したものも観察される。
- IV c 層：灰色砂質土層。粘性ややあり。締まりなし。混泥砂層で柔らかい。部分的に鉄分の沈着がみられる。
- IV d 層：紫色を帯びた灰がかった砂質土層。締まりなし。粘性なし。
- V a 層：茶色味を帯びた灰褐色粘質土層。固くはないが粘性は強い。ところにより瓦や径20cm程度の軽石礫を含む。V b層とともに木製品などの遺物が多く出土した。
- V b 層：黒味を帯びた灰褐色粘質土層。締まりややあり。粘性あり。ところにより礫などを含むが、不純物はあまり無い。
- VI a 層：粘性ややあり。締まりなし。粘性はVI b層およびVI c層に比べあまりない。
- VI a' 層：軽石を含む黄褐色土層。粘性なし。締まりなし。
- VI b 層：灰褐色粘質土層。1cmから2cm程度の軽石を含む。締まりなし。粘性あり。
- VI c 層：黒褐色粘質土層。特徴はVI b層に同じ。
- VII 層：黒色軟質土。径2cm程度の軽石礫を含む。締まりなし。粘性ややあり。
- VIII 層：黄褐色シラス。地山。



第9图 I地区A·B地点北壁土层断面图

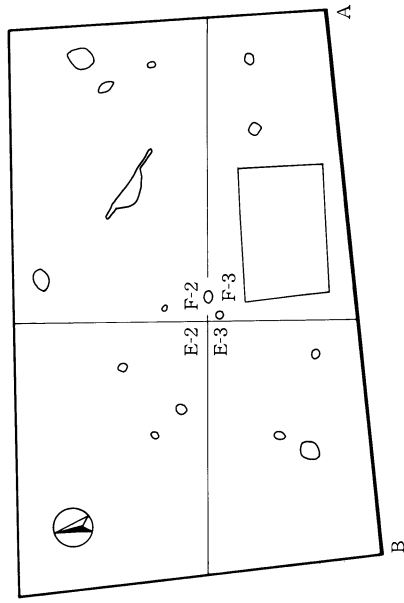
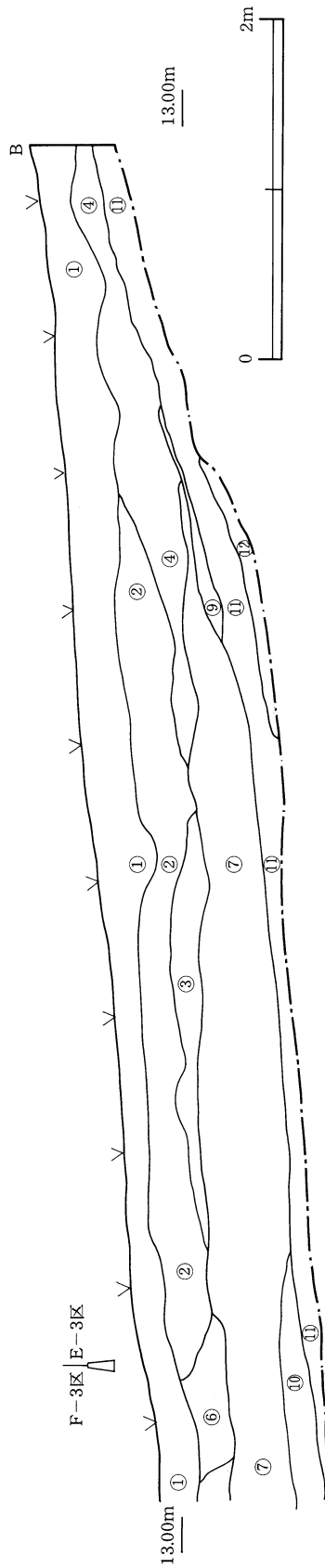
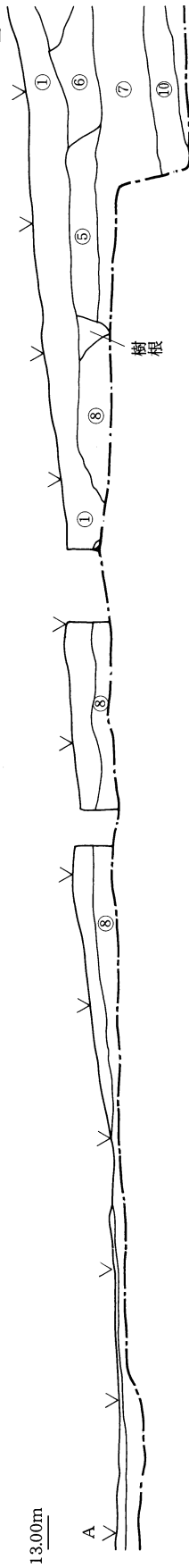


第10図 II地区H・I-3区南壁土層断面図

- ① 暗褐色砂質土層(黄白色軽石を含む)(黒褐色粘質土が混じる)
- ② 暗黄褐色砂質土層
- ③ 暗褐色砂質土層
- ④ 暗褐色砂質土層(暗黄褐色砂が混じる)
- ⑤ 暗褐色砂質土層(黄白色軽石粒を含む)
- ⑥ 暗褐色砂質土層(黒褐色粘質土・暗黄褐色砂が混じる)
- ⑦ 暗灰褐色粘質土層(大型の赤褐色軽石を含む)
- ⑧ 暗褐色砂質土層(白色軽石を含む)
- ⑨ 褐色粘質土層(黄白色軽石を含む・黄褐色粘質土が混じる)
- ⑩ 黒褐色粘質土層(大型の灰白色軽石を含む)

第10図 II地区H・I-3区南壁土層断面図

F-3区 | E-3区

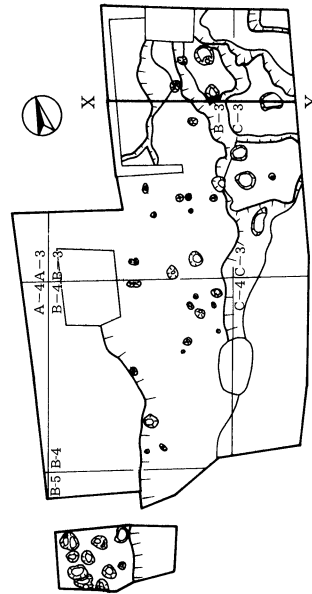
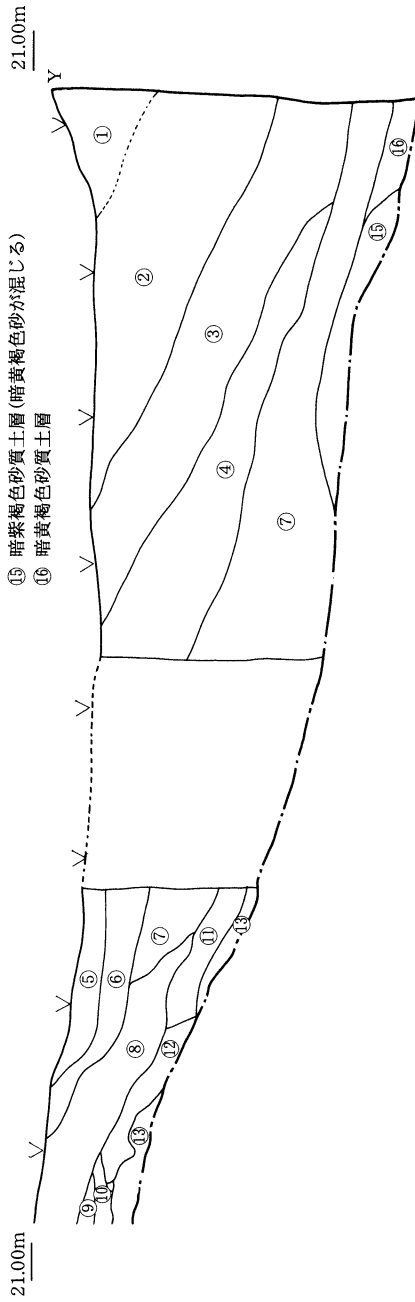
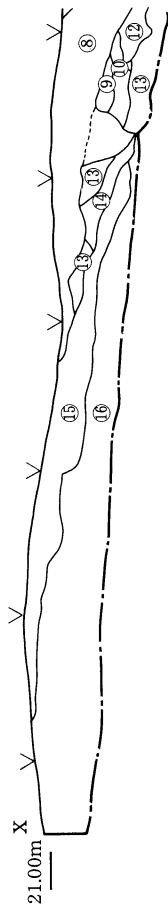


第11図 II地区E・F-3区南壁土層断面図

第11図 II地区E・F-3区南壁土層断面図

- ① 黒褐色粘質土層 (大型白色軽石を含む)
- ② 黄褐色砂質土層 (暗茶褐色砂が混じる・黄白色軽石、黄色ハミスを含む)
- ③ 暗黄褐色粘質土層 (灰白色砂が混じる)
- ④ 灰白色砂質土層 (暗黄褐色粘質土が混じる)
- ⑤ 暗茶褐色粘質土層 (白色軽石を含む)
- ⑥ 暗黄褐色砂質土層
- ⑦ 暗黄褐色粘質土層 (大型黄白色軽石を含む)
- ⑧ 暗黄褐色砂質土層
- ⑨ 暗褐色粘質土層
- ⑩ 灰白色砂質土層
- ⑪ 黒褐色粘質土層 (黄白色軽石を含む)
- ⑫ 黄白色砂質土層

- ① 暗紫褐色砂質土層
- ② 暗紫褐色砂質土層 (暗褐色砂が混じる)
- ③ 暗褐色砂質土層 (暗紫褐色砂が混じる)
- ④ 暗紫褐色砂質土層 (暗褐色砂が混じる)
- ⑤ 暗紫褐色砂質土層 (暗黄褐色砂が混じる)
- ⑥ 暗紫褐色砂質土層
- ⑦ 暗紫褐色砂質土層 (小型の黄白色軽石を含む)
- ⑧ 黒褐色粘質土層 (黄白色軽石を含む)
- ⑨ 暗黄褐色砂質土層 (暗紫褐色砂が混じる)
- ⑩ 暗紫褐色砂質土層 (暗黄褐色砂が混じる)
- ⑪ 暗褐色砂質土層 (黒褐色土が混じる)
- ⑫ 暗褐色砂質土層
- ⑬ 暗黄褐色砂質土層
- ⑭ 暗黄褐色砂質土層 (暗紫褐色砂が混じる)
- ⑮ 暗紫褐色砂質土層 (暗黄褐色砂が混じる)
- ⑯ 暗黄褐色砂質土層



第13図 II地区B・C-3区北壁土層断面図

第Ⅳ章 調査の成果

本調査では市道武・薬師線を境に検出された遺構の状況が異なることから、市道から東側部分をⅠ地区、西側部分をⅡ地区と呼称して報告を行う。

第1節 Ⅰ地区の調査

1 検出遺構

Ⅰ地区では当初設定した調査区において、遺構群の検出状況に違いがみられる。このことから、本節ではそれぞれの調査区名を踏襲して、市道武・薬師線よりの西側の調査区及びB地点までの拡張区をA地点、西鹿兒島駅よりの東側の調査区をB地点として報告する。

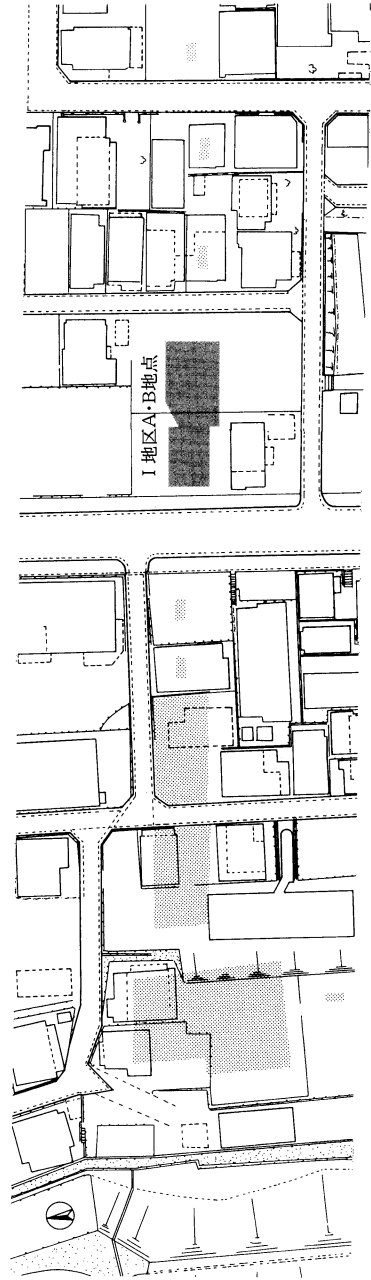
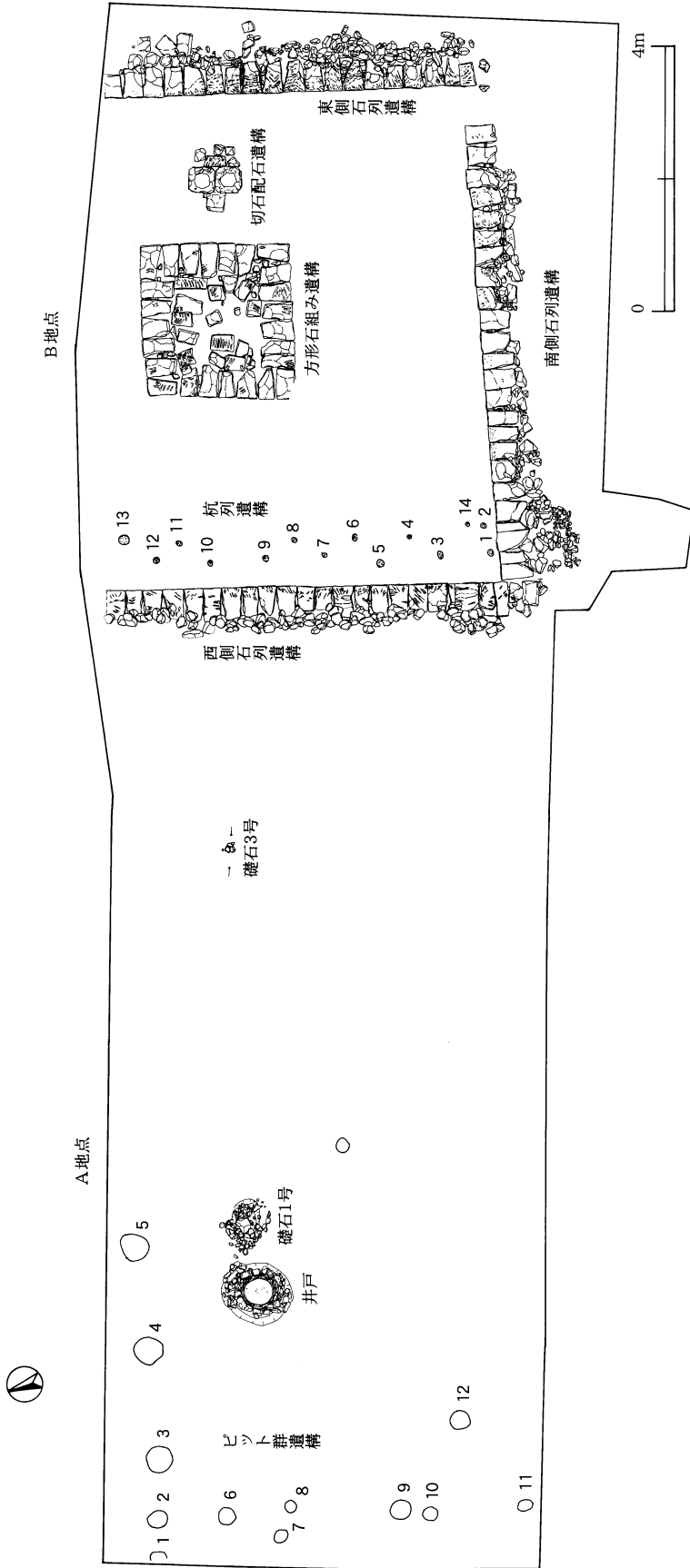
Ⅰ地区では寿国寺に関連するとみられる石組み遺構やピット群が検出された（第14図参照）。調査は当初、橋脚が建設される予定の地区について8m四方の調査区を2ヶ所に設定した。しかしその後、これらの調査区から近世の遺構群がまとまって検出されたため、最終的にこれらの調査区をつなぐ形で調査範囲を拡張した（第2図参照）。調査の結果、B地点からは方形石組み遺構や石列遺構、およびこれに関連するとみられる切石配石遺構や杭列などが、A地点からは井戸遺構と礎石、ピット群が検出された。

これらの遺構は出土遺物や『三國名勝圖會』等にみられる文献史料等との比較から、おおむね寿国寺に関連する施設と推測される。ただし、今回の調査範囲は寿国寺の寺域と推定される区域の一部に限定されたため、調査成果は寿国寺に関連するとみられる遺構の一部を断片的に把握するにとどまった。

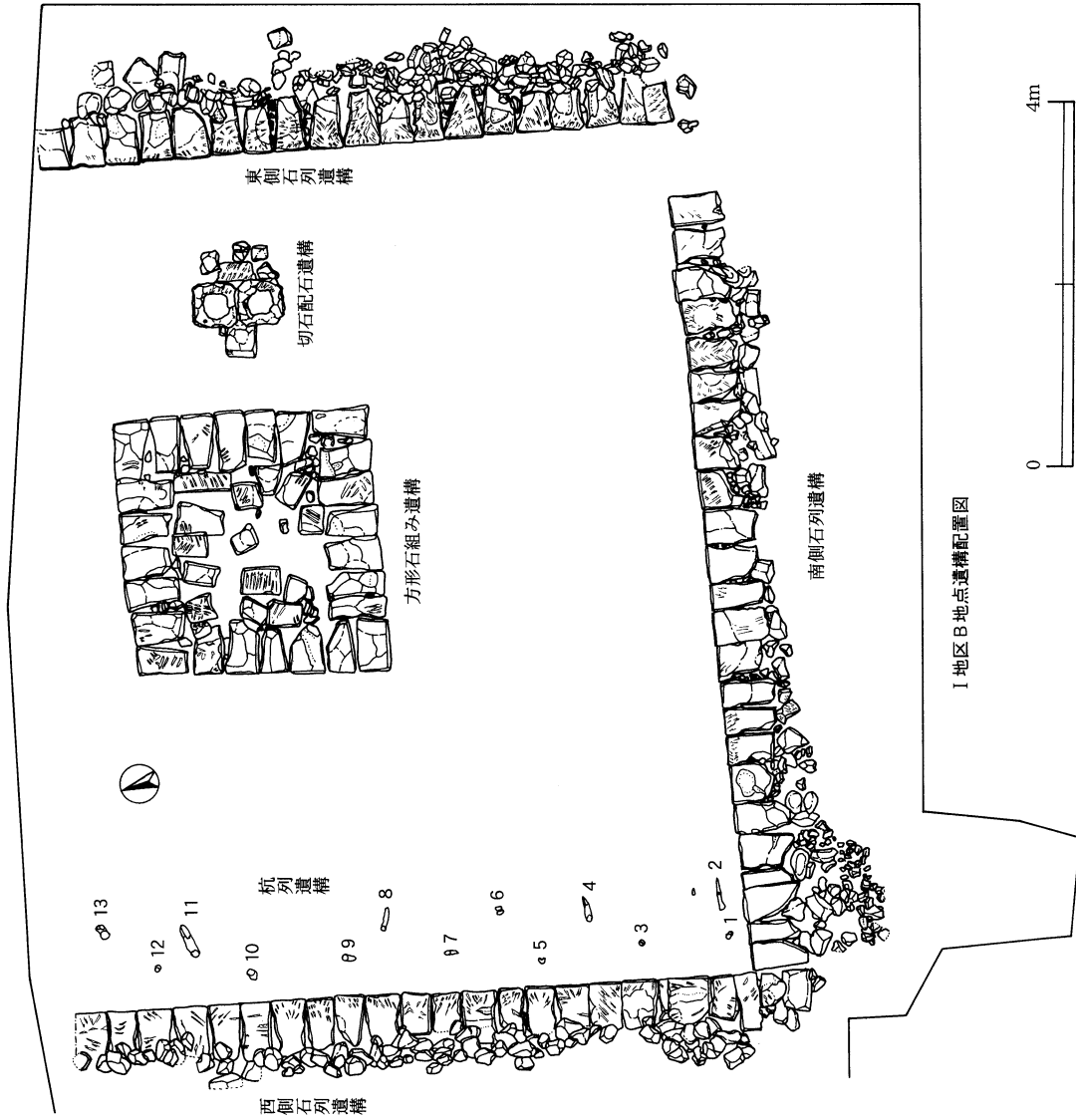
1) B地点の遺構（第15図）

B地点では、方形規格の石組み遺構と石列遺構、およびこれに関連するとみられる杭列が検出された。B地点の中央付近では約2m四方の方形石組み遺構が検出され、その周囲には一辺約8mの石列遺構が三方に配されている。この石列遺構は、東側および西側の一部が調査区外へ北にのびているため、全容は明らかではない。中央の方形石組み遺構と東側石列遺構の間からは、凝灰岩の切石を加工した切石配石遺構が検出された（第15図左側）。また、西側石列遺構に沿って、千鳥状の杭列が検出された。

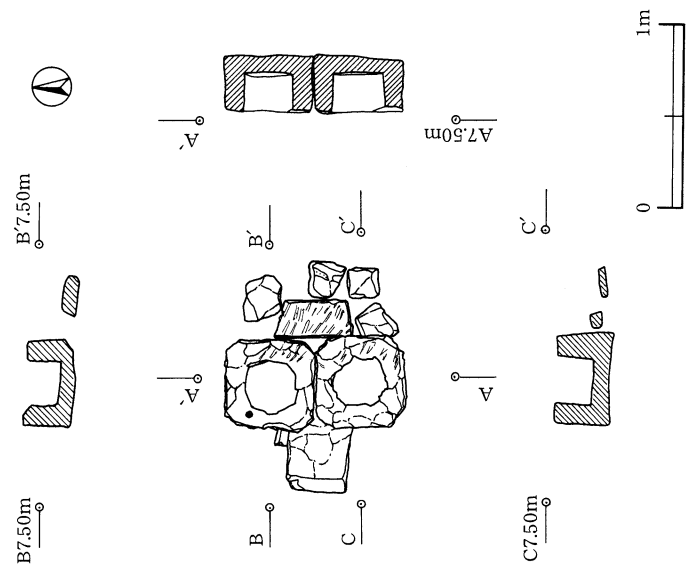
これらの石組み遺構はおおむねⅥ層土の上に築造されている（第16図参照）。三方の石列で囲まれる部分には最下部に砂を含まない青灰色泥質層（Ⅴb層）が堆積し、その上に瓦や砂礫を含む泥質層（Ⅴa層）が堆積する。そして、その上には瓦礫を多く含む混泥砂層（Ⅳ層）が堆積する（第9図参照）。Ⅴ層では部分的に鉄分の沈着が見られるほか、南東部では砂層の三角堆積がみられた。Ⅳ層およびⅤ層からは近世の陶磁器を中心に木製品、瓦などが出土している。B地点の遺構は方位軸がほぼ一定の方向でそろっていることや、土層の堆積状況および遺物の出土状況を考えあわせると、方形石組み遺構とその三方を取り囲む石列遺構、西側石列遺構に並行して打設された杭列は一連の遺構として捉えることができよう。ただし、それぞれの遺構には微妙な



第14図 I地区遺構配置全体図

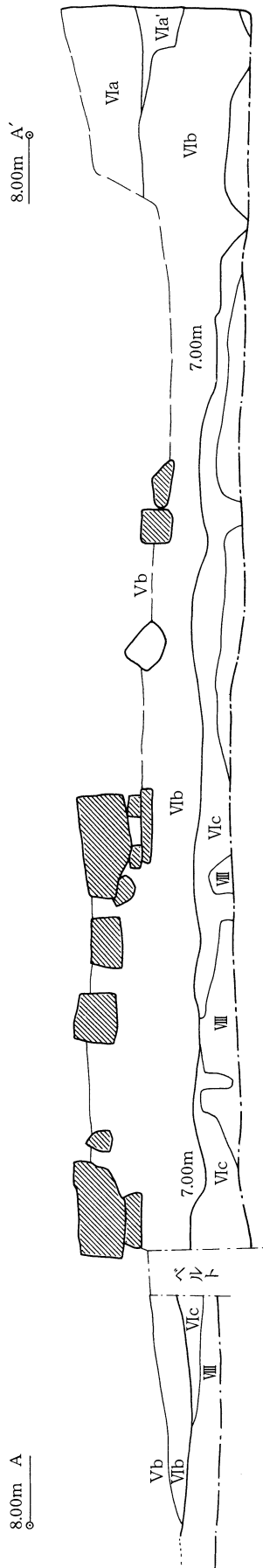


I地区B地点遺構配置図

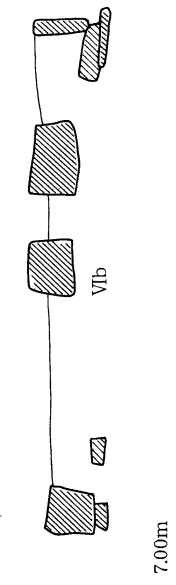
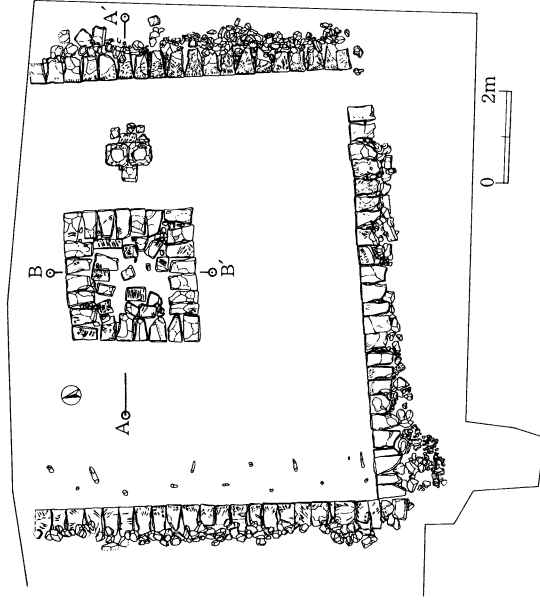


切石配石遺構実測図

第15図 I地区B地点遺構配置図および切石配石遺構



- V b 層：黒味を帯びた灰褐色粘質土層（礫などを含む）
- VI a 層：灰褐色土層
- VI a' 層：軽石を含む黄褐色土層
- VI b 層：灰褐色粘質土層（1 cmから2 cm程度の軽石を含む）
- VI c 層：黒褐色粘質土層
- VII 層：黒色軟質土（径2 cm程度の軽石礫を含む）
- VIII 層：黄褐色シラス。地山。



第16図 I地区B地点東側石列および方形石組み遺構断面図

差異が観察され、築造時期や存続期間には若干の違いがある可能性がある。

(1) 方形石組み遺構 (第17図)

B地点の中央には、約2m四方の方形の石組み遺構が検出された。この石組み遺構は、胴木の上に縦約30cm、横約40cm、奥行き50cm～60cmの直方体の切石を、外面を揃えて方形に組んでいる。それぞれの切石の面のうち、石組み遺構の四方の外面にあたる小口面は面取りされて鑿などによる粗い調整痕がみられる。調整痕の幅はおおむね1cm程度を計る。また、正面の小口面に接する四側面にも鑿等による調整痕が部分的に観察されるが、正面ほど丁寧ではない。それぞれの切石の形状は奥に向けてややすぼむ直方形を基本的な形状とし、石組み遺構の外周に配される組石にはほぼ同じ規格の切石が使われている。

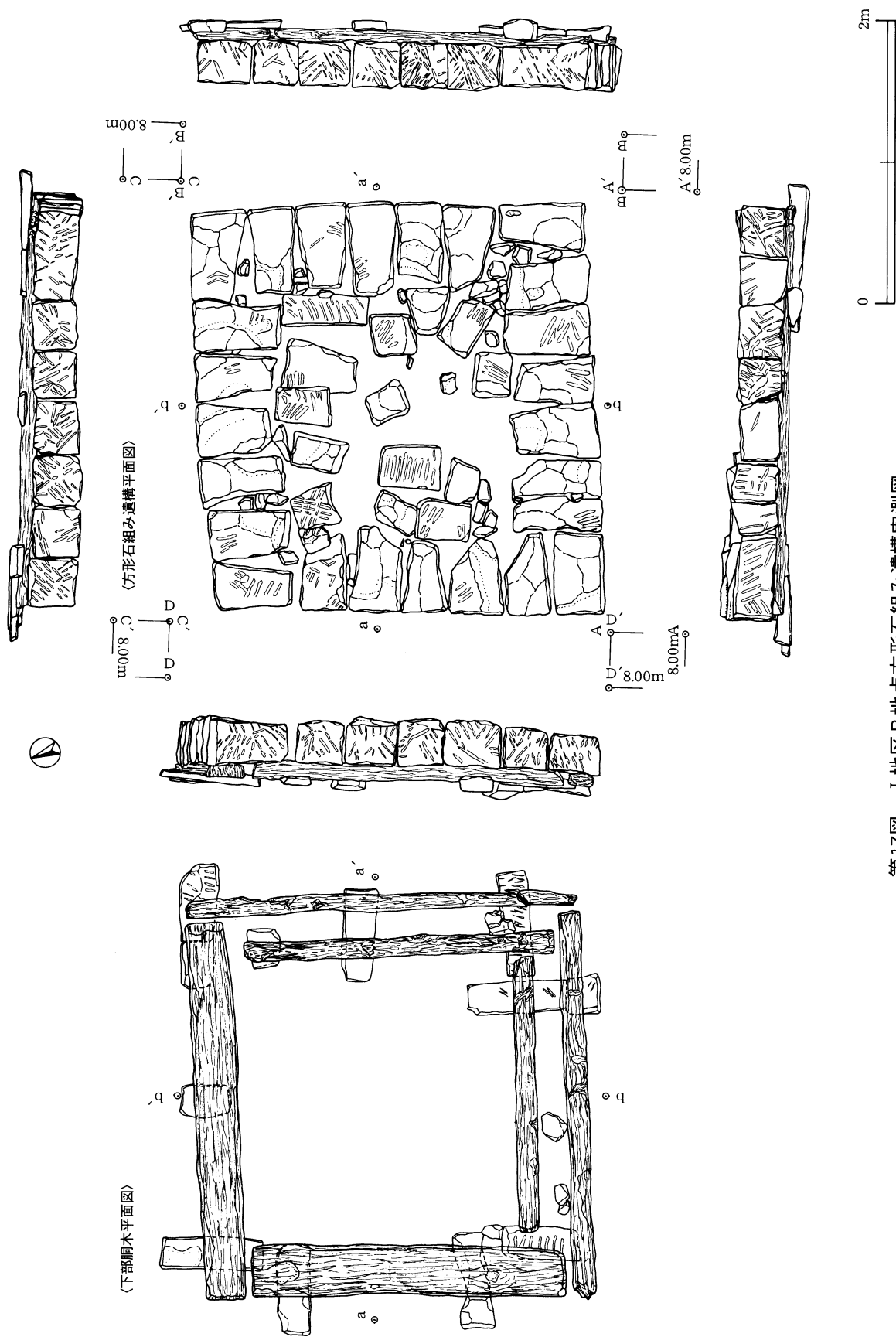
石組み遺構の下床には胴木が敷設されている。これは切石の沈下を防ぎ、石組みの基礎を安定させる工夫と思われる。胴木は、厚さ約10cm、幅約30cmを計る厚板状の木材を敷設するものと、厚さ約10cm、幅約20cmを計る角材を二本対で使用することの二つのタイプが見受けられる。また、胴木の下には細長い切石が設置されている。この切石には、長さ50cm～60cm、幅約20cm、厚さ10cm程度の細長いものと、これを補助する比較的小さい切石あるいは礫の二種類がある。細長い切石は面取りされ、鑿等によって調整が行われている。それぞれの切石あるいは礫は上面の高さがそろえられ、上部の胴木が水平になるように配置されている。こうした切石の配置は胴木の安定を保ち、石組み遺構の基礎を支えるための、枕石としての工夫と考えられる。

石組み遺構の内部は凝灰岩の切石や礫を投入し、間を土で充填している。これらの礫は外面に接する切石の空隙にも詰め込まれるように投入されており、外面の石組みを内部から固定し、石組み遺構を内部から支える胴込め石の役割を果たすと考えられる。方形石組み遺構の内部に充填された土は径1cm程度の軽石粒を含み、基盤のVI層土と特徴が類似する。内部の土は胴木の設置と外周の切石を組んだ後に礫とともに充填されたものである可能性が高いが、土層の違いをはっきり認識することはできなかった。

この石組み遺構は、検出された当時胴木の上には一段しか残存していなかった。しかし、これらの上面は全く揃えられておらず、上面よりは外周に丁寧な整形がみられることなどから、石畳などの平面的機能は想定しにくい。四方の外面により丁寧な整形がみられることから、四方の側面を外面とする、基壇状の遺構であると考えられる。上部にさらに数段の石組みが存在した可能性が高い。ただし、この遺構の具体的機能を検出時の状況だけで判断するのは難しく、こうした遺構の構造のみから方形石組み遺構の性格を判断することは困難である。

(2) 切石配石遺構 (第15図下)

B地点中央付近の方形石組み遺構の東側からは、円形の彫り込みを施した凝灰岩の切石を2個対に配した配石遺構が検出された。切石は凝灰岩製で、基本形は一辺約30cmの立方体である。それぞれの外面は丁寧に面取りされ、上面からは直径約20cm、深さ20cm程度の円柱状の穴が穿たれている。穴の内部は鑿などによる調整痕が比較的顕著にみられ、穴は整った円形に揃えられていて、丁寧な整形の痕跡がうかがえる。



第17図 I地区B地点方形石組み遺構実測図

この立方形の切石の周囲には、数個の礫と切石が配されている。対に配された切石の両側面には方形の切石が密接して配置され、その周囲を固めるように数個の礫が配されている。

また、この配石遺構の周囲には径2m程度の楕円形のしみが認識される（巻頭図版1参照）。しかし、調査当時土質の明確な違いは認識できず、十分な調査を行うことはできなかった。写真を観察する限り、土層の保水性に周囲と若干の違いがあるようである（前掲巻頭図版参照）。このしみは、付近を断ち割った際にも、明確な土質の差異としては確認できなかった（第16図）。従って、厳密にはその性格を判断し得ないが、配石遺構の築造時における礫投入等の痕跡である可能性が考えられる。

この切石配石遺構は、東側石列遺構との中間に位置している。石列遺構については後述するが、こうした築造の位置的要素と周囲に切石や礫を配置して配石の安定を図る工夫を考えあわせれば、この配石遺構は礎石としての機能を持つ可能性を指摘できる。

（3） 石列遺構（第18図，第19図）

方形石組み遺構と切石配石遺構の三方を囲む石列遺構（第18図，第19図）は、敷設された胴木の上に凝灰岩の切石を横に配置する構造で築造されている。組石の背後には多量の軽石の円礫を投入して裏込め石としている。調査時、大部分の組石は最も下の1段しか残っていなかったが、西側石列遺構の最も南側では3段の積み石が確認された。積み石の上面は造成等による削平のため明確に検出することが出来なかったが、裏込め石に使用された軽石の遺存状態等から、築造時の積み石はおおむね3～4段の範囲内である可能性が高い。

これらの石列遺構は基本的に縦30cm前後、横40cm前後、奥行50～60cm前後の直方体の切石で構成される。南側石列遺構は両端を確認できるものの、東側石列遺構および西側石列遺構は調査区の北側にのびているため、石列の全体的な規模は明らかではない。

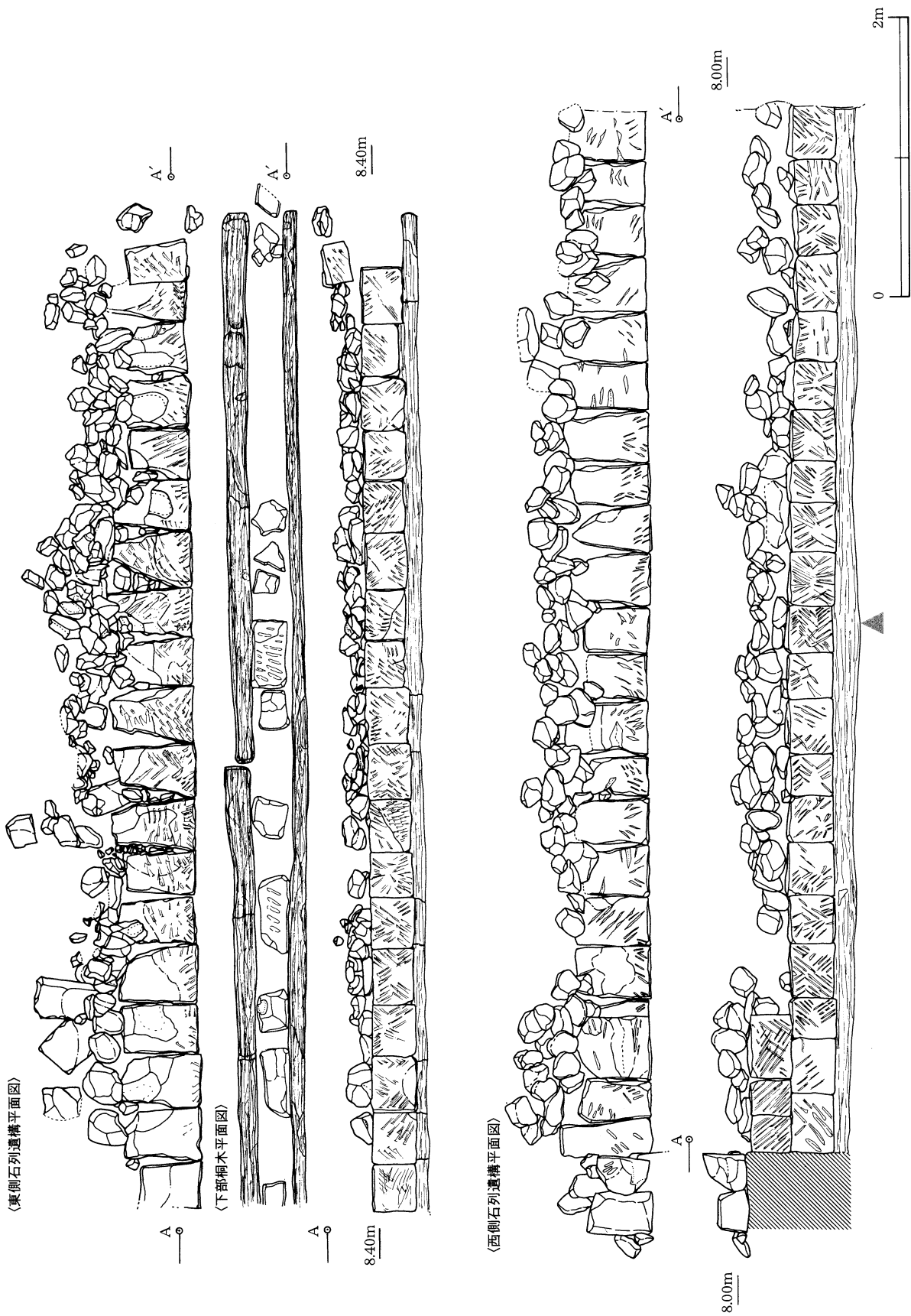
東側石列遺構（第18図上）

直方体の切石を19個横に配置している。石列の北端は調査区外にのびるため全体像は定かではない。検出時、切石は胴木直上の一段のみしか遺存していなかった。石組み遺構の正面にあたる小口面には丁寧な調整が施され、どの切石も正面はほぼ平坦に整えられている。また、それぞれの切石は正面に接する四側面が丁寧に整形され、石材を組む際にそれぞれの組石の間に空隙を生じないように形状や組み方が調整されている。背後には径10cm～30cm程度の軽石礫が多量に投入されているが、その中には凝灰岩の切石片や石造物片の転用がみられる。このような多量の礫の投入は、裏込め石として石組みの安定を図る工夫と考えられる。

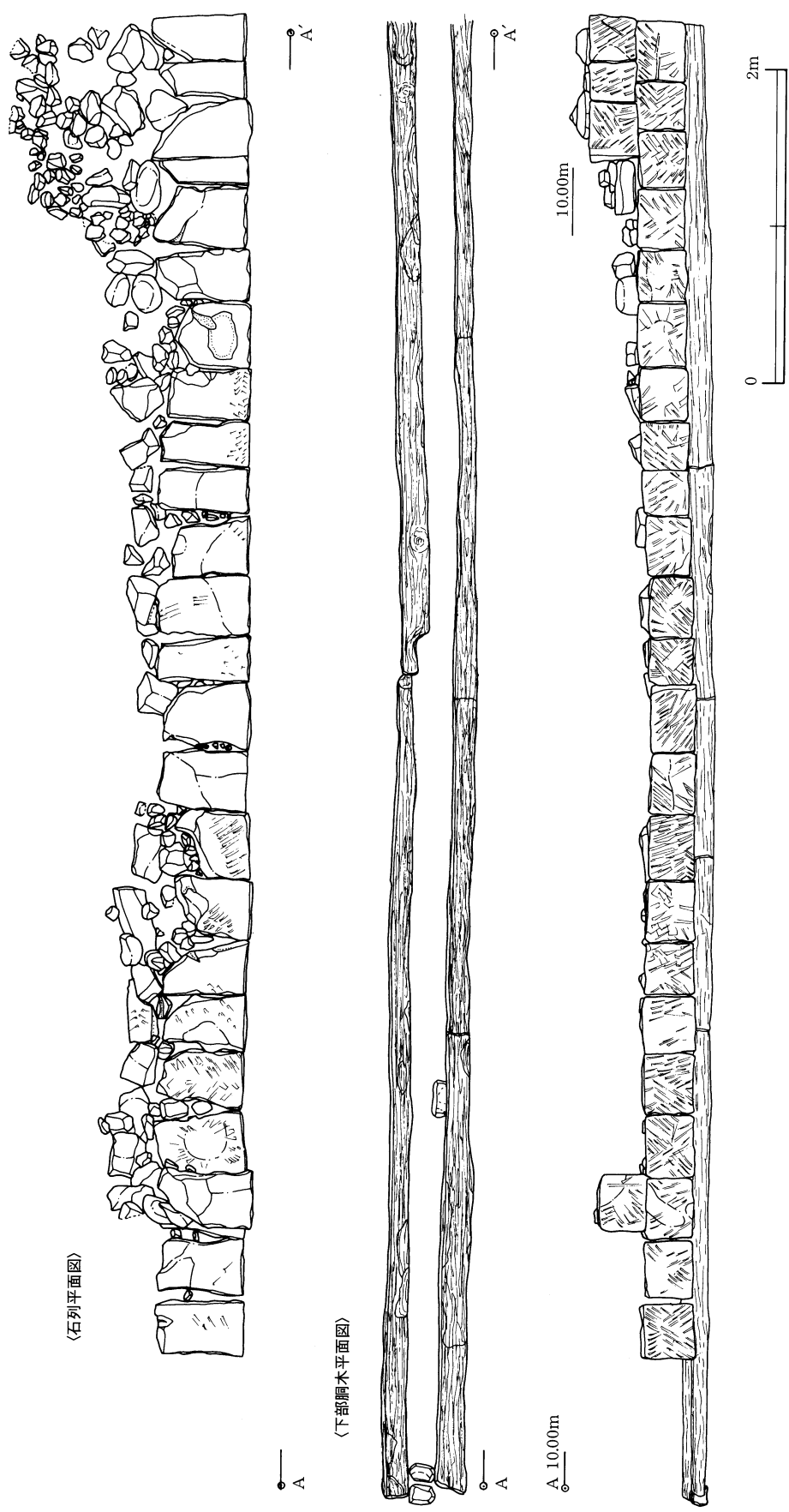
胴木には幅約20cm、厚さ約10cmの角材を二本対で使用している。間に切石や角礫を充填しているが、これは胴木の安定を図る工夫であると考えられる。胴木の間充填された石材の中には石塔の部材の転用（第74図327）が見られる。胴木の下部には、中央の方形石組み遺構に見られるような枕石の設置はみられない。

西側石列遺構（第18図下）

切石の規格は東側石列遺構とほぼ同様である。直方体に整形した切石を横に21個配置している。ただし、切石の幅はまれに規格と異なるものも観察される。石列の背後には東側石列遺構と同様、



第18図 I地区B地点石列遺構実測図1 (東側・西側)



〈石列平面图〉

〈下部桐木平面图〉

第19图 I地区B地点石列遺構実測図2 (南侧)

多量の軽石礫が投入され、裏込め石として使用されている。石列の北端は東側石列遺構と同様、調査区外へ北側にのびていて明らかでない。石列の南端部では3段の積み石が確認される。また、西側石列遺構の中央付近に配された切石（第17図下の▲印、図版4-③中央）は逆台形に加工され、楔状にはめ込まれた状態で検出された。これは組石の最後に配される要石と考えられる。切石は全て、石を組む際に空隙を生じないように、正面に接する四側面は丁寧な調整が施されている。なお、この西側石列遺構については橋脚の建設予定区から外れるため、切石の移動を伴う調査は行わず、積み石の遺存状態のみを記録して、石列遺構を現地保存とした。そのため、下床の胴木の敷設状況などについては明らかでない。正面から観察する限りでは、厚さ10cm程度の木材を敷設して使用している。

南側石列遺構（第19図）

南側石列遺構は東西の端部を調査区内で認識でき、約8mにわたり合計23個の切石が横に配置されている。切石の規格は西側、東側の石列にほぼ同様である。ところにより2段の積み石が確認できるが、最下段の積み石のうち、最も東側の数個は検出時すでに遺失していた。

胴木については二本の角材を対にして使用している。この工法は、西側石列遺構で検出した胴木の敷設方法と共通する。ただし、胴木の間には充填される礫はほとんどみられず、この点は西側石列遺構における胴木の敷設形態と異なる。裏込め石に使用される礫はほとんどが径20cm～30cm程度の軽石の円礫であるが、南側および東側の石列と異なり、量的にはそう多くない。

これらの石列遺構は、中央の方形石組み遺構を取り囲むように配置されている。切石の小口面はいずれも内向きで、三方の石列遺構の内部には泥質層が堆積し、外部とは土層の堆積状況が大きく異なる。この内部の泥質層からは、近世の遺物が大量に出土した。こうしたことから、これらの石列遺構は一連の石組み遺構の外周をめぐる石垣状の施設と考えられる。

（4）杭列（第20図～第22図）

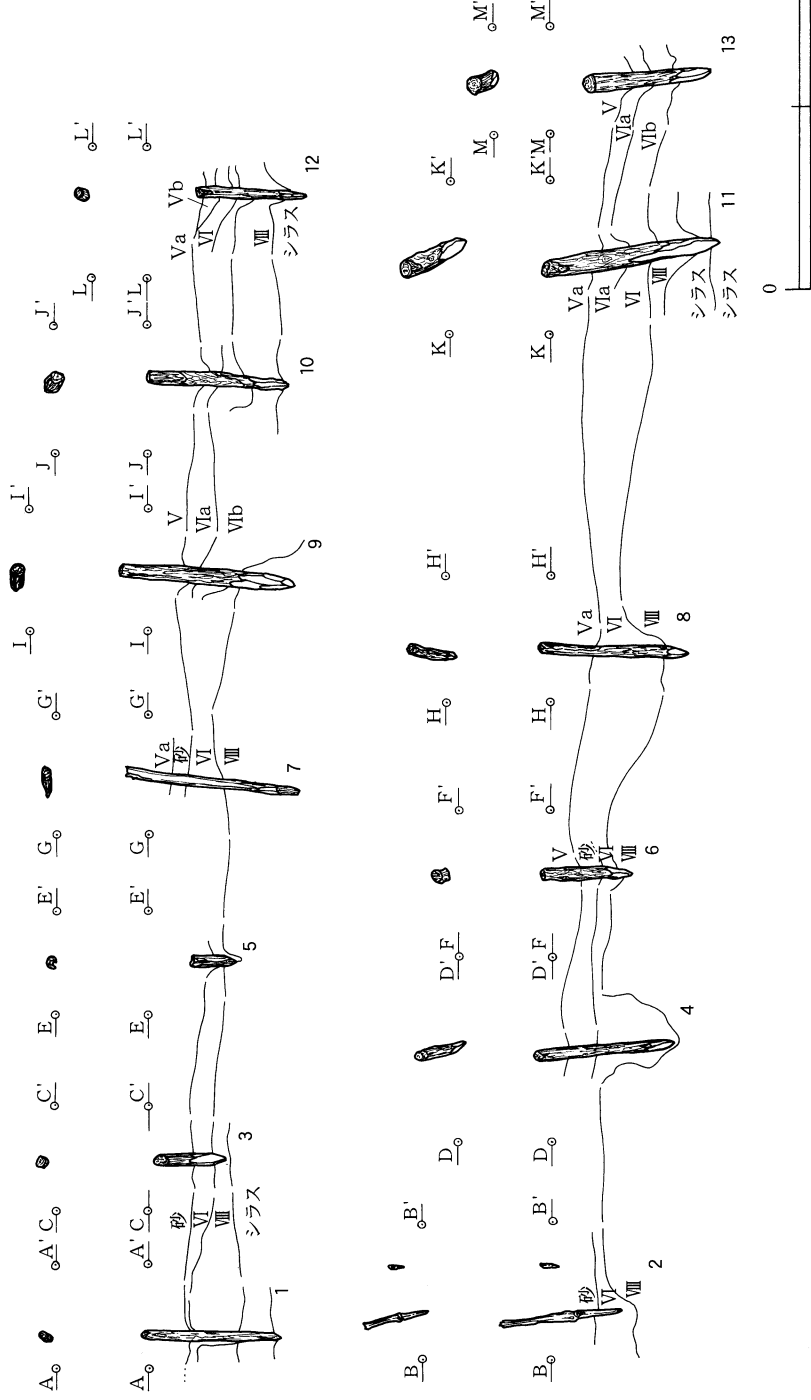
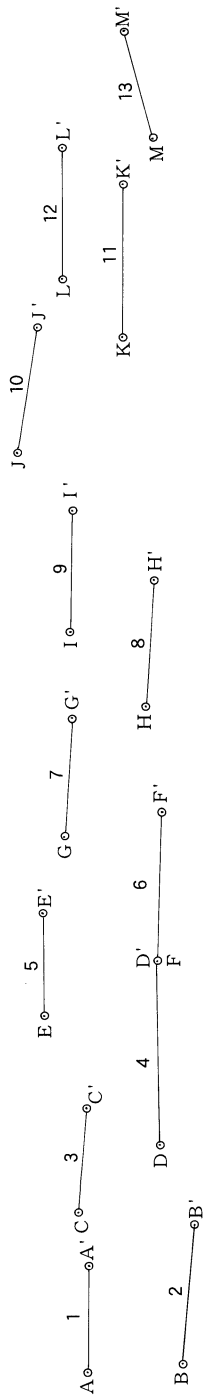
西側石列遺構の東側からは、石列遺構に沿うように千鳥状に配された杭列が検出された（第20図）。また、この杭列の他に、図化には至らなかったものの、南側石列遺構の周囲にも数本の杭が確認された。これらの杭は、直径が10cmから15cm程度の丸太材の先端を鋭く削って使用している。杭の遺存状況は腐食等に個体差がみられるため一概には言えないが、おおむね基盤のシラス層まで到達している（第21図、第22図）。これらの杭列は西側石列遺構にほぼ並行しているため、これに関連する遺構と考えられるものの、その具体的機能は不明である。

杭1

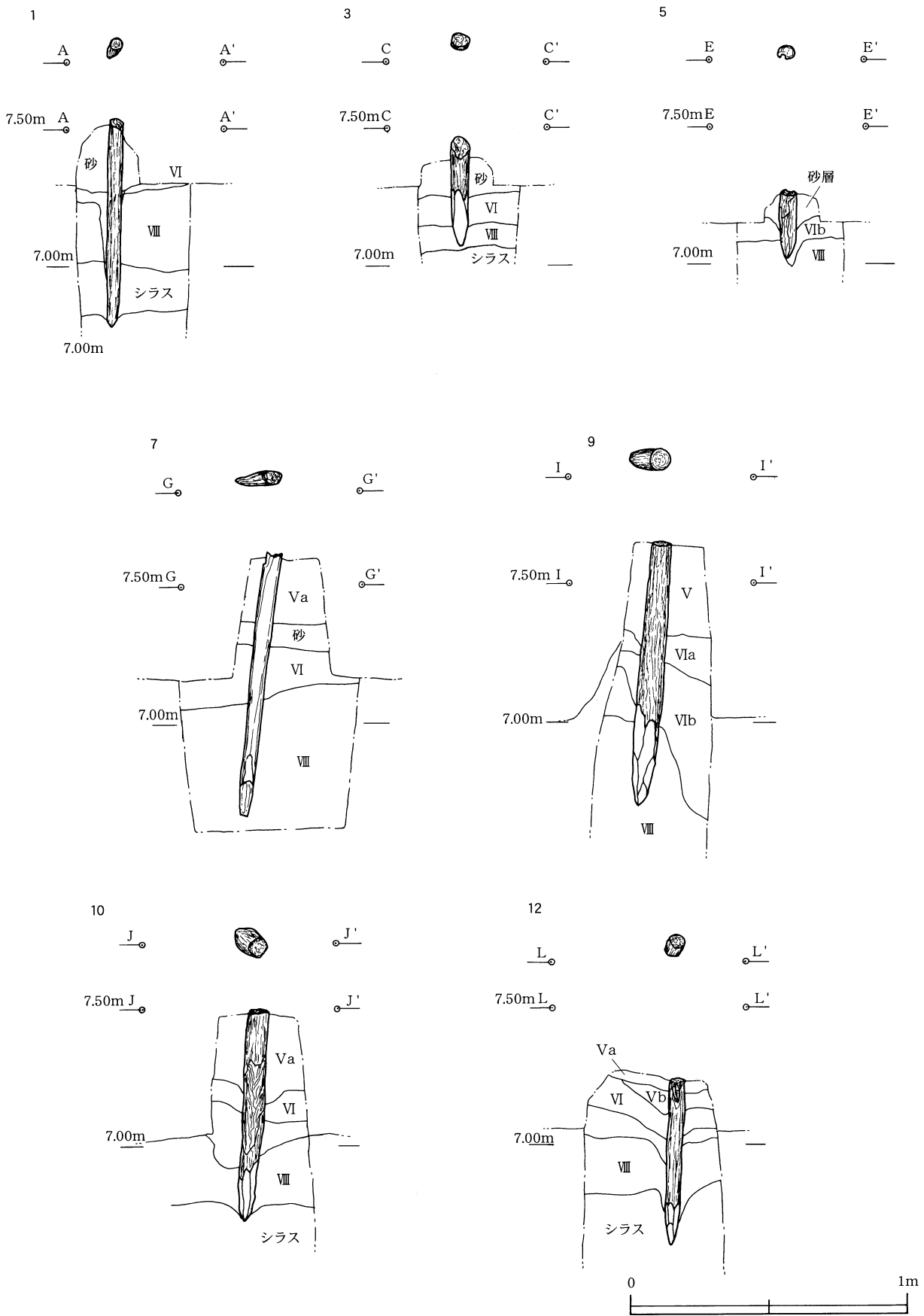
径10cm程度の丸太材の先端を鋭く削りだしている。長さは約80cmあり、基盤のシラス層まで深く達している。砂層の上面で腐食しており、それより上は認識できなかった。VI層土が杭に沿って下に沈み込んでいる状況が観察される。

杭2

径10cm程度の丸太材を使用し、先端を鋭く削りだしている。長さは約70cmあり、下端はVI層中で確認できる。上端は砂層の上面で腐食しており、それより上は確認できない。砂層が厚く堆



第20図 I地区B地点杭列遺構実測図1



第21図 I地区B地点杭列遺構実測図2 (西側)

積する場所で、VI層には先端が20cm程度入り込むだけである。

杭 3

径15cm程度の丸太材の先端を削っている。長さは約40cmあり、基盤のシラス層まで達しているが、軽石礫によって比較的浅い部分で止まっている。砂層の上面で腐食しており、それより上では確認できなかった。

杭 4

径10cm程度の丸太材を使用し、先端を鋭く削って使用している。長さは約80cm確認できるが砂層上面で腐食しており、それより上は検出できなかった。下端はレベル的には基盤のシラス層まで十分到達しているが、杭の周囲はVI層の落ち込み部分にあたっている。なお、この落ち込みについては、人為的な痕跡は見受けられなかった。

杭 5

杭 3 とほぼ同じ規格の丸太材を使用し、先端を削りだしている。長さは約20cmで、基盤のシラス層まで到達している。砂層上面より上は腐食していて上端は認識できなかった。杭に沿ってVI層土及びその上の砂層に沈み込みがみられる。

杭 6

径15cm程度の太い丸太材を使用している。腐食して明瞭に観察できないが先端を鋭く削りだしている状態は観察できる。砂層の上面で腐食し、それより上は認識できない。遺存部では長さは約20cmある。下端はシラスの上面まで達しているがそれほど深く打ち込まれてはいない。

杭 7

径10cm程度の丸太材を使用し、先端を鋭く削りだしている。下端は基盤のシラス層まで深く到達し、上端はV層まで確認できる。遺存部の長さは約1mある。杭の周囲の土層の沈み込みは観察されない。

杭 8

径10cm程度の丸太材を、先端を削って使用している。下端は基盤のシラス層まで到達し、長さは約80cmある。上端はV層中で確認できるが上端は腐食していて確認できない。杭の周囲には、土層の沈み込みは特に観察できない。

杭 9

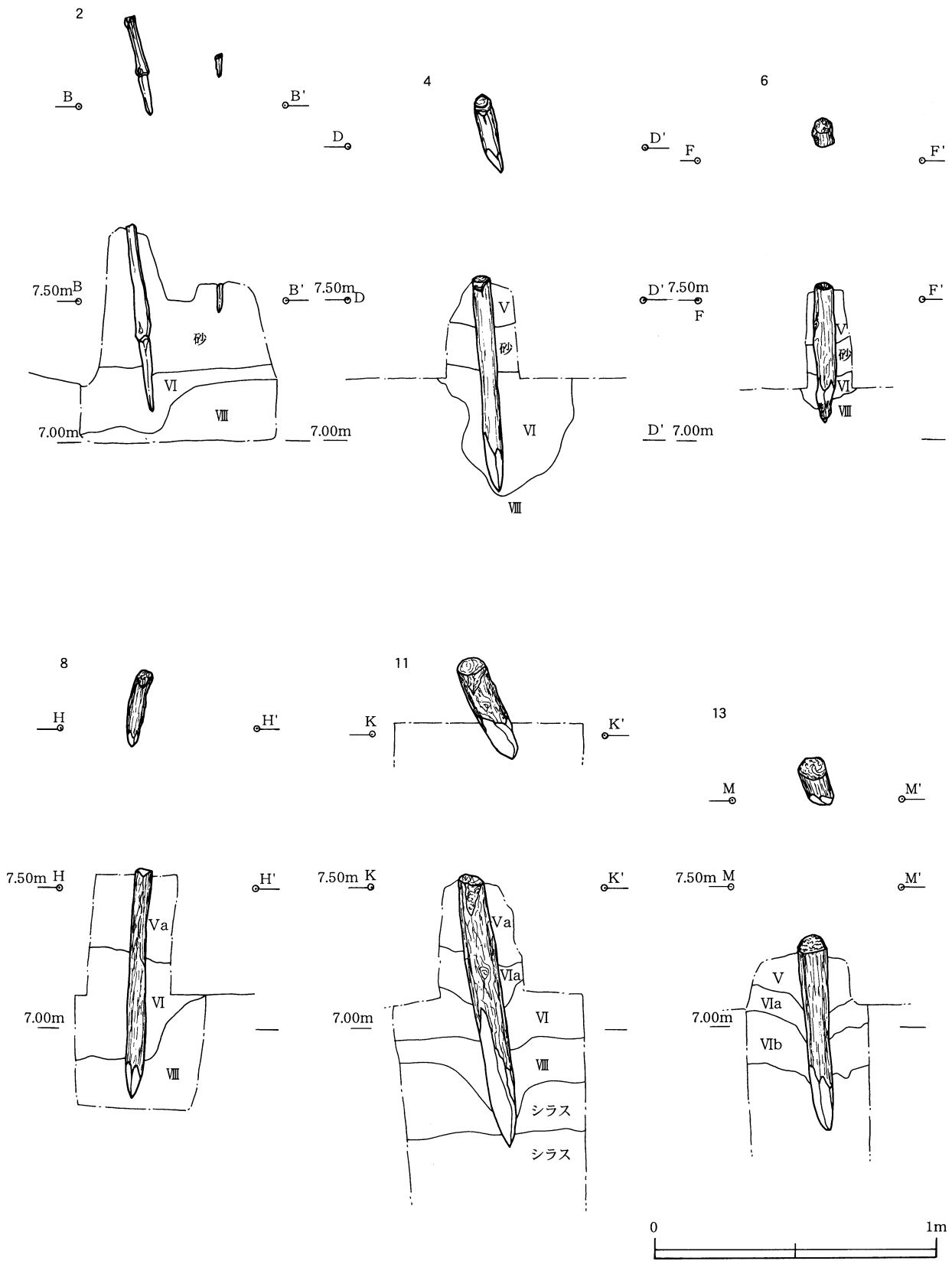
径10cm程度の丸太材を使用し、先端を鋭く削りだして使用している。先端部の遺存状態が良く、加工痕が明瞭に観察できる。一回の加工痕が大きく、鉋状の工具で粗く削りだしを行っている様子が観察できる。杭の下端は基盤のシラス層まで達し、上端はV層の上面近くまで観察できる。全長は1m程度である。

杭 10

径10cm程度の丸太材を使用し、先端を鋭く削りだしている。下端は基盤のシラス層まで到達し、杭に沿ってVI層土が沈み込んでいる。上端はV層半ばまで確認でき、それより上は腐食のため認識できない。

杭 11

径15cm程度の太い丸太材を使用し、先端を鋭く削りだしている。遺存状態が良く、鉋状の工



第22図 I地区B地点杭列遺構実測図3 (東側)

具で加工を行った痕跡が明瞭に観察できる。先端は基盤のシラス層まで達しており、V層とVI層、VIII層で杭に沿った土層の沈み込みが観察できる。上端はV層半ばまで確認でき、それより上は認識できなかった。遺存部の長さは約1mである。

杭12

径10cm程度の丸太材を、先端を鋭く削りだして使用している。遺存部の長さは約60cmでV層下部で腐食している。下端は基盤のシラス層まで到達する。杭に沿って、VI層土に若干の沈み込みがみられる。

杭13

径15cm程度の太めの丸太材を使う。長さは70cm前後で上端はV層中まで遺存している。下端はシラスまで達しているが遺存状態が良く、先端の削りだし痕が明瞭に観察できる。杭に沿ってVI層に若干の沈み込みがみられる。

これらの杭は、おおむね下部の遺存状態が良く、下端が観察できるものが多かった。その観察によれば、杭の多くは下端が基盤のシラス層まで達している。しかし、杭の一部には先端が砂層中で止まるものが確認される。(第22図・杭2の右側) また、上端はV層半ばあるいは砂層の上面で検出されるものが多く、IV層より上で杭の痕跡を確認することはできなかった。杭に沿った土層の沈み込みはVI層で多く観察されることなどを考えあわせれば、これらの杭列は砂層の堆積時期からV層の堆積時期の間に打設され、一定期間存続したものである可能性が高いものと推測される。

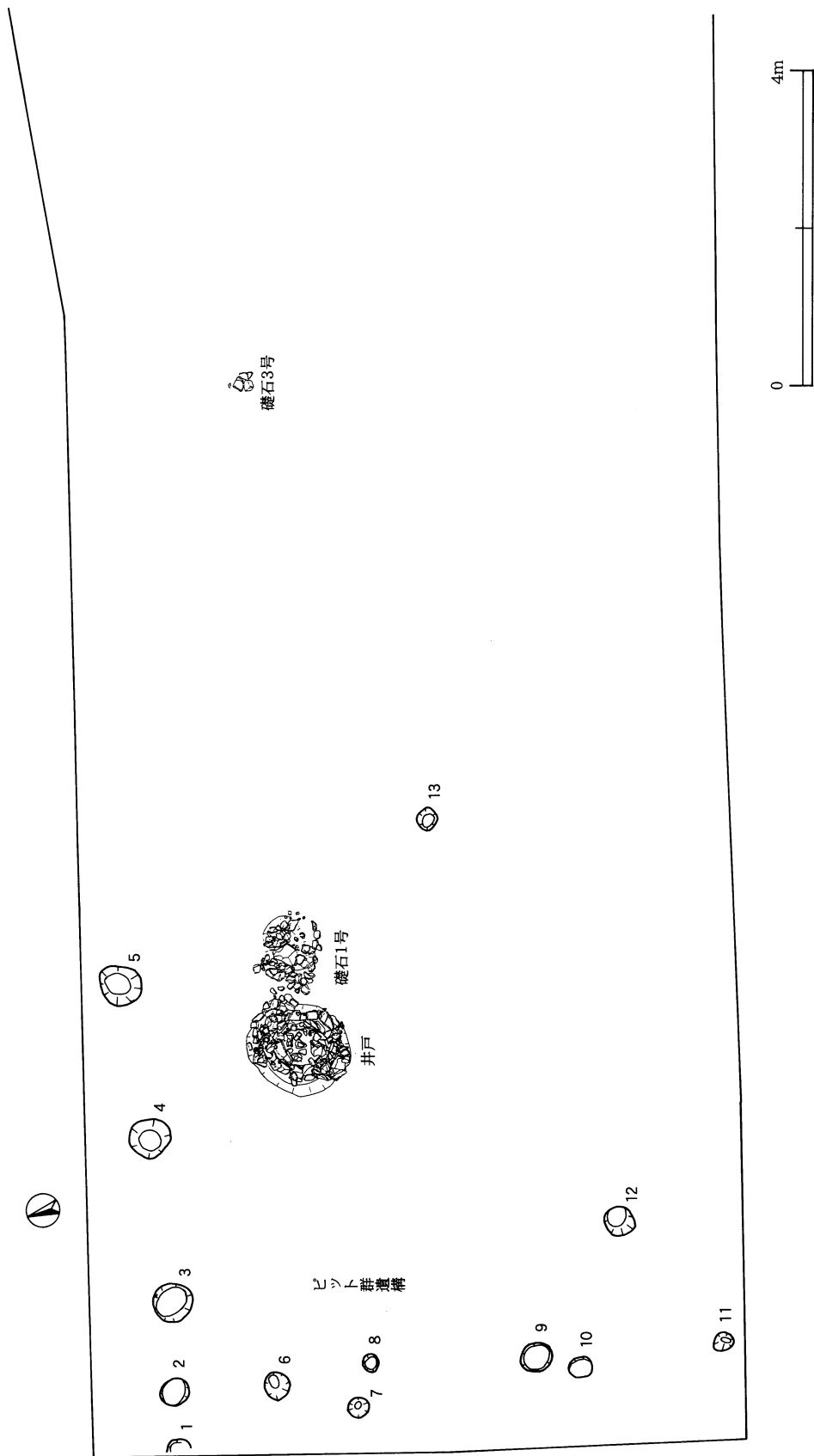
杭に使用される木材は、確認されたものは全て丸太材である。このうち遺存状態が良好なものには、鉋状の工具で加工を行った痕跡が明瞭に観察できる。

杭列の方位軸は、西側石列遺構にほぼ沿っており、石列遺構及びこれに関連する石組み遺構に関連する遺構であると考えられる。杭は南側石列遺構に沿った部分でも数本検出されており、西側石列遺構に沿うように打設された杭列が南側石列遺構に沿って展開する可能性も考えられる。

杭列の性格については、配置パターンが千鳥状になっており、具体的な用途等を推測するのは困難である。杭の直径はおおむね10cm～15cm程度で、遺存部の全長は長いものでも1m程度である。打設された杭の多くは基盤となるシラス層に到達しているが、それほど深く打ち込まれているわけではなく、強固な上部構造は考えにくい。調査時、この付近のV層上部では大量の木材が出土しており、これらとの関連も考えられる。しかし、杭列とのつながりを明瞭に示す痕跡は確認できないため、具体的な機能を想定できる状況にはない。

2) A地点の遺構(第23図)

A地点では近世の井戸遺構や礎石、ピット群が検出されたが、調査区が限定されることから遺構の把握は断片的になりがちで、周囲の状況を含めてこれらの遺構の全体像を把握することはできなかった。しかし、規格が類似するピット群の方位軸がB地点で検出された方形石組み遺構や石列遺構の方位軸とほぼ一致することや、この地点から出土する遺物の時期がB地点で検出された石組み遺構の出土遺物の所属時期とほぼ重なることなどから、A地点で検出された遺構群につ



第23図 I地区A地点遺構配置図

いてはB地点で出土した石組み遺構と何らかの関連を持つ可能性が指摘できる。

(1) 井戸遺構 (第24図)

A地点の中央部付近からは近世と考えられる井戸遺構が検出された。上面は径20cm前後の軽石礫が集積された状態で検出されたため、隣接する1号礎石との関連を中心に精査を行った。しかし調査を進めるに従い、軽石を積んだ井戸であることが判明した。

井戸の深さは、検出面から約2mを計る。上面には軽石礫がまとまった状態で出土しており、それを上げると軽石礫を円形に組んだ井戸遺構が検出された。さらにその下位には長さ約60cm、径約50cmの素焼きの土管が2段積まれ、井側を構成している。井戸の最下面は湧水のため精査することはできなかったが、底面にはきれいな砂礫が5cm～10cmほど堆積していた。しかし、植物繊維や炭化物などの痕跡は確認できなかった。

井側を構成する土管の外周には、土管の径よりも10cm～20cm大きい、井戸掘削時の掘込み痕が観察された。この掘込み痕の状況は井戸遺構の断面において観察されるが、下部は湧水のため完全に図化するまでには至っていない。

この井戸の底面の砂礫の上からは、古銭が10枚前後散らばった状態で発見された。古銭は腐食のため種類が判然としないものがあるが、ほとんどが寛永通宝である(第72図)。こうした遺物の存在からは井戸廃棄時に行われた祭祀行為を想起できる。

なお、検出当初この遺構は軽石がまとまった状態で検出されたため、調査時は隣接する1号礎石との関連から礎石として調査を進めた。この井戸遺構上面の軽石集積の中央付近では径20cm程度のピット状の痕跡が認められたものの、この遺構の性格を把握するための調査を十分に行うには至らなかった。(図版10上段左の図版を参照)しかし、この部分は下位まで礫が重なることはなく、埋土が周囲に比べて柔らかいなど、若干性質が異なる。本例では十分な検討を行うことはできないが、井戸廃棄時の祭祀行為との関連で注意しておく必要がある。

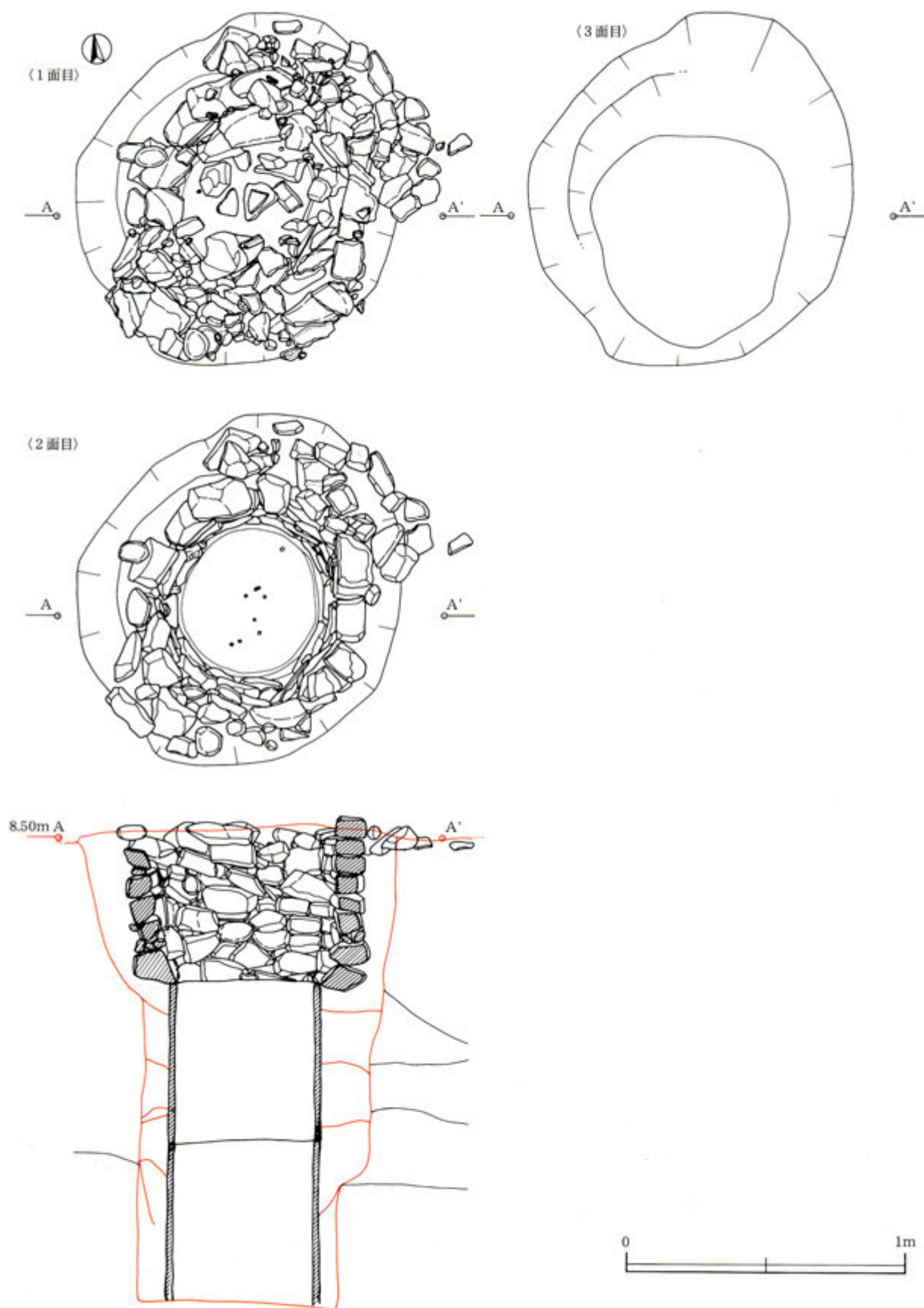
(2) 礎石遺構

A地点からは3基の礎石状の遺構が検出されている。それぞれの遺構における石材の規格や配置状況等については類似点が少なく、出土位置や検出状況も異なるため、それぞれが直接的に関連を持つ可能性は少ないと考えられる。また、検出状態や周囲の遺構の状況からみて礎石以外の機能が考えられるものもあるが、いずれも具体的機能を推測できる状況にはない。

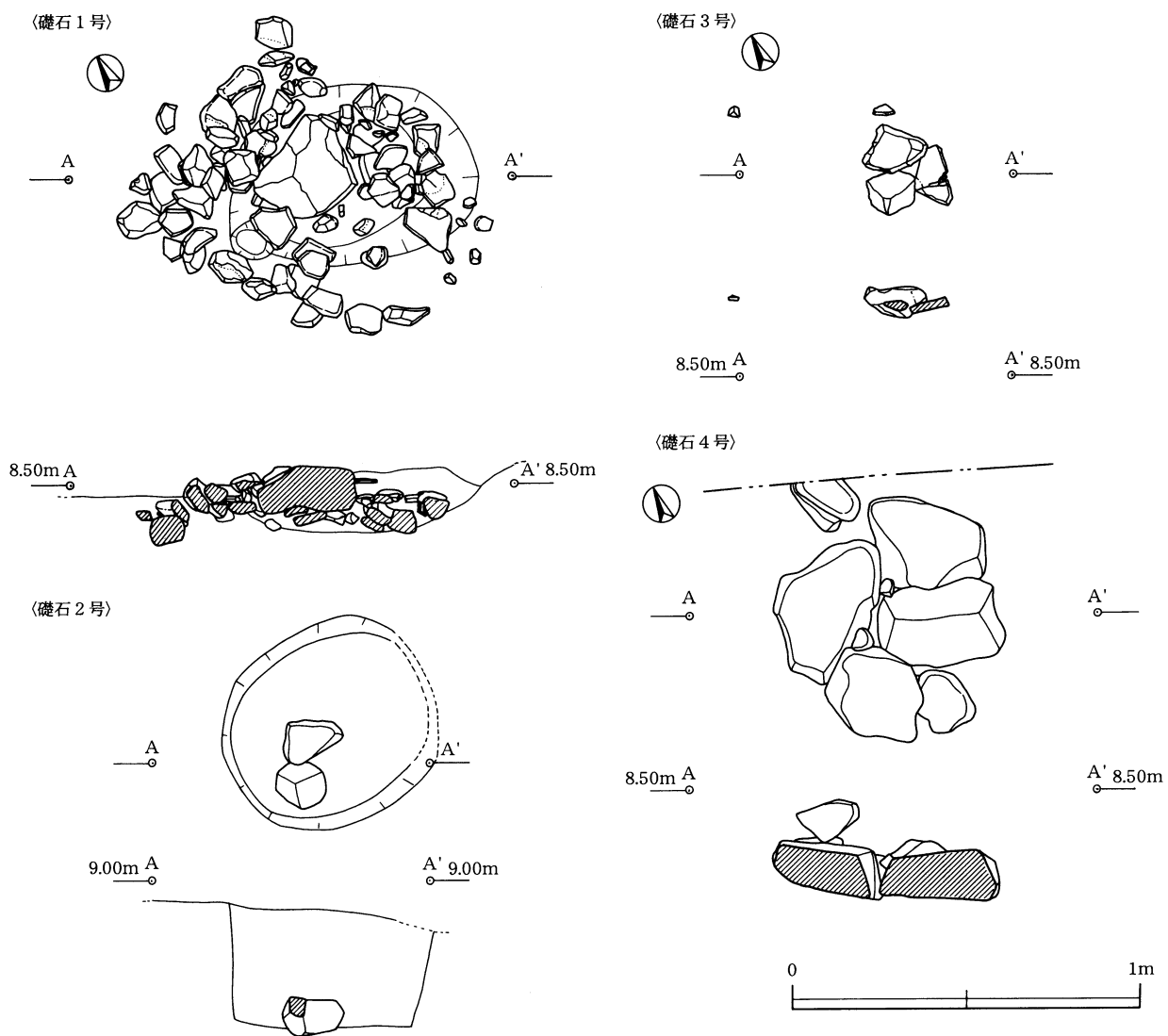
なお、3号礎石および4号礎石は出土位置を正確に記録するには至らず、調査区の中で正確な位置関係を示すことはできない。3号礎石の大まかな出土位置はA地点西側のピット群の周辺である。4号礎石の出土位置はおおむねA地点の北壁沿い、ピット5より東に約6mほどの地点である。

1号礎石

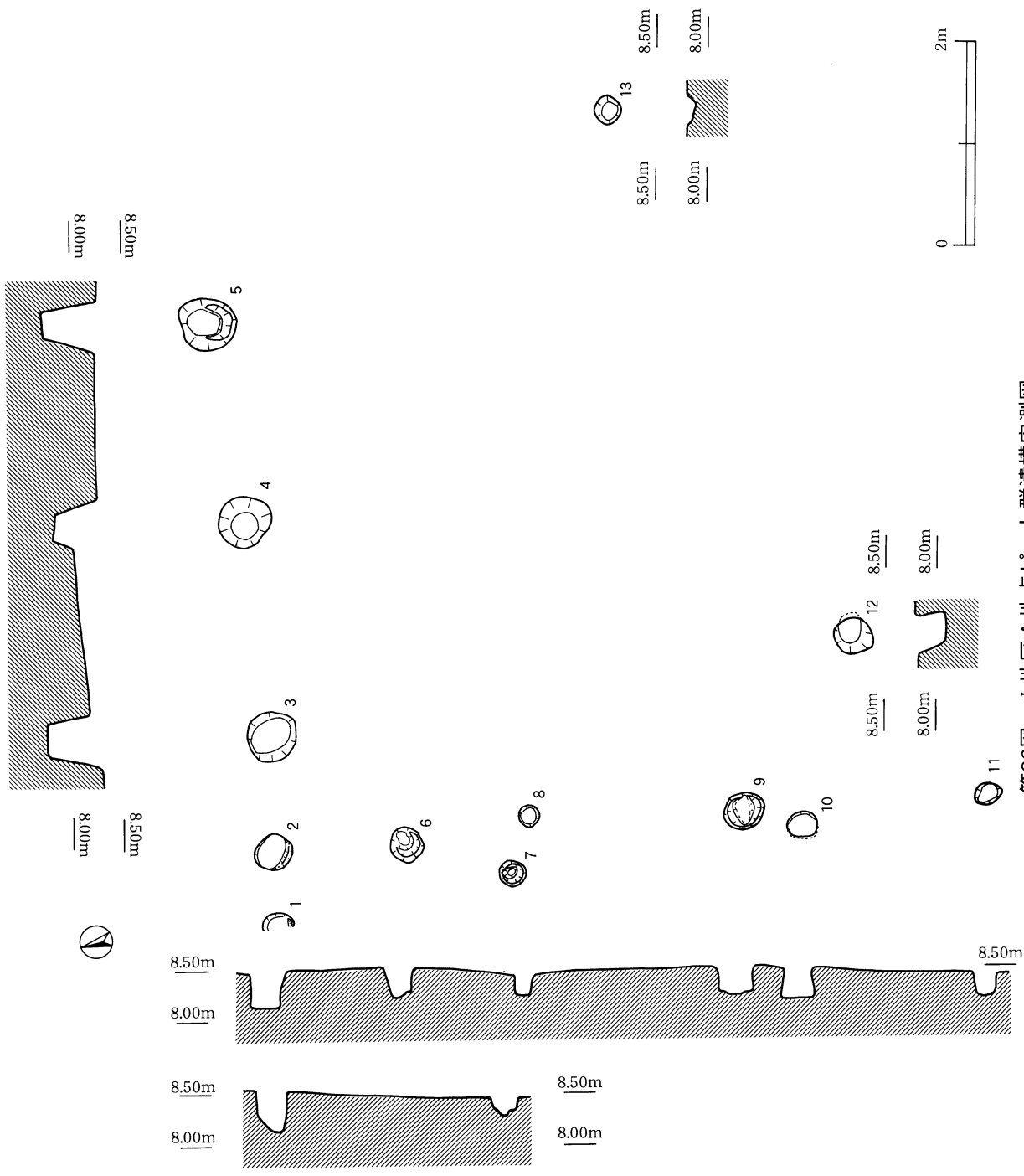
この遺構は井戸遺構に隣接する状態で検出された。中央に径30cm前後の大きな凝灰岩礫を配し、その周囲には径10cm～20cmの礫を集積している。調査区内に類似する遺構はみられず、付近にピット等も検出されなかったため、上部構造を推測しうる状況にはない。下部に若干の掘り込み



第24図 I地区A地点井戸遺構実測図



第25図 I地区A地点礎石遺構（1号～4号）実測図



第26図 I 地区A 地点A ヒット群遺構実測図

が確認できる。上位の礫は下部の掘り込みの外にも若干広がる状況が観察される。

2号礎石

この遺構は角礫を数個集積した状態で検出された。周囲に類似する遺構は見られず、調査区内で独立した状況で検出されている。周囲の状況や石材の配置状態から、礎石の他にも複数の用途が考えられるが、現状では即断できない。

3号礎石

この遺構は扁平な礫を数個平坦に配した状態で検出された。それぞれの礫はかなり大きく、径30cm～50cm、厚さ20cm前後の扁平な円礫を使用している。礫を数個集積していることや、それぞれの礫の上面が同じ高さになるように配されていることから、礎石以外にも複数の用途が推測される。この遺構は調査区の壁面近くで検出されていることや、壁面近くに別の礫がみられることから、この遺構自体が調査区外にのびる可能性も残されている。平たい円礫を数個平面的に配置しており、付近に類似する遺構もないことから、この遺構の機能や性格については不確定要素が大きい。

(3) ピット群

A地点の西側からはピットが十数基検出された。調査範囲が限定されるため建物等の上部構造を認識するには至らなかったが、一部のピットには規格や検出位置の間隔において一定のまとまりが認められる。これらのピットについては何らかの施設の一部であることが予測される。こうしたピットの配列はB地点で検出された方形石組み遺構や石列遺構と方位軸がほぼ一致することから、B地点の遺構とほぼ同時期である可能性が考えられる。

3) 小結

I地区からはB地点で方形規格の石組み遺構群が出土し、A地点ではピット、礎石及び井戸遺構が検出された。

B地点の石組み遺構群は中央の方形石組み遺構、切石配石遺構、石列遺構、および杭列で構成される。B地点で出土した一連の石組み遺構には、ほぼ同じ規格の切石が使用され、鑿等による調整痕が顕著にみられる。また、方形石組み遺構や石列遺構には胴木の敷設や裏込め石等の使用など、共通の技術的要素が多くみられる。

また、外周をめぐる三方の石列遺構は正面を内向きにして築造されているのに対し、中央付近の方形石組み遺構は四方の外表面がそろえられ、切石が外向きに組まれている。土層の堆積状況も、石列遺構によって囲まれる部分の内外では明らかに異なる。石列遺構によって囲まれる部分には青灰色の泥質土が厚く堆積し、木製品や陶磁器を含む大量の遺物が出土した。

こうした石組み遺構の構造や土層の明確な差異、遺物の出土状況を考えあわせれば、B地点の遺構は一連の構造体として捉えることができる。三方の石列遺構の内部で検出された切石配石遺構や杭列についても、これに関連する遺構と考えてよい。

一方、寿国寺については近世の文献史料にいくつか記載がある。このうち、『三國名勝圖會』

には洋池を含む寿国寺全体の景観が詳細に記載されている（第4図）。

こうした遺構の検出状況と文献史料とをつきあわせて検討すると、これらのB地点の石組み遺構は寿国寺の洋池の一部である可能性が極めて高い。石組み遺構内で寿国寺の存続期間に合致する年代の遺物が多くみられることも、こうした可能性の根拠とすることができよう（第IV章第1節2参照）。

ただし、それぞれの石組み遺構の築造方法や切石にみられる鑿等による調整痕においては、細部に若干の違いがみられる。特に石組み遺構を構成する切石正面の小口面における調整は、方形石組み遺構の切石が面取が甘く、鑿痕も比較的粗いのにに対し、石列遺構の切石の調整は面取が丁寧で鑿痕が比較的細かいなどの違いが指摘できる（第76図333～335）。また、胴木の敷設形態においても、中央の方形石組み遺構の下床に敷設される胴木には切石が根石として埋設されているのにに対し、周囲をめぐる石列遺構の下床に敷設されている胴木にはそれが見られない。基本的な工法に大きな系統差はみられないものの、こうした工法の細かい差異から、それぞれの築造時期に若干の時間差が存在する可能性を指摘することができる。

杭列については、検出状況の検討からおおむね洋池の存続時期に符合する。『三國名勝圖會』等の文献史料に具体的な記載はみられないものの、杭列の方位軸が石組み遺構と平行することから一連の関連遺構として判断すべき遺構であると考えられる。

A地点の遺構については調査区が限定されたことが大きく、検出された遺構が断片的であったため、全体像は判然としない。

井戸遺構は内部に寛永通宝が投入されていたことから、近世末～近代初頭の廃棄とみられる。また、十分に調査し得なかったが検出時の状況から井戸廃棄時に銭貨の投入とともに祭祀行為が行われていた可能性があり、井戸廃棄時の祭祀行為を推測させる調査事例として注目できる。井戸の構造の点から見ても、井側に土管を使用している点特徴的である。近世の井戸遺構は鹿児島市の浜町遺跡などに出土例があるが、今回の調査事例で検出された井戸遺構も構造面や廃棄時の祭祀行為などの比較検討資料として興味深い。

A地点で検出されたこの他の遺構については、その性格や機能は明らかにできなかった。ただし、規格が類似するピットが並ぶ方位軸はB地点で検出された石組み遺構とほぼ同一であり、寿国寺に関連する遺構である可能性がある。周辺地区の調査を待ち、今後の成果を期待したい。

今回の調査の結果、I地区B地点の遺構は、切石積みの石垣と中島を伴う寿国寺の洋池である可能性が極めて高いと判断される。また、A地点の遺構も井戸遺構の廃棄年代等を勘案すれば、寿国寺の関連遺構である可能性が高い。調査区が限定されるため断片的な把握にとどまったが、調査の結果、I地区周辺には寿国寺門前付近の施設がかなり集中して残存している可能性が高く、近世の仏教寺院の様相を知る重要な資料として注目される。

2 出土遺物（第1～66図）

I地区で出土した遺物は、陶磁器、土製品、瓦、金属製品、銭貨、石製品、漆製品、木製品、植物繊維製品、骨製品の10種に分類することができた。なお出土遺物では、A地点とB地点とでは出土状況に違いがみられなかったため、出土地点を区別せず、順次報告を行うこととする。

1) 陶磁器類

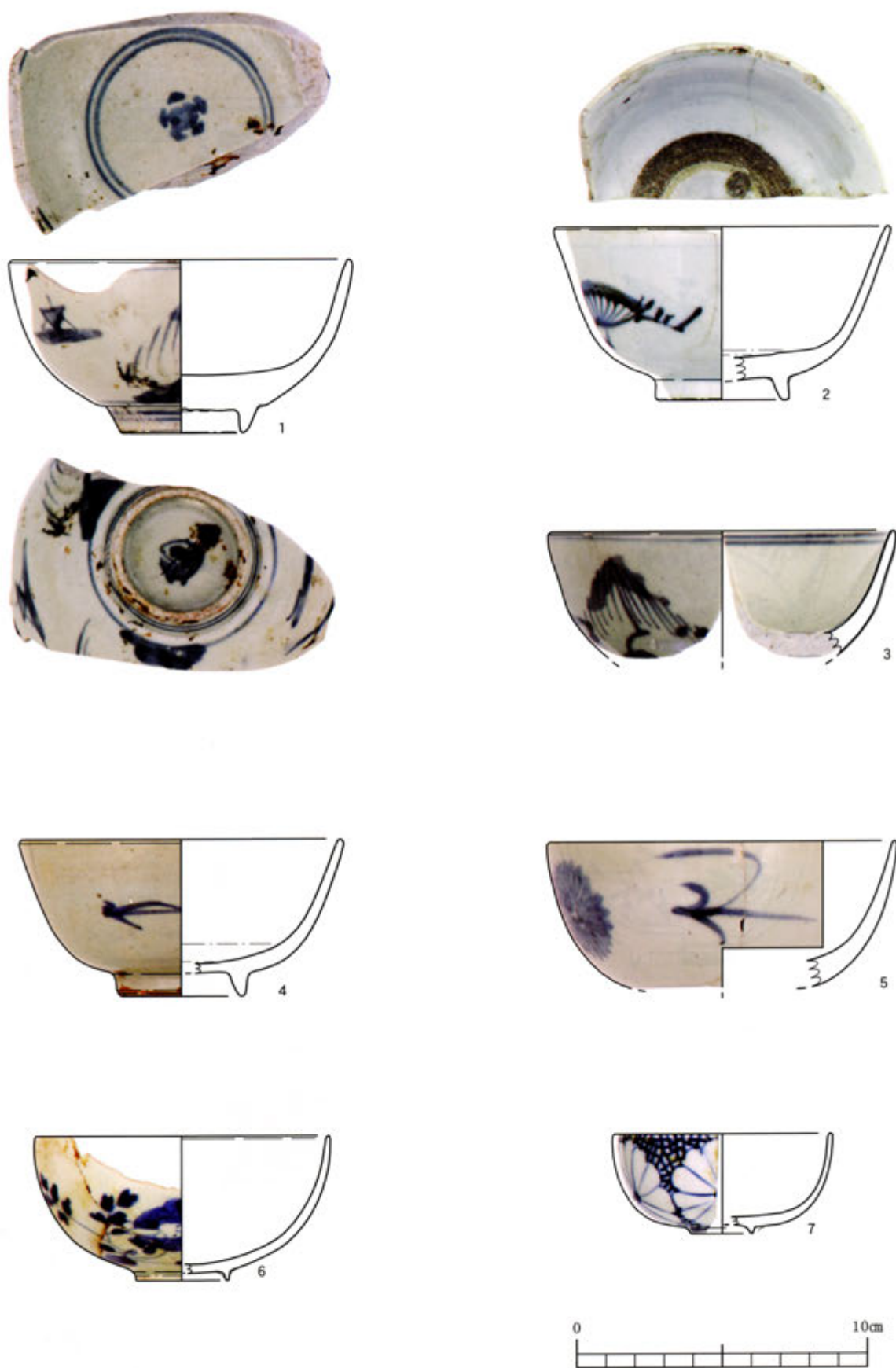
報告にあたっては資料の持つ機能や用途性を大分類とし、器形や材質による分類を更に加えている。器種として碗・皿・鉢・蓋・瓶類・仏具・灯明具・播鉢・鉢・植木鉢・壺・甕等が出土した。また、人形や仏像の土製品、焙烙、陶器を転用したメンコや、熔着した碗や窯傷のある碗も出土している。陶磁器の分類に関しては、『四谷三丁目遺跡』分冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」1991、新宿区四谷三丁目調査団を参考にした。また、分類の細部に至っては、地域性を考慮し独自の分類を加えた。

出土遺物中、洋池内出土（第V層に相当）の遺物が含まれるが、他の層のものと時期差が見られないため、別項として扱っていない。なお、区別できるように遺物観察表は洋池と記載した。また、貿易陶磁器が出土しているが、どの器種も極めて少量のため、特に独立して分類せず国内産陶磁器の中に掲載し、その都度文章と観察表で報告する。

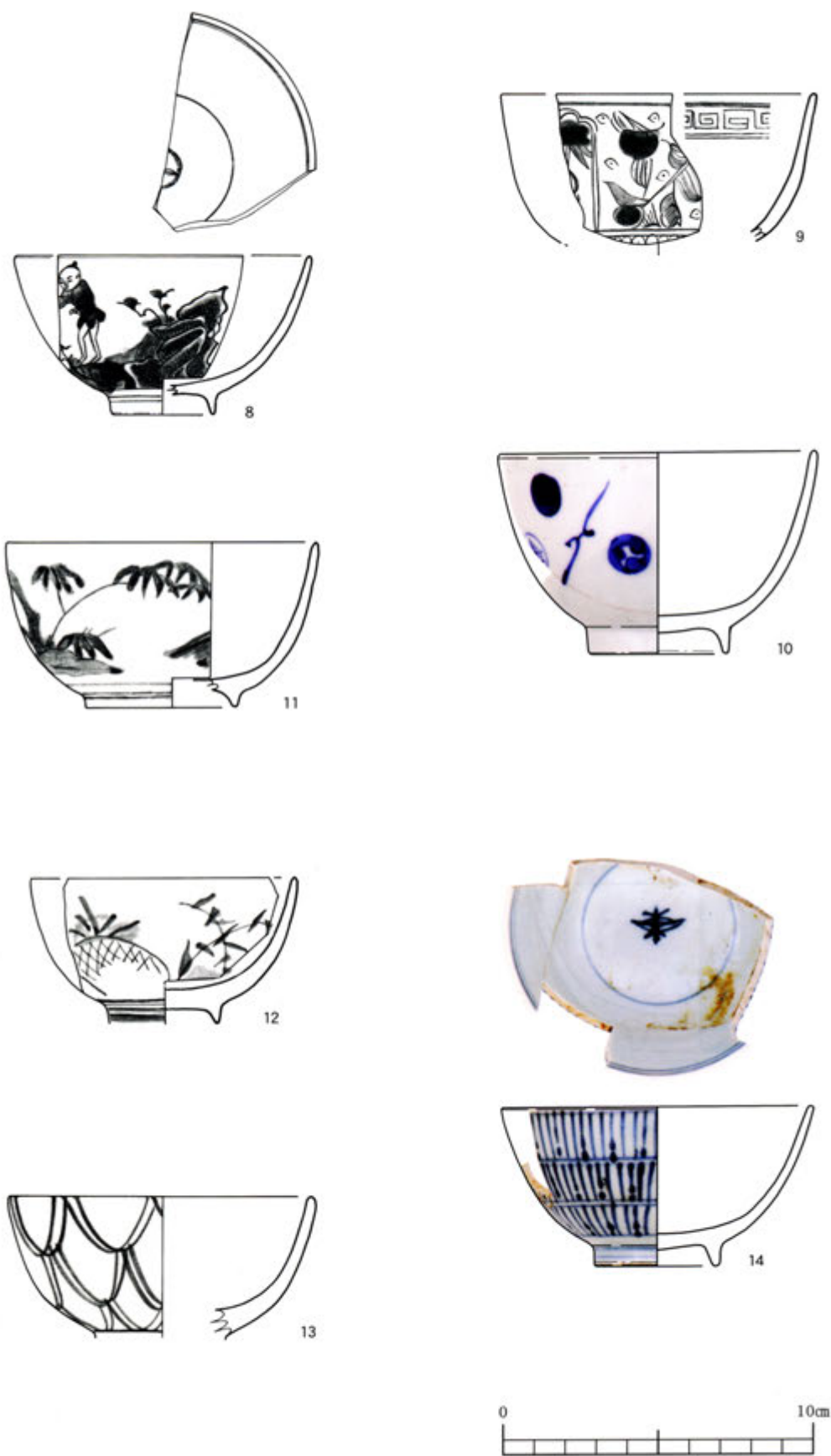
(1) 碗（第27～38図）

碗は形状によって、丸形（1～13・24）、小広東形（14）、飯碗形（15～17）、底部が基筒底のもの（18）、小形碗（19～22）、色絵（23）、腰部で屈曲するもの（25）、半筒形（26・27）、広東形（28・29）、端反形（31～55）、底部のみ（56）に分類した。なお、31は猪口で、図化できたものが1点であったため、碗の中に入れた。23の色絵、24・25の外表面青磁釉のものを除き、すべて染付である。

1は、見込みに二重圏線とコンニャク印判よる五弁花文を施し、外面に山水文が描かれた厚手の丸形碗である。高台内面に記銘が見られる。2は、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが看取され、外面は扇文が描かれる。3は、外面が山水文と思われる厚手の碗である。4は、外面に折れ松葉文が描かれた比較的底部厚の薄い碗で、5は灰白色の胎土に、やや緑がかかった釉調を呈する透明釉が掛けられており、外面折れ松葉と菊花文が描かれた厚手の碗である。6は外面草花文が描かれ高台が微小なものである。7は外面に氷裂菊文が描かれており、高台を小規模に作る。8は外面に唐子文を描くもので器壁は薄く作られている。9は蓋付碗で、同じ絵柄の碗蓋（第49図133）が出土している。10は折れ松葉と丸文が描かれ、薄手の器形である。11は丸形で、外面には笹文が描かれる。12は草花文を描く。13は二重網目文を描くやや厚手のものである。14は外面に梵寿字文、見込みに昆虫文と一重圏線を描く薄手の小広東形の碗である。15は蓋付のやや大形の碗で、口縁部内面に釉剥ぎが見られ、外面には宝尽文を施す。16は口唇部の内外に釉剥ぎの見える蓋付碗で、外面に草花文と梅文が描かれる。17は外面花文、内面四方禪文のやや薄手の碗で、蓋付碗と考えられる。18は外面に蛸唐草文、見込みに松竹梅文が描かれ、基筒底気味の高台内には銘も記されている。20～23は小形の碗で20は市松文、21は楓文、22は剣先文と連弁文が描かれている。23は赤絵の施された上絵付けのある資料である。24・25は外面青磁釉の碗で、24



第27图 I地区出土遗物(1)碗(磁器)

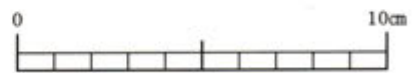
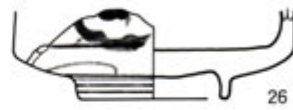
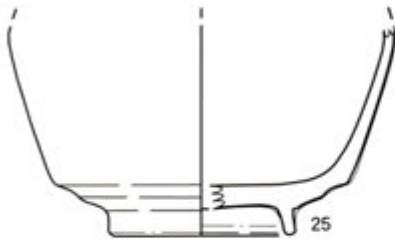
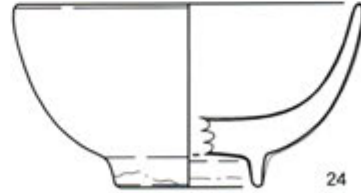
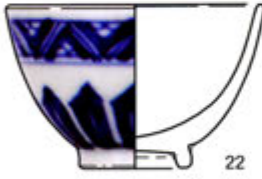
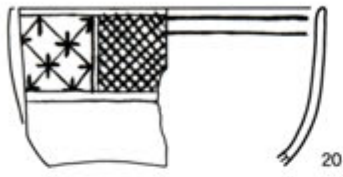


第28图 I地区出土遗物(2)碗(磁器)

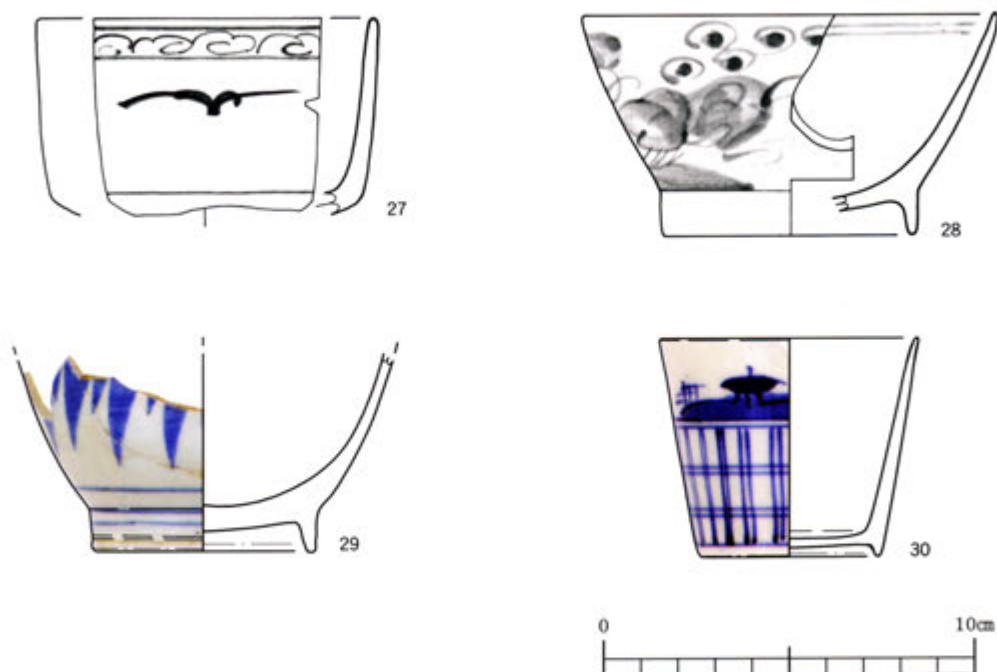


第29図 I地区出土遺物(3) 碗(磁器)

は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施され、25は、腰折れ形で見込みに二重圏線と五弁花のコンニャク印版が施されて、高台内銘も記されている。26・27は筒形で26は外面に雪持笹文と折れ松葉文、内面に一重圏線と昆虫文が描かれている。28・29は広東形で、28は花文、29は柳文が描かれている。31～55は端反形の碗である。31・32は、外面花唐草文が描かれ、31は見込みに岩波文、32は花文、松竹梅文と四方樺文が描かれている。33は、比較的底部厚があり、内底は平坦に作らず、格子文が描かれている。34は、高台がハの字に開く器形で、格子に笹文が描かれ、底部から胴部下位にかけ器壁を厚く取り、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが見られる。35・36は、胎土は焼成不良のためか暗茶褐色を呈する。37・38は、変様性の強い草花文を外面に大胆に描き、38



第30图 I地区出土遗物(4)碗(磁器)

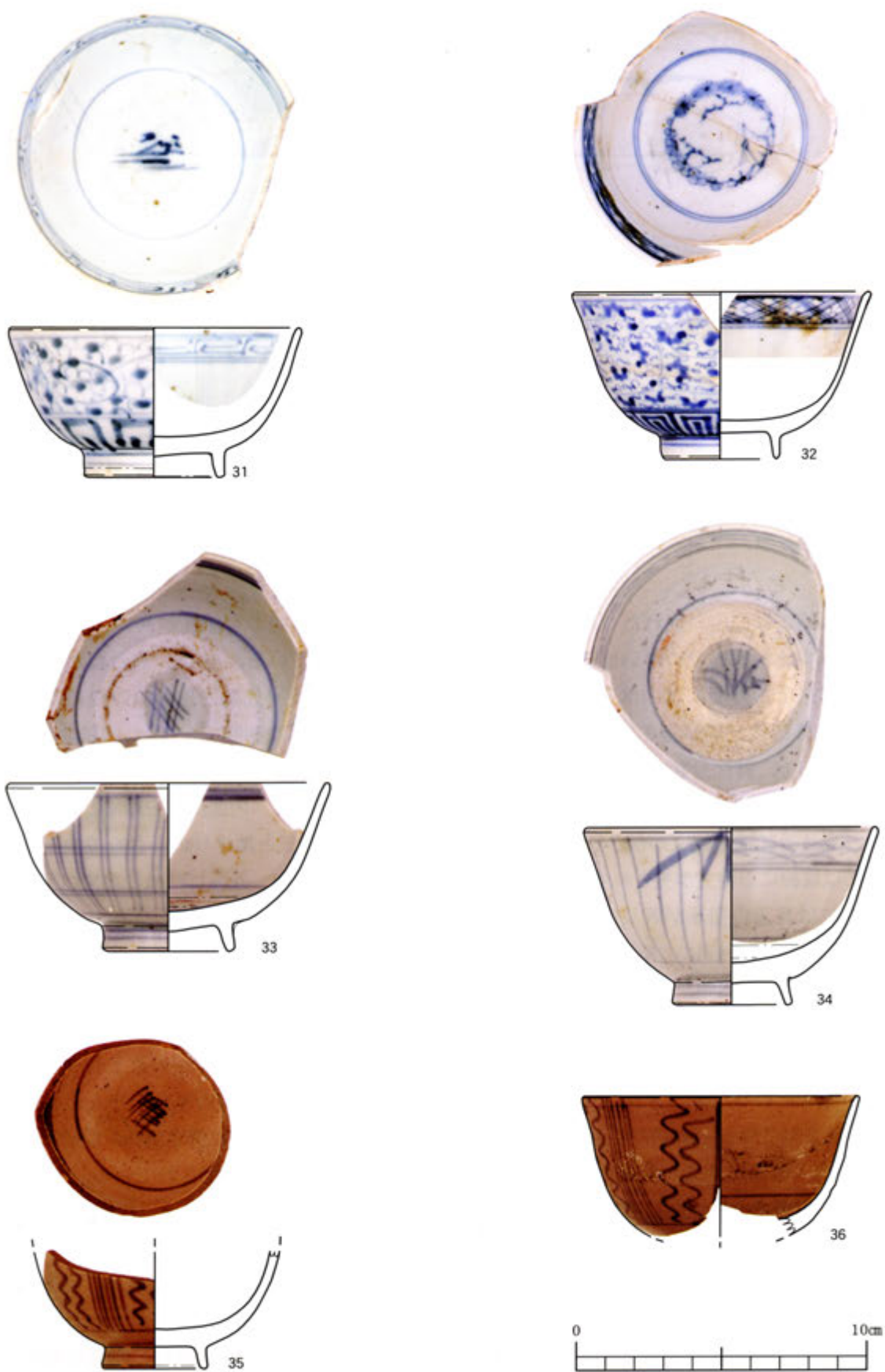


第31図 I地区出土遺物(5) 碗(磁器)

の高台内銘には口内に崩れた「寿」が記されている。共に平佐焼の可能性が高い。39は、草に露文を施す比較的器壁の厚い器形、数個体の出土が確認されている。40は、高台脇が張る端反の強い器形で、外面には山水文、見込みには岩波文が施された平佐焼と思われる資料である。41は、内外面に文様が施されているが、変様性が強いので詳細は判断できない。42は、器高のある端反碗で、鉢に分類することもできる。外面は若松文、口縁内側に四方禪の組み合わせ文が施されている。43は、内外面とも変様性の強い文様で、外面は柳文、内面は四方禪文と思われる。また、見込みには岩波文が描かれている。44は、比較的厚い器壁と薄作りの高台を持つ器形で、外面には縦線に雪輪文が施されている。45は、開口性の強い器形で、外面にはねじ花文が施され、透明釉には貫入の発達が著しい。46は、連格子に蝶文、内面は著しく変様したと思われる禪文が描かれている。47は、断面三角形の高台が付く比較的厚手の碗で、外面には格子文が描かれている。48は、体部に張りを持たず直線的に開く器形で鉢に分類することもできる。外面に角張った「寿」字が大きく描かれている。49は、高台径が大きい鉢形の器形を呈する青花で、清代の資料である。50は、外面唐草文、内面宝文が描かれており、138・139の蓋とセット関係であると考えられる。51・52は小振りな形の碗で、51は、高台脇の器壁を厚く作り、外面には若松文が施されている。52は、外面に花文が描かれている。53は、直線的に開き気味の器形である。54は、内・外面に丸文に格子文や四方禪文を組み合わせた文様構成が配されている。55も直線的に開く器形で、外面だけ青磁釉が掛かり、内面は四方禪文が記されている。56は、薄手の青花碗で仙芝祝寿文が描かれた清代の資料である。

57～73は陶器製の碗で、在地系と考えられるもの(57～69)と在地以外のもの(70～73)に大別し、抹茶碗(73・74)と特殊なもの(75・76)は最後においた。

57は、灰色気味の緻密な白色胎土に鉄釉が総釉で掛けられ、外面は褐色に、内面は鉛色に発



第32图 I地区出土遗物(6)碗(磁器)



第33图 I地区出土遗物(7)碗(磁器)

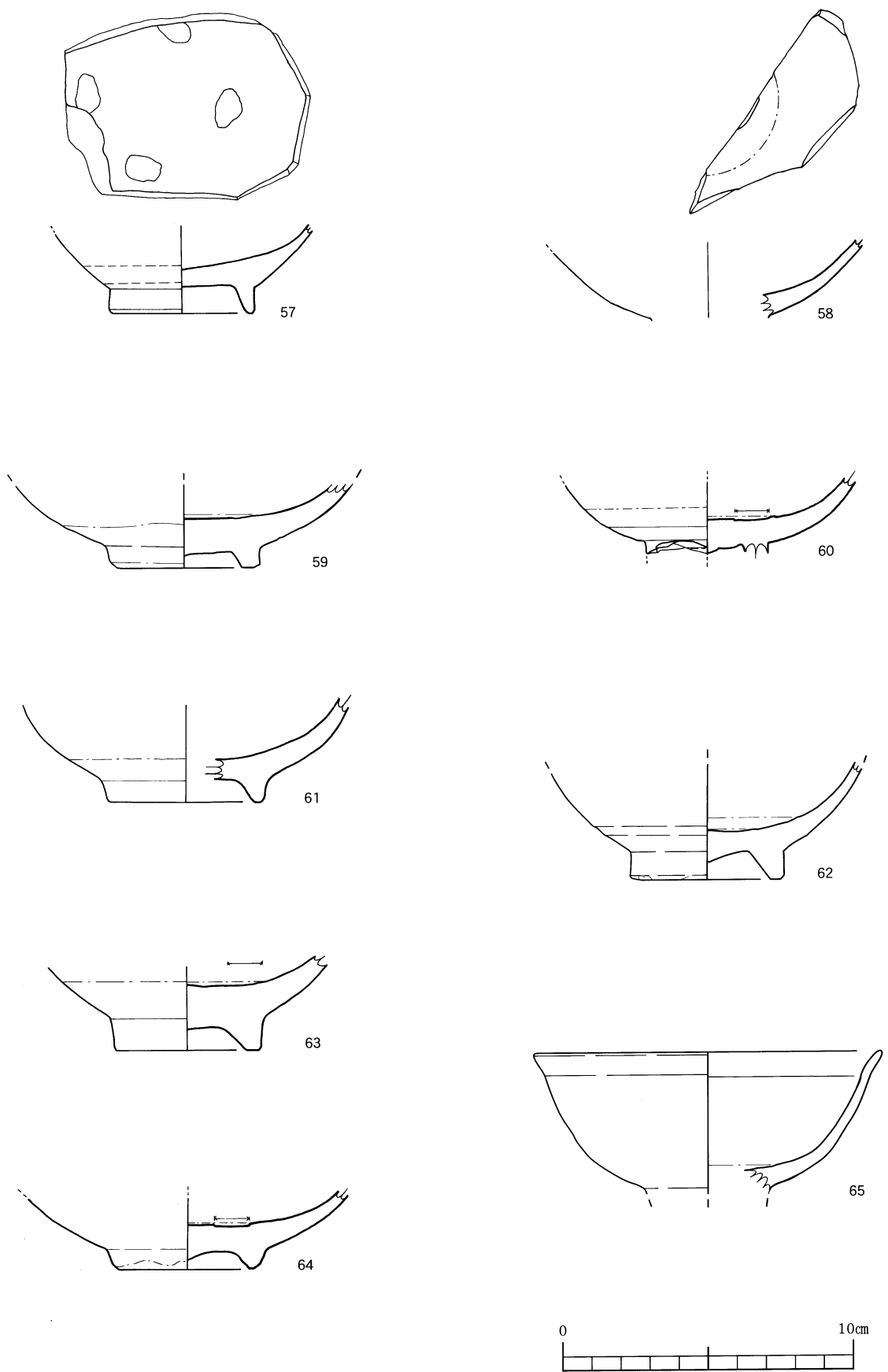


第34图 I地区出土遗物(8)碗(磁器)

色する。見込みに4か所、大形の砂目跡が設けられており、始良郡加治木町で17世紀第4四半期に稼働した山元窯の製品である。58は、灰白色の緻密な胎土に内・外面に褐釉を掛け、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが入る資料で、18世紀前半の龍門司焼と思われる。59から65は、龍門司焼である。59・60は、淡い赤褐色の胎土に白化粧土が内面と外面の高台脇まで掛けられ、その上から透明釉が高台内面を除いて掛けられ、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す資料である。61は、高台の内側の削り出しが斜めに入る器形で、59・60と同様な施釉がみられるが、内面には白化粧土を施さず、高台内まで透明釉が掛けられる。62・63も高台の内側の削り出しが斜めに入り、裏底を62は平坦に、63は兜布状に仕上げている。共に、黒褐色に発色した同様な鉄釉が掛けられ、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。64は開き気味の器形に、畳付の施釉を削り落とした総釉の資料で、オリーブ色に発色している。裏底は兜布状に、見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。65は高台部分を欠損する。口縁部の内・外面にだけ白化粧土を施し、その上から褐釉の掛けられた端反形で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが入る。66・67は、西餅田系と（元立院窯・小松窯）と思われる資料である。

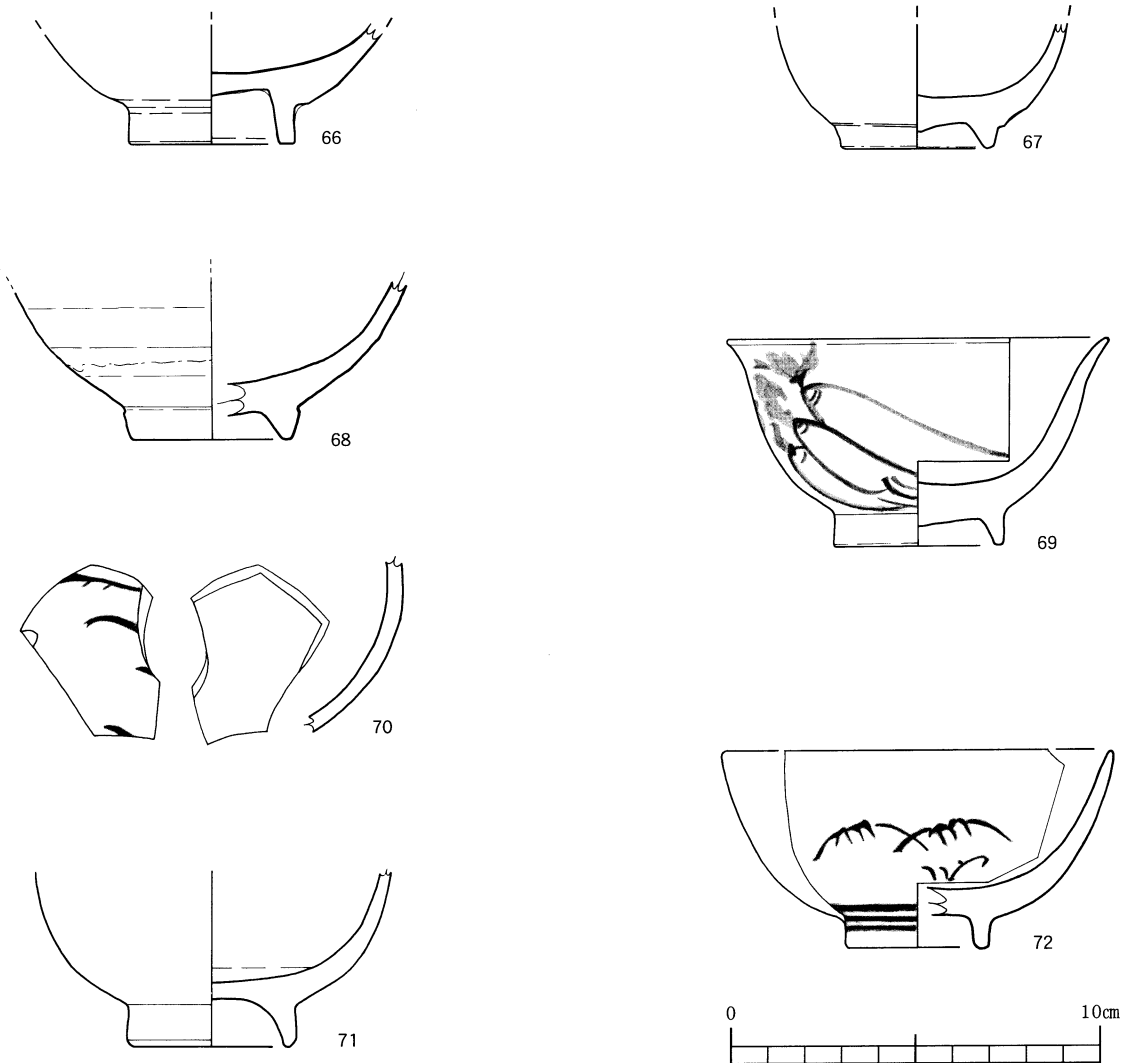


第35図 I地区出土遺物(9) 碗(磁器)



第36图 I地区出土遺物(10) 碗(陶器)

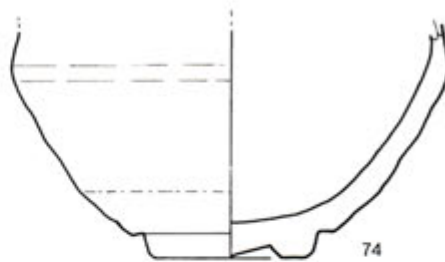
66は高台脇の器壁を厚く取り、高台内側を深く削り込んだ器形で、灰色の良く焼き締まった緻密な胎土に、光沢のある褐釉が全面に掛けられている。68は、灰白色の胎土に内面は透明が掛かり、外面には銅緑釉が高台脇まで施された肥前内野山系の資料である。69は、微細な黒色粒子を含む灰白色の胎土で、外面だけに大根・まな板・包丁文が鉄絵で大胆に描かれた在地系の資料である。70は黄色味がかかった白色の胎土で、貫入の発達した透明釉が掛けられ、赤と緑の上絵付けが施された京焼系の資料である。71は関西系と思われる碗で、内外面とも透明釉が掛けられ、高台内側の削り出しは緩やかなカーブで仕上げる。72は、白化粧土に笹文を描き、透明釉が掛けられた陶胎染付である。73は外面に一对の燕子文を鉄絵で施す抹茶碗と思われる器形で、胎土は黒色の微粒子を含む黄白色土で、透明釉が総掛けられた在地系の資料と思われる。74は関西系のもので、光沢の強い黒釉が掛けられた天目碗である。胎土は締まりの悪い白色土で、外面腰部から高台内にかけて露胎している。75は関西系の平形の碗で、口径に比べて小さくシャ



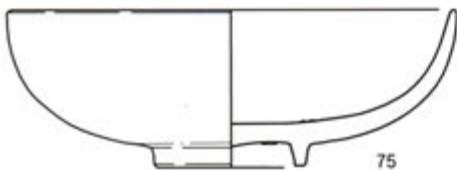
第37図 I地区出土遺物(11) 碗(陶器)



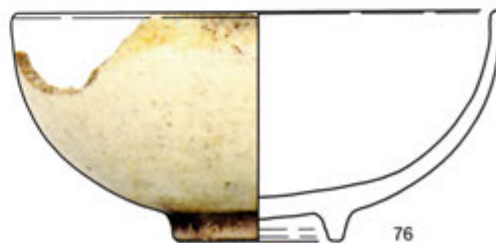
73



74



75



76



第38図 I地区出土遺物(12)碗(陶器)

一平な作りの高台が付く器形で、内外面に透明釉を施釉し、高台脇から高台内にかけては無釉である。内面には、白と赤で花文の上絵付が施されている。76は内外に貫入が未発達な透明釉が掛けられ、高台脇には一羽千鳥文を施す豎野系の資料である。

第2表 I地区出土遺物一覧表・碗(磁器) 1

番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
1	碗	丸形	磁器	11.8	6	4.4	山水文見込五弁花文(コンニャク印版)	肥前系	洋池1642	Vb
2	碗	丸形	磁器	11.6	6	4.6	扇文見込蛇ノ目釉剥	肥前系	-	-
3	碗	丸形	磁器	12	-	-	山水文?	肥前系	一括	0~II
4	碗	丸形	磁器	11.2	5.45	4.5	折れ松葉文	肥前系	洋池1834	Vb
5	碗	丸形	磁器	12	-	-	折れ松葉に菊文	肥前系	一括	0~II
6	碗	丸形	磁器	10.2	5	3.2	草花文	肥前系	1923	Vb
									1482	IVb
7	碗	丸形	磁器	7.6	3.5	2.1	氷裂菊花文	肥前系	一括	0~II
8	碗	丸形	磁器	9.6	5.2	3.4	唐子文	肥前系	-	-
9	碗	丸形	磁器	10.2	-	-	外面花文内面雷文	肥前系	一括	0~II
10	碗	丸形	磁器	10.3	6.6	4.35	折れ松葉に丸文	肥前系	2024・1990	V・I

第3表 I地区出土遺物一覧表・碗(磁器) 2

番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点	層
				口径	器高	底径			(取り上No)	
11	碗	丸形	磁器	10.6	5.4	4.85	笹文	肥前系	一括	0~I
12	碗	丸形	磁器	8.9	4.7	3.6	草花文	肥前系	T4199	I
13	碗	丸形	磁器	10	-	-	二重網目文	肥前系	一括	0~II
14	碗	-	磁器	10.1	5.2	4.1	梵寿字文見込昆虫文	肥前系	洋池1752	Va
									洋池1640	Vb
15	碗	-	磁器	13.3	-	-	宝尽文 口禿	肥前系	一括	0~II
									1469	0~II
16	碗	-	磁器	9.65	5.05	5	草花文と梅文	肥前系	池1407	Vb
17	碗	-	磁器	10.6	-	-	外面窓絵花文内面四方禪文	肥前系	1297	I
18	碗	-	磁器	-	-	4.4	外面蛸唐草文見込松竹梅文?	肥前系	一括	0~II
19	碗	-	磁器	8.45	6.6	4.35	花文	肥前系	1778・1784一括	V・IV
20	碗	-	磁器	8.6	-	-	市松文	肥前系	-	-
21	碗	-	磁器	7	5.3	-	楓文	肥前系	一括	0~II
22	碗	-	磁器	7	4.5	3.2	剣先文連弁文	肥前系	-	-
23	碗	-	磁器	-	-	2.6	色絵	肥前系	-	表
24	碗	丸形	磁器	9.4	5	4	外面青磁釉見込蛇ノ目釉剥	肥前系	洋池1725	Vb
25	碗	腰折	磁器	-	-	5.1	見込五弁花(コンニャク印版)外面青磁釉	肥前系	-	-
26	碗	筒型	磁器	-	-	4	雪持笹文見込昆虫文	在地	一括	0~II
27	碗	筒型	磁器	9.4	-	-	-	在地?	一括	-
28	碗	広東	磁器	11.2	6	6.8	花文?	肥前系	洋池1403	Va
29	碗	広東	磁器	-	-	6.1	柳文?	肥前系	1567	IV
30	猪口	-	磁器	7	5.95	4.9	格子文山水文	肥前系	1518	IVb
31	碗	端反	磁器	10.1	5.2	4.8	花唐草文見込に岩波文	肥前系	-	表
32	碗	端反	磁器	10.5	5.8	4.1	花唐草文内面四方禪文見込松竹梅文	肥前系	一括	0~II
									1300	I
									1309	Va
33	碗	端反	磁器	11.2	5.85	4.6	格子文	肥前系	-	-
34	碗	端反	磁器	10.2	6.15	4.1	格子文に笹文 蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系	一括	0~II

第4表 I地区出土遺物一覧表・碗（陶磁器）3

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
35	碗	端反	磁器	—	—	3.7	直線と波文	肥前系	一括	裏
36	碗	端反	磁器	9.6	—	—	直線と波文	肥前系	一括	裏
37	碗	端反	磁器	9.1	5.1	3.9	草花文	在地	—	—
38	碗	端反	磁器	9.2	5.1	4.1	草花文高台内銘「寿」	在地	一括	0~II
39	碗	端反	磁器	10	5.75	3.9	草に露文	肥前系	一括	0~II
40	碗	端反	磁器	9.9	5.6	3.95	山水文見込岩波文	在地?	洋池1943	Vb
41	碗	端反	磁器	9.8	5	3.9	—	肥前系	一括	0~II
42	碗	端反	磁器	10.2	—	—	若松文 四方禪文	肥前系	1353	III
43	碗	端反	磁器	10.3	5.55	—	柳文 四方禪文	肥前系	—	—
44	碗	端反	磁器	10.7	6.3	4.45	縞線に雪輪文	肥前系	一括	0~II
45	碗	端反	磁器	9.2	4.9	3.4	ねじ花文	肥前系	洋池1709	Va
46	碗	端反	磁器	10	4.2	—	連格子蝶文 禪文	肥前系	—	表
47	碗	端反	磁器	8.8	4.9	4	格子文	肥前系	1495	III
48	碗	端反	磁器	13.8	—	—	「寿」字文	肥前系	一括	IV
49	碗	端反	磁器	13	5.7	7.4	—	清	一括	IV
50	碗	端反	磁器	10.2	—	—	外面花唐草文内面宝文	肥前系	洋池1773	Vb
51	碗	端反	磁器	9.5	5	—	若松文	肥前系	B-4	表
52	碗	端反	磁器	9.6	3.9	—	花文	肥前系	—	—
53	碗	端反	磁器	11.2	3.6	—	—	肥前系	一括	0~II
54	碗	端反	磁器	12.6	4	—	丸文 格子文 四方禪文	肥前系	一括	表
55	碗	端反	磁器	12	4.5	—	外面青磁釉内面四方禪文	肥前系	一括	0~II
56	碗	—	磁器	—	—	4	仙芝祝寿文	清	一括	0~II
57	碗	—	陶器	—	—	5	鉄釉見込砂目4ヶ所胎土灰白色	在地	一括	0~II
58	碗	—	陶器	—	—	5.3	鉄釉見込蛇ノ目釉剥胎土灰白色	在地	—	—
59	碗	—	陶器	—	—	5.2	白化粧土透明釉見込蛇ノ目釉剥胎土赤褐色	在地	一括	0~II
60	碗	—	陶器	—	—	—	白化粧土透明釉見込蛇ノ目釉剥胎土赤褐色	在地	一括	0~II
61	碗	—	陶器	—	—	5.2	外面白化粧土・透明釉	在地	—	—

第5表 I地区出土遺物一覧表・碗（陶器）4

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点	層
				口径	器高	底径			(取り上No)	
62	碗	—	陶器	—	—	5.3	鉄釉見込蛇ノ目釉剥胎土赤褐色	在地	—	—
63	碗	—	陶器	—	—	5.2	内外面鉄釉見込蛇ノ目釉剥胎土茶褐色	在地	一括	0~II
64	碗	—	陶器	—	—	5.2	褐釉見込 蛇ノ目釉剥	在地	—	—
65	碗	端反	陶器	12	—	—	褐釉見込蛇ノ目釉剥胎土暗茶褐色	在地	洋池1881・1934	V
66	碗	—	陶器	—	—	4.5	褐釉胎土灰色	在地	一括	I~II
67	碗	—	陶器	—	—	4.2	褐釉胎土灰色	在地	一括	0~II
68	碗	—	陶器	19	—	—	外面銅緑釉内面透明釉胎土灰白色	肥前系	—	表
69	碗	端反	陶器	11.4	—	4.6	大根まな板包丁文胎土灰白色	在地?	—	—
70	碗	—	陶器	—	—	—	上絵付内外面透明釉胎土白色	関西系	—	—
71	碗	—	陶器	—	—	4.4	透明釉	関西系	—	—
72	碗	丸碗	陶器	10.6	—	—	白化粧土透明釉笹文(呉須)	肥前系	—	—
73	碗	—	陶器	11	7	4.95	鉄絵燕子文透明釉胎土黄色	在地	洋池1704	Vb
74	碗	—	陶器	—	—	4.4	内外面黒釉胎土白色	関西系	—	表
75	碗	平形	陶器	12.2	4.3	4.15	見込花文透明釉胎土灰白白	関西系	—	—
76	碗	丸形	陶器	13.25	6.25	4.55	高台脇一羽千鳥文透明釉胎土灰白色	在地	洋池1904	Vb

(2) 皿 (第39~45図)

皿は高台が蛇ノ目凹型高台でないもの(77~98)とそうであるもの(99~108), 高台が残っておらずどちらともいえないもの(109~112), 陶器(113・114)に大別して分類した。

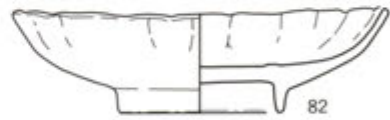
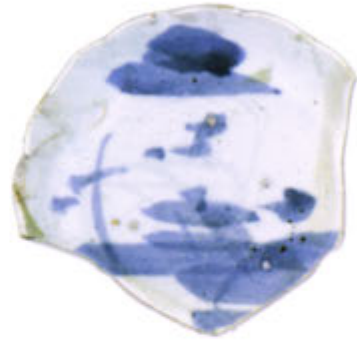
77は器壁が比較的薄く, 内面に燕子文が描かれたものである。17世紀中頃の肥前磁器である。78は見込みに矮小化したコンニャク印版の五弁花が施され, 高台内面に銘が描かれる。79はやや灰色味がかかった胎土を呈する。80はやや青みを帯びた透明釉に弱い貫入が入り, 見込みにコンニャク印版の五弁花と内面は松竹梅文, 高台内銘に口に「渦福」が施されている。81~85は在地系と考えられる手塩皿で, 81・82は同様の山水文が描かれているが, 82はより変容性が強く口縁部が輪花を呈し, 高台の削りも高い。83・84は山水文が描かれた輪花皿で, 口縁部に口鏝が施され, 84は比較的底径が広く作られている。85は口唇部に口鏝を施し, 内面に楼閣山水文が描かれ, 透明釉には貫入が入る。86は帆掛け船が描かれた高台高の低い, 器壁・底部厚ともにやや薄手のもので, 数個体分の出土が確認されている。88・89は小形の皿で, 88は山水文が描かれ, 高台内の削りが高くなっている。89は内面に若松文を描いたと思われる輪花皿である。90は, 大形の皿と考えられるものである。91~94は中形の皿で, 92は内面蛸唐草文, 見込みに松竹梅文が描かれている。93は内面に鳳凰文, 外面に唐草文が施され, 口縁部が輪花を呈する。94は墨弾きによって文様が描かれ, 胴部から口縁部にかけて端反り, 輪花を呈する。95・96は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが看取されるもので, 95は内面格子文, 96は折れ松葉に花文, 見込みに折れ松葉が施されており, 比較的高台内の削りが深いものである。どちらも波佐見焼と考えられ



第39图 I地区出土遗物(13) 皿(磁器)



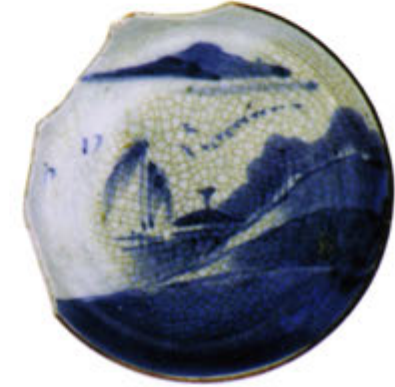
81



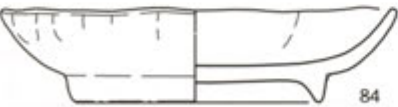
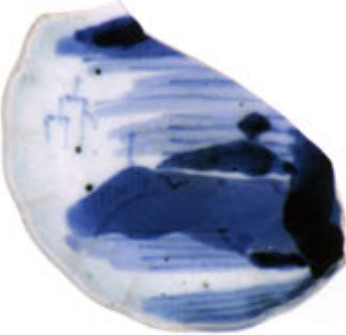
82



83



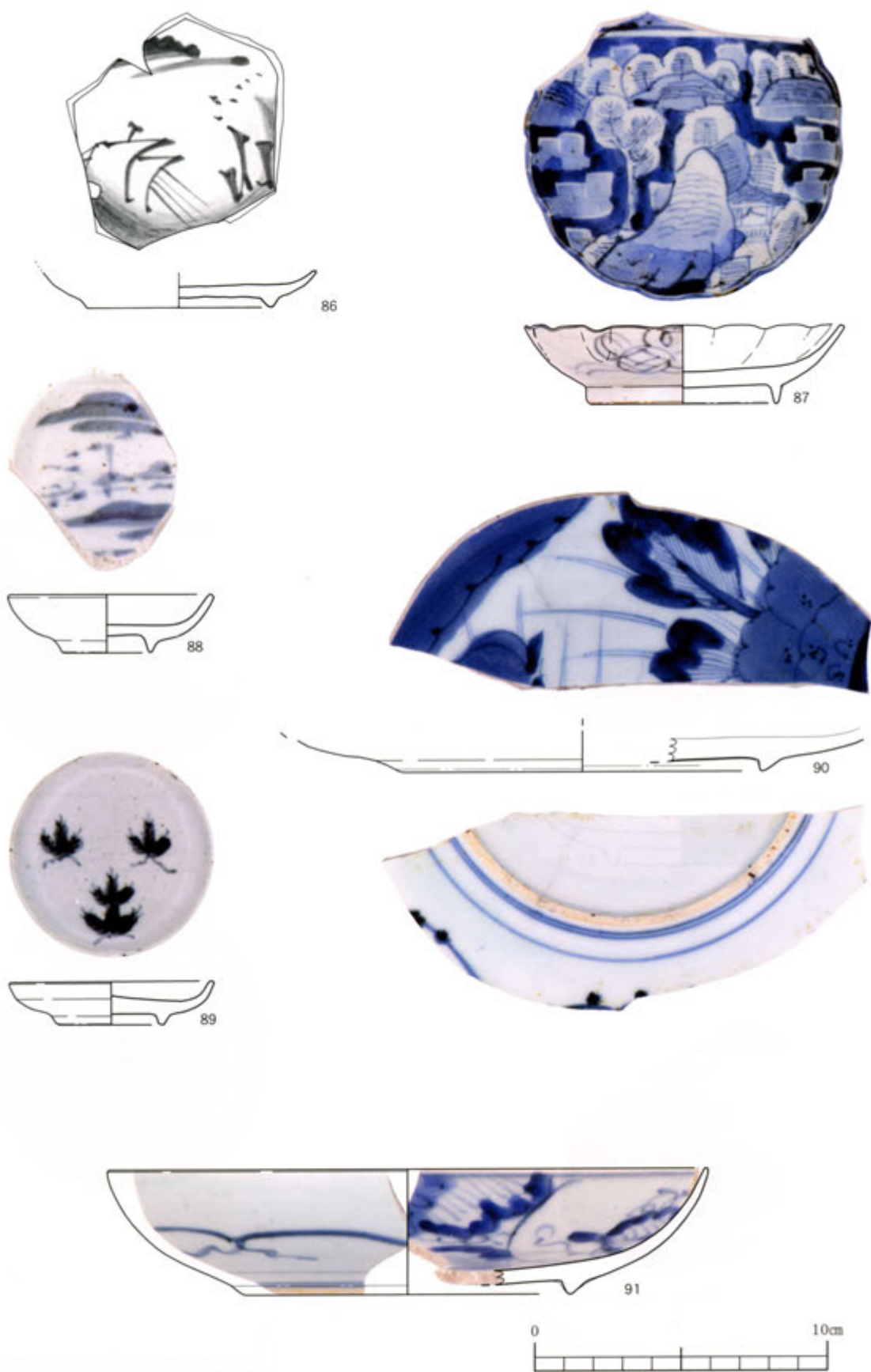
85



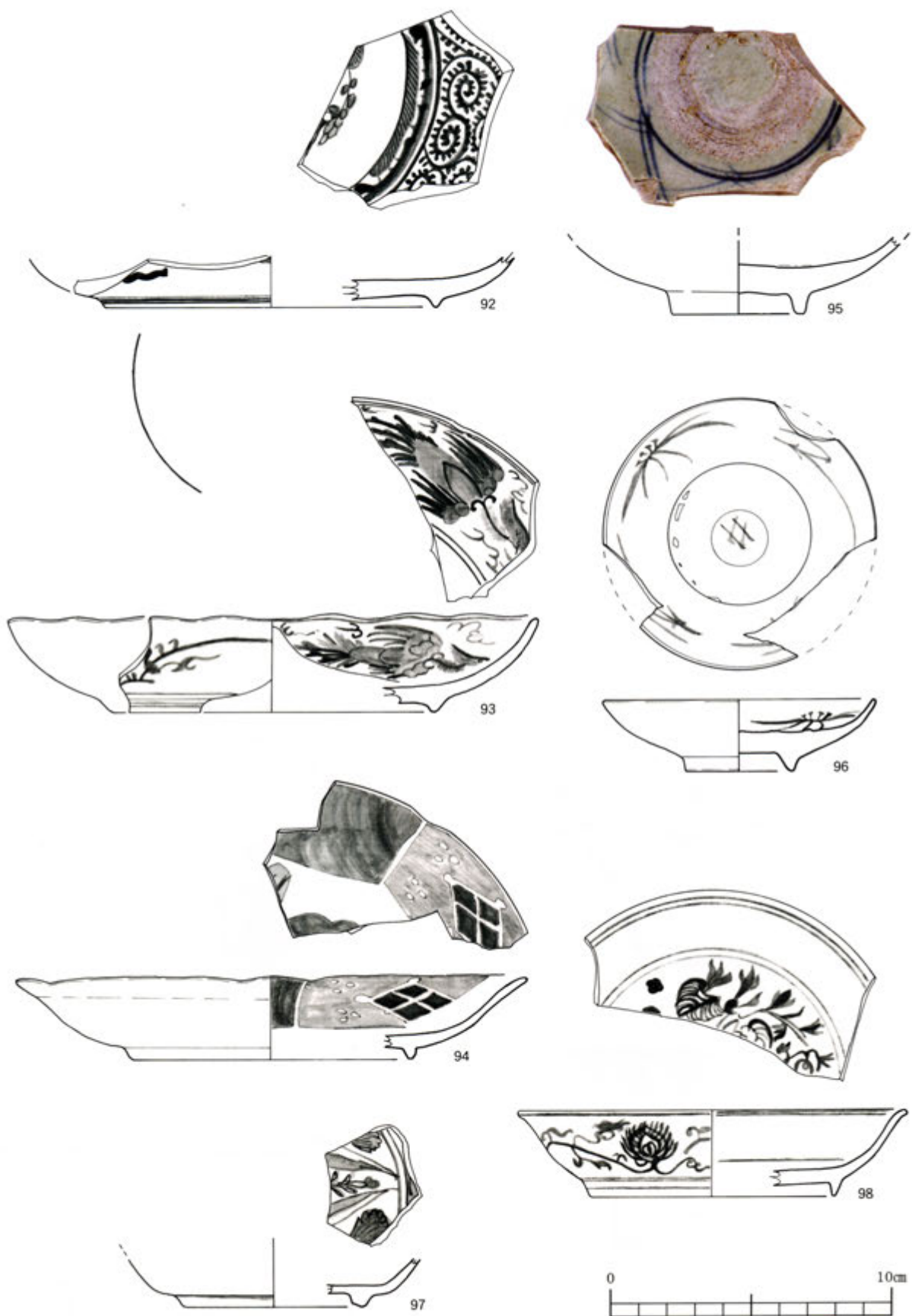
84



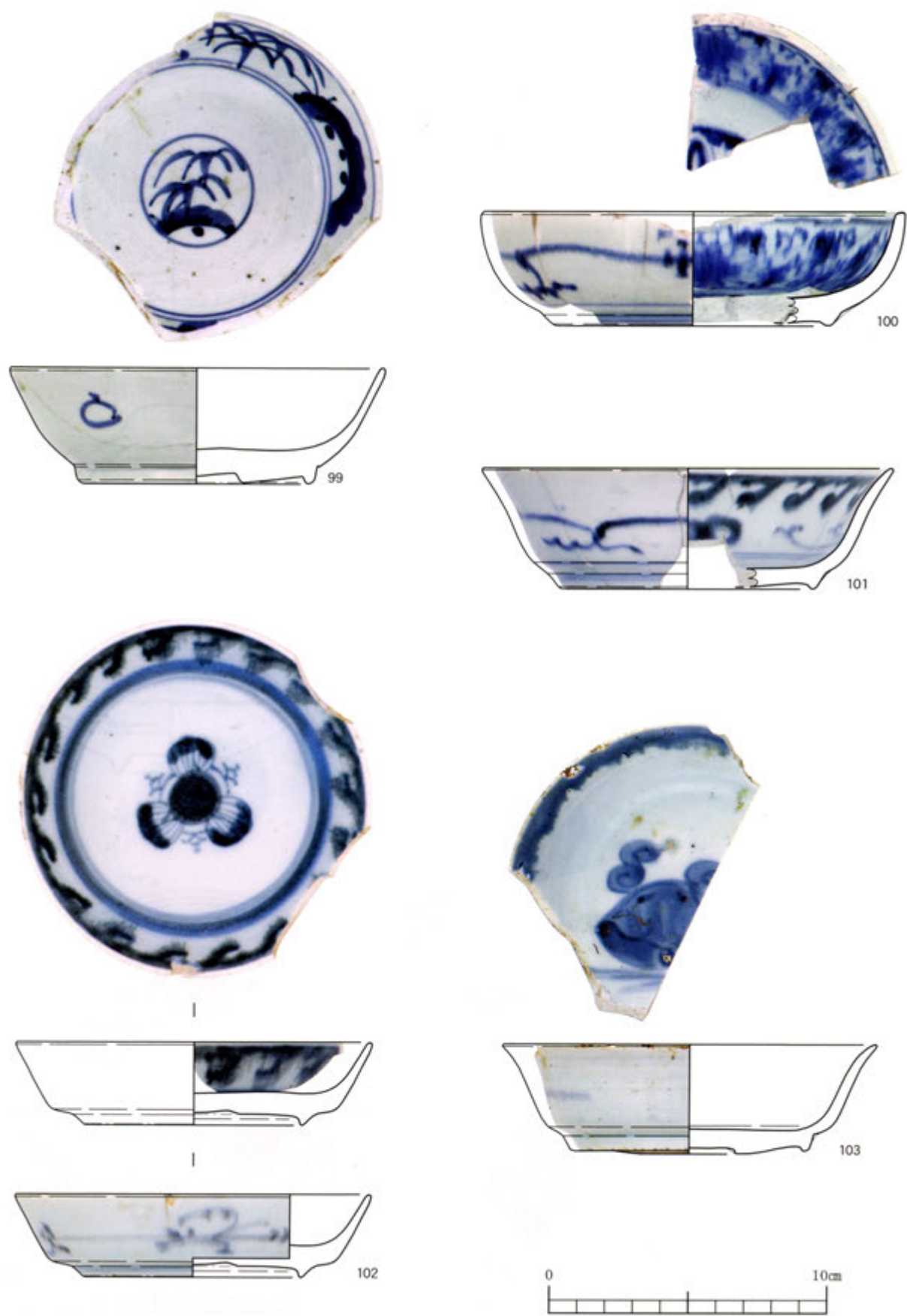
第40图 I地区出土遗物(14) 皿(磁器)



第41图 I地区出土遗物(15) 皿(磁器)



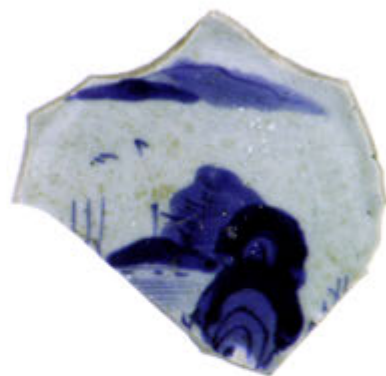
第42图 I地区出土遗物(16) 皿(磁器)



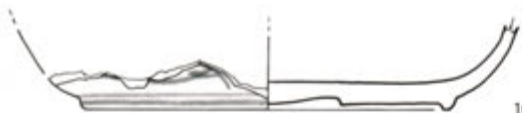
第43图 I地区出土遗物(17) 皿(磁器)



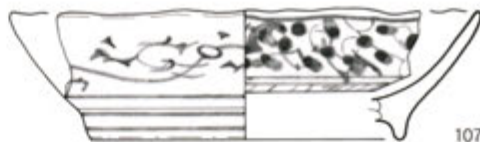
104



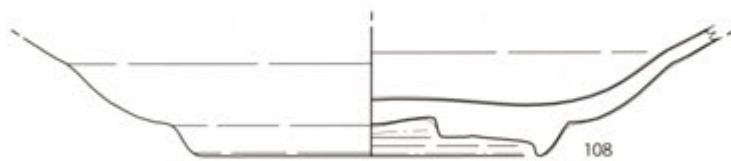
105



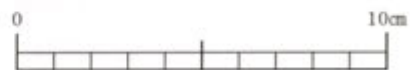
106



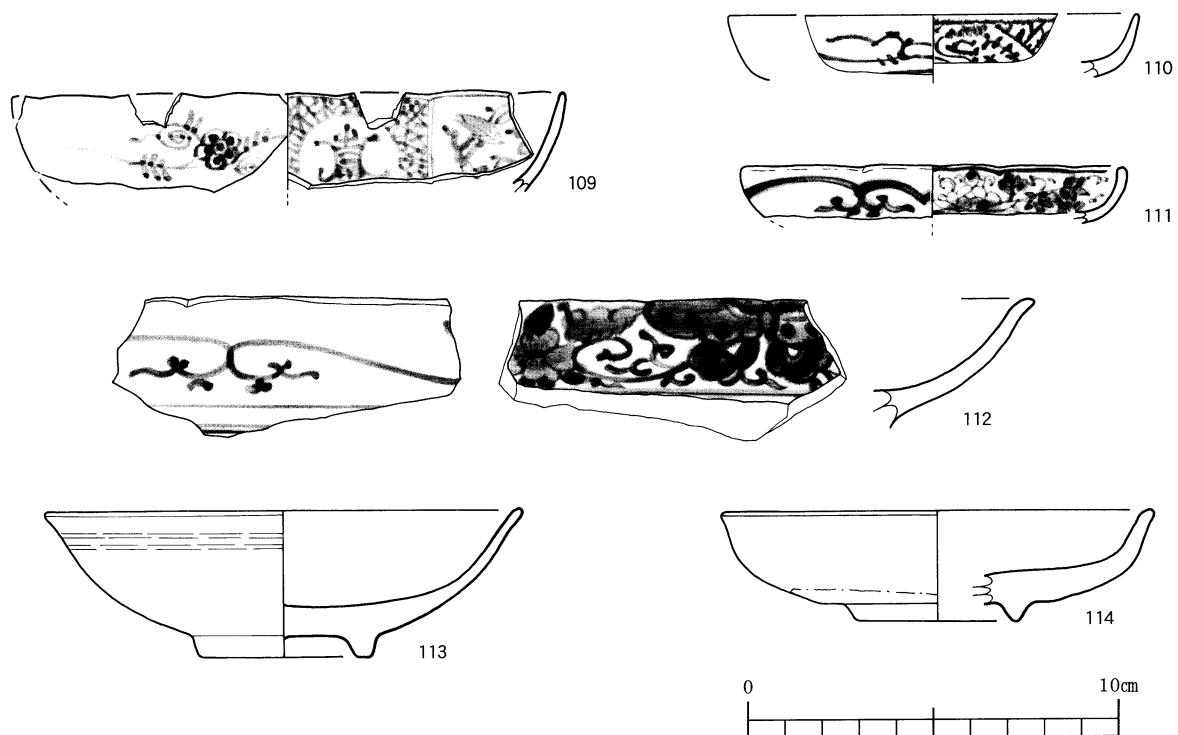
107



108



第44图 I地区出土遗物(18) 皿(磁器)



第45図 I地区出土遺物(19) 皿(陶磁器)

る。97・98は貿易陶磁器で、97は17世紀前半頃の景德鎮産の資料と考えられ、高台内は露胎を呈する。98は15世紀末～16世紀中頃の青花で、小野分類B1群に分類されるものと思われる。灰白色の胎土に草花文が描かれ、口縁部は端反形を呈する。99は底部厚が厚く、内面には雪輪篋文が描かれる波佐見焼の資料である。100～103は在地系と考えられる資料で、100はやや青みを帯びた透明釉に未発達な貫入が入る。もので平佐焼と考えられる。101は口縁部が外反する器形で、波文が描かれている。102は腰折形の器形で、波文が描かれている。103は腰折形で口縁部は外反する器形の深皿で、文様の詳細は判別できない。104・105は比較的底部厚が薄いもので、高台内の削りが深い。104は楼閣山水文が、105は山水文が描かれている。106は器壁、底部厚ともに薄手のもので、内面に山水文が描かれている。107は比較的高台内の削りが深く、口縁部が輪花を呈する器形で、内面には花唐草文が描かれており、平佐焼である。108は胴部中位で屈曲するもので、口縁部が欠損しているため詳細は不明であるが、折縁形と考えられる。内面には草花文と思われる文様が描かれている。109は氷裂地に丸文に変形の「誉」文等を配する区画文の輪花皿で、外面は唐草文が描かれている。110は内外面に唐草文が描かれる小皿である。111は内面花唐草文、外面唐草文が描かれた小形の輪花皿である。112は口縁部が外反する輪花皿である。113は灰白色の緻密な胎土に褐釉が総釉で掛けられ、口縁部が外反する器形で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。18世紀前半の龍門司焼と思われる。114は失透性の灰色に発色した唐津焼と思われる資料で、高台脇から高台内面は露胎する。

(3) 鉢 (第46・47図)

鉢類は磁器 (115～122) と陶器 (123～125) に大別して分類した。

115は口縁部が端反形の青花鉢で、福建・広東省系の資料である。外面には草花文が描かれて

おり、見込みにも文様が施されているが、判別ができない。116はやや青みがかった釉調を呈するが、焼成不良のためかガラス質特有の透明感が出ていない。見込みには蝶に草花文、外面には唐草文が描かれている。117は口縁部を花卉状に細工した輪花形で、器形は、胴部から口縁部にかけて大きく外反する。柳と思われる樹木や草花文が描かれ、見込みと口縁部内面には雲のような文様が描かれているが全体像は不明である。118は、内面には菊花文、高台内面には双魚文が描かれている青花である。119は口縁部が大きく外反する大形の鉢で、平佐焼である。外面は山水文、口縁部内面には区画文が施されているが、全体的に絵付けの仕上がりが悪く、文様の詳細は不明である青花である。120は、清朝のものかと思われる青花の鉢で、腰部が張る器形である。やや灰色がかった胎土に青味を帯びた釉がかかり、内外面ともに菊花文が描かれ、畳付には砂粒が付着する。121は色絵で、外面に呉須の窓絵の中に、淡緑と朱で草花文が描かれている。欠損部が多く詳細は不明である。122は器形が波状の六角形を呈する器形で、外面は区画に鷺文が描かれ、口縁部内外面には雷文が施されている。123は平底の小形鉢で、内外面に淡緑色の灰釉が掛けられる。底部脇から底部にかけては無釉である。124は胴部が張り、肩部から首部にかけて締まった後、外反する器形で、暗茶褐色の胎土に白化粧土を掛け飛びカンナを施し、上から褐釉が掛けられている。高台脇から高台内にかけては露胎し兜布を呈するもので、龍門司焼である。125は大形の鉢で、赤褐色の胎土に外面は白化粧土によるハケ目を施してから褐釉が掛けられ、さらに内面は白化粧土を薄く伸ばし透明釉がかけられている。高台内は無釉である。

第6表 I地区出土遺物一覧表・皿（磁器）1

番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
77	皿	丸形	磁器	10.7	6.3	7	燕子文	肥前系	1856	II
78	皿	丸形	磁器	13.5	4.05	8.2	外面唐草文見込五弁花(コンニャク印版)	肥前系	一括	0~II
79	皿	丸形	磁器	12.6	4.1	7.8	外面唐草文	肥前系	一括	0~II
80	皿	—	磁器	—	—	8	内面松竹梅文外面唐草文見込五弁花(コンニャク印刷)高台内鉄渦福	肥前系	1535	IV
81	皿	丸形	磁器	10.4	2.8	5.7	山水文	在地	一括	0~II
82	皿	輪花	磁器	10.2	2.7	4.5	山水文	在地	一括	0~II
83	皿	輪花	磁器	10.2	2.5	5	山水文口鏝 外面折れ松葉文	在地	1239	II
84	皿	輪花	磁器	10.8	2.6	6.7	山水文口鏝	在地	1516	IVb
85	皿	丸形	磁器	10.5	2.6	5.8	楼閣山水文口鏝	在地	—	—
86	皿	—	磁器	—	—	6.2	山水文帆かけ船	肥前系	1555	IV
								一括	0~II	
87	皿	輪花	磁器	10.9	2.7	6.6	—	肥前系	1745	V・VI
88	皿	丸形	磁器	7.1	2	3.1	山水文	在地	一括	0~II
89	皿	丸形	磁器	7	1.5	3.7	若松文	肥前系	一括	Ib~IV
90	皿	—	磁器	—	—	1.23	—	—	一括	0~II
91	皿	丸形	磁器	20.6	4.3	11.3	外面唐草文	—	一括	0~II
92	皿	—	磁器	—	—	12	蛸唐草文 見込松竹梅文	肥前系	一括	表
93	皿	丸形	磁器	19	3.3	9.6	内面鳳凰文 外面唐草文	肥前系	2008	I
94	皿	輪花	磁器	18.3	2.9	10	四方禪文?	肥前系	1708	IV
95	皿	—	磁器	—	—	4.65	格子文 蛇ノ目釉剥	肥前系	一括	表
96	皿	丸形	磁器	9.8	2.6	3.8	内面花と折れ松葉文見込折れ松葉文蛇ノ目細剥	肥前系	一括	表
97	皿	—	磁器	—	—	3.6	—	清	—	—

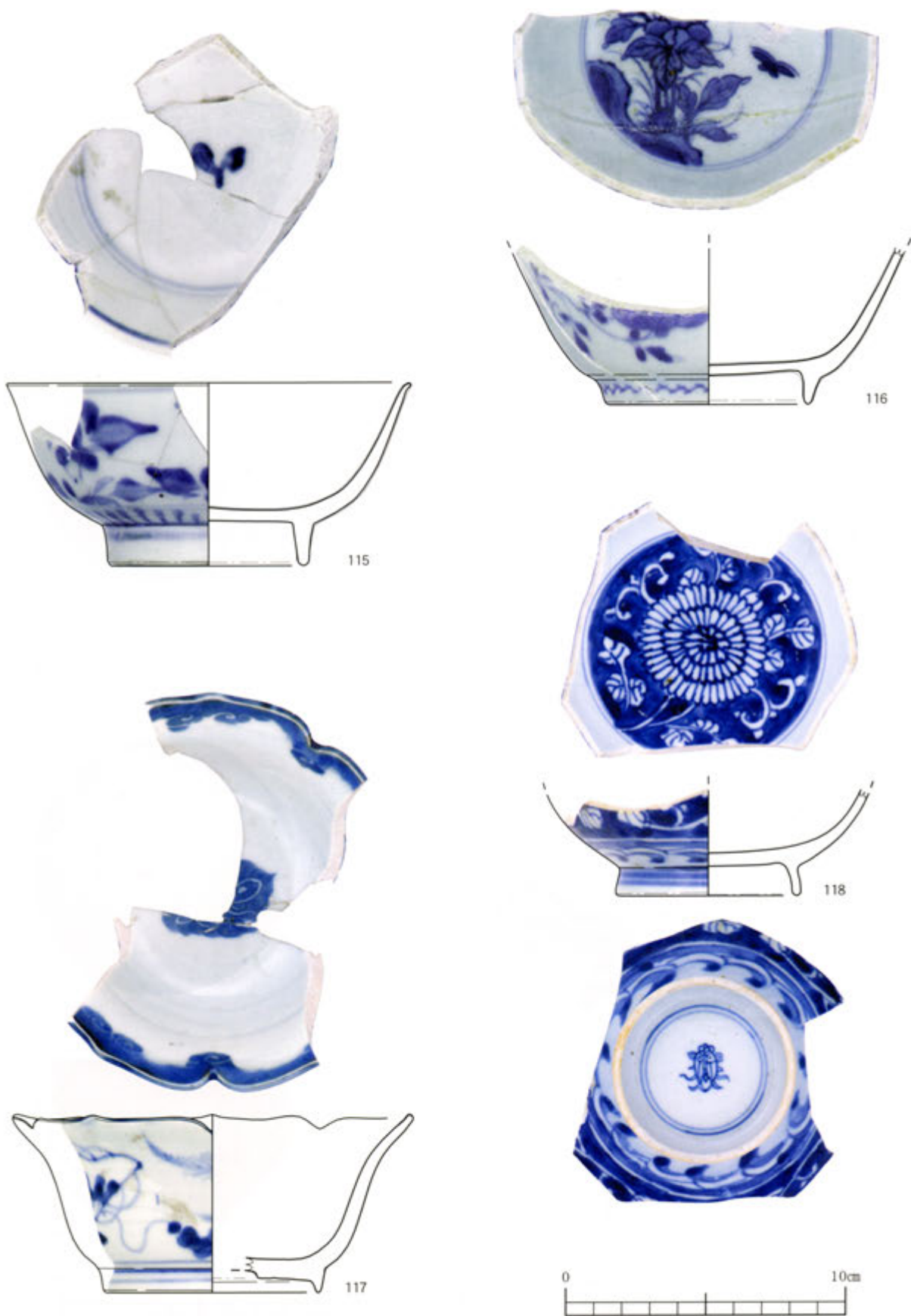
第7表 I地区出土遺物一覧表・皿（陶磁器）2

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
98	皿	端反	磁器	13.8	3.1	—	内面草花文外面花唐草文	明?	—	表
99	皿	丸形	磁器	13.55	4.2	8.55	雪輪笹文蛇ノ目凹型高台	肥前系	一括	IV
100	皿	丸形	磁器	15.2	4.15	10.1	外面唐草文貫入蛇ノ目凹型高台	在地	—	—
101	皿	端反	磁器	14.8	4.4	9.3	内面波文外面唐草文蛇ノ目凹型高台	在地	一括	I~II
102	皿	端反	磁器	12.9	3	8	内面波文外面唐草文見込草花文蛇ノ目凹型高台	在地	一括	IV
103	皿	端反	磁器	13.5	4	8.6	蛇ノ目凹型高台	肥前系	洋池1776	Vb
104	皿	—	磁器	—	—	9	樓閣山水文蛇ノ目凹型高台	肥前系	一括	Ib~IV
105	皿	—	磁器	—	—	7.3	山水文蛇ノ目凹型高台	在地	—	—
106	皿	—	磁器	—	2.3	10	内面山水文外面唐草文蛇ノ目凹型高台	在地	洋池1762	Vb
107	皿	輪花	磁器	—	3.55	8.4	内面花唐草文外面唐草文蛇ノ目凹型高台	在地	一括	I~II
108	皿	—	磁器	—	—	9.7	草花文蛇ノ目凹型高台	肥前系	1491	IV
109	皿	輪花	磁器	14.8	—	—	外面唐草文	肥前系	表採	—
110	皿	丸形	磁器	11.2	—	—	内面唐草文外面唐草文	肥前系	一括	0~II
111	皿	輪花	磁器	—	—	—	内面花唐草文外面唐草文	肥前系	表採	—
112	皿	端反	磁器	—	—	—	外面唐草文	肥前系	一括	表
113	皿	端反	陶器	8.45	6.6	—	褐釉 見込蛇ノ目釉剥胎土灰白色	在地	1778・1784	IV
									一括	V
114	皿	端反	陶器	11.8	3	4.4	内外面灰釉(かんじ灰釉)胎土灰赤色	肥前系	c-4	表

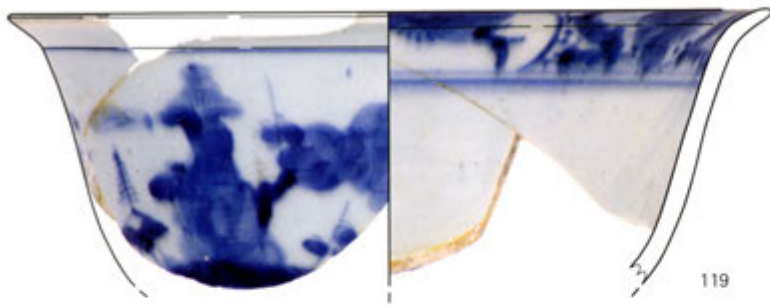
(4) 蓋 (第48~50図)

蓋は碗蓋 (126~139) , 段重または蓋物の蓋, (140~142) , 土瓶蓋 (143~145・149) , その他の蓋 (148・150) に大別して分類した。

126は外面に青灰色に発色し花文が描かれている。127は比較的薄手のもので、外面は花唐草、内面はやや変容した四方禪文と松竹梅文が描かれており、平佐焼と思われる。128は見込みに二重圏線とコンニャク印版による五弁花を施す資料である。129は肩部で折れる器形の白磁で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。130は比較的天井部厚・器壁ともに薄手に作られており、外面に牡丹と扇文、見込みに烏帽子文が描かれている。131はつまみ径が大きく、外面の文様は変容性が強いと判別できない。132は外面花、内面は雷文が施されており、第28図9とセット関係にあると考えられる。133は外面に花文、内面に雷文が描かれたものであると思われる。134はつまみ部がやや斜めに立ち上がるもので、青味がかった透明釉には強い貫入が入り、外面は変容した草花文が、見込みには昆虫文らしき文様が施されているが判別できない。平佐焼と思われる。136は内面に雷文が描かれているが、外面の詳細は判別できないと思われる。137は小形の器形である。138・139は、外面に唐草文、内面に宝文が描かれており、同一個体の可能性が考えられる。140は蓋物の蓋と考えられるもので、外面に草花文が描かれ、口唇部はわずかながら段を取り釉剥ぎされている。141は段重の蓋と考えられるもので、外面には窓絵を配し草花文が施されている。142は蓋物の蓋と考えられるもので中央部に丸いつまみが付くものと思われる。口縁部から底部にかけては釉剥ぎが施され、外面は変容した文様であるため詳細は判断できない。在地産のものと考えられる。143~147は土瓶蓋である。143~147は、外面に褐釉が掛



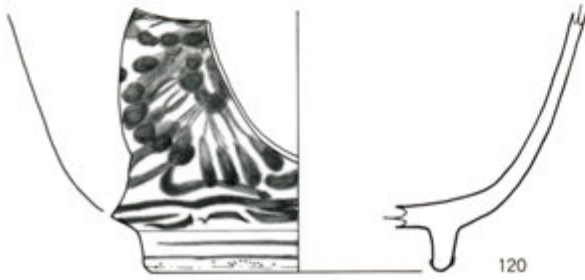
第46图 I地区出土遗物(20)鉢(磁器)



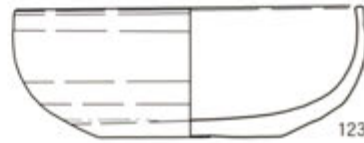
119



122



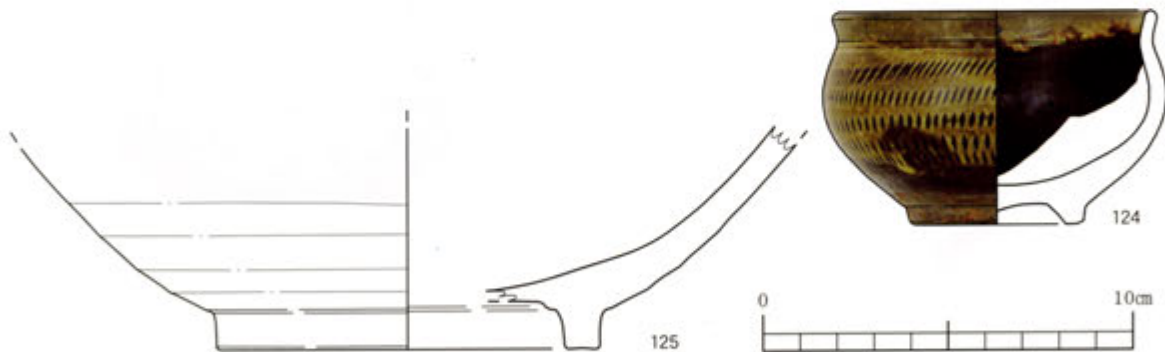
120



123



121



124

125



第47图 I地区出土遗物(21)鉢(陶磁器)

第8表 I地区出土遺物一覧表・鉢（陶磁器）

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
115	鉢	端反	磁器	14.4	6.6	7.2	草花文	清	一括	0~II
116	鉢	—	磁器	—	—	7.4	見込花と蝶に草花文 外面唐草文	肥前系	一括	0~II
117	鉢	端反	磁器	14.4	6.4	7.8	内面波文	肥前系	一括	0~II
118	鉢	—	磁器	—	—	6.4	見込菊花文高台内双魚文	清?	洋池1752	Va
									洋池1640	Vb
119	鉢	端反	磁器	20.6	—	—	—	在地	一括	0~II
120	鉢	—	磁器	—	—	8	内・外面菊花文	清?	洋池1648	V
									洋池1756	Va
121	鉢	丸形	磁器	7	—	—	色絵 草花文	肥前系	洋池1631	V
122	鉢	六角	磁器	11	—	—	外面サギ文口縁内外雷文	肥前系	—	—
123	鉢	丸形	陶器	9.45	3.5	4.95	内外面灰釉?胎土黄白色	?	洋池1690	V
124	鉢	—	陶器	8.8	5.8	4.7	飛びカンナ(白化粧土・褐釉)胎土暗茶褐色	在地	—	—
125	鉢	—	陶器	—	—	10.4	外面白化粧・鉄釉 内面白化粧透明胎土赤褐色	肥前系	一括	0~II

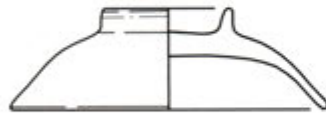
けられ、149は緑色の灰釉が掛けられており、底部から口縁部から口縁部内面にかけては露胎している。148は茶褐色の胎土に、緑色の灰釉が掛けられたもので、内面は露胎している。150は甕又は壺に伴うと考えられる蓋で、外面にはヘラ状の工具で櫛目が施され、その上から黒釉が掛けられており、底部から内面にかけては赤褐色の露胎を呈する。中心部には直径0.7cm程の穴が開けられており、空気抜き等の用途が考えられる。

(5) 土瓶・酒注・薬缶 (第51図)

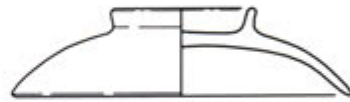
151・152・155は土瓶である。土瓶は多数出土しているが、小破片が多く図化できたものは少量であった。151は注口内の穴が一個のもので、内外面には黒釉が施されているが、摩耗が激しく、器壁は荒れている。152は丸形のもので、底部は欠損しているが三足が付くと考えられる。黒褐色に発色した鉄釉が、内面と外面下胴部まで施されている。155は器体から蔓の伸びる共手で注口部は欠損しているため詳細は不明である。黒褐色の胎土で、外面には灰オリーブ色の釉が掛けられ、内面は無釉である。153・154は酒注である。これも数個体が出土しているが、図化できるものは少なかった。ソロバン玉状の器形を呈し、底面には三足が付けられている。体部上位は褐釉が施釉され、下位は露胎していて、154は煤が付着している。156は薬缶であると思われる。蓋が付くものと考えられ、口唇部が釉剥ぎされている。内外面には黒釉が施されておる。注口は片口状を呈するものと思われる。151~156はすべて苗代川系のものである。

(6) 急須・瓶類 (第52図)

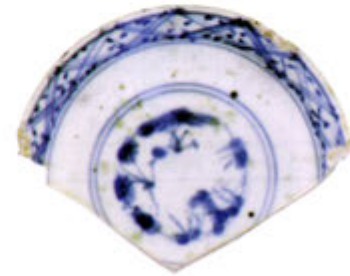
157は急須である。白粘土を沈刻する白象箆の三島手である。灰褐色の胎土に暗オリーブ色の釉が内外面に掛けられている。豎野系のものであると思われる。158は平底の酒瓶で、灰褐色の胎土に外面は底部脇まで黒釉が掛けられ、内面は無釉である。西餅田系と考えられる。159は徳利で、胴部から頸部にかけて急に狭くなる器形を呈する。内外面とも黒釉が掛けられており、苗代川系である。160・161は琉球壺屋焼と思われる荒焼きの泡盛酒瓶である。



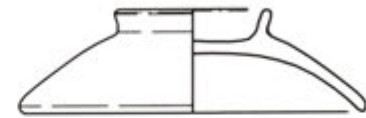
126



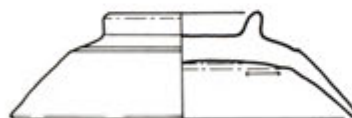
127



128



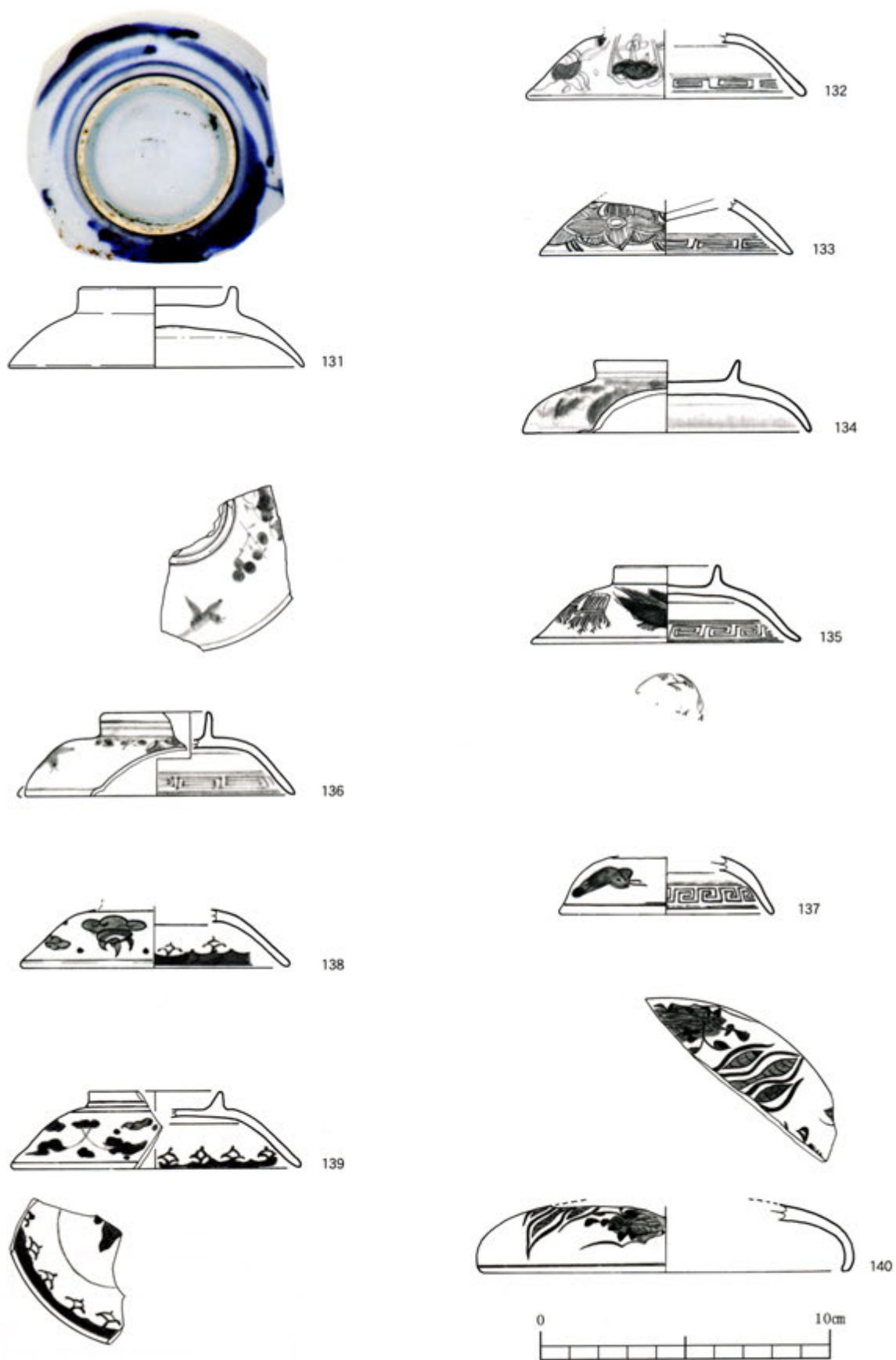
130



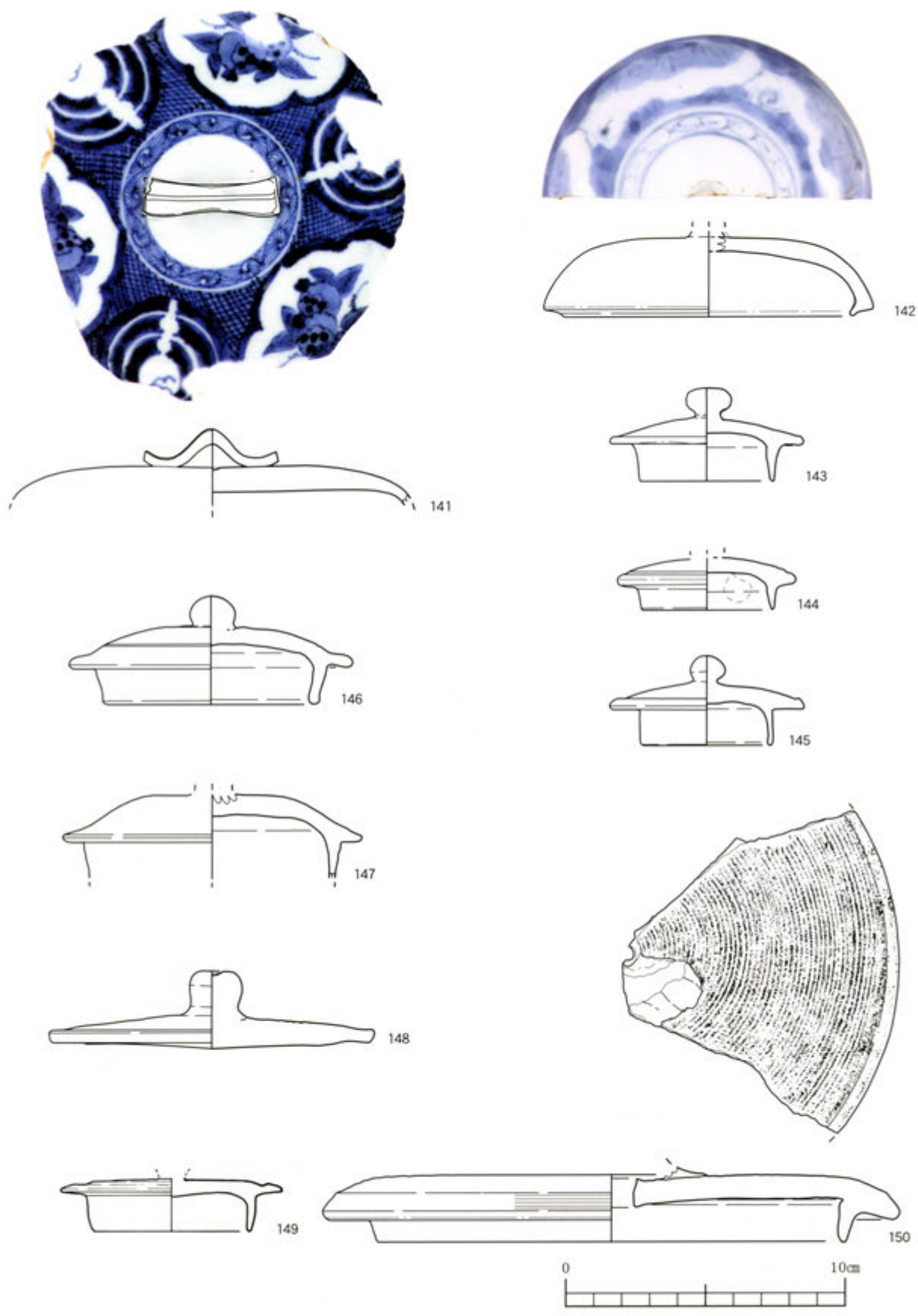
129



第48图 I地区出土遗物(22) 盖(磁器)



第49图 I地区出土遗物(23) 盖(磁器)



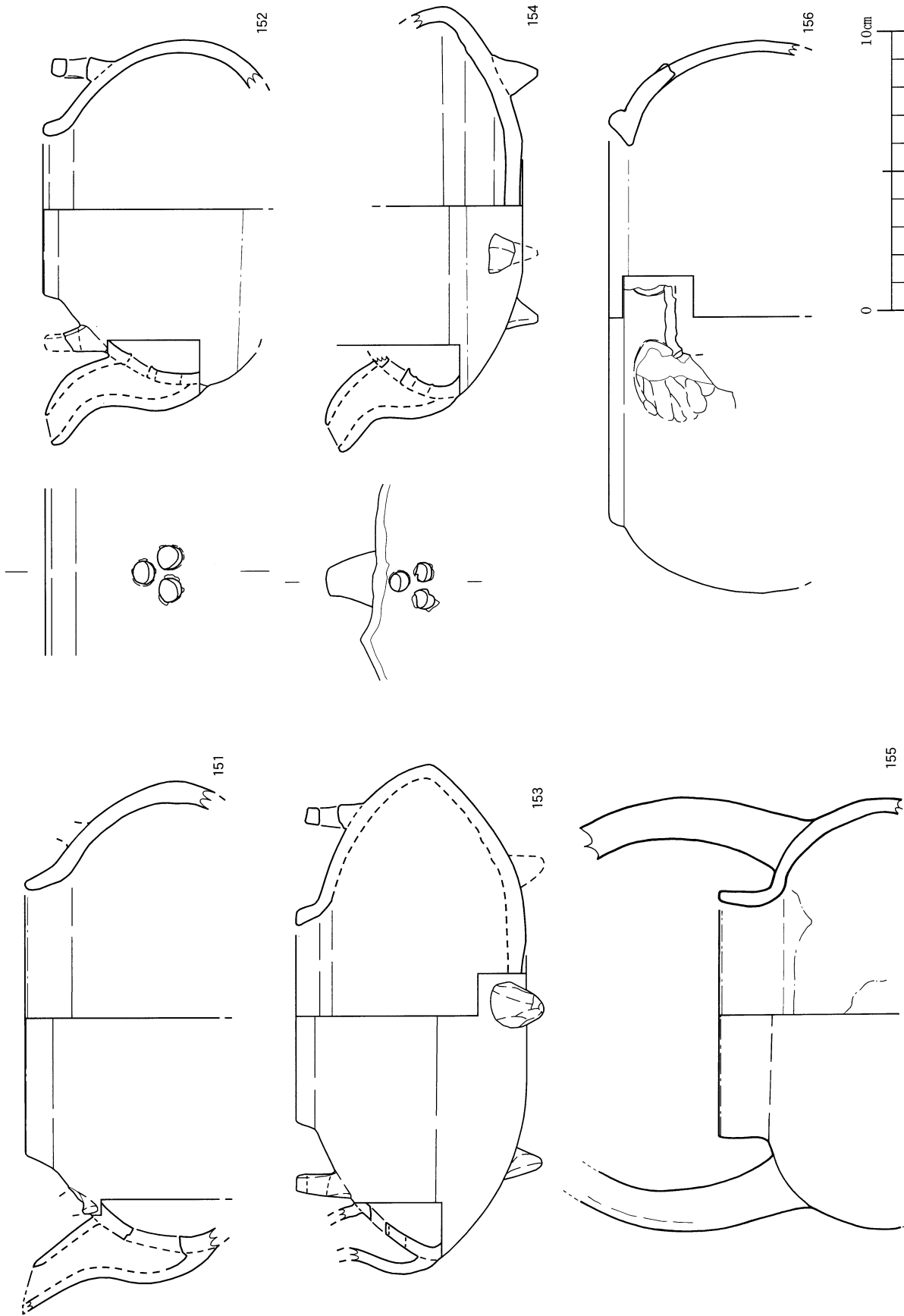
第50图 I地区出土遗物(24) 盖(陶磁器)

第9表 I地区出土遺物一覧表・蓋（陶磁器）

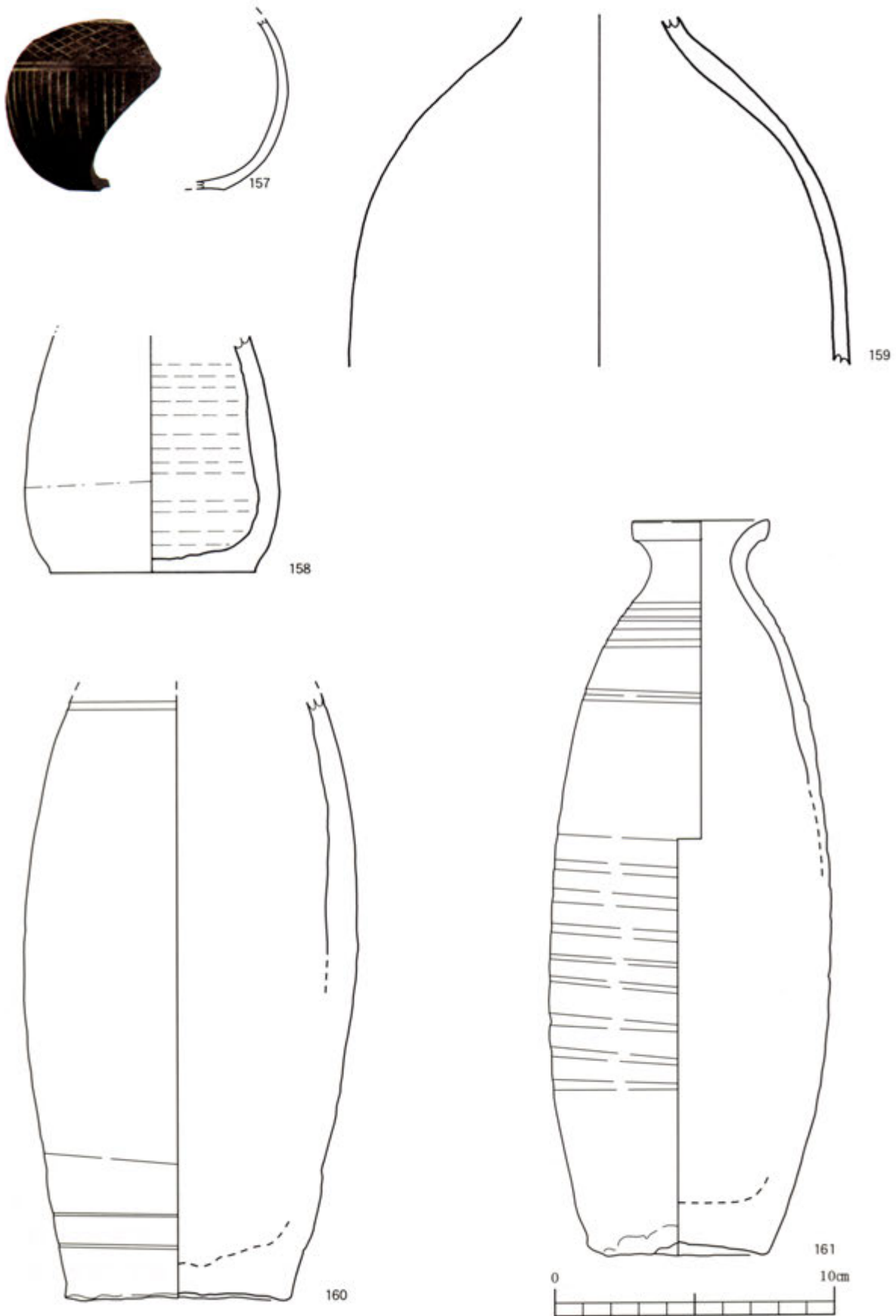
番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	つまみ径				
126	蓋	—	磁器	8.6	2.75	3.6	花文	肥前系	一括	0~II
127	蓋	—	磁器	9.2	2.4	3.9	内面四方禪外面花唐文見込松竹梅文	在地	一括	0~II
128	蓋	—	磁器	—	—	4.15	見込五弁花文(コンニャク印判)	肥前系	1536・一括	IV
129	蓋	—	磁器	9.5	2.9	4.3	見込蛇ノ目釉剥	在地	1678	IV
130	蓋	—	磁器	9.4	2.8	4.2	牡丹に扇文見込烏帽子	瀬戸・美濃?	—	—
131	蓋	—	磁器	10.2	2.8	5.5	内面蛇ノ目釉剥外面山水文?	在地	一括	0~II
132	蓋	—	磁器	9.6	—	—	外面花文内面雷文	肥前系	一括	0~II
133	蓋	—	磁器	8.7	—	—	外面花文 内面雷文	肥前系	—	—
134	蓋	—	磁器	10	2.4	4.6	—	在地	1847	Vb
135	蓋	—	磁器	9.2	2.6	3.6	内面雷文・松竹梅文	肥前系	—	表
136	蓋	—	磁器	9.6	2.9	3.8	内面雷文	肥前系	一括	0~II
137	蓋	—	磁器	7.2	—	—	—	肥前系	—	—
138	蓋	—	磁器	9.4	—	—	外面唐草文内面宝文	肥前系	一括	IV
139	蓋	—	磁器	10.2	2.7	4.6	内面宝文外面唐草文	肥前系	一括	0~II
140	蓋	—	磁器	12.4	—	—	外面草花文	肥前系	一括	0~II
141	蓋	—	磁器	—	—	—	窓絵 草花文	肥前系	一括	表
142	蓋	—	磁器	11.85	—	—	—	在地	1143	IIIb
143	土瓶蓋	—	陶器	4.85	3.35	1.6	褐釉胎土黒褐色底径6.9	在地	洋池1705	Vb
144	土瓶蓋	—	陶器	4.8	—	—	褐釉胎土灰白色底径5.4	在地	1440	III
145	土瓶蓋	—	陶器	4.7	3.2	1.25	褐釉胎土黒褐色底径6.95	在地	洋池1619	V
146	土瓶蓋	—	陶器	9.8	3.9	1.6	褐釉胎土灰赤色底径10.2	在地	一括	0~II
147	土瓶蓋	—	陶器	—	—	—	褐釉胎土灰褐色底径10.8	在地	—	—
148	土瓶蓋	—	陶器	—	2.8	1.9	緑色の灰釉 胎土灰褐色底径11.7	在地	洋池1727	V
149	土瓶蓋	—	陶器	5.6	—	—	緑色の灰釉 胎土灰褐色底径8	在地	洋池1744	Vb
150	蓋	—	陶器	16.8	—	—	黒釉胎土赤褐色底径20.7	在地	一括	IV

(7) 仏具 (第53図)

仏具は、仏飯器 (162・164) , 仏花器 (165) , 香立 (線香立て) (166~170) に分類した。脚台が中空のもの (162) とやや上げ底のもの (163・164) がある。162は灰褐色の胎土に、乳白色の釉が脚台脇までかけられている。163は灰白色の胎土で、残存している部分の内面には透明釉が掛けられ蛇ノ目釉剥ぎが施される。外面は無釉となっている。164は赤褐色の胎土で、口縁部に白化粧土を施し、透明釉がかけられるものである。三点とも龍門司焼である。165は仏花器、166は香立である。どちらも磁器質の白色の胎土で、外面には白釉が掛けられており、高台から高台内にかけて無釉である。165の高台内は兜布を呈し、166の内面は透明釉が掛けられている。166は腰部が逆「く」の字形に屈曲する器形を呈するもので、底部は残存していないが、有三足の鼎形の香立であると考えられる。外面から口縁内面まで白釉が掛けられ、呉須による雲竜文が描かれている。168・169は赤褐色の胎土を呈し、外面は褐釉、内面は無釉である。169は焼成不良のため釉薬の発色が鈍い。どちらも火入れの可能性も考えられるものである。170は三足扁平鼎形の香立で、焼成不良のため胎土は土師質に仕上がり釉薬も溶けていない。



第51图 I地区出土遗物(25) 土瓶 酒注 薬缶(陶器)



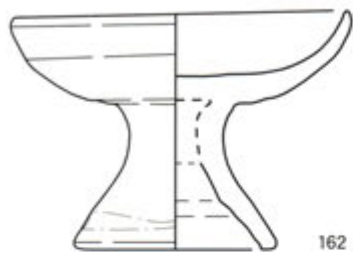
第52図 I地区出土遺物(26) 急須・瓶類(陶器)

第10表 I地区出土遺物一覧表・土瓶・酒注・薬缶（陶器）

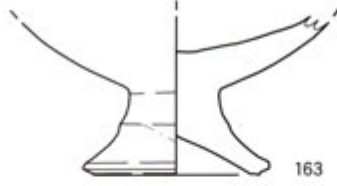
番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
151	土瓶	丸形	陶器	9.8	—	—	内外黒釉胎土灰赤色	在地	一括	0~II
152	土瓶	—	陶器	6.2	—	—	内外鉄釉胎土赤褐色	在地	130	IIIa
									洋池一括	Va
153	酒注	—	陶器	7.5	8.85	—	三足内外面褐釉胎土淡赤橙色	在地	一括	0~II
154	酒注	—	陶器	—	—	—	三足内外底部煤付着胎土灰褐色	在地	一括	IIIa
155	土瓶	—	陶器	8.8	—	—	外面施釉内面無釉胎土黒褐色	在地	一括	0~III
156	薬缶	—	陶器	15	—	—	内外黒釉胎土灰褐色	在地	—	—
157	急須	—	陶器	—	—	—	三島手暗オリーブ色の釉 胎土灰褐色	在地	一括	0~II
158	酒瓶	—	陶器	—	—	—	外面黒釉内面無釉胎土灰釉褐色	在地	—	—
159	徳利	—	陶器	—	—	—	内外面褐釉 胎土灰赤色	在地	—	—
160	酒瓶	—	陶器	—	—	8.1	泡盛酒瓶荒焼き胎土赤褐色	琉球	—	—
161	酒瓶	—	陶器	4.9	26.45	6.5	泡盛酒瓶荒屋器胎土暗褐色	琉球	一括	0~II

(8) 灯明具 (第54図)

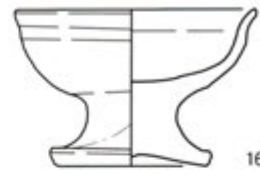
灯明具は、灯明皿 (171~175)、灯明皿受け台 (176~178)、秉燭 (179~181) に分類した。171から175は底面が糸切り底である。171は内底がやや深めのもので、内面から底部脇にかけて褐釉が掛けられている。172は内面には褐釉が掛けられ、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが見られる。西餅田系のものである。173・175は見込みにゴマ目の残る資料で、内面から口縁部外面まで褐釉が掛けられている。174は見込みと底面に四ヶ所の目跡が残るもので、内面から口縁部外面には褐釉が掛けられている。176~178は皿状の台にやや外反する円筒状の器体を結合したもので、円筒部の見込みは渦巻状に仕上げられ、中央部が小さく突起している。受け皿底面は糸切りされており、受け皿外面以外は褐釉が掛けられている。179は脚台付きの皿の見込み部分に、筒状の器体が付けられたもので、蠟燭立てと考えられる。脚部は、中空で、脚部内面以外全面に褐釉が掛けられている。180・181は台付たんころ形で口縁部が内湾する坏の部分の見込み部分に、片側に切り込みのある筒状の灯芯を差し込む部分が直立して付けられる。脚部中央には、小穴が坏部底まで穿されている。坏部内面から外面にかけては褐釉がかけられ、脚部は無釉である。



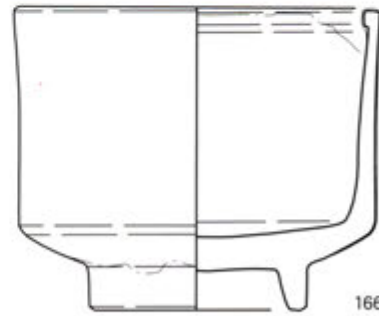
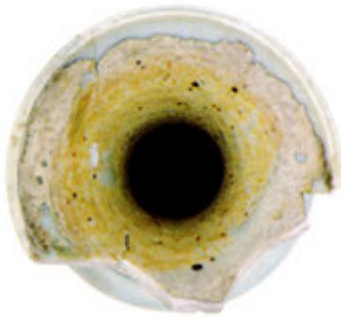
162



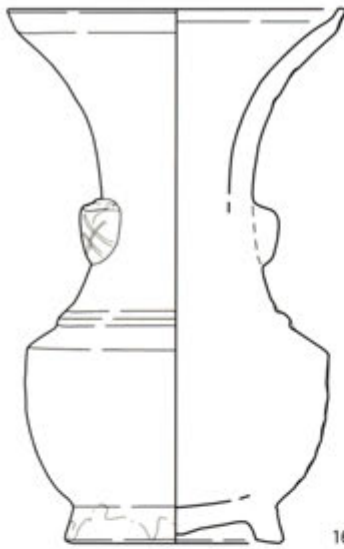
163



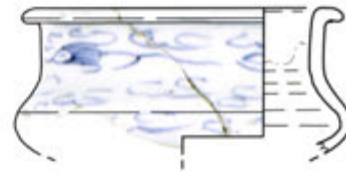
164



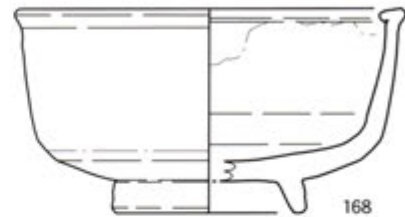
166



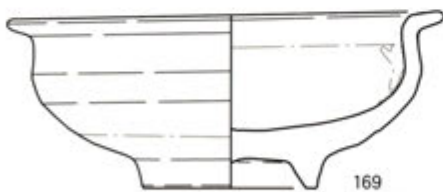
165



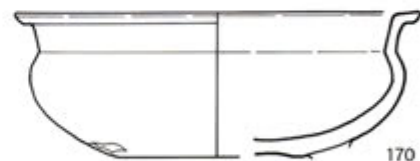
167



168



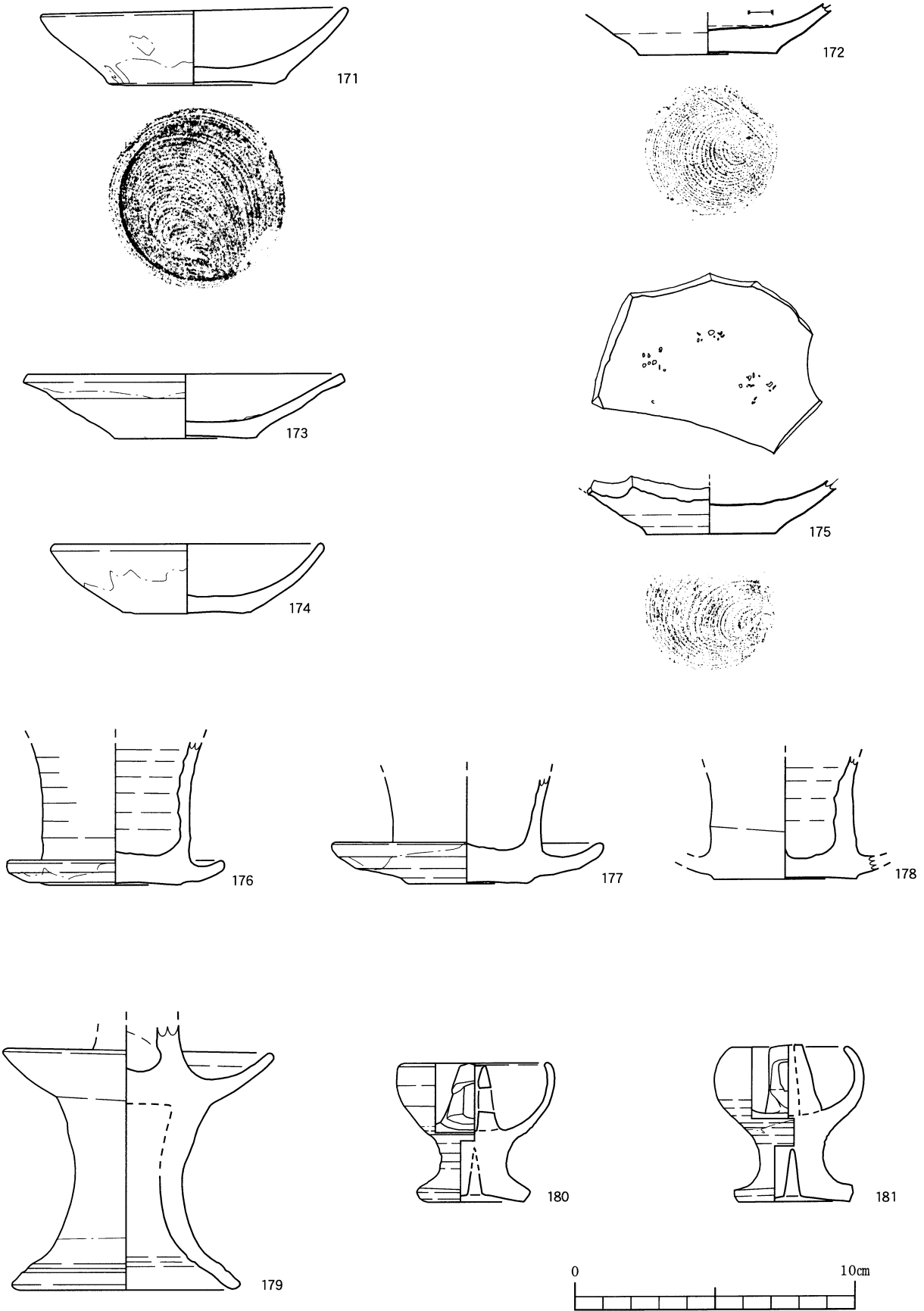
169



170



第53图 I地区出土遺物(27) 仏具(陶磁器)



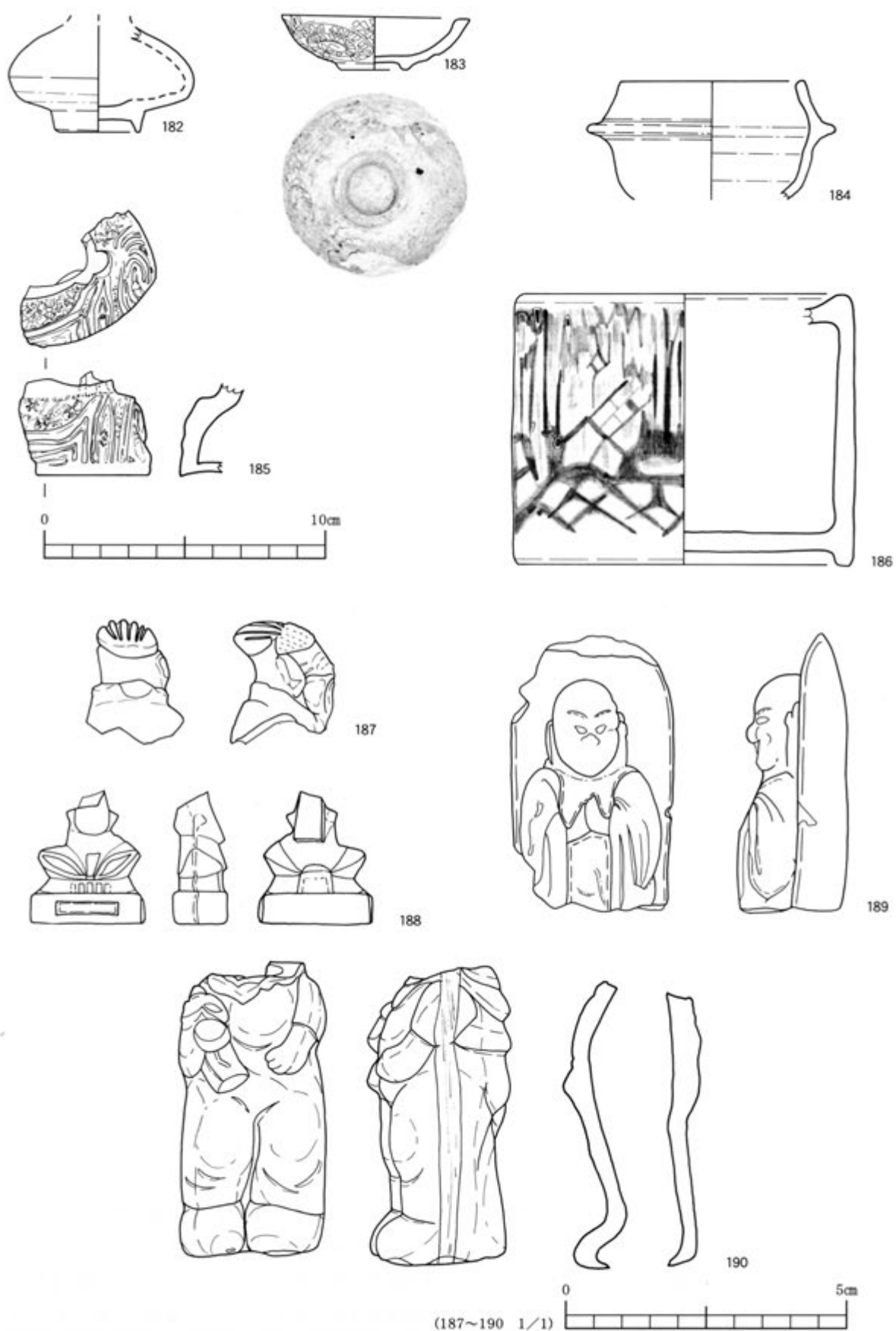
第54图 I地区出土遺物(28) 灯明具(陶器)

(9) 陶磁器・土製品 (第55図)

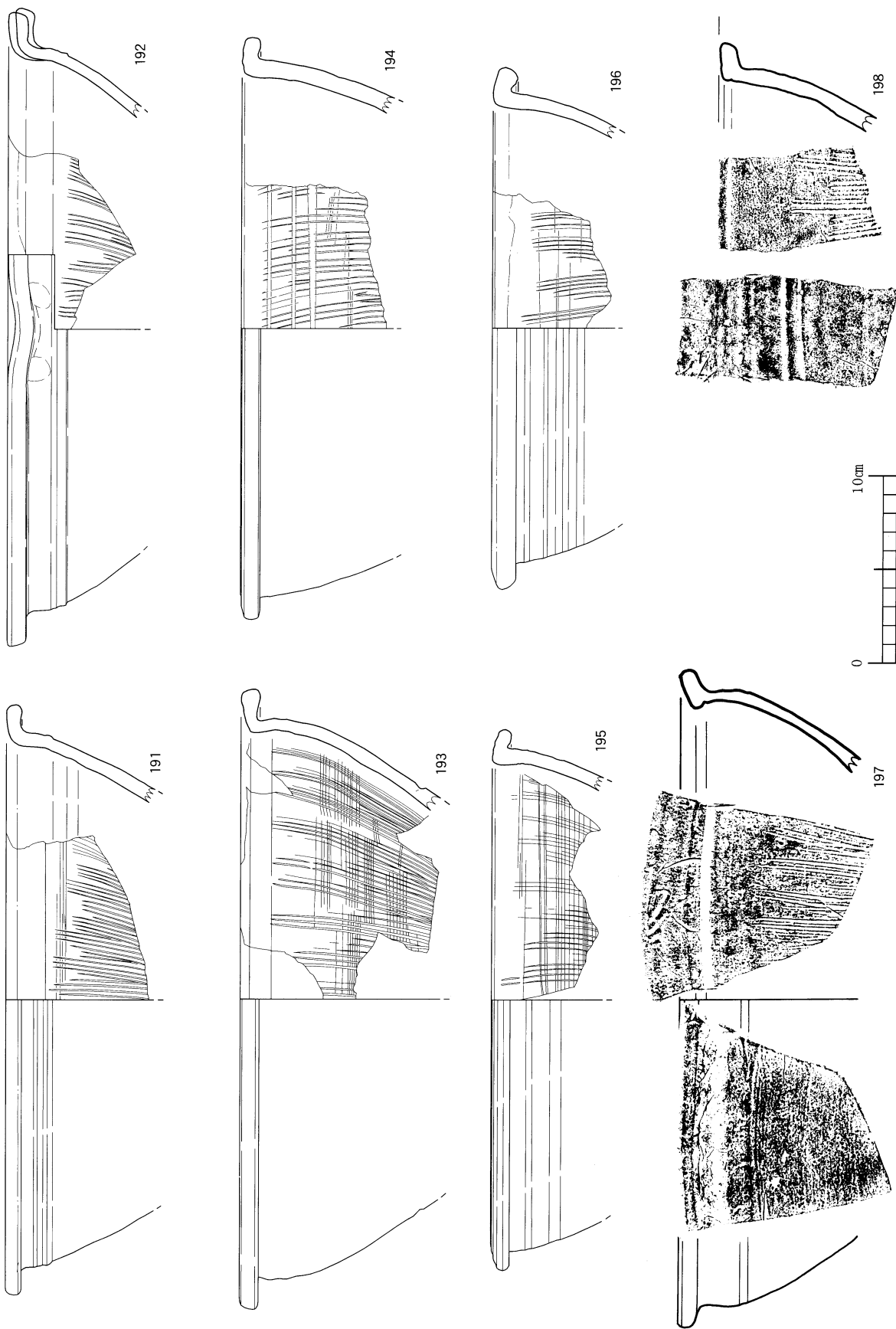
182は龍門司焼の油壺である。白化粧土が、胴部中位まで掛けられ、頸部に鉄釉が施されるもので、高台脇から高台内面にかけては赤褐色の胎土が露胎している。183は外面に型押しの花文が施された紅皿である。内面には透明釉が掛けられている。184は羽釜形の資料である。罎部上位から内面にかけては鉄釉が掛けられている。罎部下位より底部にかけては露胎を呈するが、煤の付着が見られる。185は磁器製の人形の一部と思われるもので、小さな花や衣が寄って波を打つ様子が表現されているが全体像は不明である。186は用途不明のもので、外面には文様が描かれているが、変容性が強いいため判別できない。貫入の入った透明釉が総釉で掛けられているが、熔触が悪く緑褐色となっている。187は磁器製の人形の頭部から肩部で、顎ひげを生やし、頭部にはやや強い沈線が施されているが、帽子を表現しているものと思われる。188～190は土製品の人形で、型作りである。188は小形ではあるが雛人形の「お内裏様」と思われる。頭部は欠損していて不明であるが、台座に座り手に尺を持っているものと思われる。189は袈裟を着た仏像で胸の前で手が合わされ、後背も作られている。190は中空の人形で、頭部は欠損している。ズボンのような衣服を着ているようにも見えるが詳細は不明である。

第11表 I地区出土遺物一覧表・仏具・灯明具(陶磁器)

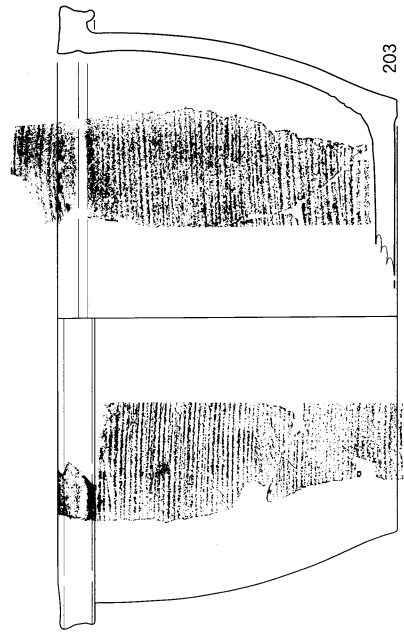
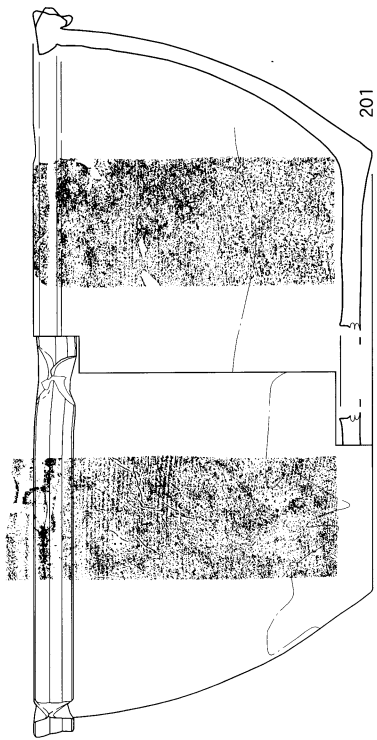
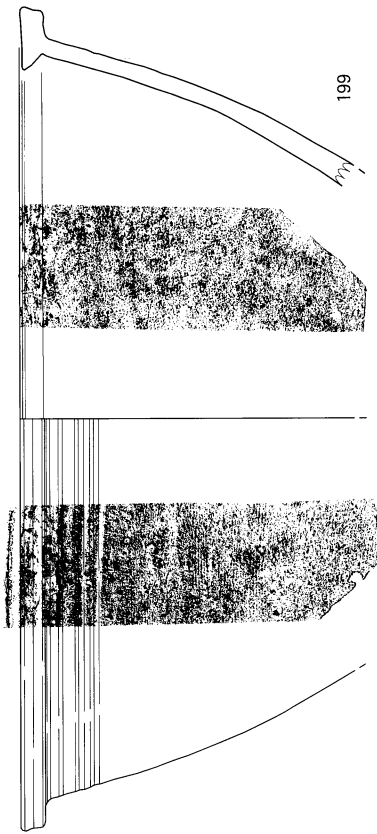
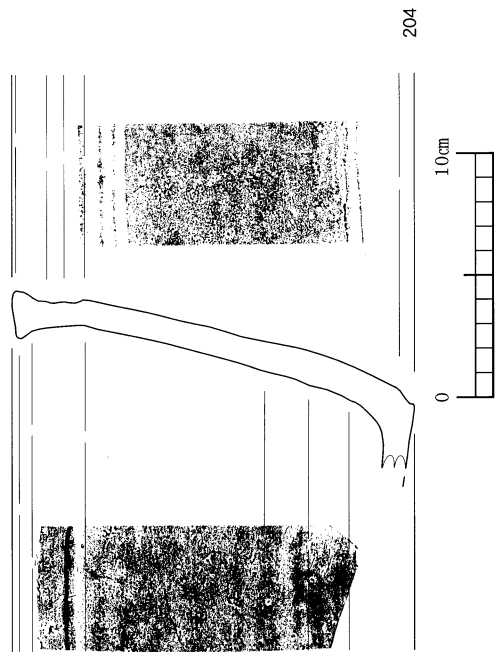
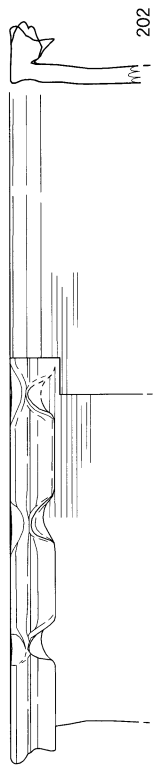
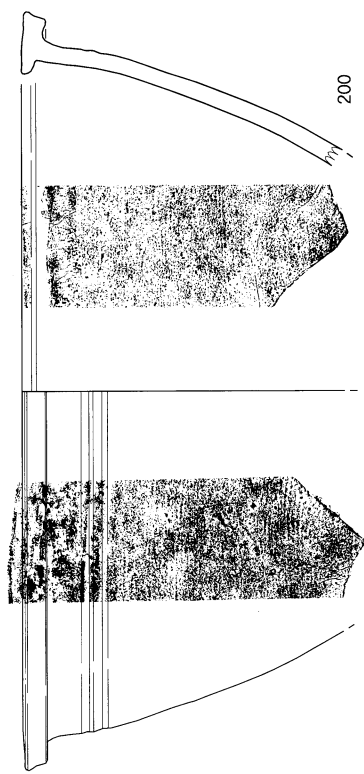
番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
162	仏飯器	丸形	陶器	9.25	6.45	5.5	乳白色の釉胎土灰褐色	在地	洋池1681	Va
163	仏飯器	丸形	陶器	—	—	5	内面透明釉 胎土灰白色	在地	—	—
164	仏飯器	端反	陶器	6.6	4.25	4.4	白化粧土透明釉外面無釉 胎土赤褐色	在地	洋池1738	Vb
165	仏花器	—	磁器	9.2	14.55	5.95	白釉高台～高台内無釉	在地	一括	0～II
166	香炉	半筒形	磁器	9.9	8.25	6	高台～高台内無釉外面白釉内面の透明釉	在地	—	—
167	香炉	鼎形	磁器	8.7	—	—	雲竜文外面白釉内面無釉	在地	一括	0～II
168	香炉	浅筒形	陶器	10.6	—	5.25	外面褐釉内面無釉胎土赤褐色	在地	一括	0～II
169	香炉	鼎形	陶器	11.85	—	4.8	外面施釉内面無釉胎土赤褐色	在地	一括	0～II
170	香炉	鼎形	陶器	10.8	4	—	焼成不良三足胎土浅黄橙色	在地	—	—
171	灯明皿	—	陶器	11	2.75	6	糸切り底内面褐釉胎土明赤色	在地	—	—
172	灯明皿	—	陶器	—	—	—	糸切り底内面褐釉見込蛇ノ目釉剥胎土褐灰色	在地	洋池1750	Va
173	灯明皿	—	陶器	11.5	2.3	5.1	糸切り底内面褐釉見込ゴマ目胎土明赤褐色	在地	洋池1643	Vb
174	灯明皿	—	陶器	9.8	2.5	4.6	糸切り底内面褐釉見込底部目跡4ヶ所胎土浅黄色	在地	一括	0～II
175	灯明皿	—	陶器	—	—	—	糸切り底内面褐釉見込ゴマ目胎土明赤褐色	在地	—	—
176	灯明皿	—	陶器	皿部:7.8	—	皿部:4.8	皿部外面無釉糸切り底褐釉胎土明赤褐色	在地	一括	0～II
177	灯明皿	—	陶器	皿部:10.3	—	皿部:8.5	皿部外面無釉糸切り底褐釉胎土褐灰色	在地	洋池1871・1911	Va・b
178	灯明皿	—	陶器	—	—	皿部:5.1	皿部外面無釉糸切り底褐釉胎土褐灰色	在地	洋池1729	Vb
179	乗燭	たんころ	陶器	9.75	—	8.2	内外面褐釉胎土明赤褐色	在地	—	—
180	乗燭	たんころ	陶器	5.55	5	4.05	内外面褐釉胎土明赤褐色	在地	一括	Ib～IV
181	乗燭	たんころ	陶器	4.15	5.65	4	内外面褐釉胎土明赤褐色	在地	洋池1779	Vb



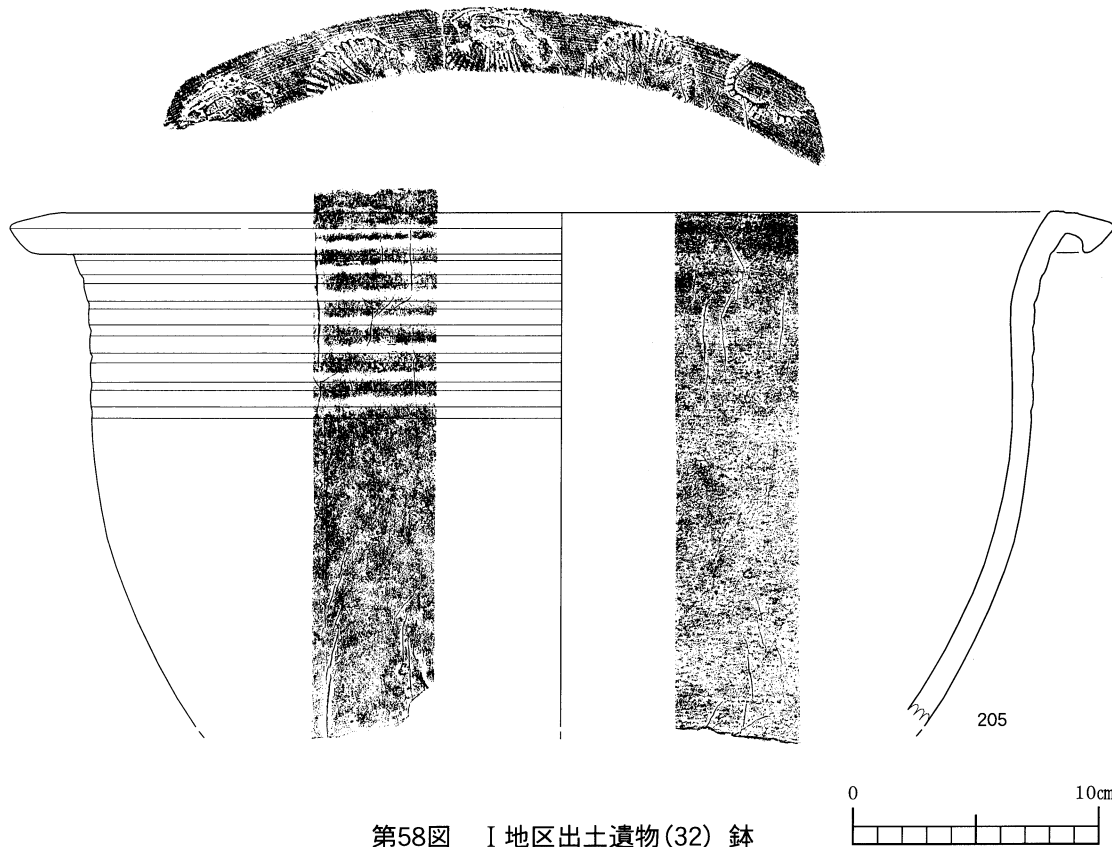
第55图 I地区出土遗物(29) 陶磁器・土製品



第56图 I地区出土遗物(30) 播鉢



第57図 I地区出土遺物(31) 鉢



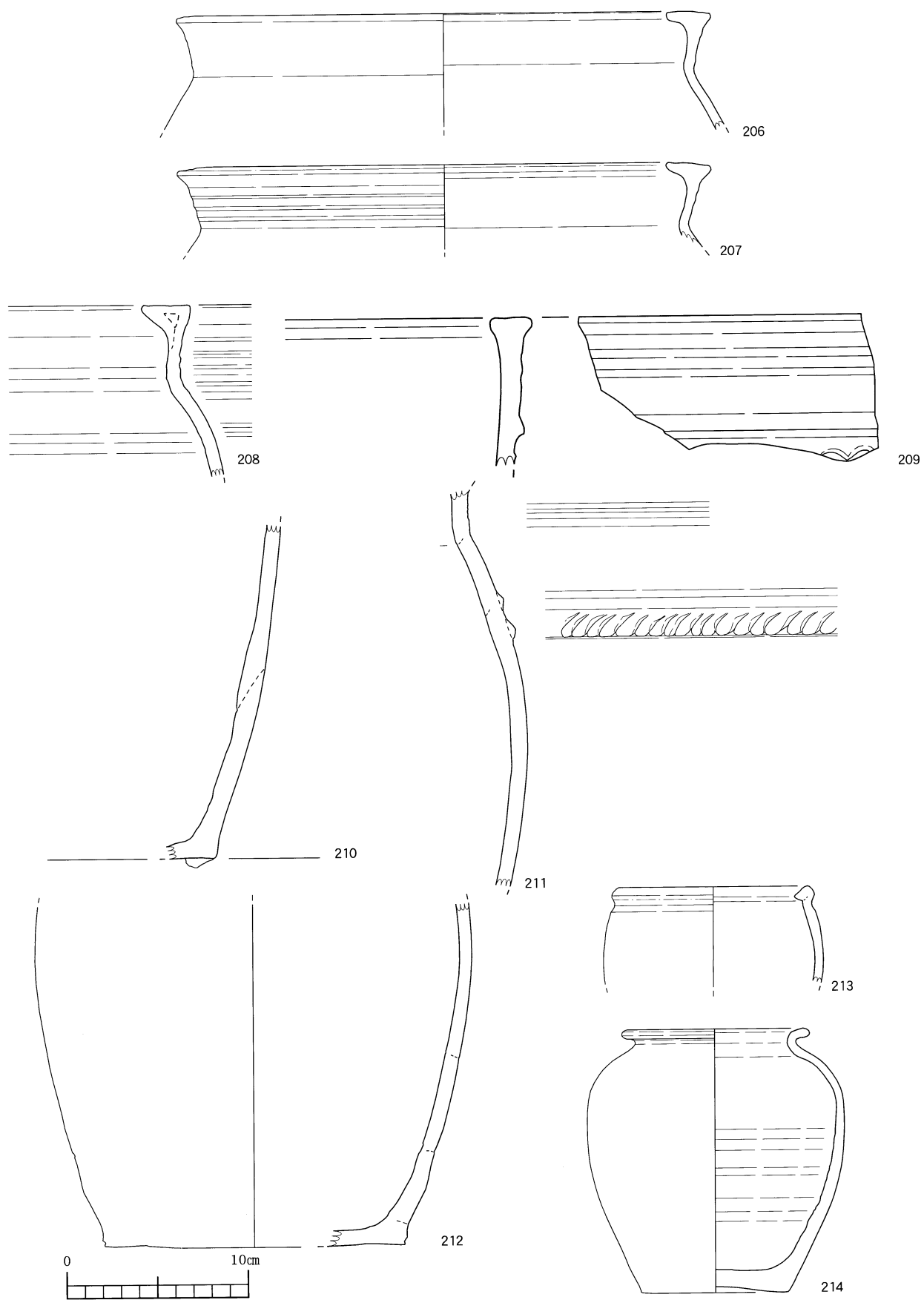
第58図 I地区出土遺物(32) 鉢

(10) 播鉢 (第56図)

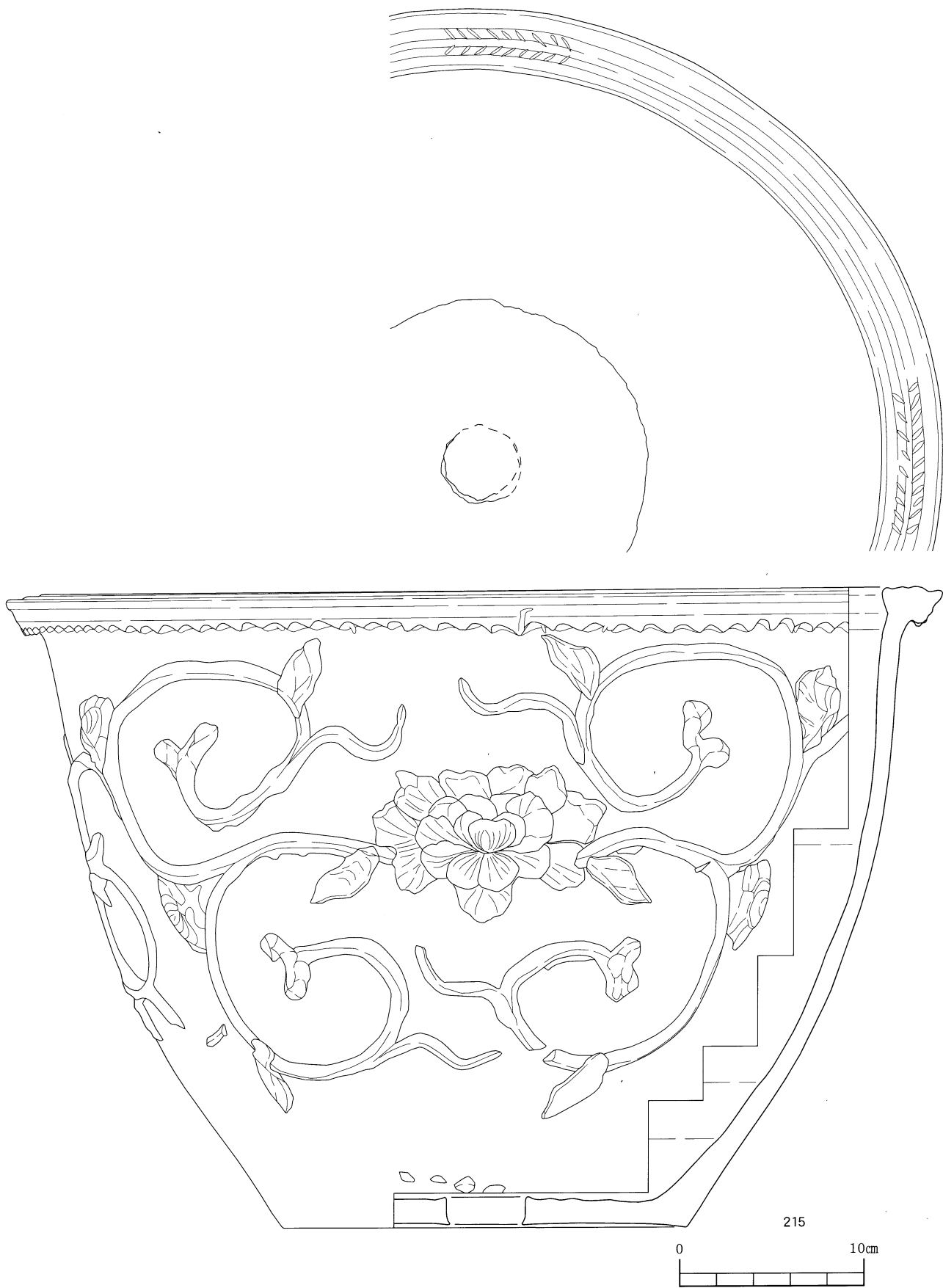
191~198は内外面が施釉された在地系の播鉢である。191・192は、底径に対して口径の開く器形で、内外面に鉄釉が施され、口縁部直下に退化した1~2条の凸帯を回らすものである。内面には播り目が密に施され、口唇部の釉薬は削り取られている。193は底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部では内湾気味にすぼまりながら口唇部を逆L字状に折り返す器形である。194は比較的焼成が悪く、胎土は赤褐色を呈し焼き締まりが悪い。197は193と同様の器形であるが、口縁部はくの字に折り返して肥厚させ、口唇部にイタヤガイの貝目を持つ。198は播り目を内面の全面に施さず、口縁部内側には余白を残すものである。

第12表 I地区出土遺物一覧表・その他(陶磁器・土製品)

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
182	油壺	-	陶器	-	-	3.05	二彩(白化粧鉄釉)胎土赤褐色	在地	-	-
183	紅皿	-	磁器	6.7	1.95	2.3	内面透明釉外面型押し花文	在地?	-	-
184	羽釜	-	陶器	9.9	-	-	鉄釉外面煤付着胎土赤黒色	-	1520	IV
185	人形	-	磁器	-	-	-	胎土灰白色	-	1543	IV
186	不明	-	陶器	11	9.8	11.8	外面緑褐色透明釉 内面透明釉 胎土浅黄橙色	?	-	-
187	人形	-	磁器	-	-	-	胎土灰白色	-	1151	II
188	人形	-	土製品	-	-	-	ひな人形か?胎土赤褐色	-	1358	II
189	人形	-	土製品	-	-	-	胎土淡橙色	-	-	-
190	人形	-	土製品	-	-	-	胎土浅黄橙色	-	-	-



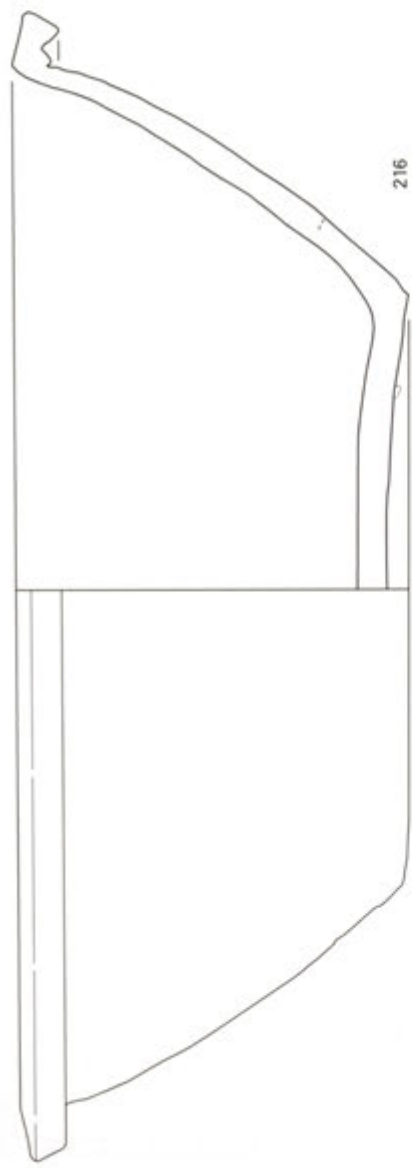
第59图 I地区出土遺物(33) 甕・壺



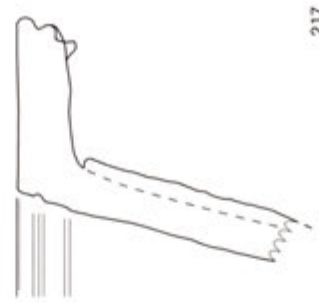
第60図 I地区出土遺物(34) 植木鉢



218



216



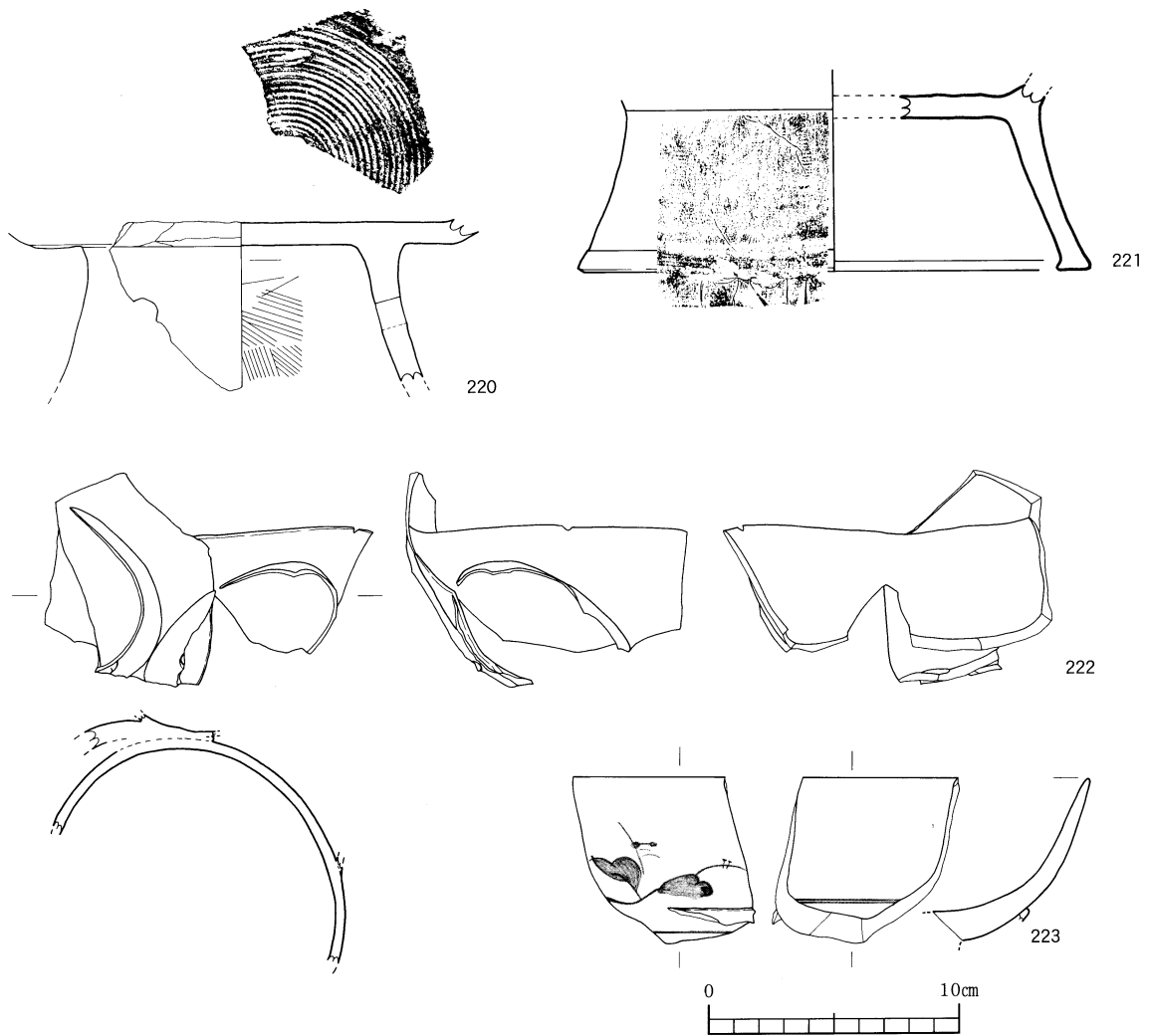
217



219



第61図 I地区出土遺物(35) 大鉢・大壺



第62図 I地区出土遺物(36) その他

(11) 鉢 (第57・58図)

199～204は内外面に鉄釉の掛けられた在地系の鉢である。199・200が底径に対して口径が開く器形で、口唇部をT字状に作り出した鏝縁形の器形である。201・203・204は底径に比べ口径の開かない安定感のある器形で、201は口縁部の内外面にのみ施釉する。205は口径約45cmの大形の資料で、胎土は黒褐色を呈し、口唇部には貝目が密に入る。

(12) 甕・壺 (第59・60図)

206～214は在地系と思われる甕・壺で、叩き目を持つ古手の資料は見あたらない。

206～208は口縁部を内側に屈曲させ、その外側に粘土を貼り付け安定感のある口唇部を作り出した器形である。214は口径が10cm余りの小形の壺で、糸切りの外底を除いて全面に釉葉が掛かり口唇部は施釉を剥ぎ取っている。本来は蓋が付くものであろう。また、糸切りは左回転の口クロを示している。

(13) 植木鉢 (第960図)

215は口径が50cmを越える大型の植木鉢で、底部には穿孔が見られる。外面胴部には、苗代川焼の半胴甕に散見される粘土ひもによる貼り付け花文が施され、口縁部や口唇部も装飾性が強い。

(14) 大鉢・大壺

216・217は大形の鉢で、釉葉は用いず、貼り付け花文が施された、琉球壺屋焼と思われる資料である。217は、内外面に鉄釉が掛けられた大形の鉢でへら状の工具でつけられたと思われる櫛目が、内外面に見られる。218は灰褐色の胎土に大粒の長石が混ざる大型の資料で、外面には白泥を用いて牛を描き、鉄釉が内外面に施されている。219は褐釉と白化粧土が施された肥前形の二彩手の資料である。

(15) その他

220は低火度で焼かれた瓦質の資料で、外面は朱色を呈し、研磨されたようになめらかである。脚部内面には櫛描状の沈線が密に入り、表面には金雲母が観察される。また、脚部には穿孔が二か所に見られるが、位置関係から本来は3か所に設けられているものと思われる。221も220同様、低火度で焼かれた瓦質の資料で、脚部外面には細かい沈線を埋めるように白化粧土が施されている。222は4個体以上の磁器が熔着した資料で、本来消費遺跡からは出土しないものと思われる。223は、胴部下位に別個体の口縁部が熔着し、口形が変形している資料である。

第13表 I地区出土遺物一覧表・播鉢・鉢・甕

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
191	播鉢	—	陶器	31.4	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	—	—
192	播鉢	—	陶器	33.8	—	—	内外面鉄釉胎土暗赤褐色	在地	—	—
193	播鉢	—	陶器	口外径:33	—	—	内外面鉄釉胎土暗赤褐色	在地	一括	0~II
194	播鉢	—	陶器	31	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	一括	0~II
195	播鉢	—	陶器	口外径:28.9	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	—	—
196	播鉢	—	陶器	27.8	—	—	外面鉄釉内面施釉胎土赤褐色	在地	—	—
197	播鉢	—	陶器	25.95	—	—	内外面鉄釉貝目胎土赤黒色	在地	一括	—
198	播鉢	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉目跡胎土暗赤灰色	在地	洋池1806	Vb
199	鉢	—	陶器	33.6	—	—	内外面鉄釉胎土暗赤褐色	在地	—	—
200	鉢	—	陶器	31	—	—	内外面鉄釉口唇部目跡胎土赤褐色	在地	洋池1698	Vb
201	鉢	—	陶器	29.6	13.75	18	内外面鉄釉底部目跡胎土暗赤灰色	在地	—	—
202	鉢	—	陶器	30.1	—	—	内外面施釉胎土暗赤灰色	在地	一括	0~II
203	鉢	—	陶器	25.4	13.8	17.6	内外面施釉口唇部貝目胎土赤褐色	在地	一括	0~II
204	鉢	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉口唇部目跡胎土暗赤灰色	在地	—	—
205	鉢	—	陶器	44.8	—	—	内外面鉄釉口唇部貝目胎土黒褐色	在地	—	—
206	甕	—	陶器	29.2	—	—	内外面鉄釉口唇部目跡胎土赤褐色	在地	—	—
207	甕	—	陶器	29	—	—	内外面鉄釉胎土暗赤褐色	在地	—	—
208	甕	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土暗赤褐色	在地	—	—
209	甕	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土赤色	在地	—	—

第14表 I地区出土遺物一覧表・甕・壺・鉢・土製品・碗

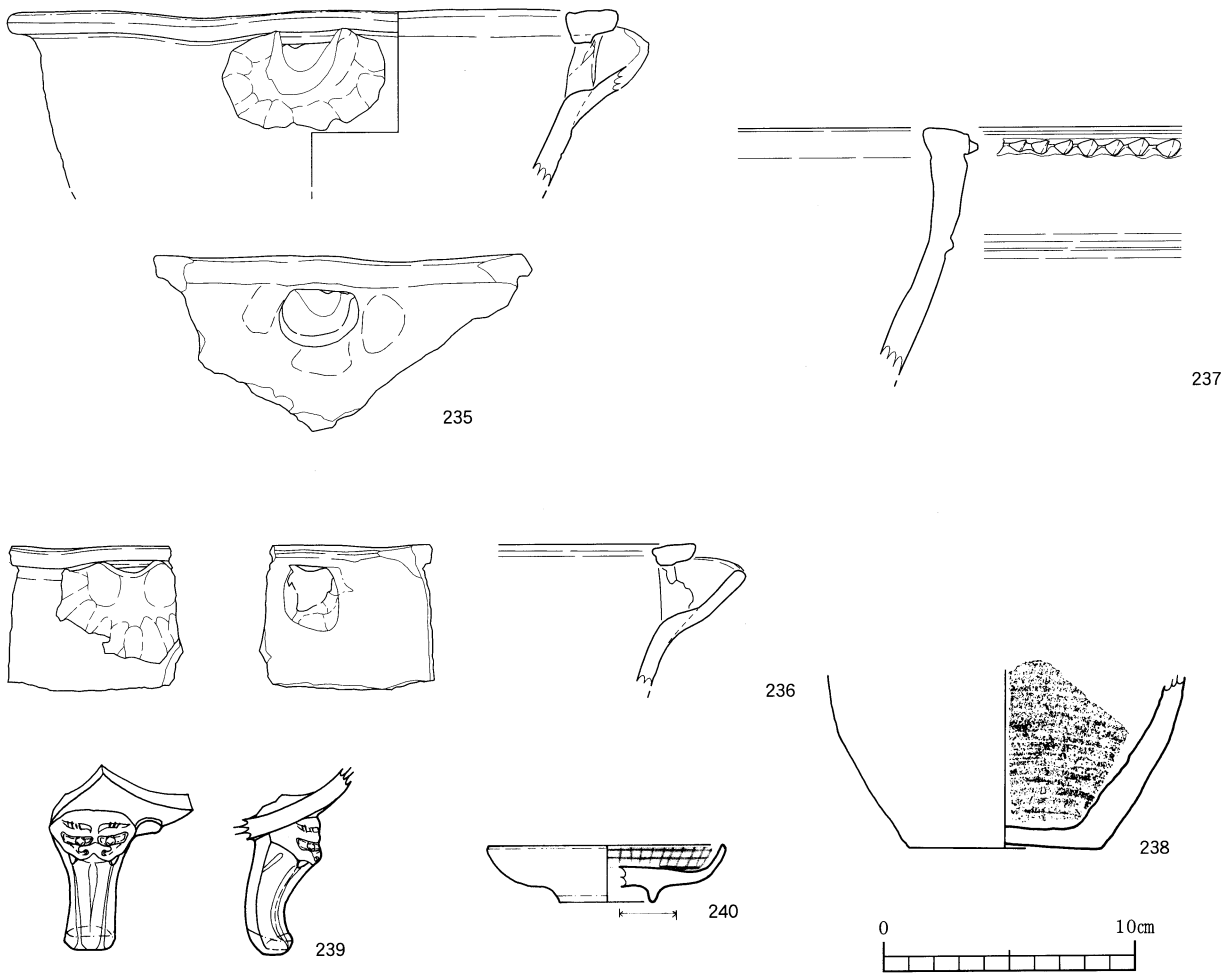
番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
210	甕か蓋	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土赤黒色	在地	洋池1638	Vb
211	甕	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	—	—
212	甕か蓋	—	陶器	—	—	16.5	外面鉄釉内面無釉胎土暗赤褐色	在地	一括	0~II
213	甕	—	陶器	11.1	—	—	全面施釉口唇部目跡胎土黒褐色	在地	—	—
214	壺	—	陶器	10.3	14.5	8.05	全面施釉底部糸切り胎土黒褐色	在地	洋池1871・1911	Va・b
215	鉢	—	陶器	51.6	35.4	22.4	褐釉胎土黒褐色 底部に穿孔 貼り付け花文	在地	—	—
216	鉢	—	陶器	46.9	16.1	24.1	—	—	—	—
217	鉢	—	陶器	—	—	—	貼り付け花文 焼きしめ胎土赤褐色	琉球	一括	表
218	壺	—	陶器	—	—	—	牛内外面鉄釉胎土灰褐色	在地	一括	I~II
219	壺	—	陶器	—	—	—	外部二彩(白化粧鉄釉)内面褐釉胎土褐灰色	—	一括	II
220	不明	—	土製品	—	—	—	脚部内面櫛状の沈線 表面に金雲母	—	一括	表
221	不明	—	土製品	—	—	13.8	脚部外面に細かい沈線 白化粧土	—	洋池1792	Vb
222	碗	—	磁器	—	—	—	熔着	不明	洋池1584・1903	Va・b
223	碗	—	磁器	11.6	—	—	釜傷あり	不明	—	表

(16) 確認トレンチ内出土遺物 (第63・64)

225~140は確認トレンチ内出土の遺物である。224は2トレンチから出土したもので、挿鉢である。口縁部がL字に外反し、内外面鉄釉が掛けられる。外面には2条の沈線が施され、内面にはやや太めの櫛目が施される。225は3トレンチ出土のもので、外面には緑色の釉が掛けられており、内面は無釉である。226~239は4トレンチ出土のものである。226は端反形の碗で、胎土が灰色を呈する。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。227は端反碗で、胎土は淡灰色を呈する。228は外面菊花文、内面雷文、見込み花文の碗である。高台内に「祀」の字が記されている。229は口縁部の器壁が薄い蓋で、内面には変容した雷文と見込みに松竹梅文が描かれ、外面の文様も変容しているため判別できない。230は段重又は蓋物の蓋で、外面に山水文が記されている。底部から口縁部にかけて釉剥ぎされている。231・232は蛇ノ目凹形高台を呈する皿で、231は口縁部を折り返して玉縁とし、内面には蛇ノ目釉剥ぎが施される。232・233は見込みに竜文、高台内面に「渦福」が施されている。233・234は挿鉢で、233は緩やかに外反する口縁の下に1条の凸帯が回っている。233・234とも内面にはやや細めの櫛目が施されており、内外面には鉄釉が掛けられている。235・236は片口である。内外面とも黒褐色の鉄釉が施されている。237は焼き締め鉢である。植木鉢の可能性も考えられる。238は内外面黒褐色の鉄釉が施された甕か壺の底部である。239は獅子頭が施された香炉の脚部である。白色の胎土に透明釉が掛けられ、在地系のものである。240は6トレンチより出土したもので、内面には格子文が描かれ、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。



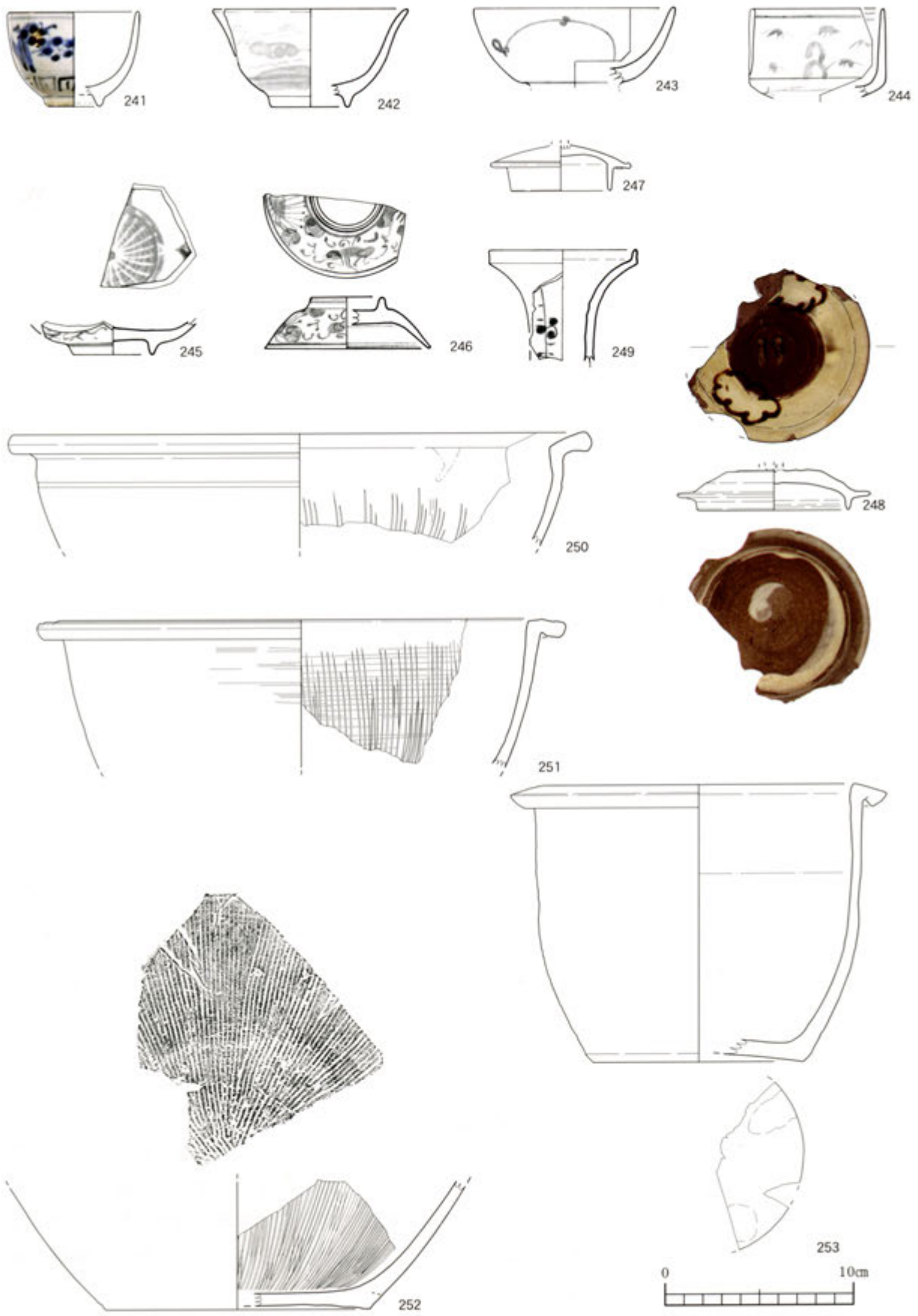
第63図 I地区出土遺物(37) 確認トレンチ



第64図 I地区出土遺物(38) 確認トレンチ

(17) 確認トレンチ4土坑内(第65図)

241~253は確認トレンチ4の土坑内から出土した遺物である。241は外面に草花文が描かれるやや器壁の厚い碗である。242は口縁部が外反する端反形のもので、外面に文様が描かれているが変容性が強く判別できない。243はやや器壁の厚い丸形碗で、外面には変容した唐草文が描かれている。244は外面に雪持笹文、高台脇に折れ松葉文が描かれた筒形碗である。245は内面菊花文、外面唐草文が描かれた皿である。246は草花文が描かれた蓋である。247は土瓶蓋で、外面には褐釉が掛けられている。底部から内面にかけては無釉である。248は白化粧土の上から一對の雲様の鉄絵が描かれ、透明釉が外面にのみ掛けられる資料で、龍門司焼である。249は仏花器の頸部で、内面は無釉である。草花文が描かれ、釉調は青みがかっている。250~252は鉄釉が全面に施された在地系の播鉢である。250は鉢形に口径の開く器形で、播り目の末端は掻き消さない。251は底径に対して口径が大きくなる深みのある器形で、播り目が密に入り、末端は掻き消さない。252は播り目が密に入った平底の底部で播り目の摩耗が観察される。253は釉薬が外面にだけ施され、光沢のある茶褐色に発色した鉄釉が用いられている。外底は無釉とするが、コマ目の一部が熔着している。



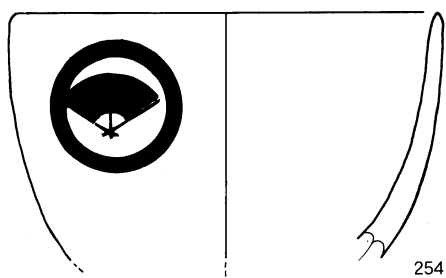
第65図 I地区出土遺物(39) 確認トレンチ4土坑

第15表 I地区出土遺物一覧表・確認トレンチ

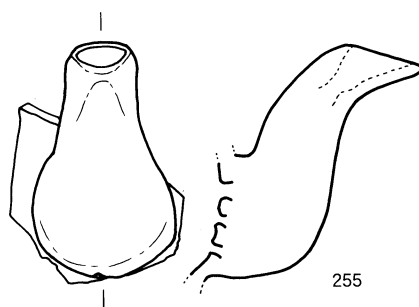
番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
224	擂鉢	—	陶器	29.8	—	—	内外面鉄釉胎土黒褐色目跡	在地	T2	表
225	鉢?	—	陶器	19.4	—	—	外面緑釉 内面無釉 胎土灰白色	?	T3	表
226	碗	端反	磁器	10.8	—	—	見込蛇ノ目釉剥	肥前系	T4	表
227	碗	端反	磁器	10.2	—	—	縦線文	肥前系	T4	表
228	碗	丸形	磁器	11.1	5.5	4.1	外面菊花文 内面雷文 見込花文	肥前系	T4	表
229	蓋	—	磁器	8.4	2.8	つまみ径3.6	内面雷文見込松竹梅文	肥前系	T4	表
230	蓋	—	磁器	11.7	3.15	—	山水文	肥前系	T4	表
231	皿	玉縁	磁器	19.4	3.5	14.4	格子文蛇ノ目凹型高台	肥前系	T4	表
232	皿	—	磁器	—	—	9.8	見込竜文外面唐草文高台内銘渦福	肥前系	T4	表
233	擂鉢	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	T4	表
234	擂鉢	—	陶器	—	—	27	外面鉄釉内面施釉胎土赤褐色	在地	T4	表
235	片口	—	陶器	24.8	—	—	内外面鉄釉口唇部コマ目	在地	T4	表
236	片口	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉胎土灰褐色	在地	T4	表
237	鉢	—	陶器	—	—	—	口縁部刻み凸帯内外面無釉胎土赤褐色	在地?	T4	表
238	壺	—	陶器	—	—	7.7	内外面鉄釉胎土茶褐色	在地	T4	表
239	香炉	—	陶器	—	—	—	脚部獅子頭透明釉胎土白色	在地	T4	表
240	皿	丸形	磁器	9.6	2.3	3.6	格子文見込蛇ノ目釉剥	肥前系	T6	表

第16表 I地区出土遺物一覧表・確認トレンチ4土坑

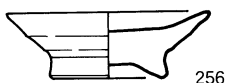
番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
241	碗	丸形	磁器	7.1	5.1	3	草花文	肥前系	DT4土坑	—
242	碗	端反	磁器	10.6	5.3	4.2	—	肥前系	DT4土坑	—
243	碗	丸形	磁器	10.8	—	—	唐草文	肥前系	DT4土坑	—
244	碗	筒形	磁器	7.2	—	—	雪待笹文折れ松葉文	在地	DT4土坑	—
245		—	磁器	—	—	4.4	見込菊花文外面唐草文	肥前系	DT4土坑	—
246	蓋	—	磁器	9	2.8	つまみ径3.8	草花文	肥前系	DT4土坑	—
247	土瓶蓋	—	陶器	5.4	—	底径7.6	褐釉胎土灰褐色	在地	DT4土坑	—
248	土瓶蓋	—	陶器	10.4	—	底径10.4	白化粧に鉄絵胎土灰色	在地	DT4土坑	—
249	仏花器	—	磁器	8	—	—	草花文	肥前系	DT4土坑	—
250	擂鉢	—	陶器	31.6	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	DT4土坑	—
251	擂鉢	—	陶器	28.6	—	—	内外面鉄釉胎土赤褐色	在地	DT4土坑	—
252	擂鉢	—	陶器	—	—	14.4	胎土赤褐色	在地	DT4土坑	—
253	鉢	—	陶器	20.4	15	11.4	外面鉄釉内面無釉胎土黒褐色	在地	DT4土坑	—



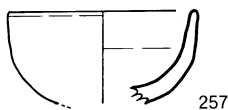
254



255



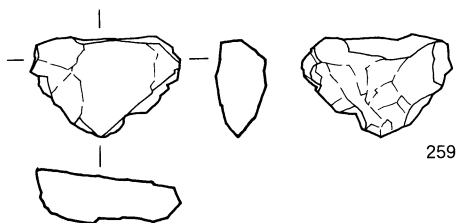
256



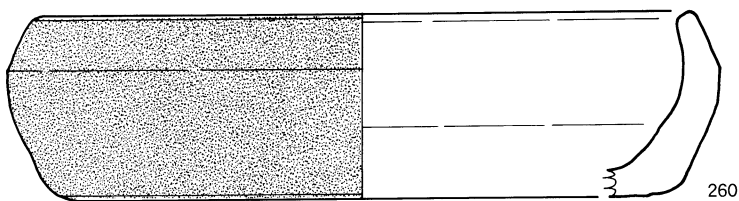
257



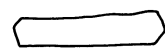
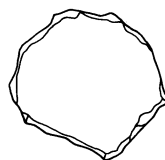
258



259



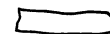
260



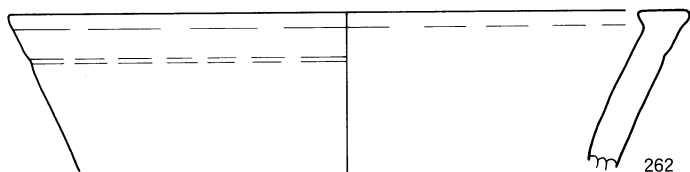
263



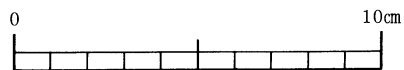
261



264



262



第66图 I地区出土遺物(40)碗(陶器)

(18) 追加の遺物

254～264はI地区に追加された資料で、本来ならばそれぞれの種別に分類されるものであるが、都合により一括して掲載した。254は丸に扇の家紋が描かれた在地系の白色陶胎の碗である。255は白色陶胎にやや緑がかった透明釉が掛けられた急須の注口で、7個の茶留め穴が穿たれている。256・257は龍門司焼である。256は内面に白化粧土と透明釉が施された小坏で、薄い蛇ノ目釉剥ぎ釉剥ぎが看取される。257は脚台部が欠損するが、仏飯器と思われる器形で、白化粧土と緑釉が施された二彩手である。259は金属光沢を持つ鉱物で、「おろかもの金」と呼ばれる硫化鉄である。260・261は外面に煤が付着する焙烙である。262は薄く透明釉が掛けられるが焼成温度が低く熔触が悪い。用途不明の器種とした。263・264は播鉢の破片を転用したメンコである。

第17表 I地区出土遺物一覧表・碗・その他(陶磁器・土師質)

番号	種別	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
254	碗	—	陶器	11.6	—	—	「扇」の家紋白色陶胎	—	一括	IV
255	土瓶	—	陶器	—	—	—	注口部分貫入白色陶胎にやや緑がかった透明釉	在地	1552	IV
256	酒杯	平形	陶器	5.5	1.8	3	内面に白化粧土と透明釉 薄い蛇ノ目釉剥ぎ	在地	一括	IV～V
257	仏飯器	—	陶器	5.2	—	—	二彩釉 白化粧と緑釉	在地	1407・一括	IV
258	紅皿	—	磁器	4.6	1.5	1.4	内面透明釉	—	洋池1821	Vb
259	—	—	—	縦2.7	横4.1	厚1.5	硫化鉄	—	洋池1770	Vb
260	焙烙	—	土師質	18	5.1	15.6	外面煤付着胎土明茶褐色	—	2110	III
261	焙烙	—	土師質	21.6	—	—	外面煤付着胎土灰白色	—	1566・1564	IV
262	不明	—	陶器	18.6	—	—	胎土明赤褐色	—	1897	IV
263	メンコ	—	陶器	縦4.3	横4.1	厚1	胎土赤褐色播鉢転用	—	洋池1392	Va
264	メンコ	—	陶器	縦3.0	横3.0	厚0.7	胎土赤褐色播鉢転用	—	DT-4土坑	—

2) 土製品 (第67図・図版38)

265は口径54.4cm, 底径55.9cm, 器高57.5cm, 厚さ2.2cmを計る陶質の井筒である。同形の土管が2個重ねられた形 (P.54, 第24図参照) で検出されたことなどから, この遺構を井戸と, この遺物を井筒と判断した。器表面は, 篋状工具を使ったていねいな縦ナデで仕上げられている。色調は明黄橙色を呈する。胎土はきめが細かく, 良質である。陶質の井筒は, 本県ではあまり例をみない。

266・267は玉子形につくられており, 縦位に3連の孔をあけた漆喰製品である。孔は両方から開けられている。用途は不明である。266の大きさは, 長さ3.1cm, 幅2.1cm, 厚さ2.2cm, 重さ15.7cmを計る。

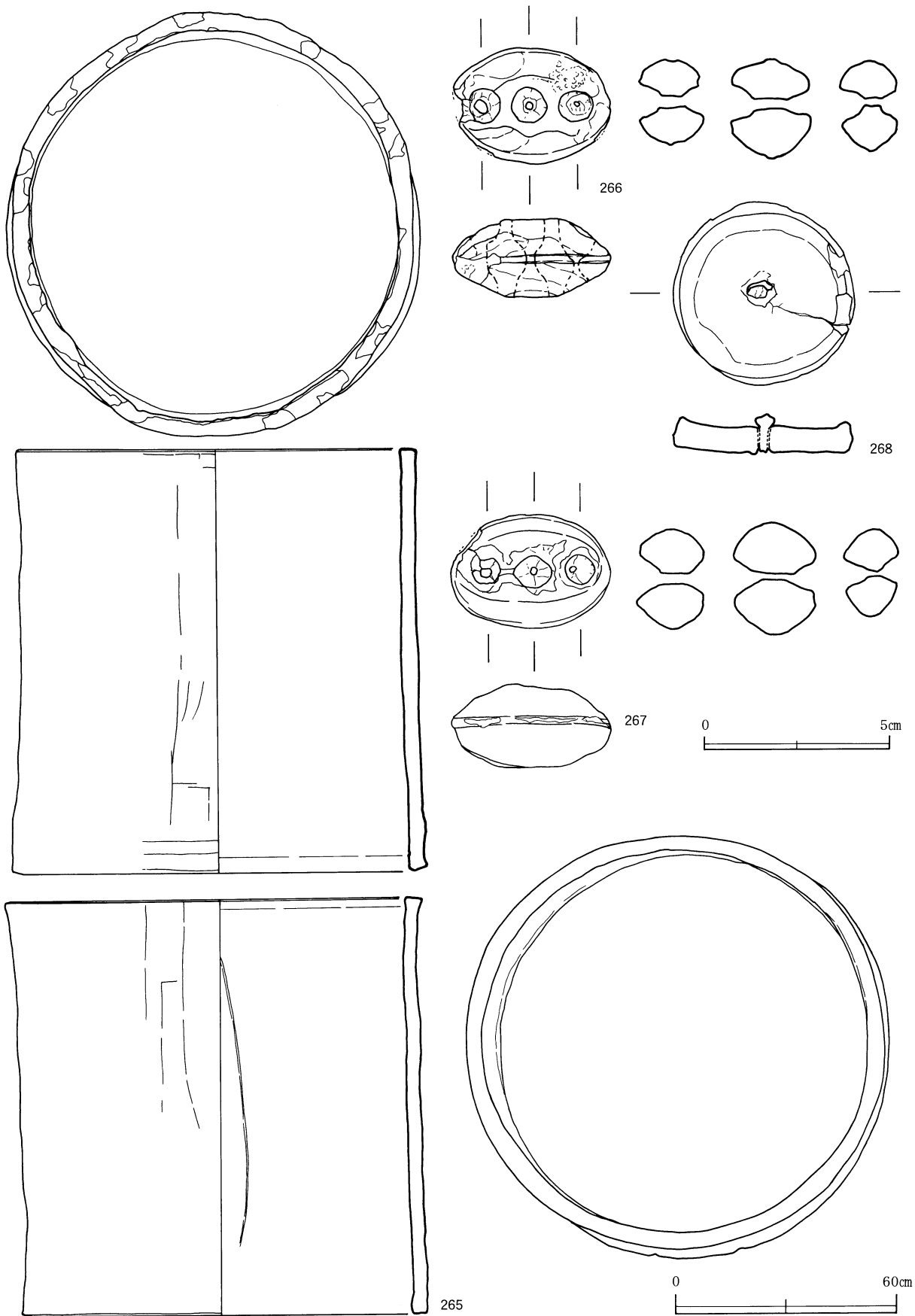
268は直径4.8cm, 厚さ1.1cm, 重さ25.6cmを計る焼物の紡錘車で, 表面は滑石粉と考えられる薄い層で覆われている。色調は灰茶褐色で, ヒビが入っている。中央には鉄芯がみられる。

3) 瓦 (第68図・図版38・39)

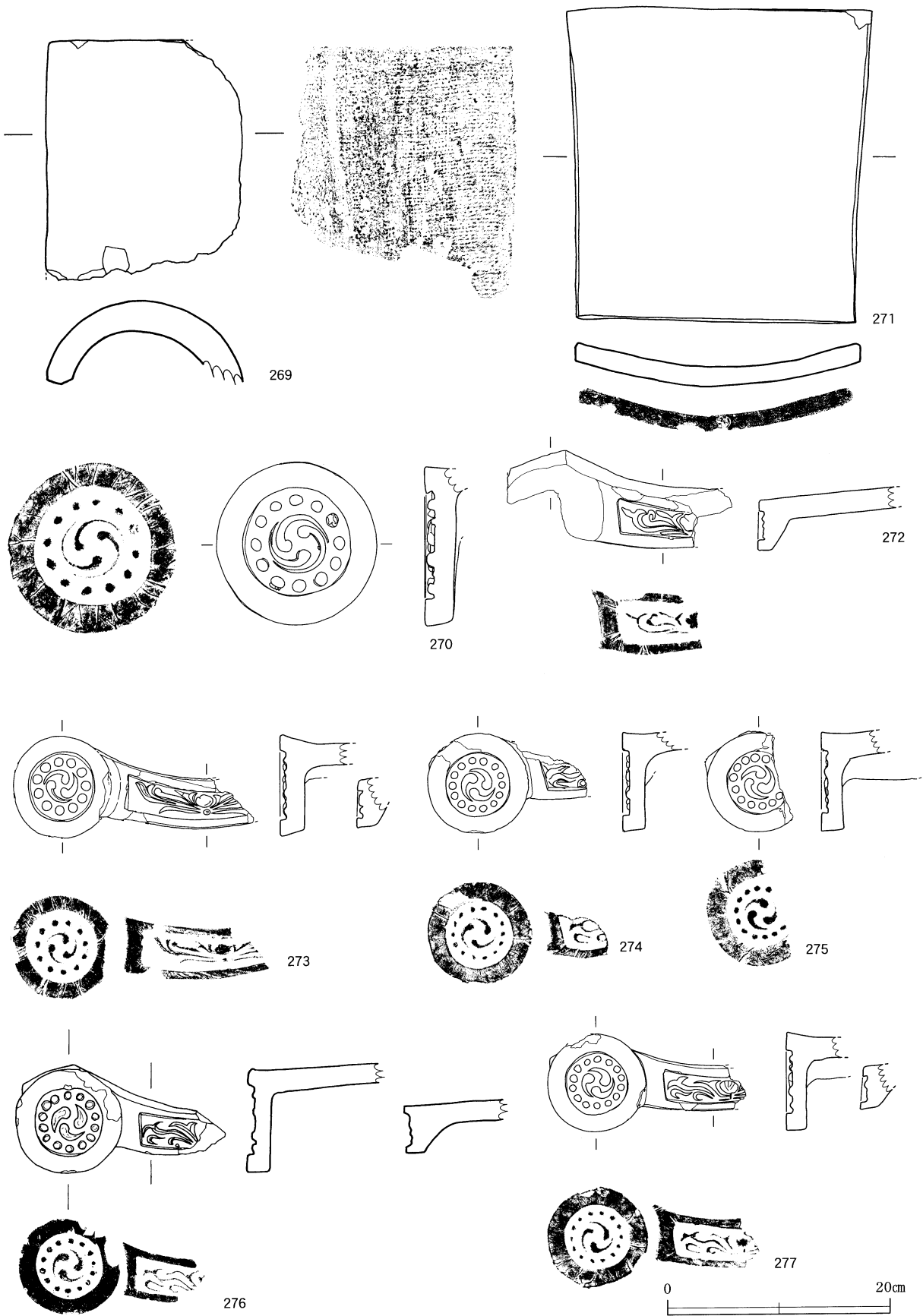
269は丸瓦である。裏面には布目痕と部分的にそれをナデ消した跡が, 表面には篋切り痕がみられる。270は軒丸瓦である。巴文と12個の連朱文とを組み合わせたものである。巴文は左巻きである。271は平瓦である。刻印はあるが, 字形は不明である。272から277は軒丸と平瓦とが一体となった軒棧瓦である。軒丸部は巴文と連朱文とを組み合わせた文様で, 軒平部は唐草文様で構成されている。巴文はいずれも左巻きである。273は軒丸部の連朱文が11個からなり, 丸味は他と比べて大きめである。唐草文は直線的に描かれているが特徴的である。274, 276, 277は連朱文が共に14個からなり, 丸味は273に比べて小さめである。唐草文は曲線的に描かれている。

第18表 I地区出土遺物一覧表・土製品・瓦

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			
						口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	
67	265	井戸	A地点N-2			54.40	57.50	55.90	
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
67	266	三孔土製品		表層		3.10	4.20	2.10	15.7
	267	三孔土製品		表層		3.10	4.20	2.20	16.1
	268	紡錘車	表採			4.8(径)		1.10	25.6
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
68	269	丸瓦				17.10	14.10	2.30	658
	270	軒丸瓦		一括		14.3(径)		2.60	612
	271	平瓦		一括		28.10	27.20	1.80	2100
	272	軒棧瓦	B	Vb	1625	15.50	19.00	1.30	860
	273	軒棧瓦	A	井戸		9.1(径)	20.50	2.20	421
	274	軒棧瓦	B	IV	1421	9.00	14.00	2.00	308
	275	軒棧瓦	B	Va	1832	9.0(径)		2.00	229
	276	軒棧瓦	B	I~IV一括		9.00	16.00	1.80	614
	277	軒棧瓦	B	IV	1438	8.80	17.50	1.80	375



第67图 I地区出土遺物(41) 土製品



第68图 I地区出土遺物(42)瓦

4) 金属製品 (第69～71図・図版40・41)

278から289は鉄製品である。

278は第4トレンチから出土した鉄製品である。表面は径8.3cmで2段になり、中央部に径1.2cm高さ4cmの棒状の突起が付いている。縁に径3mmの孔が1か所みられる。裏面は中が空洞になり、その縁は薄く尖らしている。形状からみて、寺院の柱に打ち込む、宝珠に似せた飾りものと考えられる。279は長さ22.5mm×最大幅6.5mm、厚さ1.5mmの鉄板を底状に曲げて作られたものである。表面には、7対の鉾が打ち込まれている。鉾は、青銅製のもので、表には星状の突起が出ており、裏には足が折り開かれている。冑の眉庇と考えられる。280は、鉄製の鋏先である。長さ45.5cm、幅10.8cmで22cm袢り込みがある。この部分は、差し込みができる構造になっている。先の部分は厚みがあり、重味が感じられる。先端部は丸味をもっているが、片方が直線状になっている鋏先である。

281～289は四面をもった鉄製の和釘で、「頭巻釘」あるいは「皆折釘」に分類できるようである。基部上端は平坦で少し広げて面を作り、折り返して頭部としている。先端部は尖らしている。

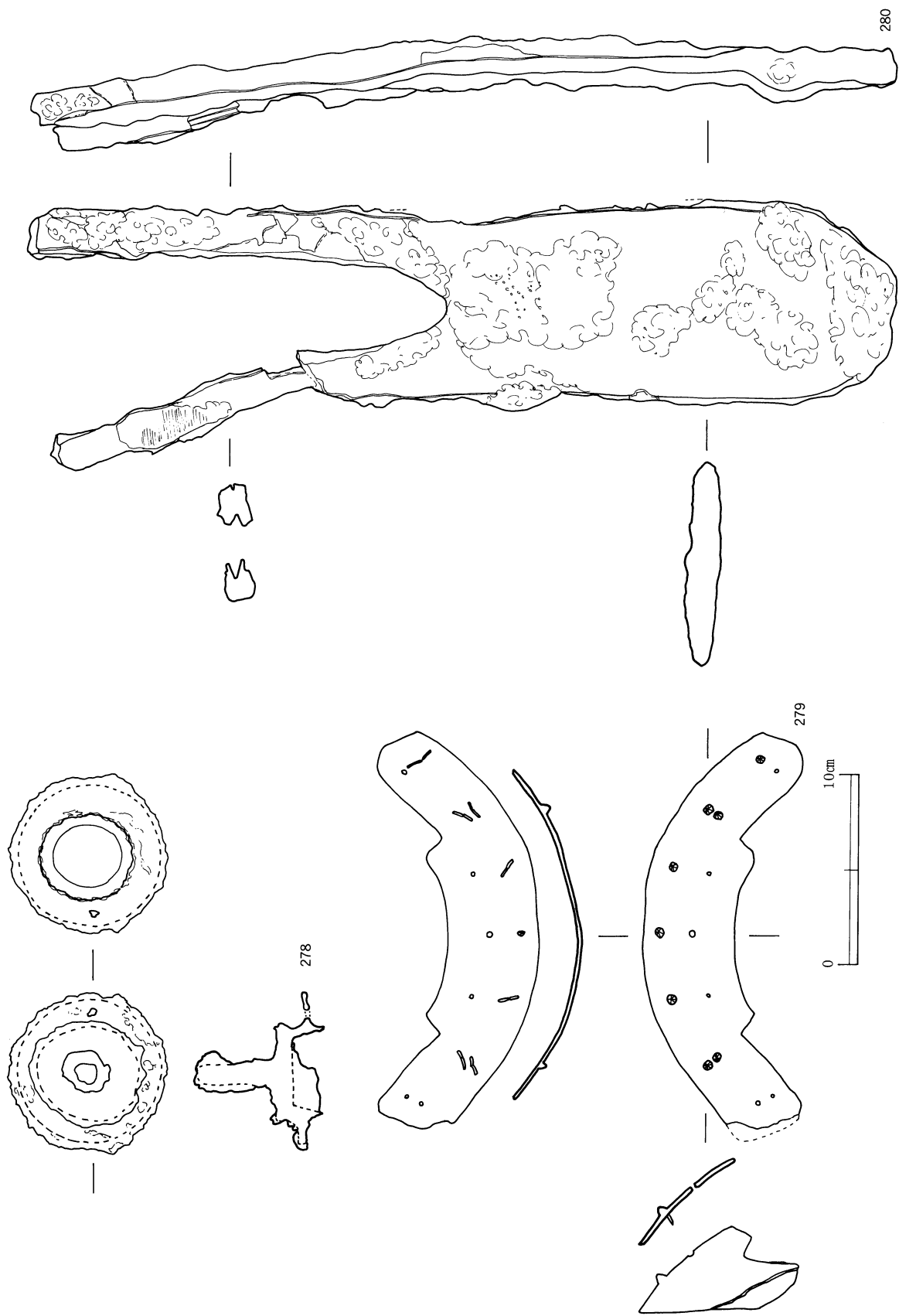
290～299は銅製品である。なお、291は竹製品であるが、290とセットとして、ここで報告した。290は銅製の円筒容器である。上部はキャップをしたらしく鏝状に受け部をつくっている。下部は若干丸味をもちながらふさがっている。表面は緑錆が付着している。用途としては筆筒が考えられる。この中には291が挿入されていた。291は竹製である。一端を五面で斜めにカットしている。中央部は墨が付着している。片方の一端は萎びれている。筆の可能性が高い。292はL字の銅金具である。端は段状に装飾し3か所の孔がある。留め具である。293は銅製の釣り針である。釣り糸を付ける孔はない。基部は小さなU字形に、針部は大きなU字形に曲げている。先端部は尖っている。294は鈴である。銅製で下には金メッキの部分が残っている。295は銅板細工板片である。細長い薄手の銅板で作られ、基部と中程とに1つつ2つの孔がある。先端部は折れ曲がっている。296は薄手にできた銅板の破片で、四角や円などに銅板をカットした際の、残りの板のようである。297は鉄製の金属製品の一部であるが、金具全体像は不明である。298・299は飾り金具であると思われる。298は銅製の金属製品である。横に2つの透かしがあり、表面の中央に菊花状、それから放射状に細工を施している。また、金メッキの部分も残っている。299は銅製の薄手の金具である。花卉状に切り、表面に菊花葉文を細工している。

5) 銭貨 (第72～73図・図版42)

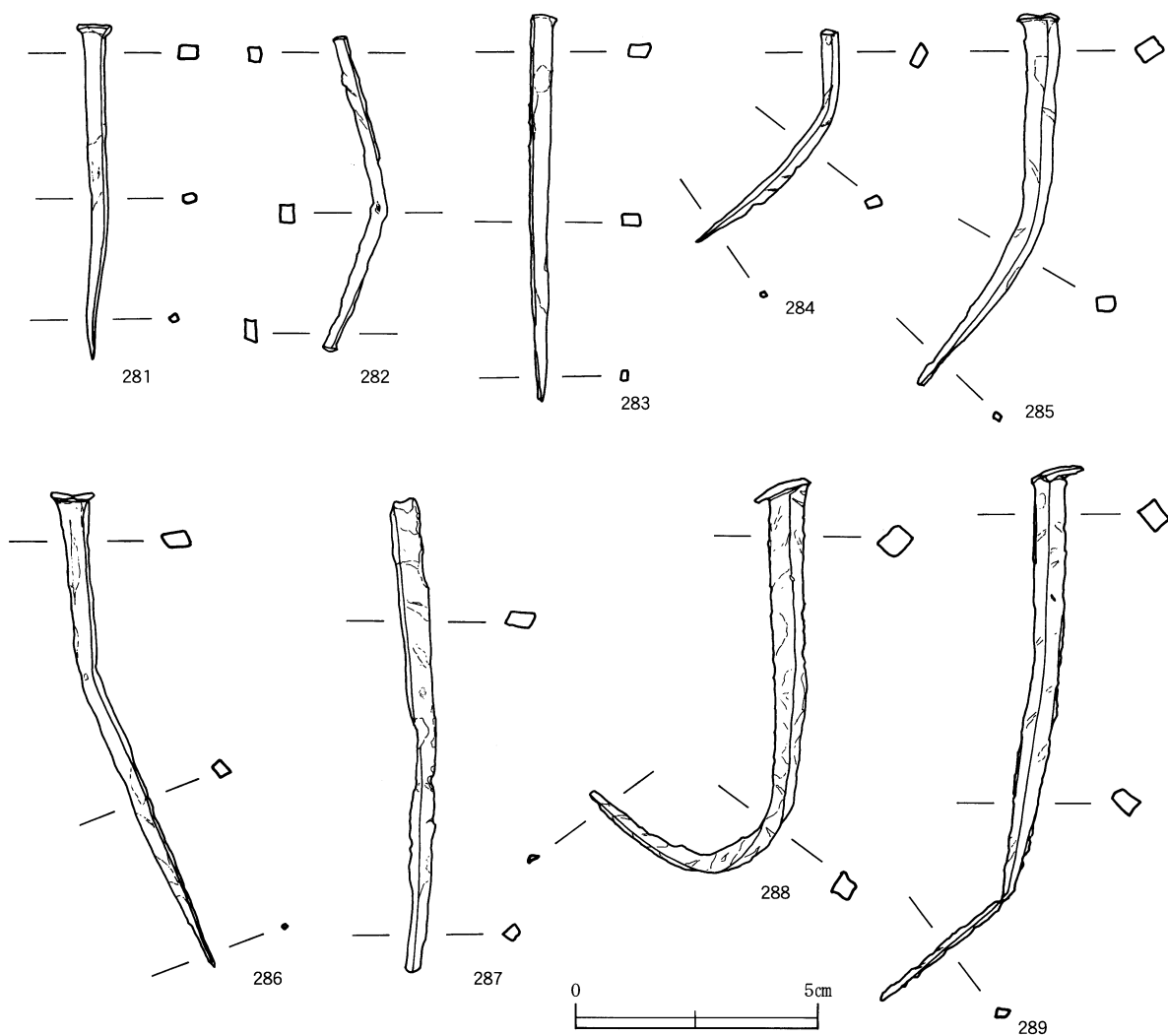
I地区における銭貨の出土総数は28点で、識別できるものはすべて寛永通宝であった。この数は、細かい破片状のものまで数えた点数であり、拓影や写真に掲載しなかったものもある。そのうち、I地区A地点で検出した井戸跡の底から19枚が出土した。これらは、廃仏毀釈時あるいはそれ以降に井戸が廃棄される際に行われた祭祀の奉納品と考えられる。そのほかのものは、それぞれ単独で出土した。

I地区で出土した銭貨は、全て銅銭の寛永通宝(第72・73図)で、一文銭であった。

『日本出土銭総覧1996年版』(兵庫埋蔵銭調査会発行)によると、寛永通宝は「寛」と「寶」



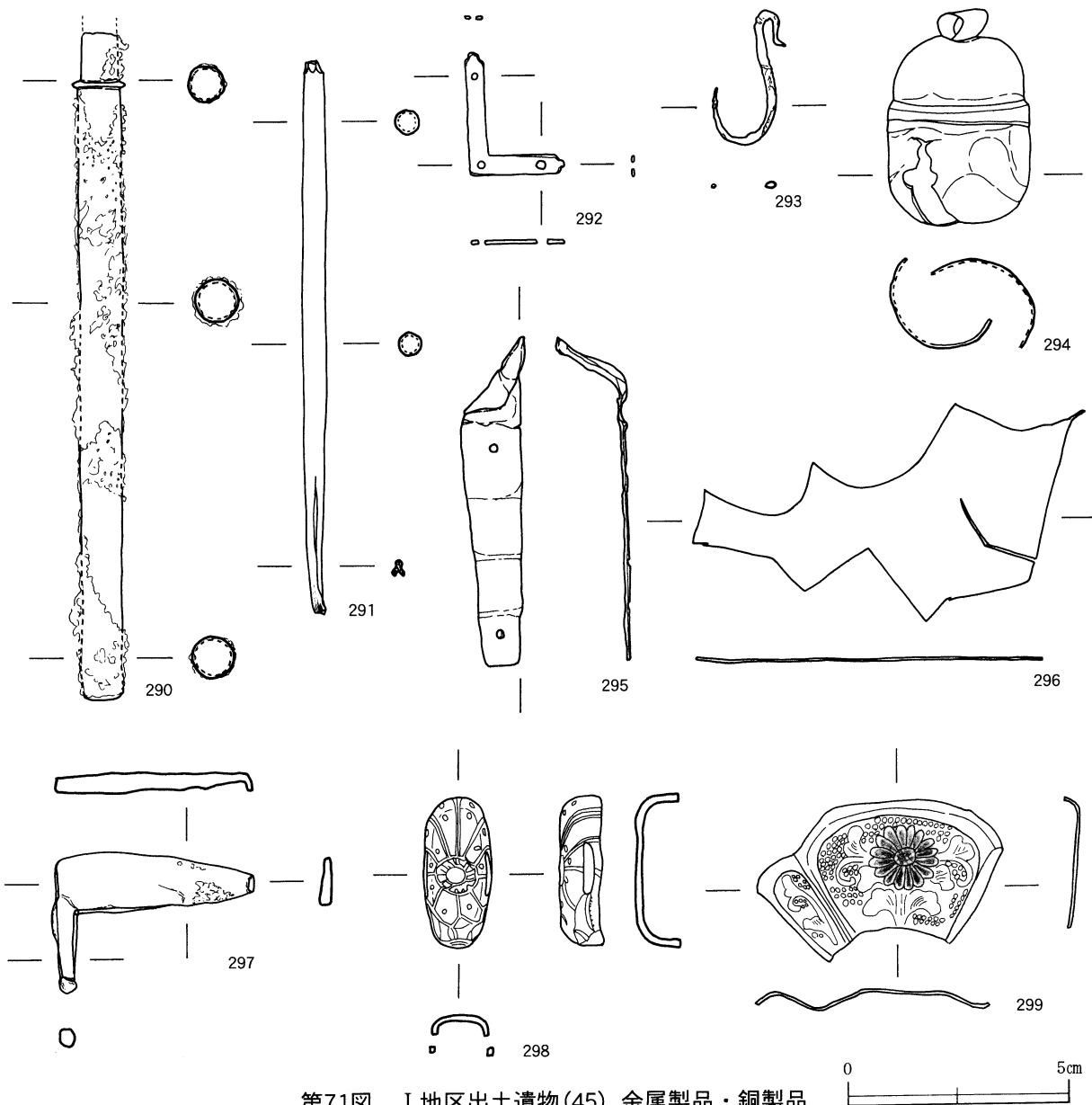
第69図 I地区出土遺物(43) 金属製品・鉄製品 1



第70図 I地区出土遺物(44) 金属製品・鉄製品 2

字の書体の相違等から分類できるとされている。すなわち、古寛永は「寛」字の12画と13画の頭が相接し、「寶」字の貝画末尾が「ス」（ス貝寶）であり、新寛永は「寛」字の12画と13画の頭が離れ、「寶」字の貝画末尾が「ハ」（ハ貝寶）になっているようである。

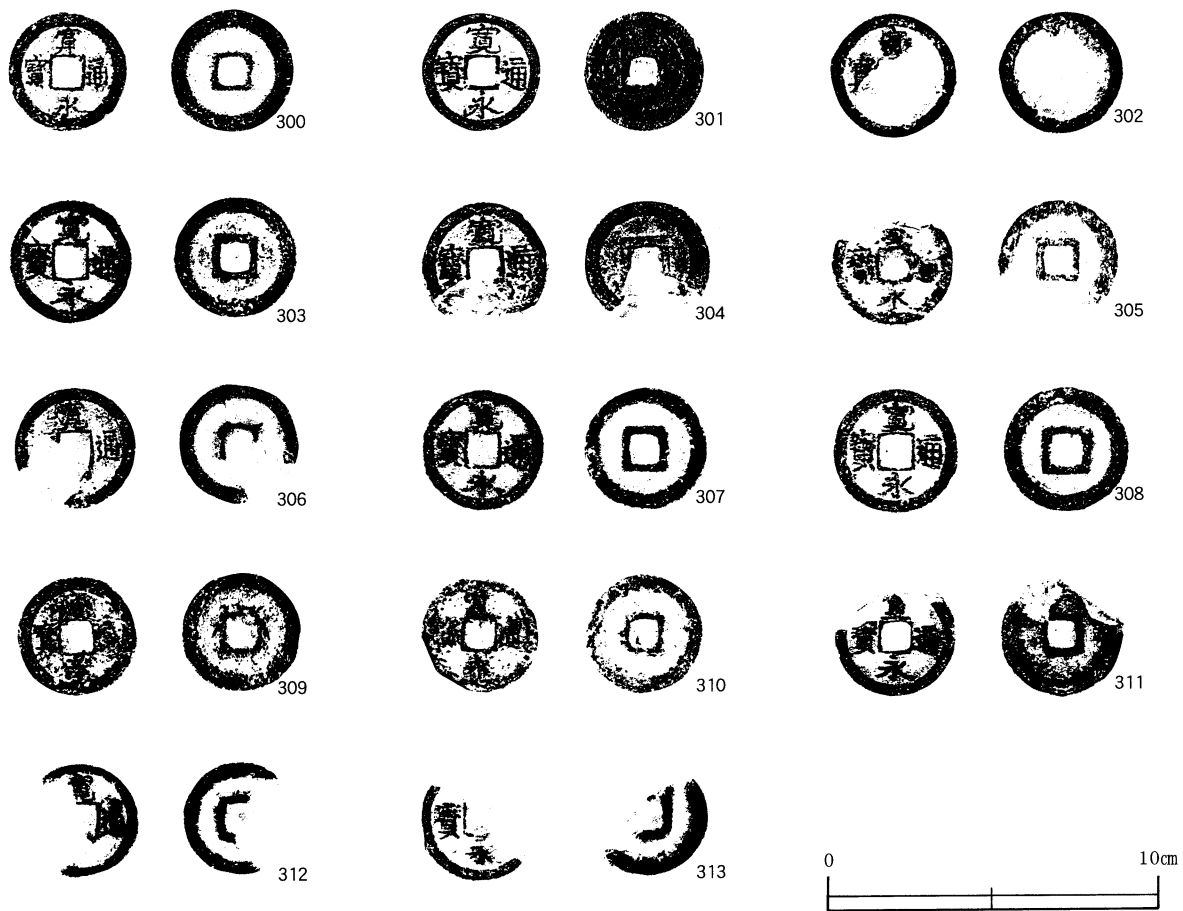
この分類を当てはめると、I地区では1期、2期、3期に属する寛永通宝が出土した。1期（古寛永、1636年から1659年鑄造）に属する錢貨は、301・303・304・305・307・308・311・313・316・318の10点である。また2期（新寛永・文銭、1668年から1683年鑄造）に属する錢貨は、背面の「文」字から文銭（ぶんせん）とも呼ばれているもので、319の1点であった。さらに3期（新寛永、1697年から1747年鑄造）に属する錢貨は、300・302・306・309・310・312・314・315・320の9点であった。ほかに317は識別不能で分類できなかった錢貨であった。



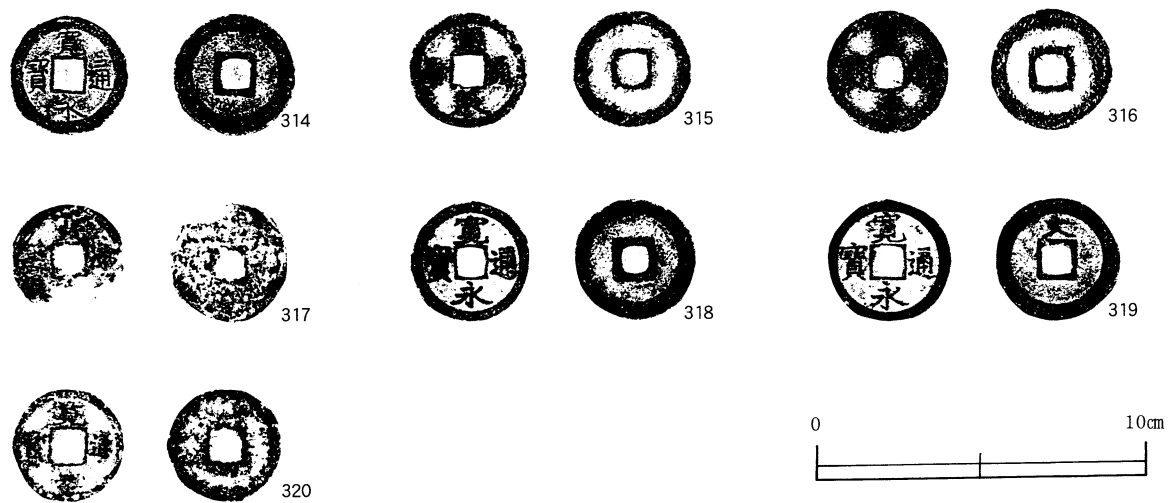
第71図 I地区出土遺物(45) 金属製品・銅製品

第19表 I地区出土遺物一覧表・金属製品

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土地点	注記番号	材質	法量			備考
							長(cm)	幅(cm)	重量(g)	
69	278	柱金具			一括	鉄	8.40	8.30	141.97	
	279	冑		表探	一括	鉄	(22.50)	(6.50)	(133.24)	
	280	鍬	4T	廢棄土坑	一括	鉄	(45.50)	10.80	(1450.00)	
70	281	角釘		V	一括	鉄	6.90	0.75	3.70	
	282	釘	B	Vb	1771	鉄	(6.75)	0.40	(3.10)	
	283	角釘		V	一括	鉄	7.90	0.55	4.70	
	284	角釘		V	一括	鉄	(5.20)	0.35	(2.20)	
	285	角釘		V	一括	鉄	(8.00)	0.90	(9.00)	
	286	角釘	B	Vb	1760	鉄	9.80	0.90	9.30	
	287	釘	B	Va	1820	鉄	(9.90)	0.65	(8.07)	
	288	角釘	B	Vb	1743	鉄	(11.50)	1.10	(14.50)	
	289	釘	B	Vb	1764	鉄	(12.30)	1.10	(15.05)	
71	290	筆筒	B	Vb	1728	銅	(15.00)	1.00	(22.70)	
	291	棒状製品	B	Vb	1728	竹	(12.30)	0.55	(0.94)	墨付着有り
	292	金具	B	Vb	1815	銅	2.70	0.90	1.30	横2.1cm
	293	釣り針	B	Vb	1864	銅	3.10	1.70	1.07	
	294	鈴	B		一括	銅	4.90	3.20	17.59	金メッキ有り
	295	銅板細工片	B	Va	1645	銅	(7.60)	1.40	(4.10)	
	296	銅板破片	B	Vb	1689	銅	(9.50)	(5.00)	(7.80)	
	297	ミニチュア金属部		表探	一括	鉄	4.50	3.10	9.10	
	298	金具		表	一括	銅	3.40	1.60	8.00	金箔メッキ有り
	299	金具		表探	一括	銅	2.90	5.55	8.10	



第72図 I地区出土遺物(46) 井戸内出土銭貨



第73図 I地区出土遺物(47) 銭貨

第20表 I地区古銭一覧表

挿図番号	レイアウト番号	出土地点	注記番号	重さ(g)	備考	挿図番号	レイアウト番号	出土地点	注記番号	重さ(g)	備考
72	300	A地点	井戸1	2.45	新寛永	72	312	A地点	井戸15	(1.34)	新寛永
	301	A地点	井戸2	2.85	古寛永		313	A地点	井戸16	(0.66)	古寛永
	302	A地点	井戸3	(1.31)	新寛永			A地点	井戸17	(1.50)	
	303	A地点	井戸4	2.75	古寛永			A地点	井戸18	(0.67)	
	304	A地点	井戸5	(1.51)	古寛永			A地点	井戸19	(0.26)	
	305	A地点	井戸6	(1.85)	古寛永			II	1224	(1.01)	
	306	A地点	井戸7	(2.16)	新寛永	73	314	Vb	1710	2.48	新寛永
	307	A地点	井戸8	3.11	古寛永		315	Va	1321	2.60	新寛永
	308	A地点	井戸9	2.75	古寛永		316	IV	1423	2.87	古寛永
	309	A地点	井戸10	2.31	新寛永		317	Vb	1714	(1.57)	
	310	A地点	井戸11	2.38	新寛永		318	Vb	1786	3.31	古寛永
	311	A地点	井戸12	(2.05)	古寛永		319	II	1857	2.00	新寛永(文銭)
		A地点	井戸13	(1.91)			320	IV	2043	1.76	新寛永
		A地点	井戸14	(1.22)							

6) 石製品

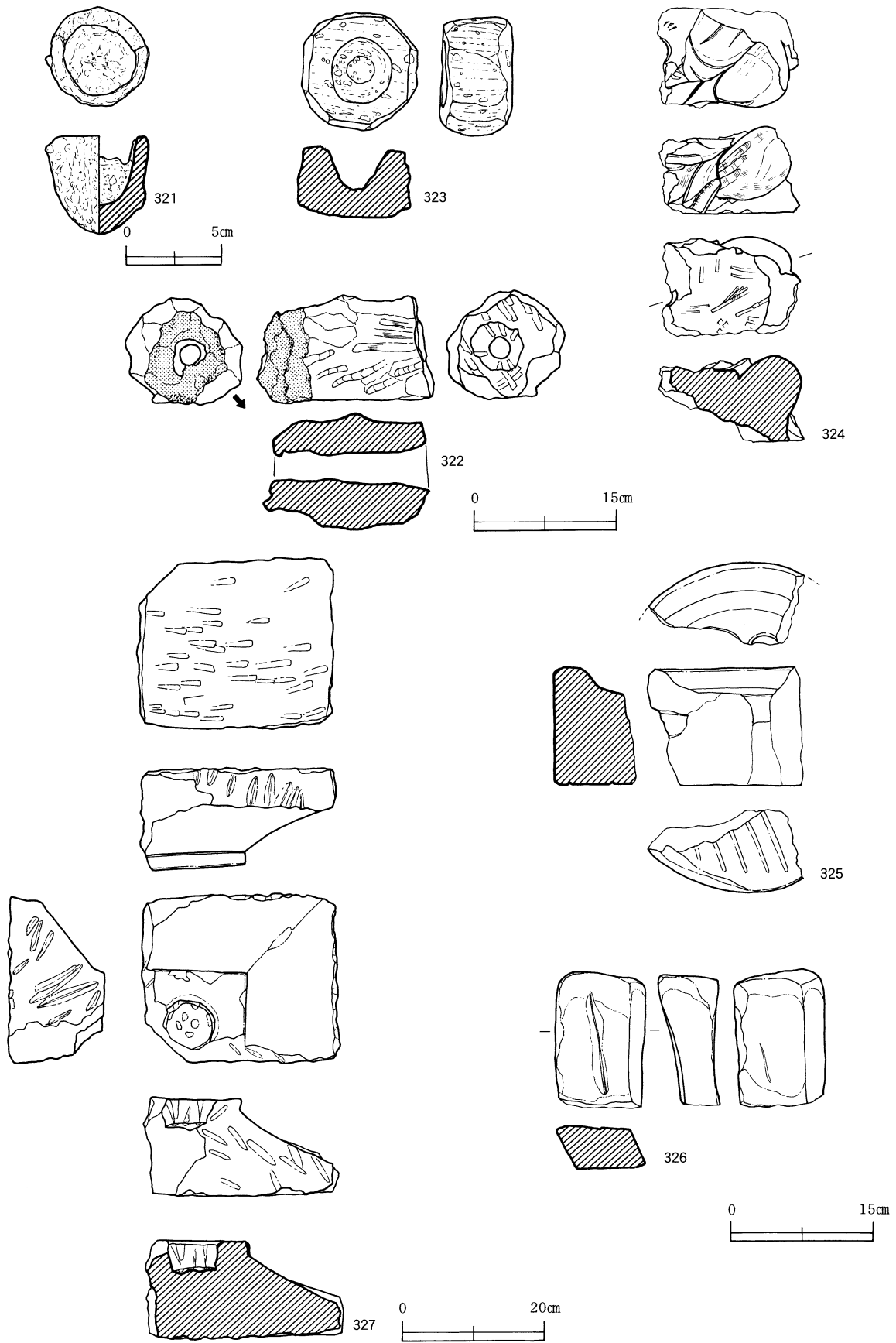
321は埴埦である。中に緑青と思われる付着物が観察できることから、銅の鑄造に用いられたと考えられる。

322は熔結凝灰岩製の鑢羽口である。幅7mmの平鑢を用いて粗く加工してある。長さ18cm・直径11cm、孔径5cmを測る。炉面にくる部分は金属滓が熔着している。垂れ下がった位置から判断すると矢印の方が上にあつたと考えられる。石製の鑢羽口は鹿児島県内では類例が少なく、徳之島町カンジャエー遺跡例と天城町資料館蔵があるぐらいである。この付近でどのような鍛冶または鑄造が行われていたか興味深い。323は軽石を素材とするもので、幅12.5cm・高さ7.5cmを測る。内側を直径6.6cm・深さ4.5cmで抉つてある。平面形は6面あるいは7面を意識して面とりを行なう。近世の遺物と考えられるが、用途は不明である。324は座像石仏の左足の部分と考えられる。良質の熔結凝灰岩を素材とし、入念な彫刻を施している。袈裟の襷部分は細かな鑢を使用し、表面は丁寧に磨いてある。内面は幅5mm程の平鑢を用い、やや粗めに刻む。左手にあたる部分には何かを持っていたのか孔穿してある。325は安山岩質の石材を用いた石臼の上臼である。高さは12.4cmを測る。上面は受け皿状になり、一部穀物の落ちる孔がみられる。側面には鍵状になった木製の柄を差し込むための方形の穴が穿たれる。下面には2cmおきに筋状の溝が刻まれている。326は砂岩質の砥石である。4面を使用しており、元々はもう少し長かったのが半分に分れ、その後も上面及び下面を主に使つたと考えられる。というのは、両側面は割れた部分へ砥ぎ面が続くのに対し、上面及び下面は割れた部分の近くから再度砥ぎ面がはじまっているからである。さらに興味深いのは、上面及び下面の中央部に一筋の細い砥ぎ痕がみられる点である。最初は刃部の広い物を砥いでいたのが、砥石の最終場面では、刃が極端に狭い物を砥いだようである。この様な細い砥ぎ痕は古代末～中世初頭の砥石にもみられ、中央部分に一筋の砥ぎ痕ができることと、砥石が充分使われた後にこの様な砥ぎ方をする点が共通する。いったい何を砥いだのかは解らな

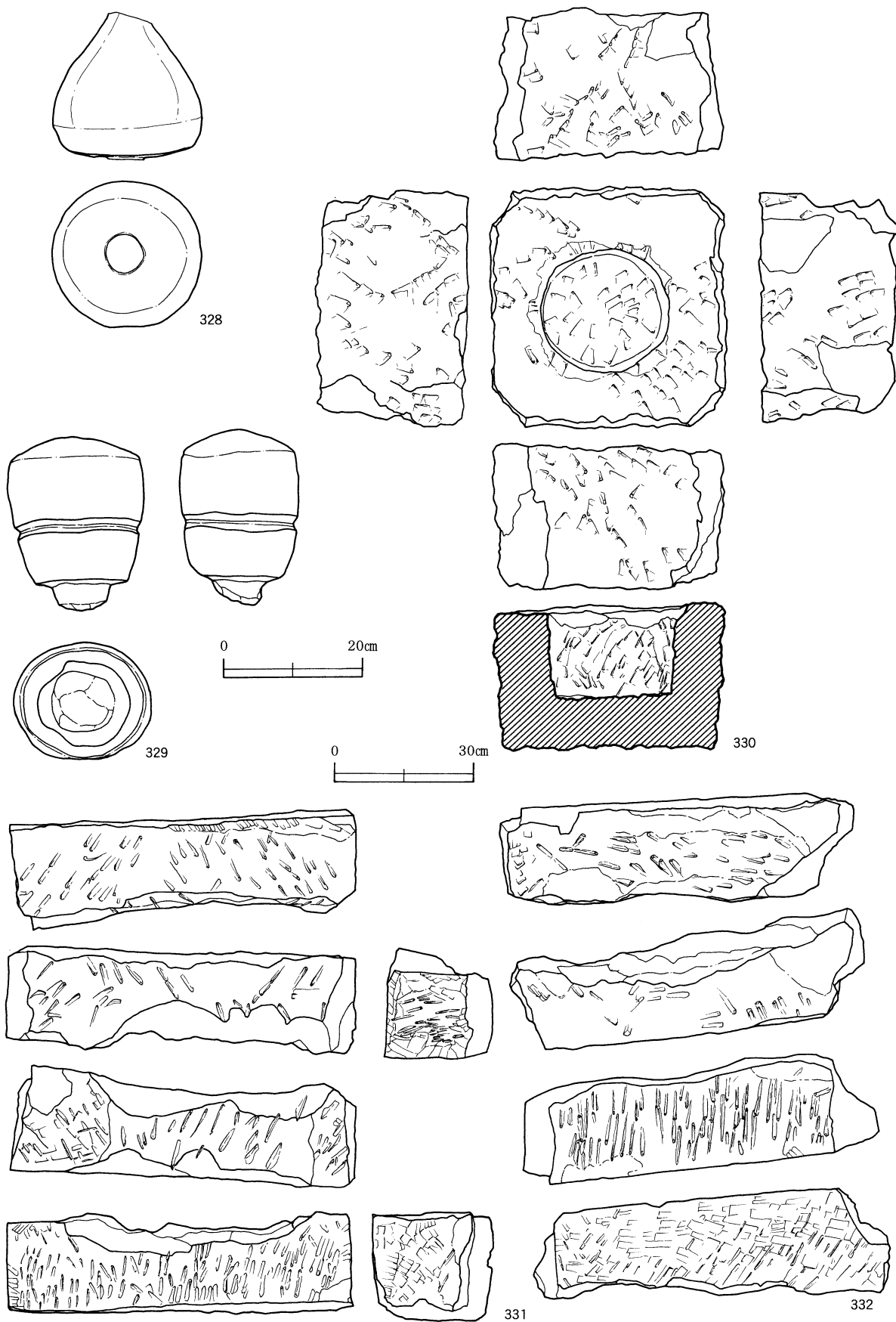
いが、時期を越えて同じ道具を砥いだのではないかと考えられる。327は石塔の笠部分である。推定復元による一辺は44.4cm、高さは13.5cmである。屋根の反りはわずかであり、その厚みも少ない。上面には直径7.2cm・深さ4cmの柄穴が穿たれている。この笠部は転用されており、23.5cm×27.5cmの切り石として再加工されている。胴木の間に充填されていた。328は宝珠と考えられる。最大径は下面近くにあり、21.8cmを測る。先端は欠けているが、ほぼ鋭い頂部に延びると推定される。下面には直径5.6cmの柄がつくられている。329は五輪塔の空輪と風輪が合体したものである。風輪はほぼ円形であるが、上部の空輪は楕円形を呈している。最大径は上面近くにあり、低い頂部をもつ。空輪と風輪の境は一条の溝を刻んでいて、その比は13:8である。下面には直径8.4cmの柄がつくられている。330は一辺約50cm・高さ31cmの切石で、四隅を切りおとしてある。中央に直径27cm、深さ19cmの穴を穿った切石配石遺構を構成する切石である。先端が尖った鑿を使った粗仕上げである。331・332は23cm×25cm×75cm前後の細長い石材である。裏側になる部分は鑿を用いた粗い削りであるが、表面に出る部分は、丁寧な細工あるいは平鑿によって仕上げを行う。方形石組み遺構の胴木を支える根石としてわれたものである。333～335は31cm×36cm×59cm前後の石積みの石材である。鑿による削りを石材に対して左右斜方向から行うが、奥に隠れるにしたがって粗くなる。正面とその奥8cm程度の4面は丁寧に面とりがなされ、それより先はやや厚みを減じて契状になっている。334には矢割りを行った際の矢穴が認められる。333・334は石列遺構の石材であり、335の方形石組み遺構の石材よりも丁寧な加工を行っている。330～335はすべて同一の石材が使われており、同じ時期に同じ場所から切り出されたのではないかと考えられる。

第21表 I地区出土遺物一覧表・石製品

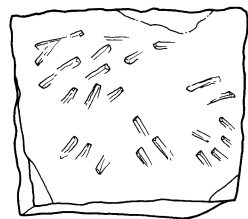
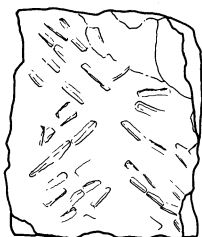
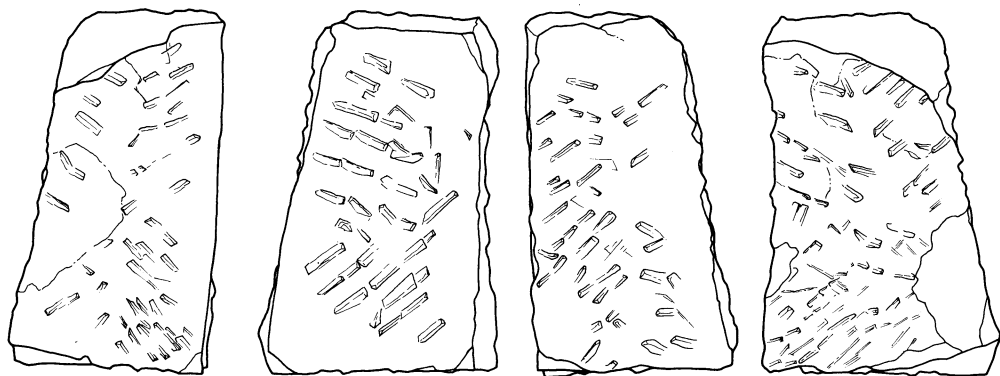
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
74	321	るつぼ	A	0~II	一括	5.8	6.0	0.7	111
	322	鞆の羽口	B	Va		11.0	18.5	12.3	1980
	323	軽石製品	B	0~II		7.4	12.4	7.4	410
	324	座像石仏	B			10.4	14.2	8.9	750
	325	石臼(輪)	B			12.4	16.0	8.9	1855
	326	砥石	B			14.4	9.5	6.3	1130
	327	石塔(傘)	B			27.1	23.8	14.2	9000
75	328	宝珠	B			20.9	21.3	20.9	8010
	329	五輪塔	B			24.9	19.4	19.4	8015
	330	橋脚礎石	B			50.6	51.8	32.3	95000
	331	方形石組遺構根石	B			74.5	25.8	23.3	43000
	332	方形石組遺構根石	B			75.8	23.5	24.7	31500
76	333	石列遺構切石	B			59.1	38.4	33.9	91000
	334	石列遺構切石	B			61.6	37.5	31.8	99300
	335	方形石組遺構切石	B			58.9	38.0	31.7	92000



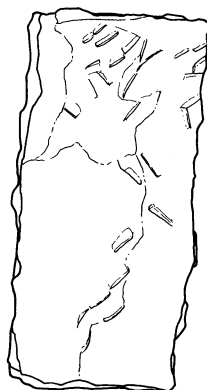
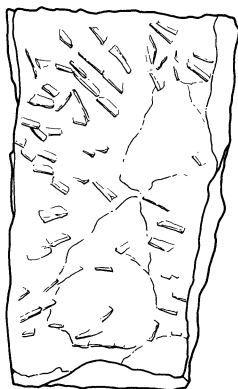
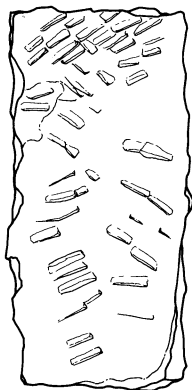
第74图 I地区出土遺物(48) 石製品 1



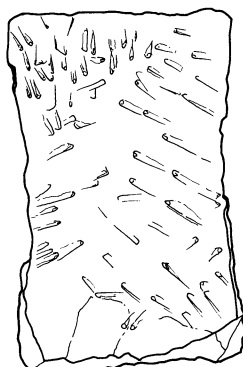
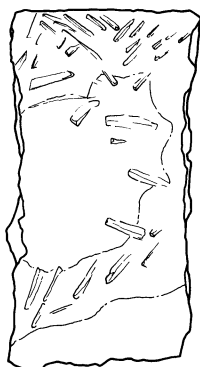
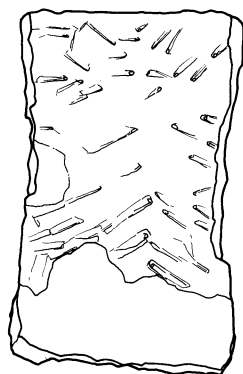
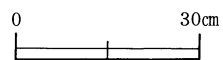
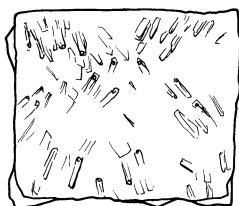
第75図 I地区出土遺物(49) 石製品 2



333

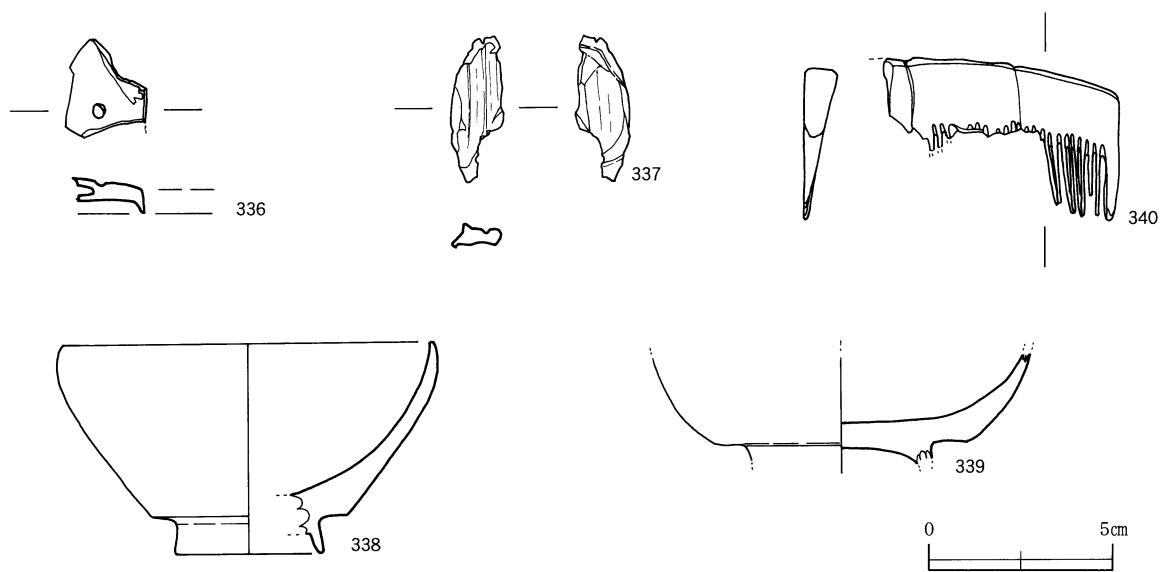


334



335

第76図 I地区出土遺物(50) 石製品3



第77図 I地区出土遺物(51) 漆製品

7) 漆製品 (第77図, 図版30・50)

336は表裏面とも赤く塗られた漆器である。用途としては蓋と思われる。337は内側に漆塗りをしたもので、どのようなものか不明である。338, 339は高台付の椀である。338は両面とも赤色で塗られている。器形は、高台が低く若干外に開いている。腰が張り、体部は直線的に開き、口縁部は内彎している。樹種はエゴノキ属である。339は高台部・口縁部が欠損しているので詳細は不明であるが、体部は338と同じように直線的に開いている。中井さやか氏の編年によれば、これらは19世紀前半に位置づけられるものであろうか。340は木製の細身の横櫛で、櫛歯が2cmを計る。断面は二等辺三角形を呈し、若干丸味をもった形である。色調は黒色を呈す。樹種はイスノキである。

8) 木製品 (第78～88図・図版27～30, 45～48)

341から347は、丸材の先を削り尖らせた杭状の木製品である。

341は、先端部の加工は片方から大きく斜めに切り、周りを補助的に削った杭である。上部は節の部分を利用し、打ち込みの破損を防いだと考えられる。樹種はスギである。342は先端部を三方から削り尖らせている。不揃いであったため再び片方から切り、加工している。切り落とし

第22表 I地区出土遺物一覧表・漆製品

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			備考
						長(cm)	幅(cm)	重量(g)	
77	336	蓋		Vb	1953	0.9			残存高
	337	漆器		III	1453	3.95	1.5		
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			備考
						復元口径	器高	復元高台径	
77	338	椀		Vb	1889	10	5.7	4	
	339	椀		Vb	1955	9.9	(3.2)	4.5	
挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			備考
						長(cm)	幅(cm)	重量(g)	
77	340	櫛			1513	6.45	4.4		歯長2.2cm

た材木と思われる。343は先端部を2方向から削り加工したものである。枝材を利用したためか、全体的に曲がっており、用途は不明である。344は先端部を5面切りで加工した杭である。杭先から35cmの部分は残存状態が良いため、土に差し込まれていた部分と思われる。345は枝材を利用したためか、曲がっている。加工は片方から大きく削ったのちに、周りを補助的に削り調整を施している。頭部は横方向に切られている。346は曲がっているため、枝材を利用した細目の杭と思われる。杭先は荒く片方から削られている。上部には表皮が残っている。

348から356は丸材を棒状に加工した木製品である。

348は均等に丸く真っ直ぐ整形されたもので、柄の一部と思われる。349は四面取りした上で各角を削り落とした、真っ直ぐな棒状加工品である。350は、丸材を四面取りに削った角材で中央部は表皮が残っている。上半分は四角形を呈するが、下半分は扁平状に加工している。351は「く」字状に曲がった丸材を使用している。両端には丸味をつけ、表面は表皮が残り、刃物の跡が残っている。352は、丸材を斜めに切っている。片方は折れてその面はすり減っている。353は三面取りで削った加工品である。354は細く加工し、端を尖らせている。片方は折れている。355は細く板状に加工したものである。両端は折れている。356は細く棒状に加工している。面が波を打ったように加工されているのが特徴である。349から356の木製品の用途は不明である。

357から368は板状に加工した、部材である可能性が高い木製品である。

357は丁寧に加工された長方形を呈する木札状の木製品である。358は長方形の板状に加工された木製品で、両端は破損している。屋根板と考えられる。359は角板状加工された木製品で、半分から斜めに切っている。360は角材が剥がれたものと考えられる。面取りは良好に行われている。361は薄手に加工したもので、両端は破損している。362は先端部が尖り、基部はまっすぐに切られており、舟形をした薄手のものである。359から362の木製品の用途は不明である。

363は他と比べ幅が狭く、長さが長い木製品である、片面にはのこぎり痕がみられ、片端は焼けた痕跡があり、黒色を呈している。364は両端が破損した状態である。365は片方が破損しているが、短冊状に加工された薄い板である。366は薄く加工されたものである。一部分であるため、全体像は不明である。367は片方は破損している。368は両方が破損している。

363・364・367は壁板と考えられるものの、365・366・368の用途は不明である。

369から374は板状に整形した加工品である。

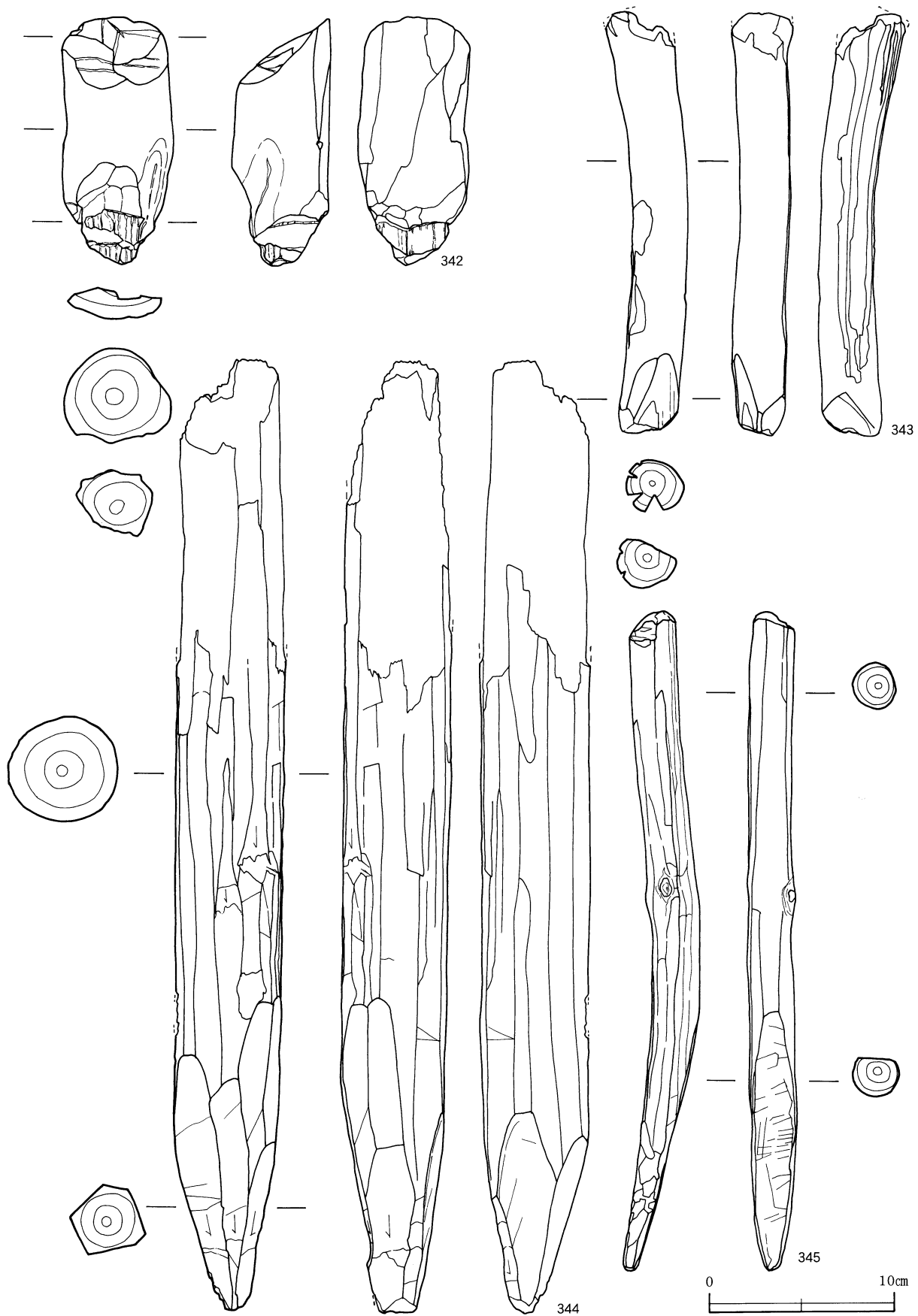
369は角状につくり、1条の突起を付けた加工材である。調度品の一部であろう。370は基部に矩形の抉りを入れた、カマ状に曲がった木製品である。調度品の一部と考えられる。371は両端と中央に切り込みを入れ、面取りを施した加工品である。両端にクギを打ちこんだ孔がみられる。また中央部には紐ずれの痕跡と思われる摩耗痕がみられる。372は板目板を加工したもので、木の丸味が残っている。2か所のホゾ穴がある。373は板をL字状に加工したもので、2か所のウケがみられる。調度品の一部と考えられる。374は柾目板をスパナ状に加工したものである。雨どいをささえる製品と考えられる。

375～382は、丸い板状製品で、形状から結物・曲物の蓋や底板と考えられる木製品である。

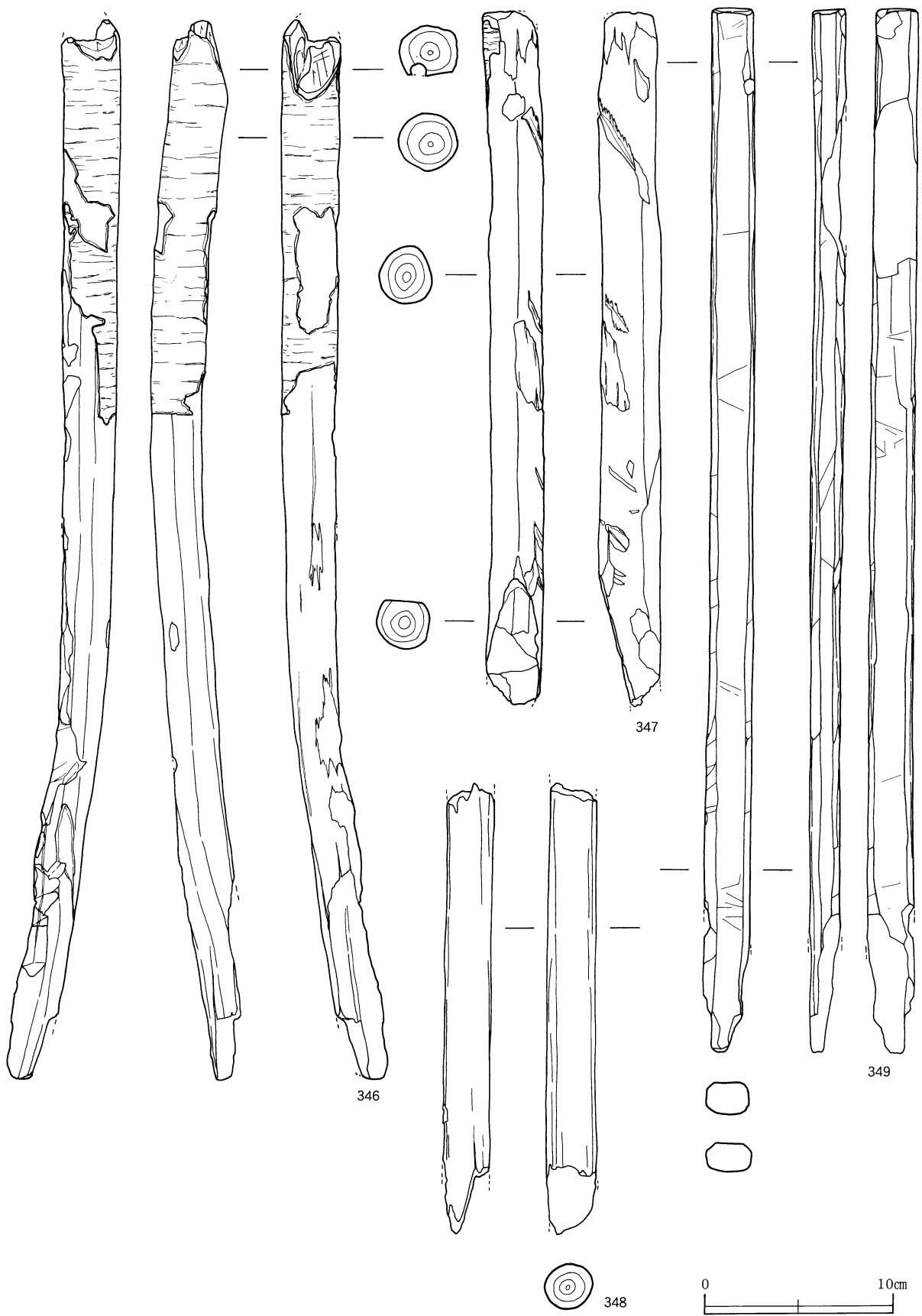
375は、取っ手のついた丸い木製品で、鍋蓋と考えられる。378には「兪」という商号らしき文字が焼印されている。379には中央に孔が開いている。取っ手用の孔か、あるいは木栓を詰め



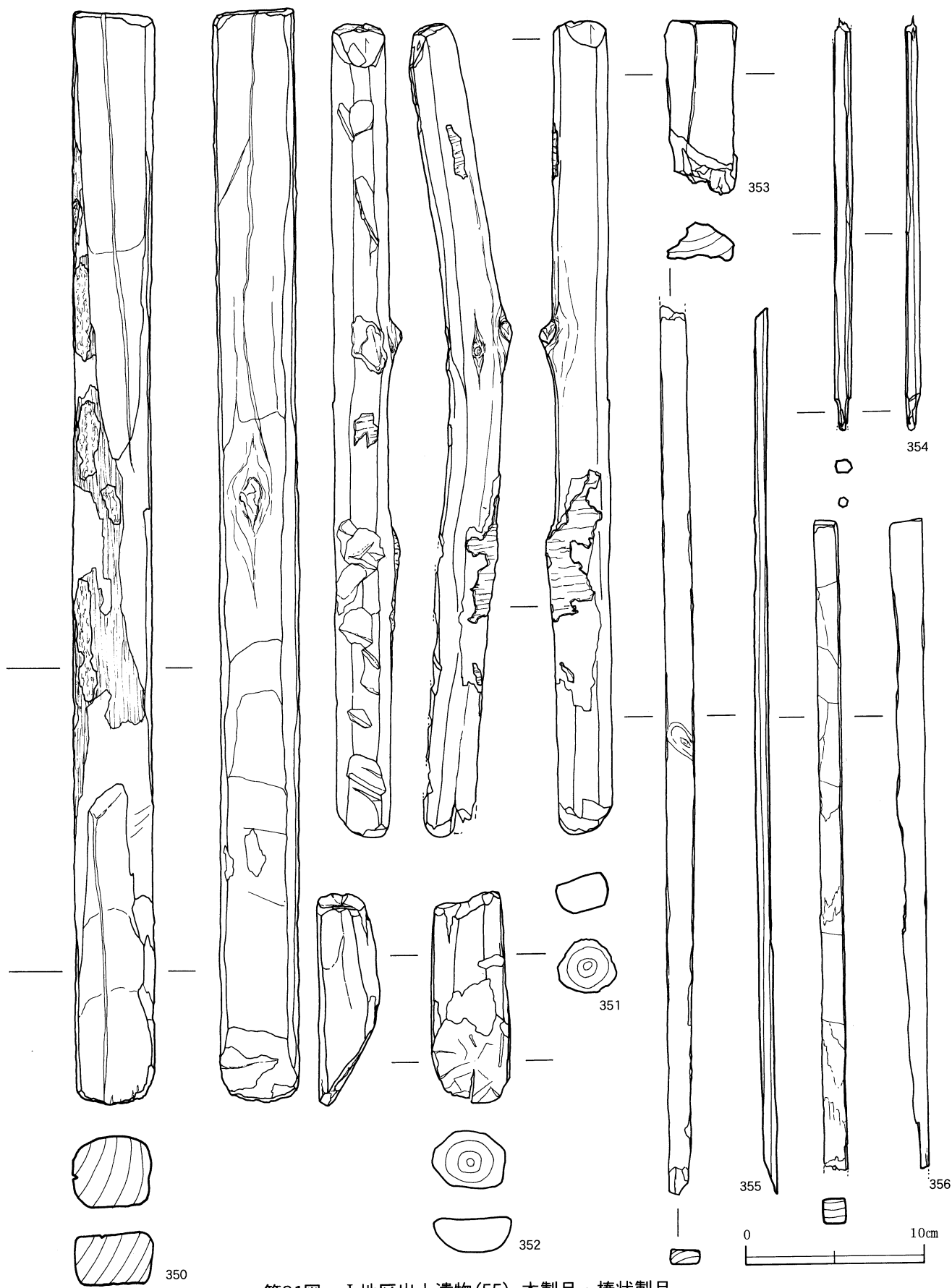
第78図 I地区出土遺物(52) 木製品・杭状製品1



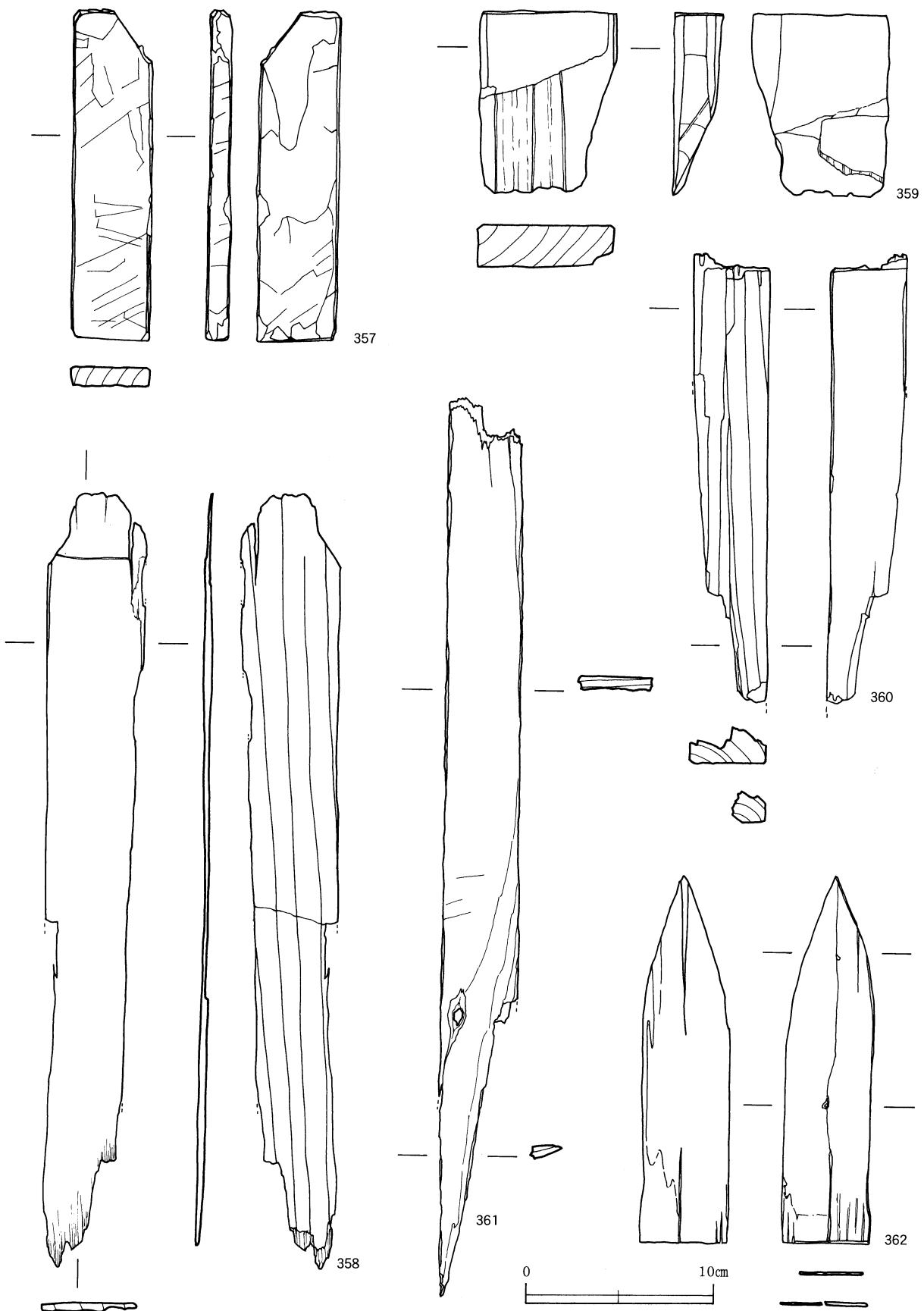
第79图 I地区出土遺物(53) 木製品・杭状製品 2



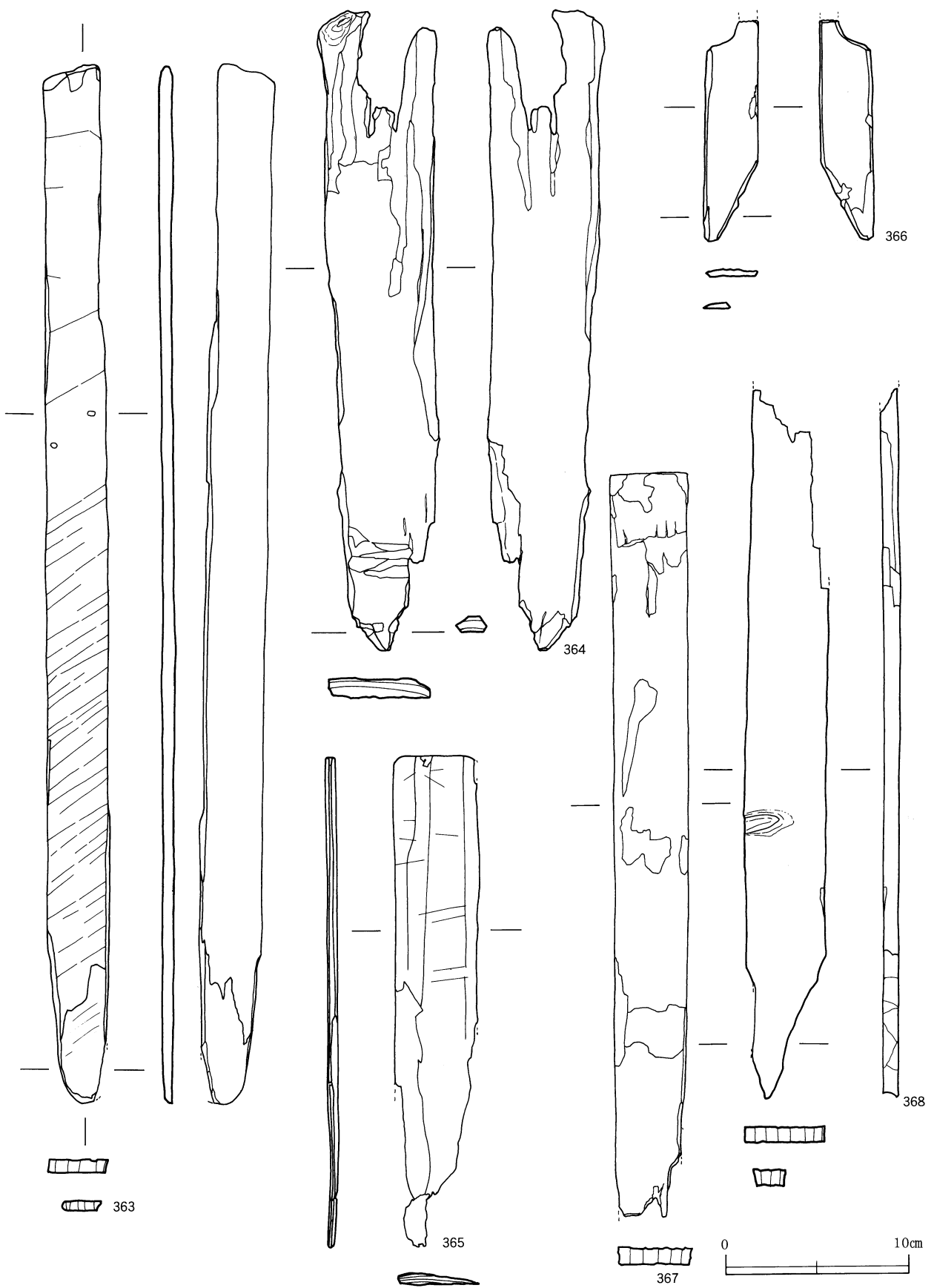
第80図 I地区出土遺物(54) 木製品・杭状製品 3



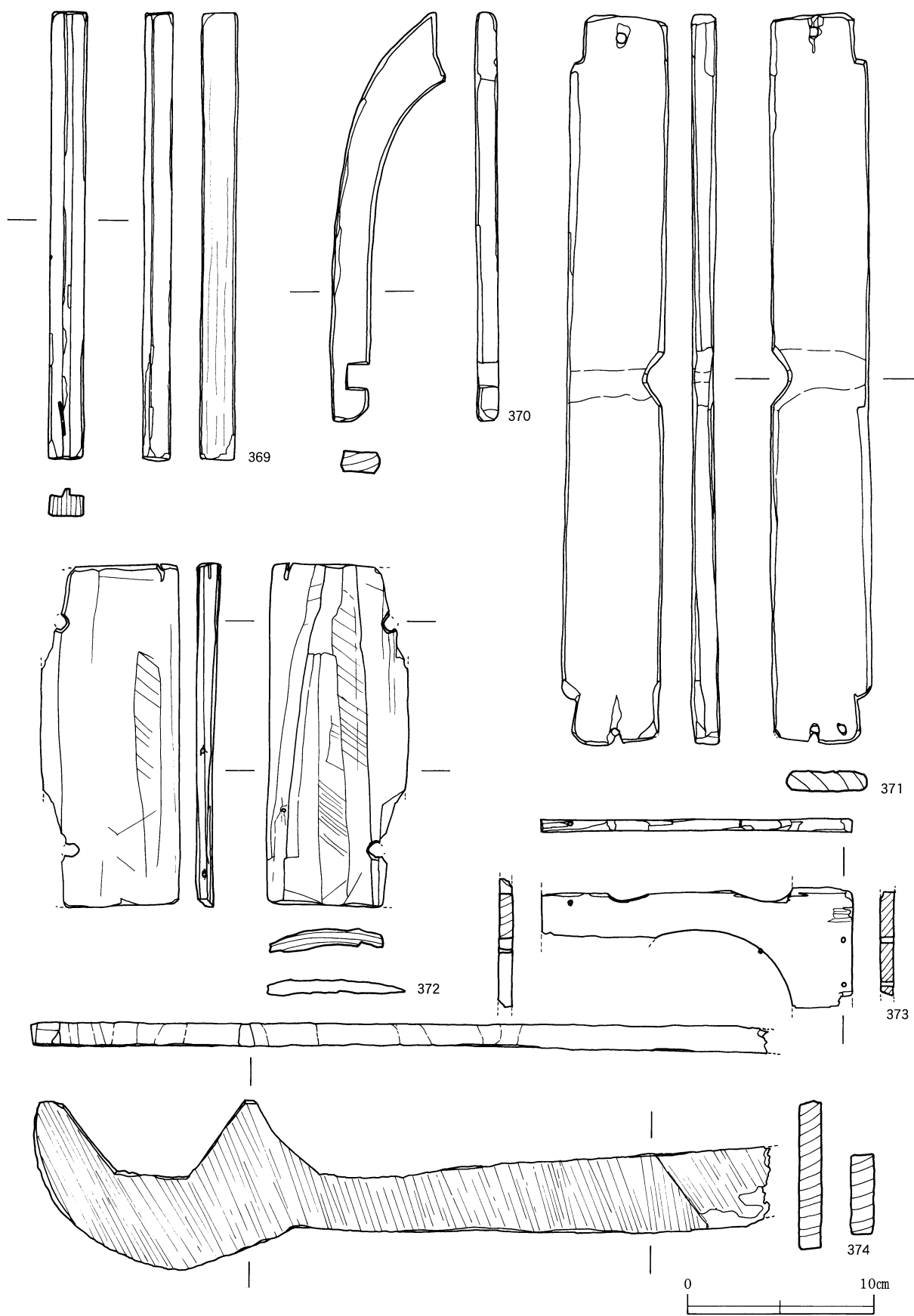
第81图 I地区出土遺物(55) 木製品・棒状製品



第82図 I地区出土遺物(56) 木製品・板状製品 1



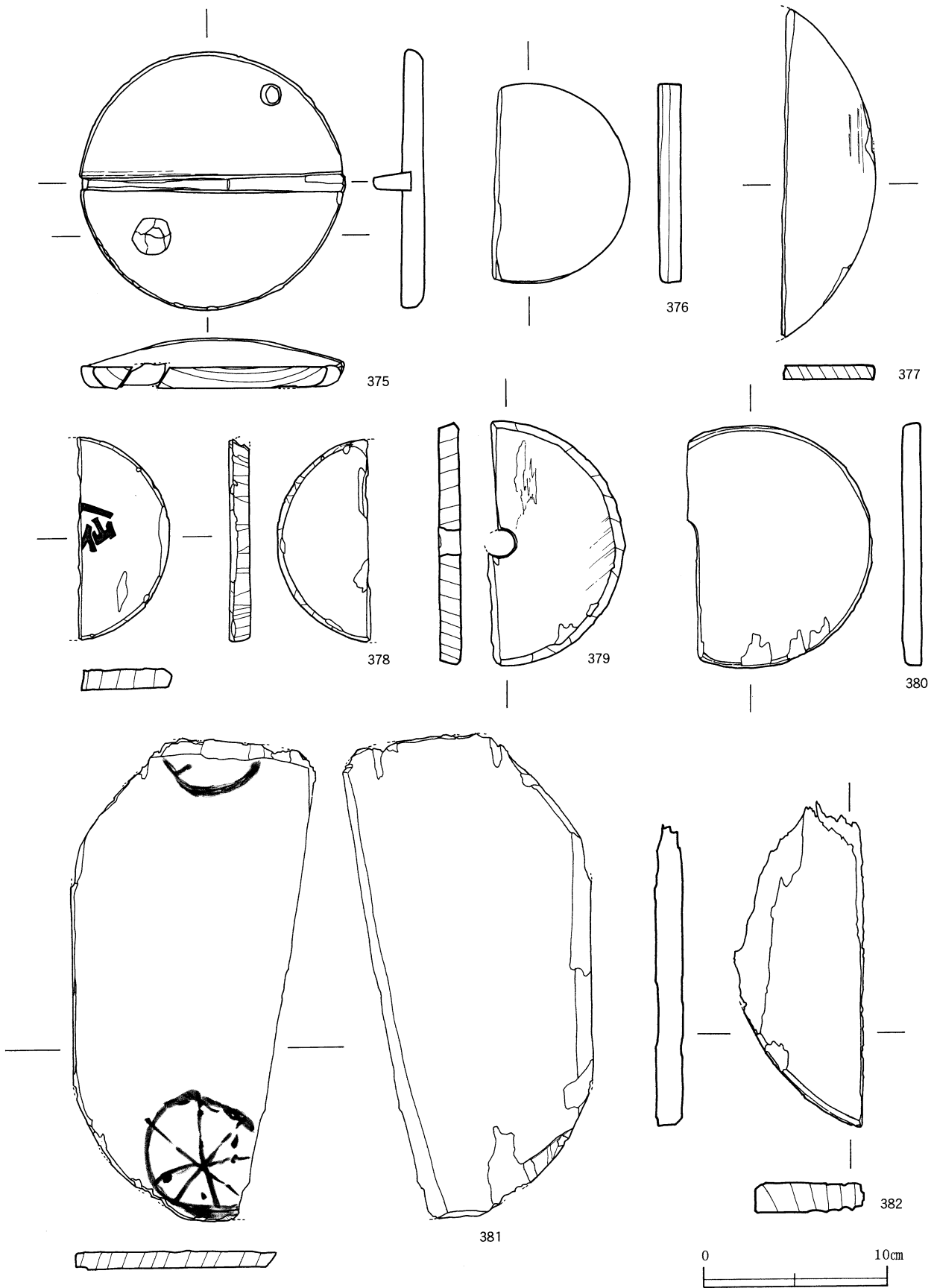
第83図 I地区出土遺物(57) 木製品・板状製品2



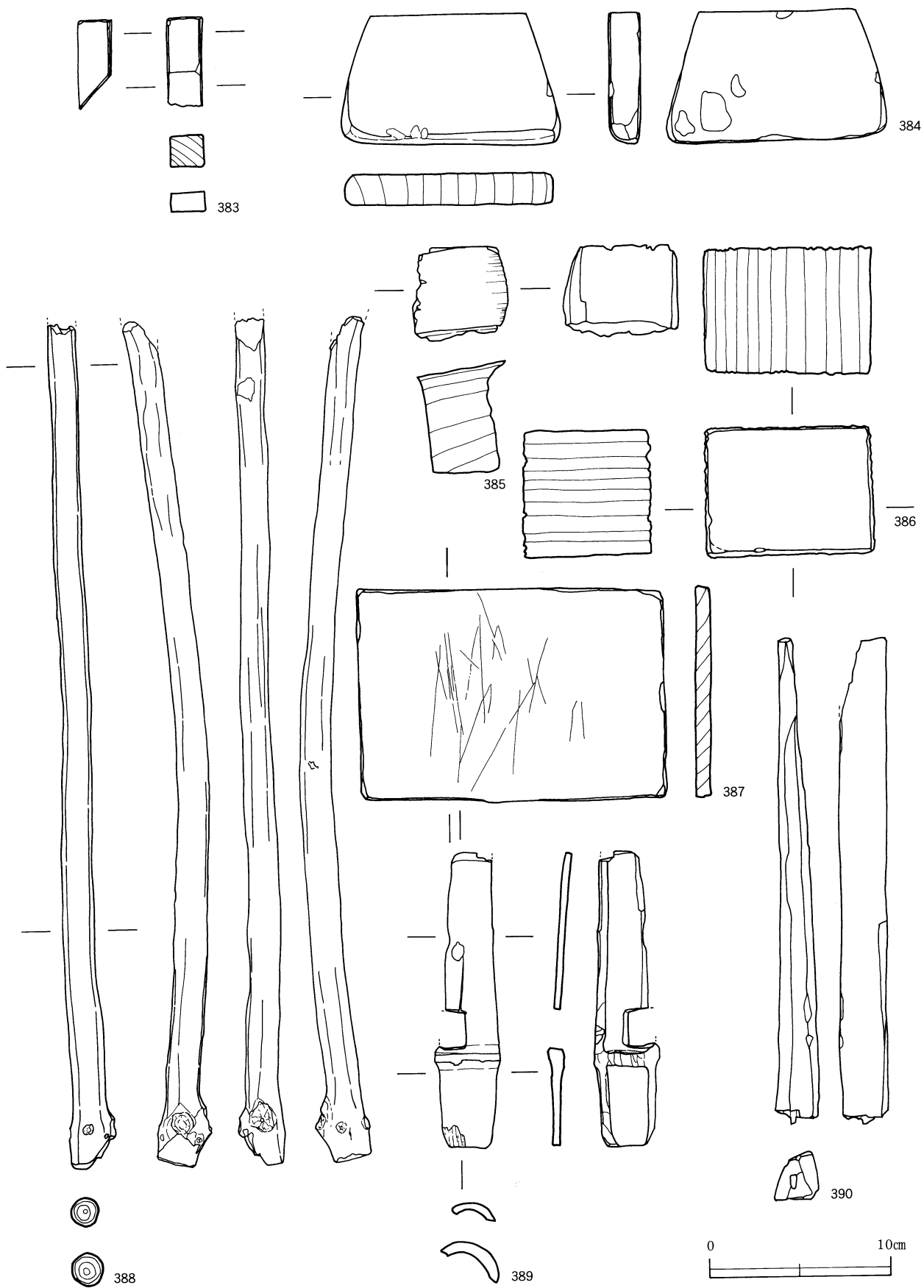
第84図 I地区出土遺物(58) 木製品・板状製品 3

第23表 I地区出土遺物一覧表・木製品

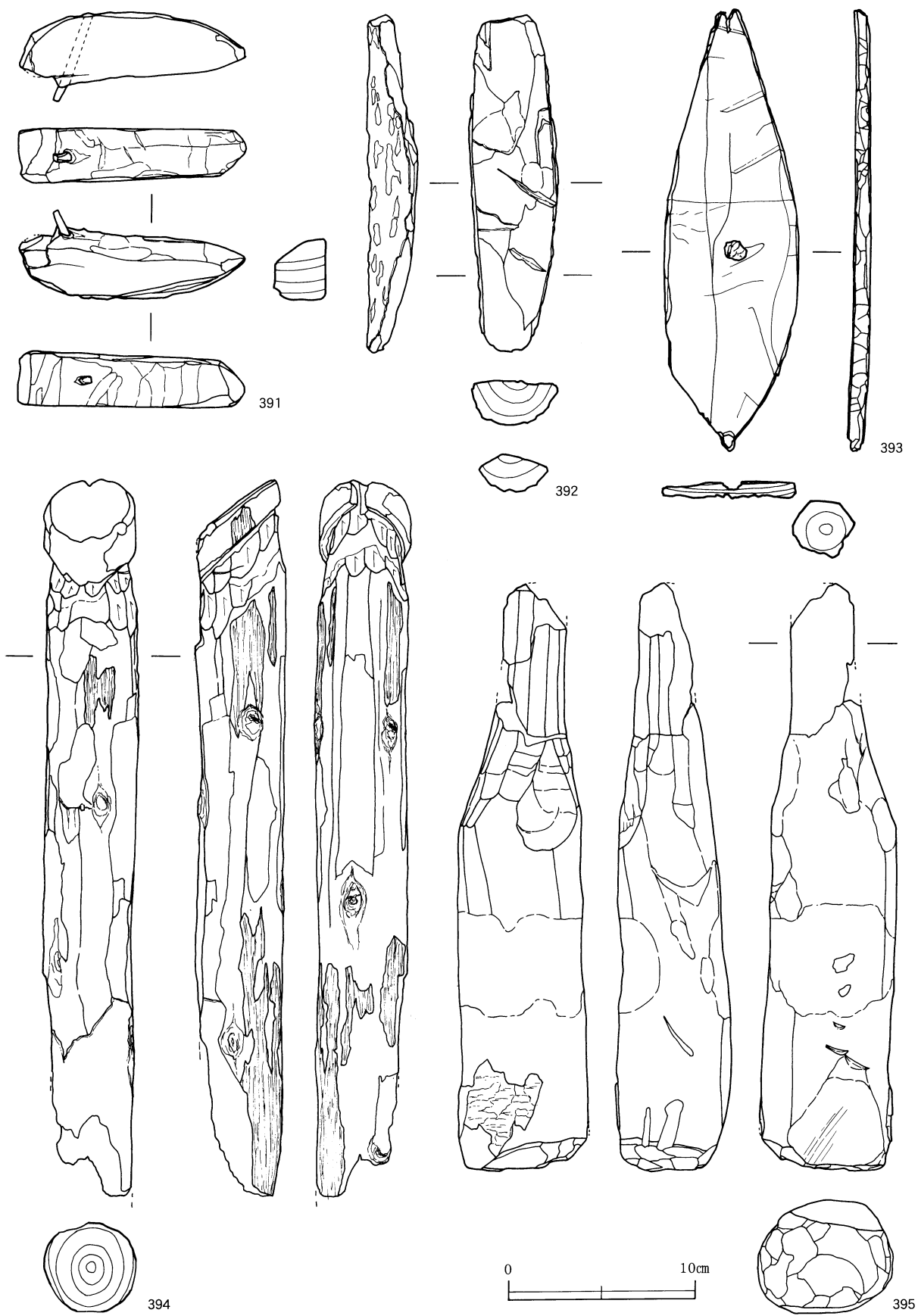
挿図No.	レイアウト番号	出土地点	注記番号	器種	法量			重さ(g)
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
78	341	一括		杭	69.9	7.5	7.1	
	342	一括		端材	13.4	6	5.1	
79	343	一括		棒状加工品	22.95	4.45	2.75	
	344	一括		杭	46.5	5.95	5.85	
	345	一括		棒状加工品	35.6	2.5	2.55	
80	346	一括		枝材?	56.45	3.15	3.05	
	347	一括		杭?	36.9	3.4	3.2	
	348	一括		枝材?	24	2.65	2.4	
	349	一括		棒状加工品	55.55	2.4	1.7	
81	350	一括		建築材	61.4	4.7	4.05	
	351	一括		杭?	45.9	3.05	3.3	
	352	一括		楔?杭?	11.9	4.45	3.3	
	353	一括		加工品	9.8	4	2.2	
	354	一括		調度品の一部	23.2	1.05	0.85	
	355	一括		建築材の一部	49.9	1.8	0.9	
82	356	一括		端材	36.55	1.55	1.8	
	357	一括		加工品	17.7	4.35	1.3	
	358	一括		板材	41.5	5.3	0.5	
	359	一括		下駄	9.75	7.4	2.6	
	360	一括		板状加工品	24.2	4.1	2	
	361	一括		端材	48.15	4.15	0.8	
83	362	一括		へら	19.7	4.7	2.5	
	363	一括		加工品	56.8	3.5	0.7	
	364	一括		板状加工品	35.1	6.2	1.1	
	365	一括		板状加工品	26.95	4.75	5.5	
	366	一括		板状加工品	12.05		4	
	367	一括		板材	41.8	4.1	1	
	368	一括		板材	38.8	4.5	0.9	
84	369	一括		建具の一部	24.1	1.9	1.5	
	370	Va	1751	木製具の一部	21.95	2.15	1.2	
	371	一括		板状加工品	39.3	5.35	1.15	
	372	一括		板状加工品	6.15	18.5	1.2	
	373	一括		調度品の一部	6.4	16.7	0.7	
	374		2017	雨どいささえ	39.3	9.2	1.4	
85	375	一括		蓋	24.2	24.5	2.8	
	376	一括		蓋あるいは底板	7.45	10.95	1.25	
	377	一括		蓋あるいは底板	17.9	5.15	8.5	
	378	Vb	1788	蓋あるいは底板	11.1	5	1.2	
	379	一括		蓋	13.35	6.8	1.25	
	380	Vb	1803	蓋あるいは底板	13.2	10	1.1	
86	381		2018	底板	26.2	13.4	1	
	382	Va	2025	蓋あるいは底板	17.8	7.3	1.6	
	383	一括		建具類の端材	4.5	1.95	1.85	
	384	一括		下駄の差し歯	7.2	12.05	1.8	
	385	一括		端材	5.2	5.2	6.3	
	386	一括		角材	9.3	7.2	7.1	
87	387	一括		加工品	15	11.8	0.9	
	388	一括		自在鍵の一部	46.7	2.7	3.75	
	389	一括		自在鍵の一部	16.7	3.6	0.9	
	390	一括		棒状加工品	26.9	3.25	2.55	
	391	一括		加工品(一部)	12.1	4.8	2.9	
	392	一括		棒状加工品	18.1	4.8	2.65	
88	393	一括		加工品	7.2	23.65	1.1	
	394	一括		棒状加工品	38.5	4.9	4.75	
	395	Vb	1661	横槌	32	6.7	6.15	
	396	一括		はま	4.3	4.7	2.1	
	397	一括		はま	5	4.9	2.45	
	398	一括		はま	4.3	4.55	1.6	
	399	一括		はま	5.3	5.55	2.25	
	400	一括		はま	3.35	3.4	1.3	
	401	一括		はま	3.8	4.2	1.45	
	402	一括		はま	5.2	5.3	1.65	
	403	一括		はま	4	4.85	1.1	
	404	一括		はま	5.1	5.7	1.65	
89	405	一括		はま	4.7	5	1.6	
	406	一括		はま	4.3	4.95	1.8	
	407	一括		はま	6.45	7.05	1.9	
	408	一括		はま	8.1	5	1.3	
	409	Vb	1949	栓	4.15	2.6	2.3	
	410	一括		栓	5.25	3.05	3.1	
	411	一括		栓	4.5	4.2	3.4	
	412	一括		栓	5	3.25	2.9	
	413	一括		下駄(草履下駄)	12.1	7.8	3.4	
	414	Vb	2028	下駄(草履下駄)	18.5	7	1.7	
415	Vb	2027	下駄(草履下駄)	13.4	8.35	1.9		
416	Vb	1781	下駄(草履下駄)	21.25	7.25	2.4		



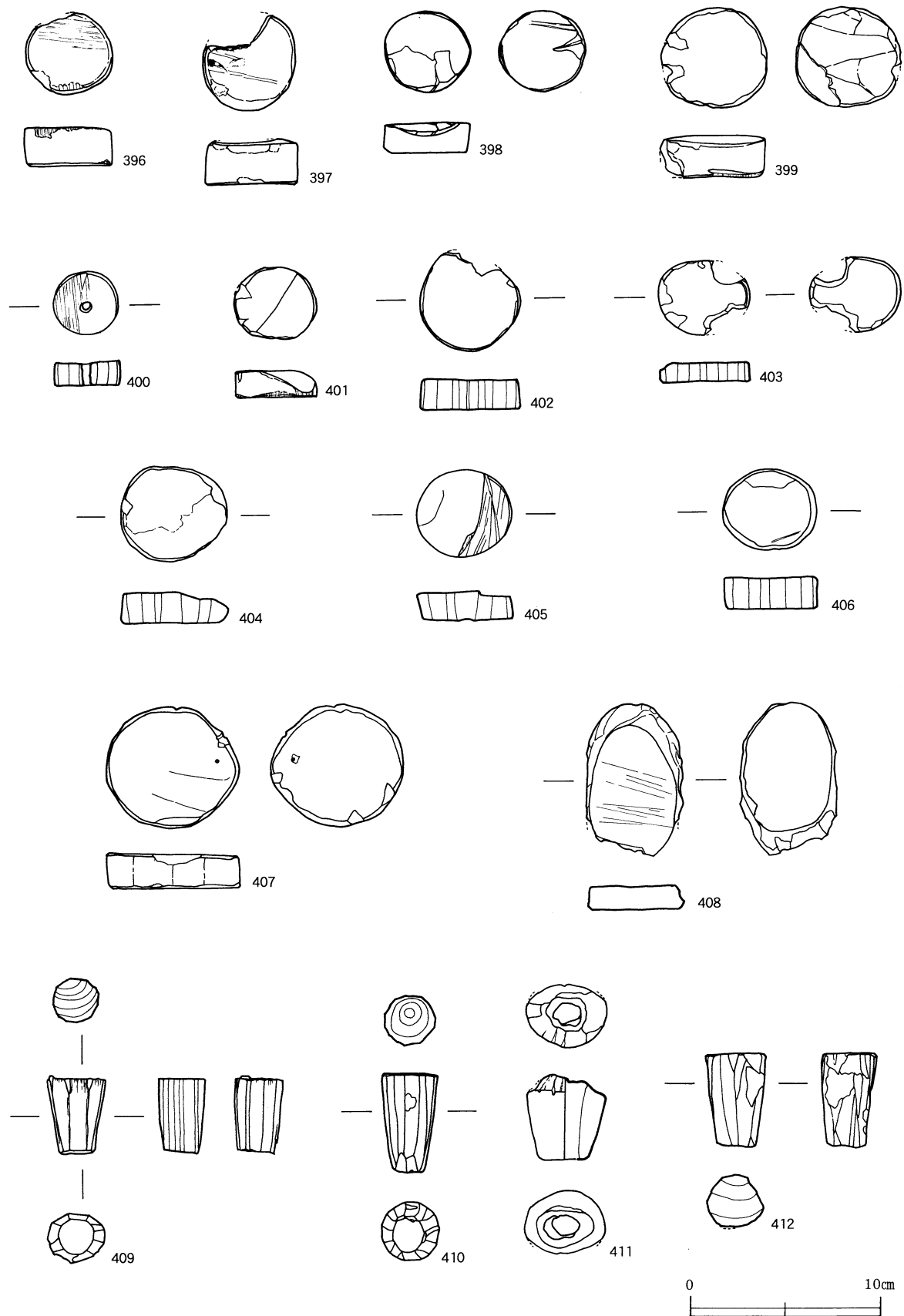
第85図 I地区出土遺物(59) 木製品・雑器1-底板・ふた



第86図 I地区出土遺物(60) 木製品・雑器 2



第87图 I地区出土遺物(61) 木製品・雜器 3



第88図 I地区出土遺物(62) 木製品・雑器4-破魔・栓

るための孔と考えられる。376・380はこれらとほぼ同じ形を呈している。381は杉材の加工品で、形から楕円形の底板と考えられる。一面に墨で模様らしきものが描かれている。382は加工品で、桶類の底板と考えられる。

383から387は、384を除き、端材である。

383は楔形をした角材で、ふすまなどの建具類の端材と考えられる。384は杉材の加工品で、げたの差し歯と考えられる。385・386は建築材の端材と、387は板材の端材と考えられる。表面に包丁などで切った痕跡が見える。

388はカヤの木を用いた棒状品である。389は四角い孔の開けられた竹製加工品である。388と組み合わせて、自在カギの一部をなすと考えられる。390は板材を加工したもので、調度品の一部と考えられる。

391は舟形状に加工されており、鉄製の繋ぎピンが打ち込まれている。ハマ遊びの打ち具の柄の部分とも考えられる。392は棒状に、393は舟状に加工したもので、中央に孔がみられる。用途不明である。394は先端部分を意図的に加工した、陽物形木製品と考えられる。生産儀礼との関わりが指摘されている木製品である。395は端部を細く削った棒状製品である。横槌と考えられる。

396～408は直径約5cm前後の棒を約1.5cmの幅で輪切りにしたもので、ハマ遊びのハマと考えられる。

409～412は木栓と考えられる。上が太く、下に行くにしたがって細く、縦断面が台形状になるように加工してある。409の樹種は、スギである。411は、栓の中心部に孔が開けられている。

413～416は、草履の芯、あるいは履き物製作用の台と考えられる。

414・416の中央部に切り込みが入れられており、413・415は中央部の切り込み部で折れている。414・416には、使用による摩耗がみられる。

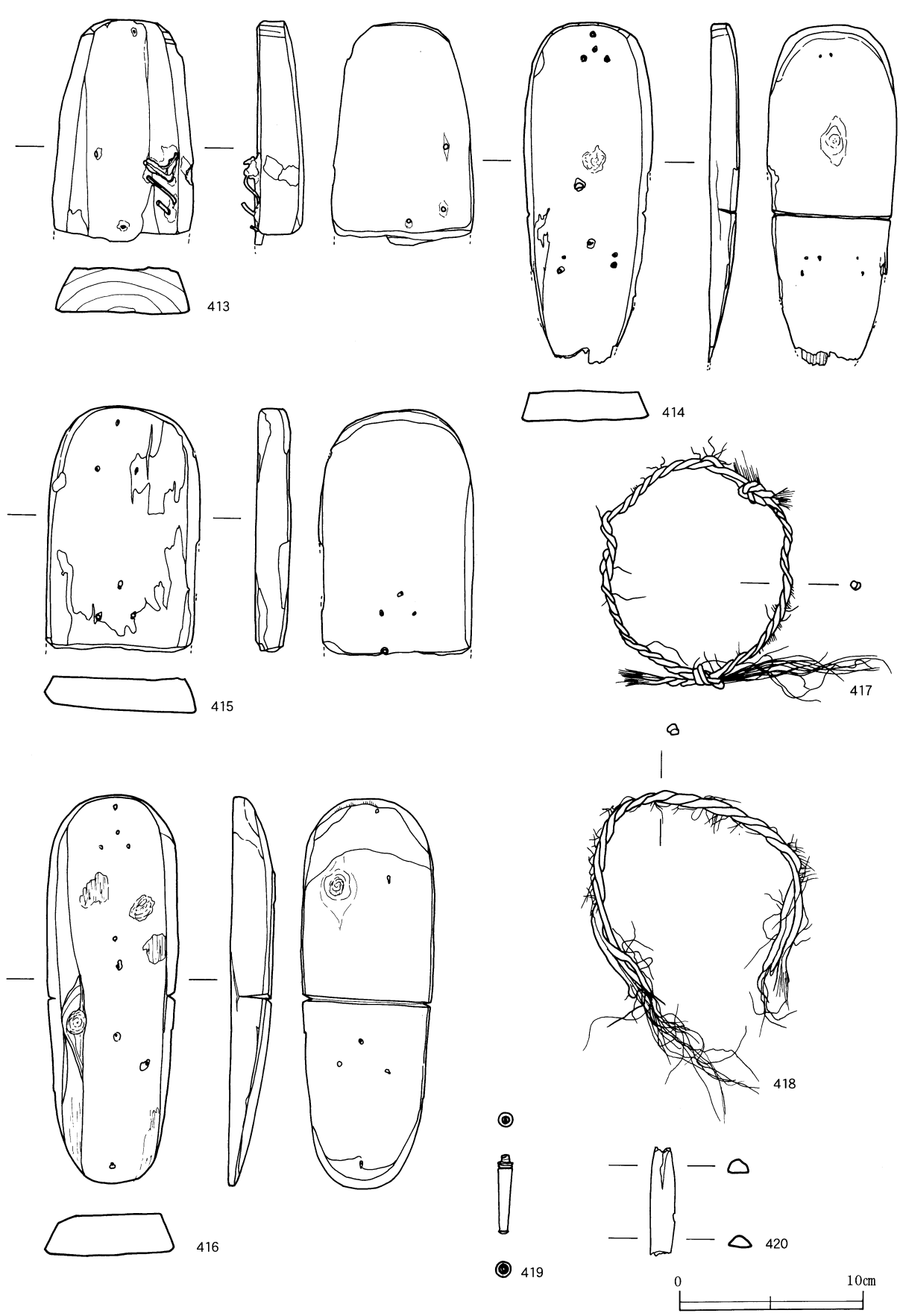
9) 植物繊維製品 (第89図, 図版50)

417・418は、シュロ製のひもと考えられる。417は、2か所に結び目がある。

10) 骨製品 (第89図, 図版41)

419は、キセルの吸口と考えられる。象牙製で、丁寧なつくりである。

420は、歯ブラシの柄の部分と考えられ、途中で折れている。象牙製である。



第89図 I地区出土遺物(63) 木製品・雑器5—下駄／植物纖維製品／骨角製品

第2節 II地区の調査

II地区の調査は、地区内の比高差が10m以上になるため、3地点に分断して行った。そこで各地点間の位置関係を把握するため、II地区全体に10mグリッド方眼をかぶせ、分断した3地点を東側から、H・I-2・3区、E・F-2・3区、A~C-2~5区と名付けた（第2図参照）。

さてII地区では、近世期の遺物が多量に出土する層と、古墳時代や古代の遺物が多量に出土する層とが、互層で観察できた（第3章参照）。これは、II地区には近世期の生活面が数多く存在することを示している。しかし生活面を全て調査することは出来なかったため、近世期の数多い生活面のうち最も古い面を検出することに努めた。その結果、各調査区で多様な遺構が明らかになった。

また、調査区によって遺構群の検出状況に違いが見られたことから、遺構については各調査区毎に報告する。一方、遺物については調査区間で種類や年代などに有意な差が認められなかったので一括して報告する。

1 検出遺構（第90~95図）

II地区では、多数のピットや土坑、スロープ状遺構、溝状遺構、土壌など多様な遺構を検出した。そこで、各調査区ごとに報告を行うことにする。

1) H・I-2・3区の調査（第90図上・第92図、図版14・15）

H・I-2・3区の西側では、標高が高い位置にシラス土を削り出して造成した面が検出され（以下、西側部分と称する）、東側では標高が低い位置に、多数のピットや土坑などが検出された（以下、東側部分と称する）。さらに、西側部分と東側部分との境にはシラス土の造成面が急に段落ちする部分があり、スロープ状遺構や溝状遺構が検出された。

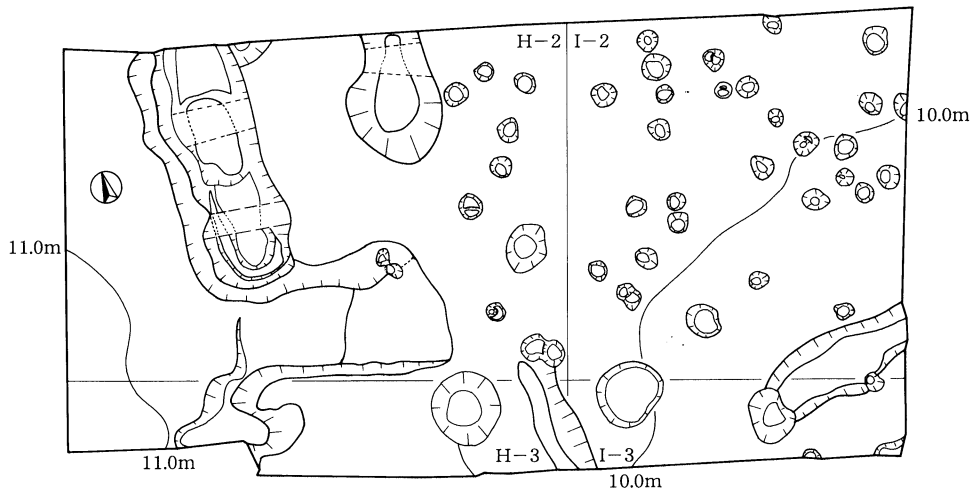
(1) スロープ状遺構

H-3区において西側部分と東側部分との境では、シラス土の造成面が急に段落ちしていた。

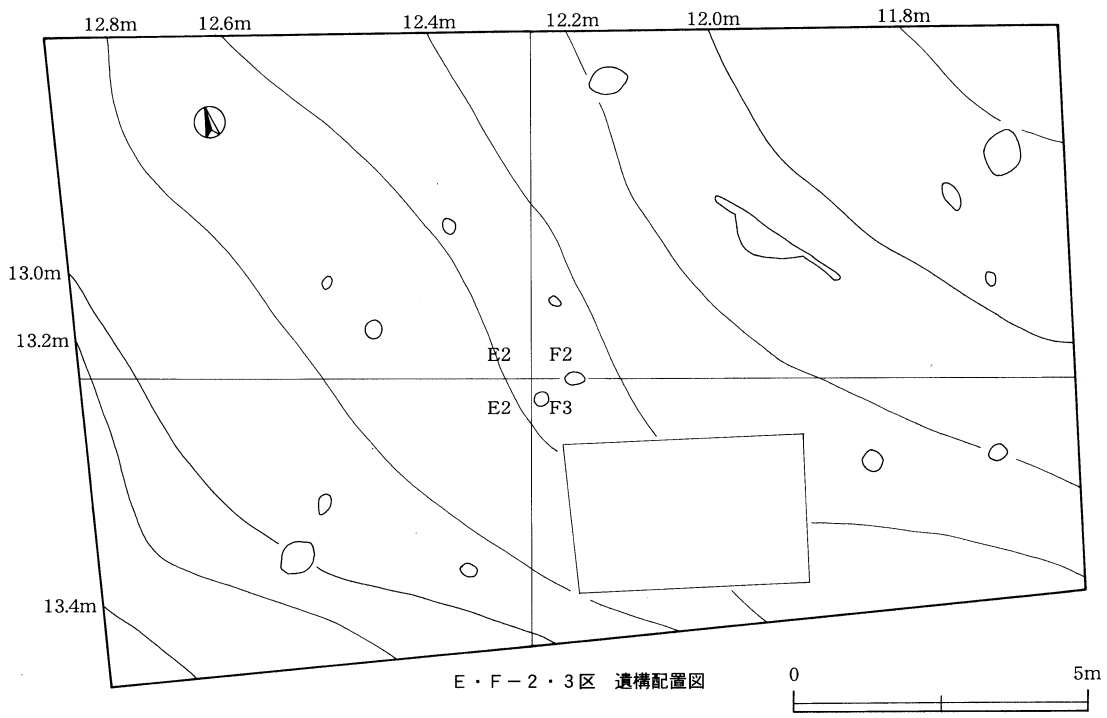
しかしH-2区南側部分には、西側部分と東側部分との境に約110~150cmの幅で、シラス土の造成面が西側から東側に向かって緩やかに下っている、坂道状の遺構があることがわかった。このスロープは、水平距離が約4m、標高が高い西側部分と低い東側部分との比高差が約1m、勾配率が25%を測る遺構であった。このスロープ部は、周りの検出面より心持ち硬化度が高い感触があった。以上の様相から、I地区からII地区へ向かう、登り口にあたる坂道であると、解釈した。

(2) 溝状遺構

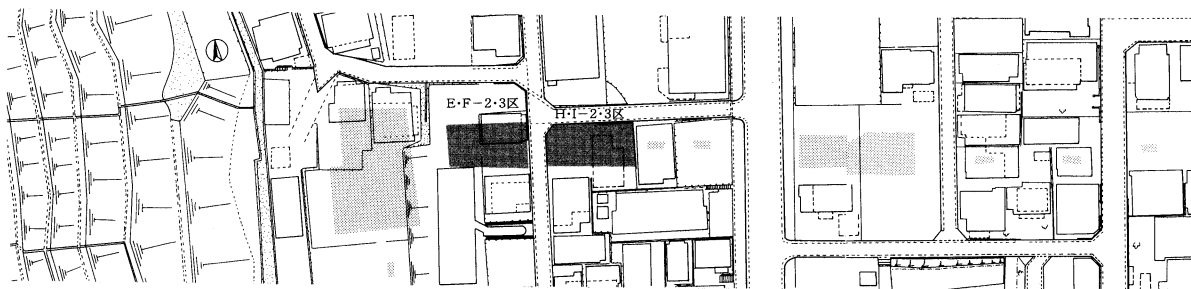
H-2区北側部分では、西側部分と東側部分との境に南北方向にのびる溝状遺構が見つかった。この遺構は、残存最大長420cm、上場最大幅約150cm、下場最大幅約70cm、東側部分のシラス造成上面端からの最大幅約190cm、西側部分との最大比高差約90cm、東側部分との比高差約160cmを測る。遺構南側は、スロープ状遺構ののり面を削る状態で検出されたことから、スロープ状遺構構築後に掘られた遺構ではあるが、時期差はほとんどないものとする。北側が調査範囲外に延びていき調査ができなかったため、北端が区切られていたのか、延びていくのかは不明である。



H・I-2・3区 遺構配置図



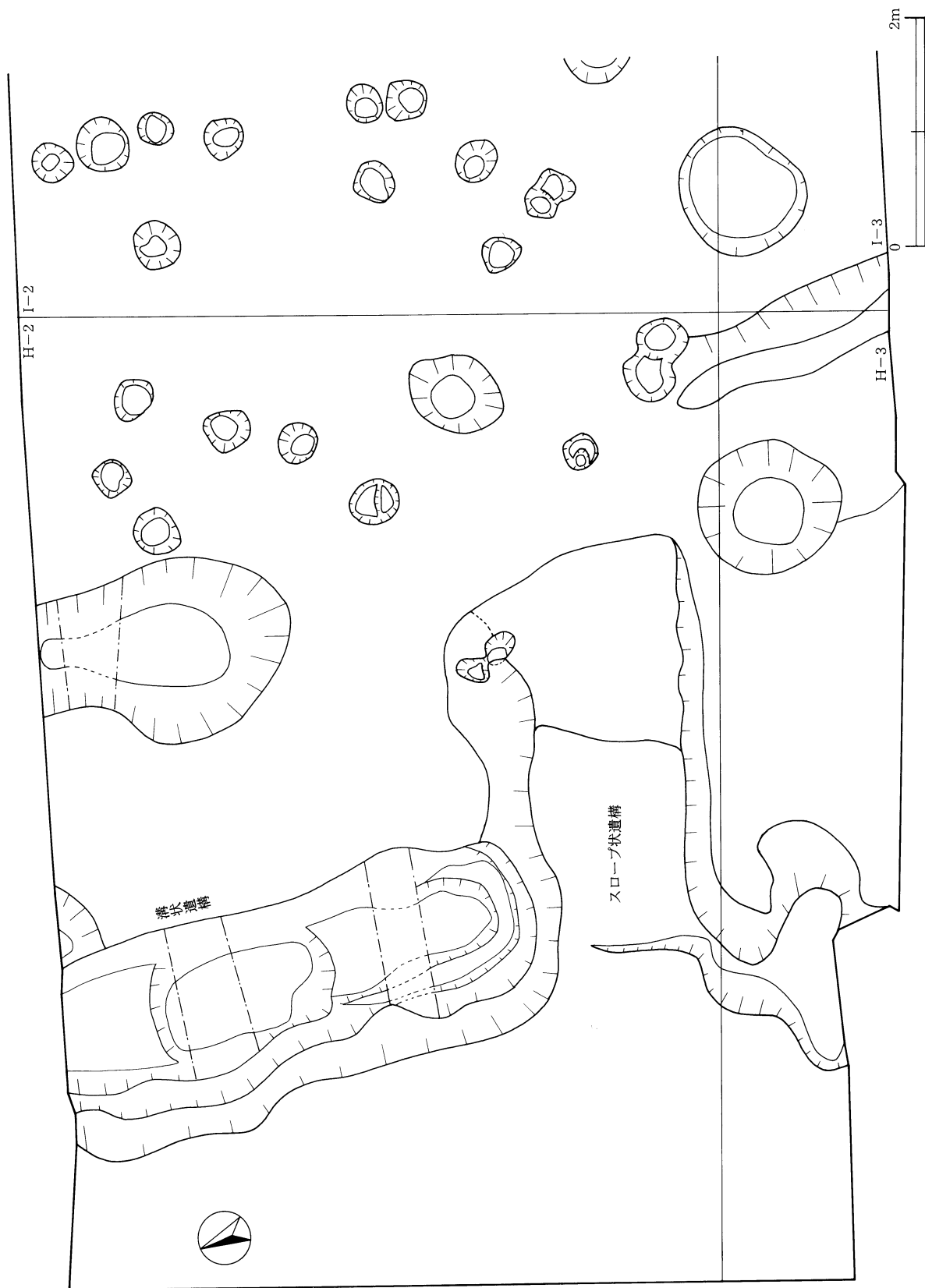
E・F-2・3区 遺構配置図



第90図 II地区遺構配置全体図(1)(H・I-2・3区, E・F-2・3区)



第91図 II地区遺構配置全体図(2)(A~C-2~5区)



第92図 II地区H・I-2・3区遺構配置図

(3) ピット・土坑

I-2・3区とH-2・3区東側では、近世期の最も古い生活面に多数のピットや土坑が検出された。ピットは、径が30cm～40cmを測るものが大部分で、中には床面近くに礫が埋められているものもあった。しかし、これらのピット群には、建造物が建つような規則的な関係を見つけることができず、土坑と同様に性格は不明であった。

2) E・F-2・3区の調査 (第90図下, 図版16)

E・F-2・3区では、近世期の最も古い生活面に多数のピットや土坑が検出された。ピットの大きさは、径が30cm～40cmを測るものが大部分であった。しかし、これらのピット群には、建造物が建つような規則的な関係を見つけることができず、土坑と同様に性格は不明であった。

3) A～C-2～5区の調査 (第91・93・94図, 図版17～25)

A～C-2～5区では、C-3区でスロープ状遺構が、B・C-2・3区で土壙が4基、B-3・4区で床面に軽石を置いた土坑が3基検出された。また、B-5区では犬と思われる獣骨が埋められた土坑が1基みつけた。

(1) スロープ状遺構 (第91・93図)

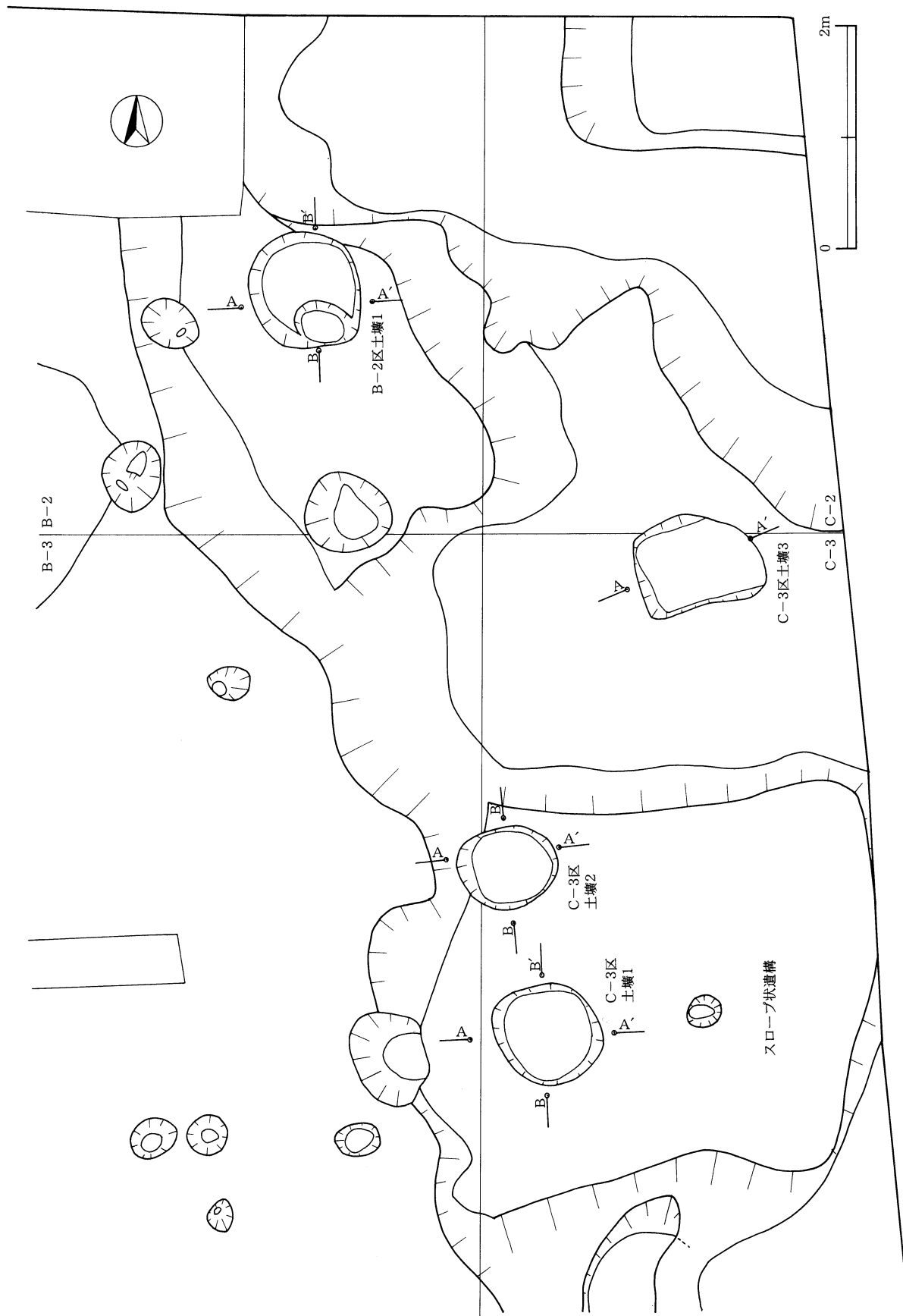
C-3区ではスロープ状遺構が検出された。C-3区の北側と南側では、シラス土の造成面が急に段落ちしていた。しかしC-3区の中央部には、シラス土の造成面が約300cm～370cmの幅で、西側から東側に向かって緩やかに下っている、坂道状の遺構が検出された。このスロープは、水平距離が約450cm、比高差が約150cm、勾配率は33%を測る遺構である。東側は調査範囲外に延びていき調査ができなかったため、東側の状況は不明である。

C-3区のスロープ状遺構は、H-2区で検出されたスロープ状遺構と比べて、幅が2.5倍ほど広いものの、勾配はやや急になっている。

(2) 土壙 (第93・94図)

B・C-2・3区で検出された4基の土坑には、人骨が埋葬されていたところから土壙と判断した。いずれもシラス造成面での検出であったため、これらの土壙がどの層から掘り込まれたものなのかを把握することは出来ていない。しかし、C-3区土壙1と土壙2とはスロープ状遺構上に掘られていること、B-2区土壙1はシラス造成面が段落ちした途中に作られた平坦面に掘られていることから、これらの土壙は、シラス造成面が現れている状況で埋葬が行われたと考えられ、寿国寺に係わる方の墓であると判断した。一方C-3区土壙3は、シラス造成面が急に段落ちした場所に作られていることや、土壙の平面形態が他の土壙とは異なることから、寿国寺に係わる方の墓であるとは即断できない。

また、人骨については、竹中正巳氏から埋葬姿勢および形質人類学的計測と観察結果などについて玉稿を頂いた。第V章第2節に掲載しており参照されたい。埋葬様式については、古泉弘氏の分類に従った。なお、土壙の計測値は検出面での値である。



第93図 II地区B・C-2・3区遺構配置図

1) C-3区土壌1

長径90cm, 短径80cm, 最大深約40cmを測る, 略円形を呈する土壌である。人骨は土壌北側に, 四肢骨の上に頭蓋骨がのる状態で検出された。墓壙形態および人骨検出状況から桶形木棺墓による座位屈葬と考えられる。

2) C-3区土壌2

径約100cm, 最大深約20cmを測る, 略円形を呈する土壌である。人骨は土壌中央に, 四肢骨が立った状態で, 頭蓋骨が土壌床面から浮いた状態で検出された。銭貨が複数枚副葬されていたが, 種類や枚数は確定できなかった。墓壙形態および人骨検出状況から桶形木棺墓による座位屈葬と考えられる。

3) C-3区土壌3

残存最大長約1m, 最大幅80cmを測る, 隅丸長方形を呈する土壌である。東側部分が削平されているため全形は明らかでない。西側に頭蓋骨が, 東側に四肢骨が床面から検出された。竹中氏の所見によれば, この状況から膝を立てた状態で埋葬されたようである。墓壙形態から立方体箱式木棺墓が想定でき, 人骨検出状況から座法は胡座が行われたと考えられる。

4) B-2区土壌1

最大幅約1m, 最大深約40cmを測る, 略五角形を呈する土壌である。南側には長径45cm, 短径30cmを測る略楕円形の土坑が, さらに掘られていた。人骨は, 土壌西側の床面で検出された。寛永通宝の銭貨が2枚とガラス玉と考えられるものが1点副葬されていた。墓壙形態および人骨検出状況から桶形木棺墓による座位屈葬と考えられる。

(3) 土坑 (第91・93・94図, 図版17~25)

B-3・4区には, 床面に軽石が設置されていた土坑が3基検出された。いずれの土坑でも床面からは軽石以外には何も検出されず, 埋土中からも何も見つからなかった。さらにこれらの土坑の並びには規則性があるとは言えない。したがって, これらの土坑の性格は不明である。

土坑1

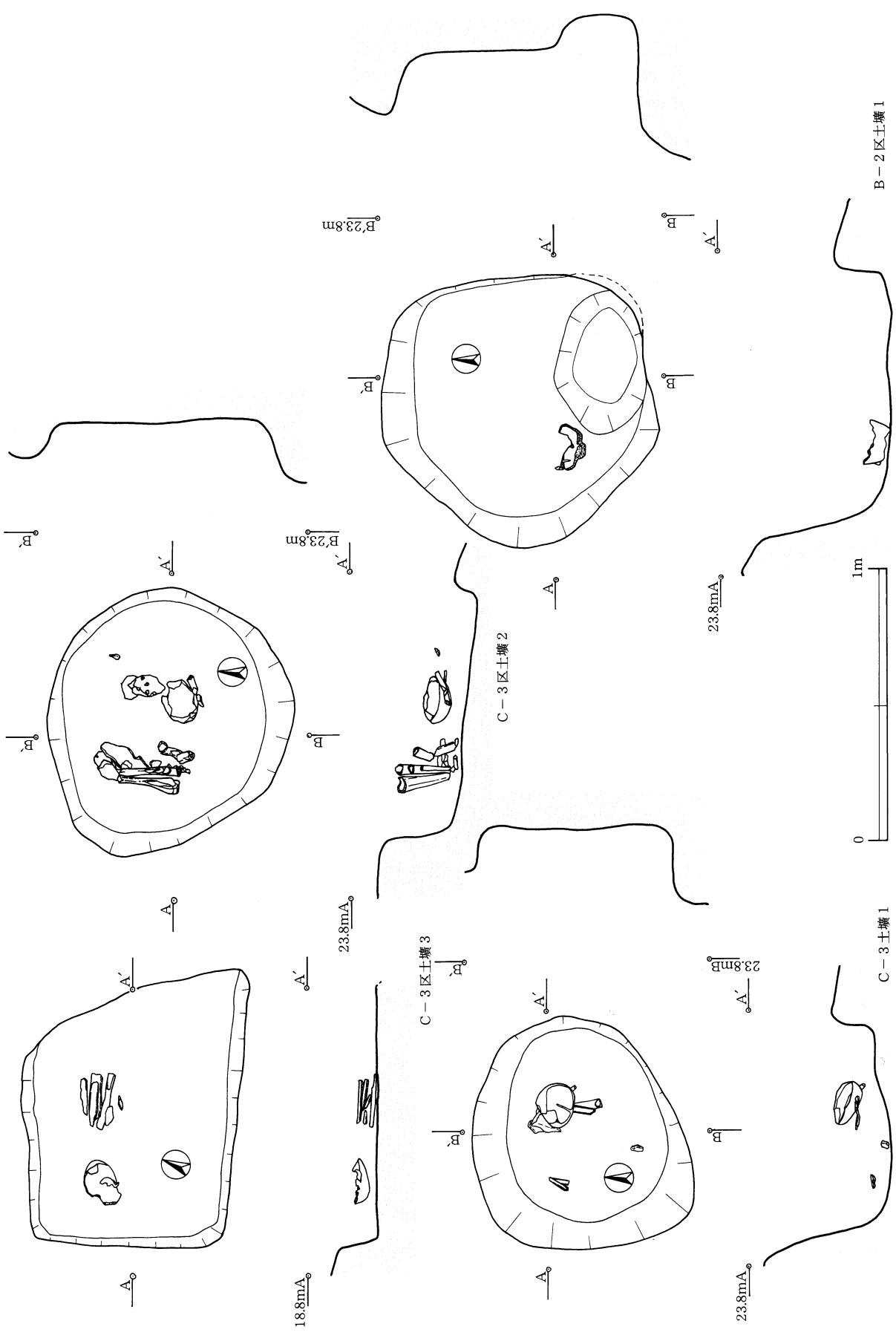
長径80cm, 短径70cm, 深さ20cmを測る略円形の土坑である。直径約10~20cmの軽石が約20個ほど床面中央部に集中した状態で検出された。

土坑2

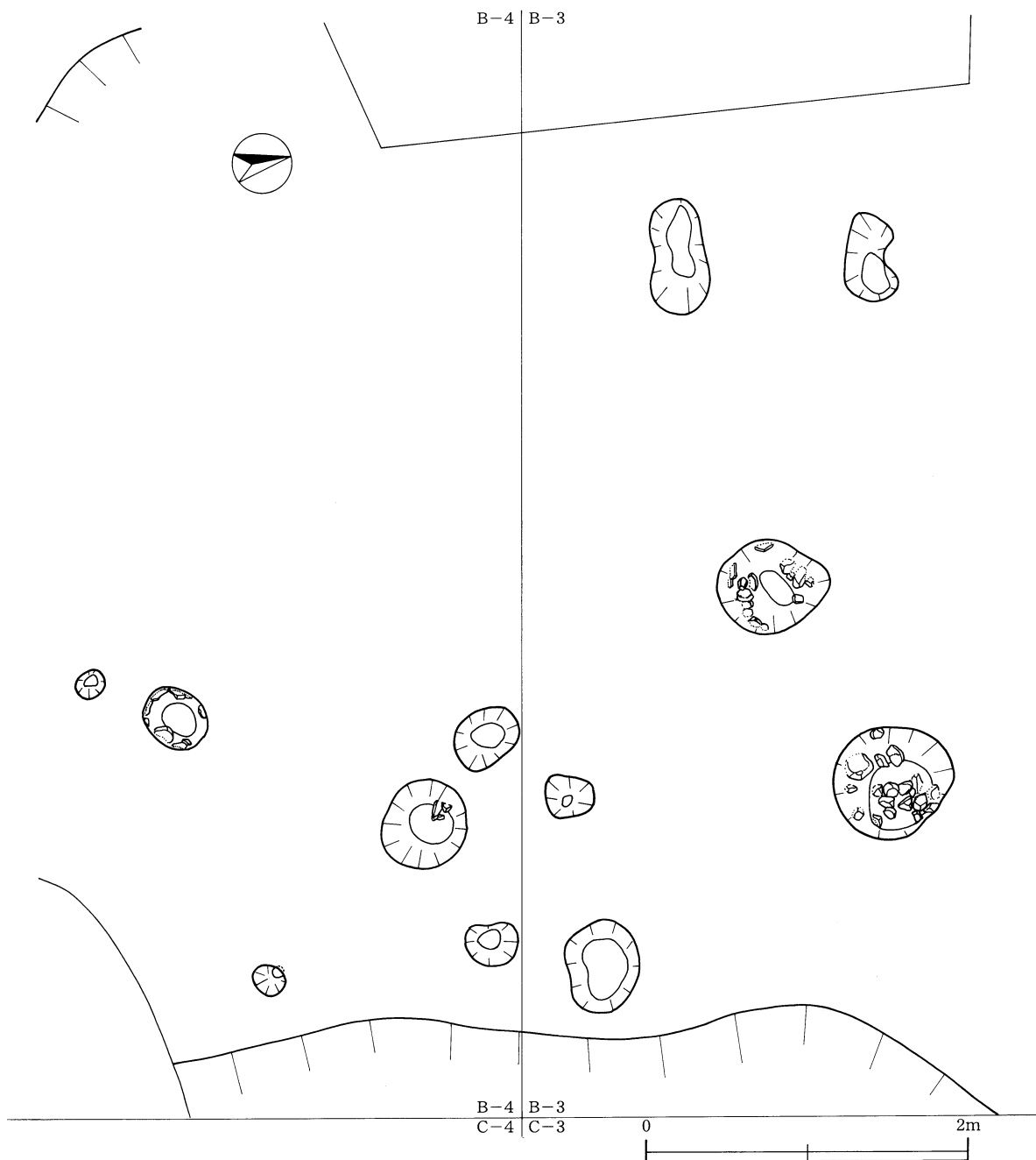
長径70cm, 短径60cm, 深さ約40cmを測る略円形の土坑である。直径5~10cmある15個ほどの軽石が, 直径約40cmの円形状に床面から検出された。

土坑3

長径25cm, 短径20cm, 深さ約15cmを測るほぼ円形の土坑である。直径15cm程度の軽石が約10個ほど, 床面の縁を取り囲むように設置された状態で検出された。



第94图 II地区B·C-2·3区检出土壤实测图



第95図 II地区B-3・4区検出土坑配置図

(4) 獣骨が埋められた土坑 (第91・93・94図, 図版17~25)

B-5区では犬と思われる獣骨が埋められた土坑が1基みつかった。直径約70cm, 深さ約15cmを測るほぼ円形の土坑である。シラス造成面での検出であったため, これらの土坑がどの層から掘り込まれたものなのかを把握することは出来ていない。検出された骨は上顎骨と下顎骨のみで, 全体骨格は出土しておらず埋葬されたものとは言えず, 性格は不明である。

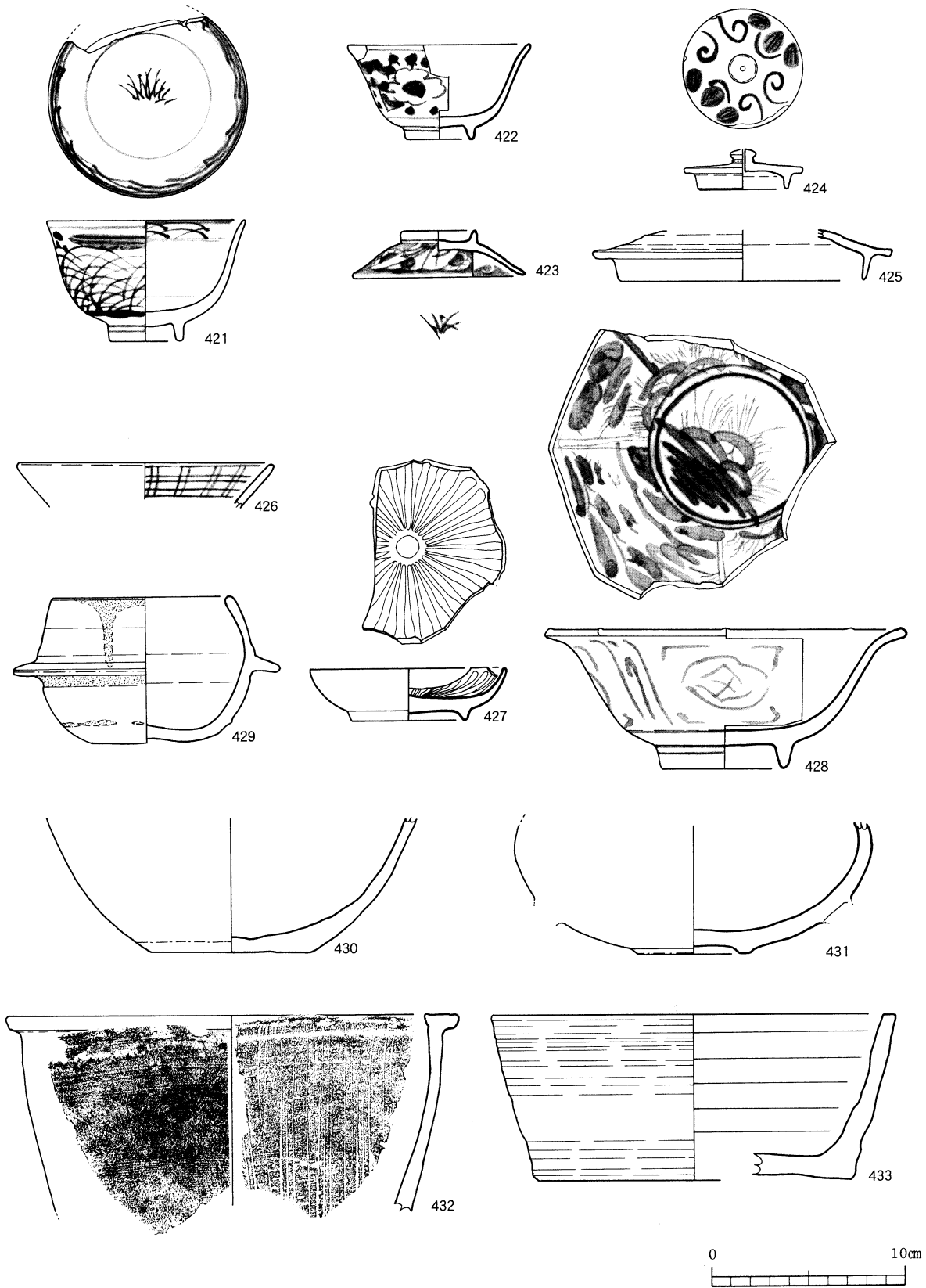
2 遺構内出土遺物

1) II地区瓦廃棄土坑内出土遺物(第96・97図)

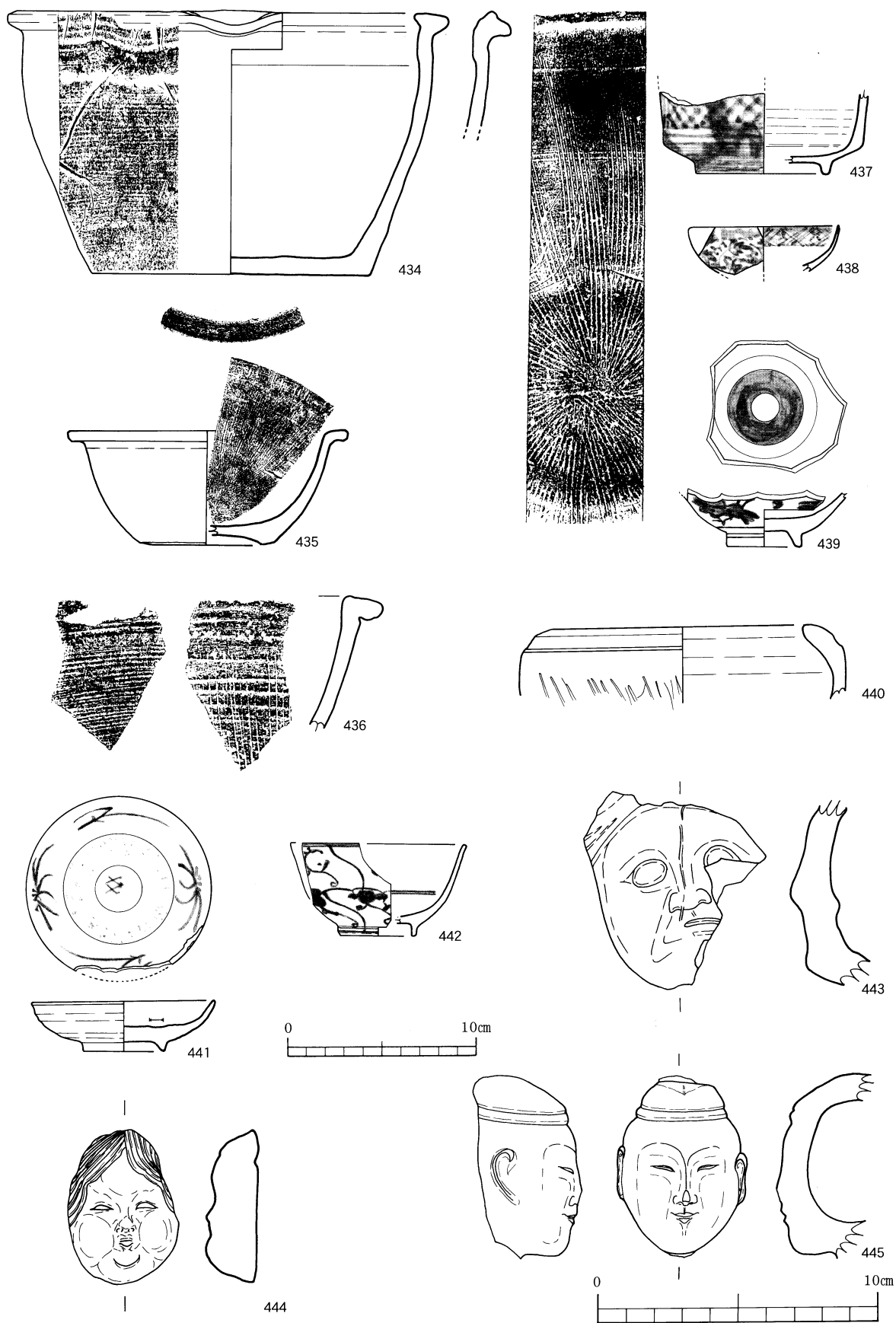
421～433・435・437・440・443は瓦廃棄土坑1内から、436・438・441・444は瓦廃棄土坑2内から出土した資料である。421・422は端反形の碗で、421は外面に草に露文、見込みに草文が描かれる。422は外面に草花文が描かれる。423は外面に草花文が施された蓋である。424はつまみ中心に蒸気抜き穴が通る土瓶蓋で、外面には白泥により文様が施され、全面無釉である。425は大形の蓋で、外面には光沢のある釉薬が施されている。426は灰色がかった胎土の皿で、内面には格子文が描かれている。427は型打ち菊花陽刻文の皿で口唇部に口錆が施されている。428は内面に岩草文が施された八角形の鉢で、平佐焼と思われる。429は小形の羽釜形の資料で、内面から鏝部上位にかけて施釉され、鏝部下位には煤が付着する。430は外底を除いて褐釉が施された龍門司焼である。内底中央部に指頭痕が集中して看取される。431は白色陶胎の外面に細かい貫入った透明釉が掛けられた在地系の資料である。高台脇には三足の脚部が付いていたと考えられ、香炉の可能性もある。432・434・436は底径に対して口径が大きく開かず、口唇部がT字に作られる鏝縁状を呈する器形の播鉢である。内外面は施釉され、口唇部は剥ぎ取られて3条の沈線が残り、播り目の末端は掻き消さない。434は外底面にコマ目の一部と思われる跡が観察される。433は茶褐色を呈する胎土に、光沢のある釉薬が外面にのみ掛けられる資料で、窯道具のサヤとも考えられるが、用途は不明である。口縁部外面には、櫛目状の工具で施されたと思われる細かい沈線が観察される。435は小形の播鉢で、外面は施釉され、内面には細かい播り目が密に施され、末端は掻き消さない。餌播鉢と考えられる。437は白色陶胎で、外面には緑釉でスニコロク写しが描かれた豎野系と思われる資料で、香炉の可能性が考えられる。438は外面に花唐草文、内面に四方櫛文が描かれた、器壁の薄いもので、器形は不明である。439は外面に赤絵が描かれた碗で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが二重に施されており、内側の蛇ノ目釉剥ぎには青紫色となっている。440は内面から口唇部にかけて煤が付着しており、火舎等の用途が考えられる資料であるが用途不明である。外面にはヘラ状の工具で調整されたと思われる削り痕が観察され、全面無釉である。441は内面に花と折れ松葉文が描かれ、蛇ノ目釉剥ぎが施される皿である。442は清代と思われる青花で、同一個体と考えられる破片が3個あり、瓦廃棄土坑1～3からそれぞれ1点ずつ出土したものである。やや青みがかった釉調を呈する透明釉が豊付以外全面に掛かり、外面には濃い青色の仙芝祝寿文が描かれている。口縁部はやや外反気味である。443・444は土製品で型作りの人形の頭部である。443は額から鼻下にかけて、細い粘土の帯が見られるが、これは型を合わせた部分とは考えにくく、鋳型にひび等が入っていたものと考えられる。445も型作りの土製品で、人形の頭部であるが、I地区で出土したものであり、本来ならば第55図に挿入されるべき資料である。

2) H-3区 ピット2内出土遺物(第98図)

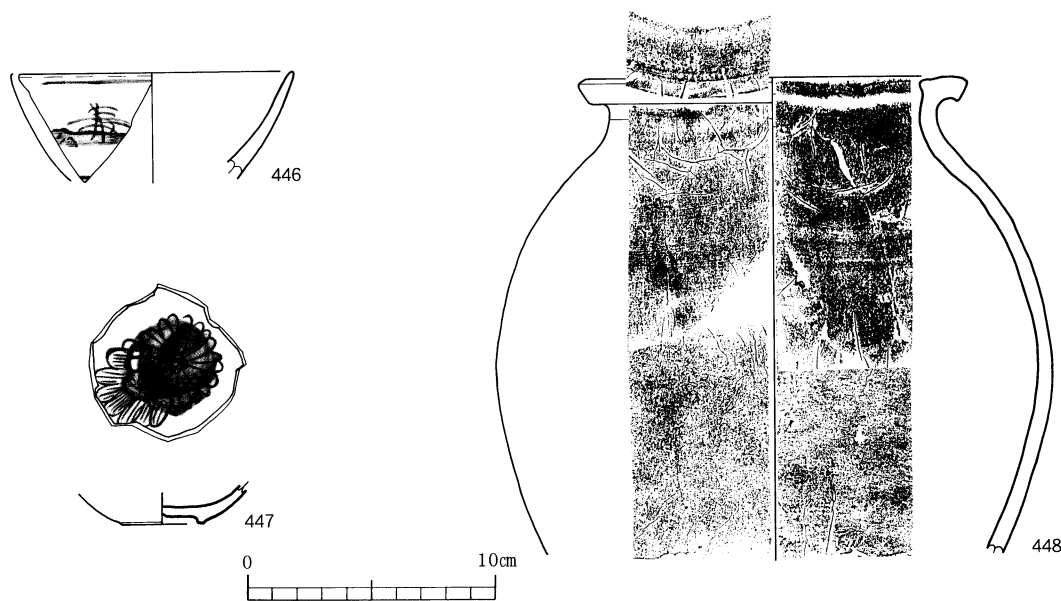
446～448は、H-3区から検出されたピット2内から出土した資料である。446は口縁部がハの字に開く器形を呈する碗で、外面には薄く文様が描かれているが、判別できない。447は見込みに菊花文が描かれた小皿で、釉薬の色調は緑がかかる。448は、内外面とも施釉された在地系の壺である。12点の破片から復元されたもので、そのうち1点がピット内から出土している。



第96图 II地区瓦砾土坑出土遗物(1)



第97图 II地区瓦房棄土坑出土遺物(2)



第98図 II地区P-2出土遺物

第24表 II地区出土遺物一覧表・瓦廃棄土坑1

番号	器種	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
421	碗	端反	磁器	9.3	4.9	3.2	草に露文見込草文	肥前系	B-3瓦廃棄土坑1	—
422	碗	端反	磁器	10.2	6.2	3.9	草花文か?	在地?	B-3瓦廃棄土坑1	—
423	蓋	—	磁器	9	2.3	つまみ径39	外面草花文?内面泥文見込草文	瀬戸・美濃?	B-3瓦廃棄土坑1	—
424	蓋	—	陶器	4.2	2.1	底径6.2	上面白泥土による文様 全面無釉	在地?	B-3瓦廃棄土坑1	—
425	土瓶盖	—	陶器	13	2.6	底径15.6	外面施釉胎土黒褐色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
426	皿	丸形	磁器	13.3	2.3	—	格子文	肥前系	B-3瓦廃棄土坑1	—
427	皿	輪花	磁器	—	2.7	6.1	型打ち陽刻菊花文 口鏝	肥前系	B-3瓦廃棄土坑1	—
428	鉢	八角	磁器	18.8	7.3	6.5	内面岩草文	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
429	羽釜	—	陶器	9.3	7.6	5.2	鏝径14.0底部煤付着胎土褐色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
430	鉢・甕	—	陶器	—	7	8.3	内外面褐釉胎土茶褐色	在地?	B-3瓦廃棄土坑1	—
431	香炉?	—	陶器	—	6.8	5.7	三足か?内面無釉外面透明釉胎土黄白色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
432	播鉢	—	陶器	23.6	—	—	内外面施釉胎土赤褐色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
433	サヤ?	—	陶器	20.8	6.65	16.2	釜道具か?外面施釉胎土茶褐色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
434	播鉢	—	陶器	24	14.2	14.8	内外面施釉胎土赤褐色 コマ目	在地	B-3瓦廃棄土坑2	—
435	香炉	—	磁器	15	6.1	3.6	外面灰胎内面無釉	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
436	播鉢	—	陶器	—	—	—	内外面施釉胎土赤褐色	在地	B-3瓦廃棄土坑2	—
437	鉢	—	陶器	—	—	—	スソコロク写し内面無釉外面緑釉胎土白色	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—
438	皿?	—	磁器	8.2	—	—	外面花唐草文内面四方禪文	肥前系	B-3瓦廃棄土坑2	—
439	碗	—	磁器	—	—	3.8	色絵見込蛇ノ目釉抜 (二重)	肥前系	B-3瓦廃棄土坑2	—
440	?	—	陶器	12.4	—	—	口縁部煤付着 外面ヘラ削り	在地	B-3瓦廃棄土坑1	—

第25表 II地区出土遺物一覧表・瓦廃棄土坑2・P2出土遺物

番号	種別	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層	
				口径	器高	底径					
441	皿	丸形	磁器	9.8	2.7	4.4	花と折れ松葉文見込蛇ノ目釉剥	肥前系	B-3瓦廃棄土坑2 C-4	— 表	
442	碗	端反	磁器	9.4	4.95	—	仙芝祝寿文	清	B-3瓦廃棄土坑123	—	
443	人形	—	土製品	—	—	—	頭部胎土黄橙色	—	B-3瓦廃棄土坑1	—	
444	人形	—	土製品	縦5.5	横3.9	高1.45	頭部「おかめ」胎土赤褐色	—	B-3瓦廃棄土坑2	—	
445	人形	—	土製品	縦6.5	横4.8	—	頭部胎土黄橙色	—	I地区出土	—	
446	碗	—	—	—	—	—	—	肥前系	H-3Pt2土坑	—	
447	皿?	—	—	—	—	3.4	見込み菊花文	肥前系	H-3Pt2土坑	—	
448	壺	—	陶器	15	—	—	内外面施釉	在地	H-3Pt2土坑	I d上	
									H~I-2・3		
									904・909・910 915・918・978 518・548・612		
									H~I-2・3		
										I d下	
											721・727

3 出土遺物

II地区で出土した遺物のうち近世の時期に属するものは、陶磁器、瓦、金属製品、銭貨、石製品の5種に分類することができた。その他に、古代の時期に属する遺物と古墳時代に属する遺物とがある。なお先に述べたように、出土遺物では、各地点間で出土状況に違いが見られなかったため、出土地点を区別せず、順次報告を行うこととする。

1) 陶磁器類

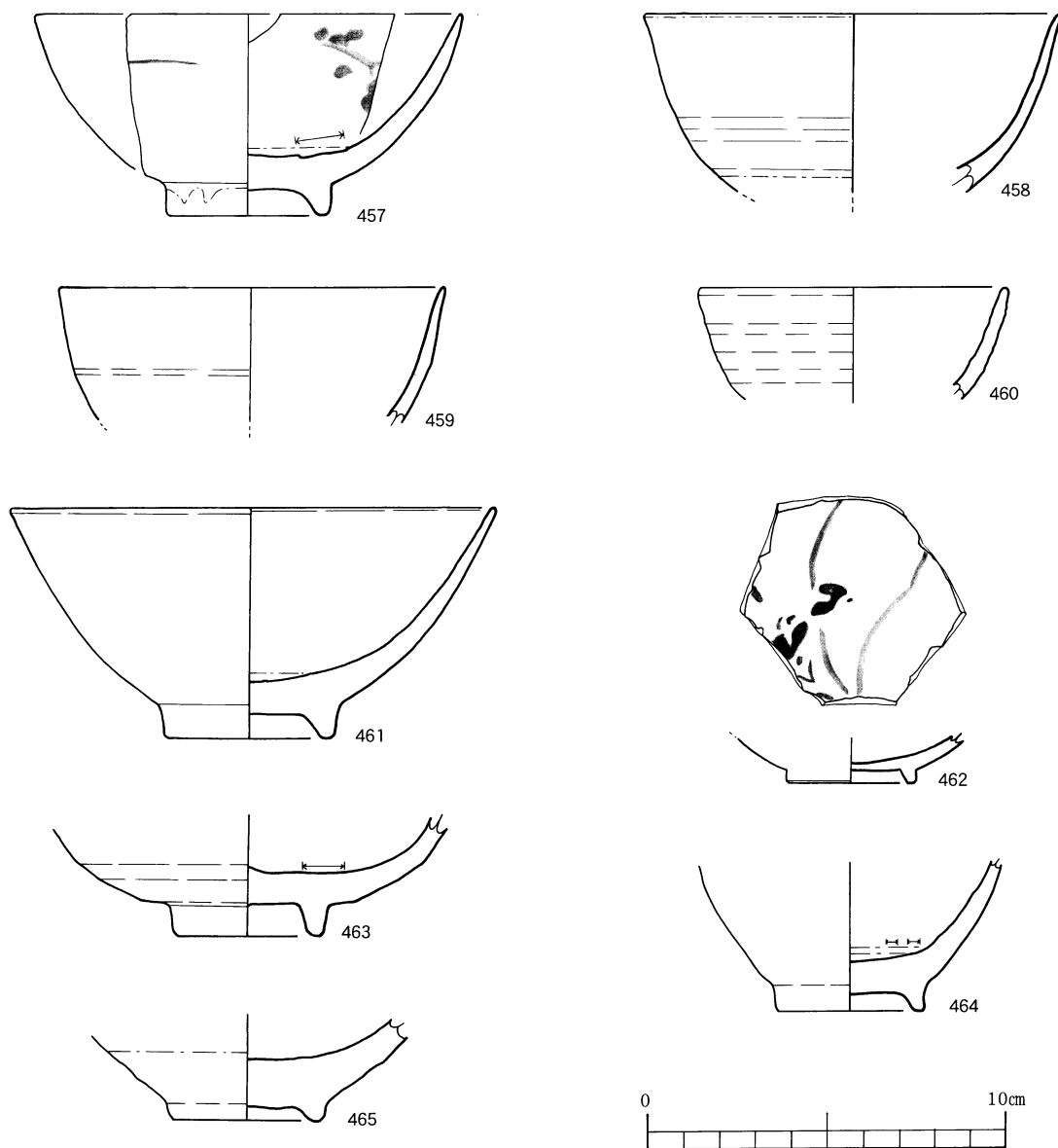
II地区からは、碗・皿・鉢・瓶・土製品・播鉢・鉢・甕・壺・焙烙・火舎・メンコ等の遺物が出土した。中には、中世の遺物（青磁碗・播鉢）も含まれており、これらは別に一括して掲載した。なお貿易陶磁器に関しては、I地区同様、特に独立して分類せず国内産陶磁器の中に掲載し、その都度文章と観察表で報告する。

(1) 碗 (第99・100図)

449～456は磁器碗で、457～465は陶器の碗である。449は16世紀末頃と思われる青花の碗で、青みがかった釉調の透明釉が掛けられ、外面には唐草文が描かれている。高台は切高台状の形状を成し内面は無釉である。450はやや緑がかった釉調を呈する透明釉が掛けられた丸形の碗で、外面には草花文が描かれている。器壁は比較的薄く、小高台である。451は腰部が張った器形の碗で、口縁部内面は釉葉が掻き取られており、蓋が伴うものと思われる。やや青みがかった釉調を呈する。透明釉には貫入が入り、変容の強い文様が描かれているが、呉須の反映が悪く判別できない。452は薄手の白磁で、高台の作りも薄く丁寧である。453は端反形の碗で、外面には花文が描かれている。454は薄く丁寧な作りの端反碗で、色調は純白に近く、外面には松葉唐草文が描かれている。455は胎土の色調が灰色みがあり、外面に霊芝文、内面に雷文が描かれた端反形の碗である。口唇部にも、1条の圈線が描かれている。456は口縁部の端反が強く、外面は輪郭を細い線で表し、その間をダミで埋めた唐草文が描かれている。457は黄白色の陶胎に透明釉が掛けられた丸形の碗で、関西系のものである。内外面には朱色の上絵付けが描かれ、高台内面は無釉、見込みには蛇ノ目



第99图 II地区出土遺物(1)碗(磁器)



第100図 II地区出土遺物(2) 碗(陶器)

釉剥ぎが施されている。458・459は肥前内野山の資料である。458は口縁部がわずかに外反する器形を呈するもので、外面には銅緑釉が高台脇まで掛かり、内面には透明釉が掛けられている。459は比較的器壁が薄いもので、内外面に銅緑釉が掛けられている。460はやや小形の碗である。灰白色の陶胎に透明釉が内外面に掛けられている。461は高台脇からわずかにふくらみを持って斜め上方に立ち上がる器形で、灰白色の陶胎に黒褐色の鉄釉が総釉で掛かる資料で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされた龍門司焼である。462は黄色みを帯びた色調で外面は露胎した薄作りの資料で、関西系の製品である。シャープな作りの高台が付く。内面は貫入が発達した透明釉が掛けられ、上絵付けで燕子文が描かれる。464は灰白色の胎土に、緑がかった色調の透明釉が総釉で掛かる資料で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが観察される。465は黄白色の胎土に、灰色の色調を呈する灰釉が掛けられる唐津焼で、高台脇から高台内面にかけては無釉である。

第26表 II地区出土遺物一覧表・碗（陶磁器）

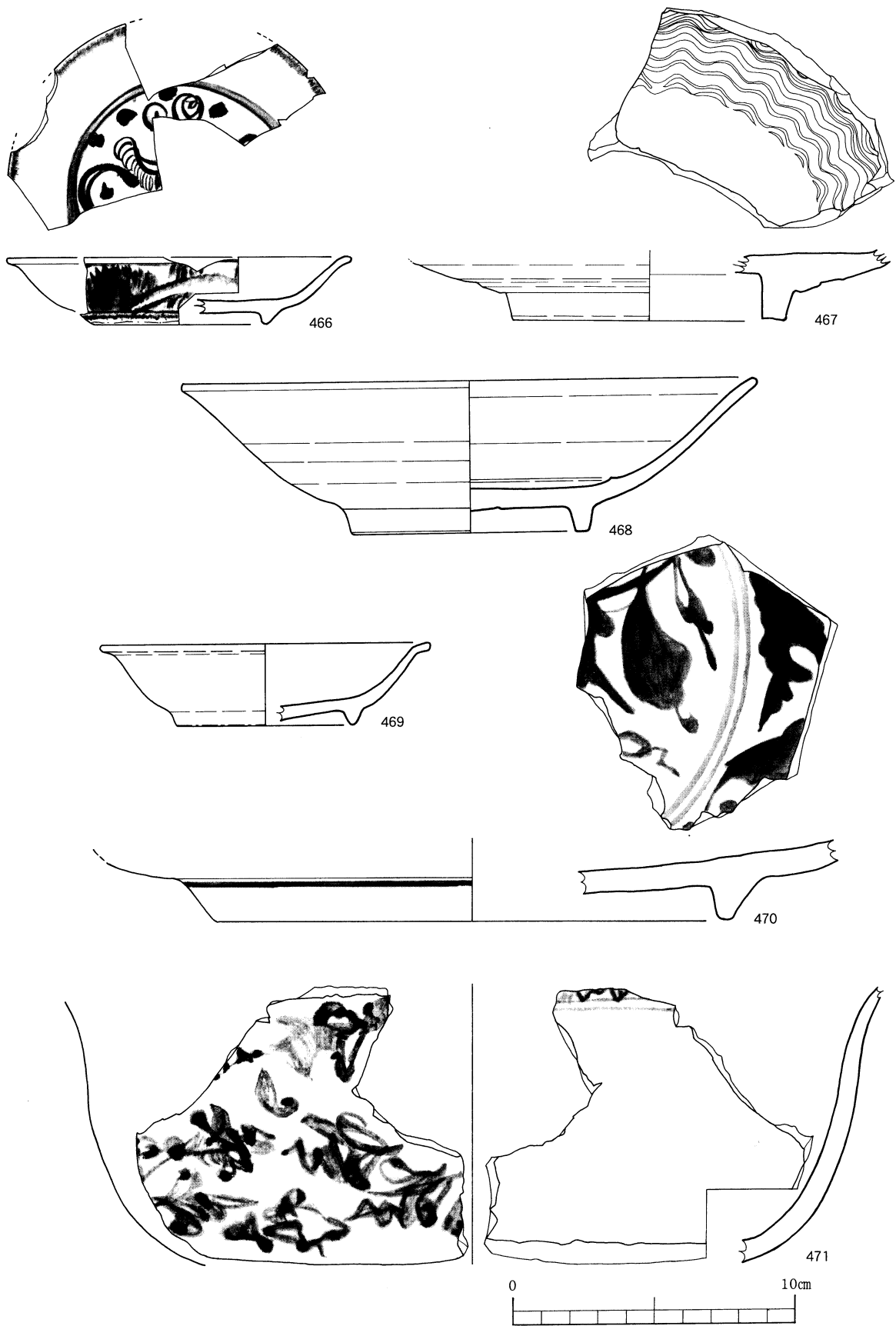
番号	器種	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
449	碗	丸碗	磁器	11.6	4.8	5.2	外面唐草文 高台内無釉	明	H・I-3	表
450	碗	丸碗	磁器	5.2	10.4	4.98	草花文	肥前系	E・F・H・I-2.3	—
451	碗	飯碗	磁器	11	5.6	4.4	貫入 口禿	在地	C-4	表
452	碗	形	磁器	10.3	5.9	4.6	白磁	肥前系	C-3	表
453	碗	—	磁器	10.6	—	—	花文	肥前系	B-4	表
454	碗	端反	磁器	11	5.9	4.2	松葉唐草文	肥前系	—	表
455	碗	端反	磁器	10	—	—	外面靈芝文 内面雷文	肥前系	B・C	—
456	碗	端反	磁器	12.7	—	—	外面唐草文	肥前系	H・I-3	I c
									H-21067	I d上
457	碗	端反	陶器	12	5.6	4.4	上絵付透明釉 見込蛇ノ目釉剥 胎土黄白色	関西系	H・I-3	I c
458	碗	端反	陶器	11.6	—	—	外面銅緑釉 内面透明釉	肥前系	C-4	表
459	碗	端反	陶器	10.8	—	—	内外面銅緑釉 胎土灰色	肥前系	H・I-3	I c
460	碗	端反	陶器	8.6	—	—	内外面透明釉 胎土灰白色	在地	H・I-2.3967・776	I d上
461	碗	丸形	陶器	13.6	6.5	4.7	鉄釉 見込蛇ノ目釉剥 胎土灰黄褐色	在地	H・I-2.3653・534・662	I c
462	碗	平形	陶器	—	—	3.6	上絵 胎土黄白色	関西系	C-3	表
463	碗	—	陶器	—	—	4	灰釉 見込蛇ノ目釉剥 胎土灰色	肥前系	H・I-2.3724	I d下
464	碗	—	陶器	—	—	4.1	灰釉 見込蛇ノ目釉剥 胎土灰白色	肥前系	I-21072	I d上
465	碗	—	陶器	—	—	4.1	灰釉 胎土灰黄色	肥前系	H・I-2.3	I c

(2) 皿・鉢 (第101図)

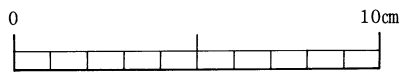
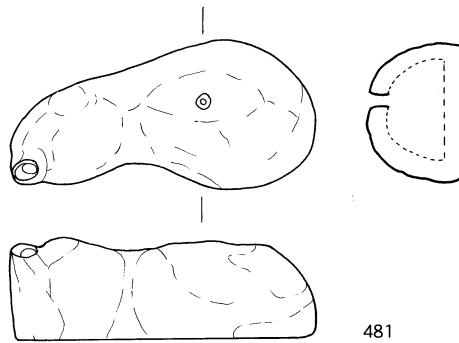
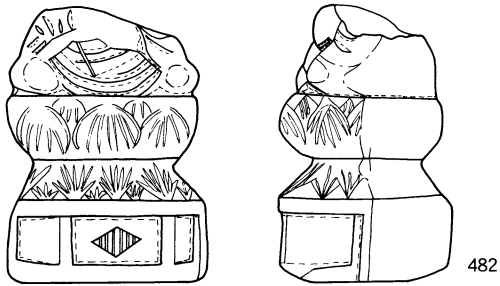
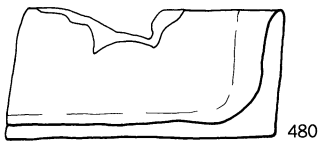
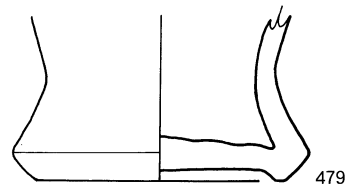
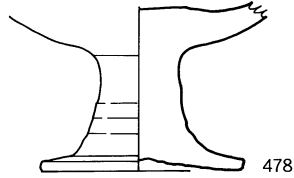
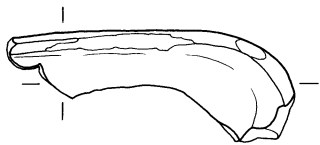
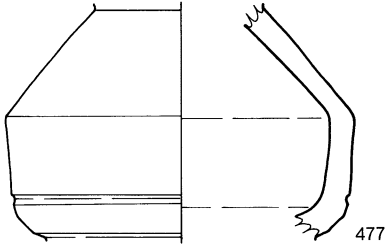
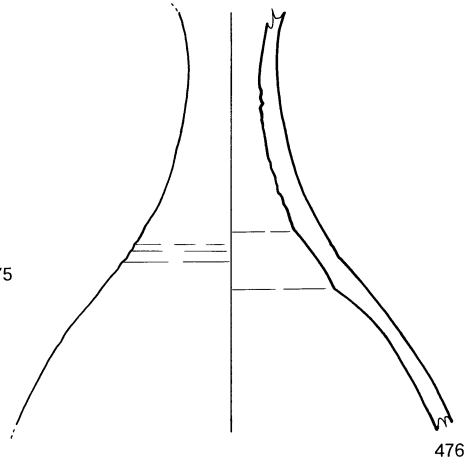
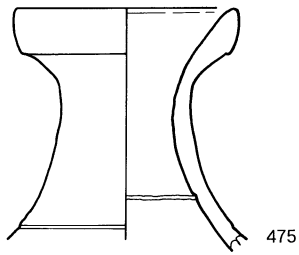
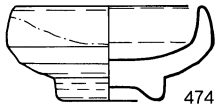
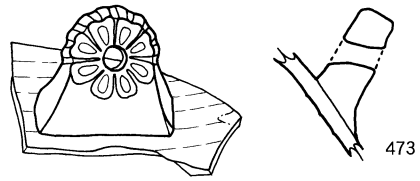
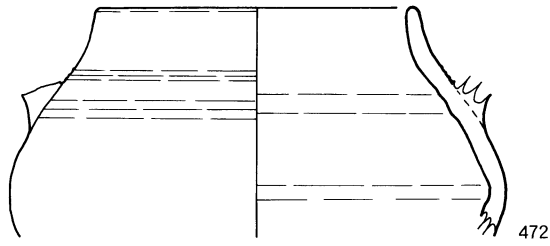
466～470は皿, 471は鉢である。466は15世紀末～16世紀中頃の青花の皿で, 小野分類B1群に分類されるものである。やや青みがかった色調の透明釉が畳付以外総釉で掛けられ, 内面には玉取り獅子文が描かれている。467は灰褐色の胎土で, 内面には白土による刷毛目が施され, 透明釉が内面から高台外まで掛けられた資料で, 大皿又は盤と思われる。468は黒褐色の鉄釉が総釉で掛けられた資料で, 龍門司焼である。469は胎土がやや灰色の色調を呈し, 466と同様, 口縁部が端反形の器形を呈する白磁で, 16世紀代の貿易陶磁である。470は17世紀中葉頃の漳洲窯系の青花大皿又は盤で, 胎土が荒く, 焼成不良のためか呉須が薄く発色が悪い。471は17世紀前葉頃の漳洲窯系の青花の鉢で, 470同様の荒い胎土で釉の発色が悪く, 透明釉には濁りが見られる。

(3) 陶磁器・土製品 (第102図)

472～481は様々な器種の陶磁器で, 482は土製品である。図化できるものが少ないため, 一括して掲載した。472は土瓶473は土瓶の耳部である。黒褐色の胎土に, 光沢のある釉葉が内外面とも施されている。474は胎土が灰白色を呈し, 藁灰釉が内面から口縁部外面まで掛けられた小坏である。475・476は在地系の徳利である。475は内外面に, 476は外面と内面の一部に鉄釉が掛けられている。477は白化粧土を刷毛目で施し, 薄い緑釉が部分的に掛けられている瓶状の器形で, 内面は無釉である。478・479は仏具である。478はわずかに緑がかかった灰釉が全



第101図 II地区出土遺物(3) 皿・鉢(陶磁器)



第102図 II地区出土遺物(4) 陶磁器・土製品 (482のみスケール1/1)

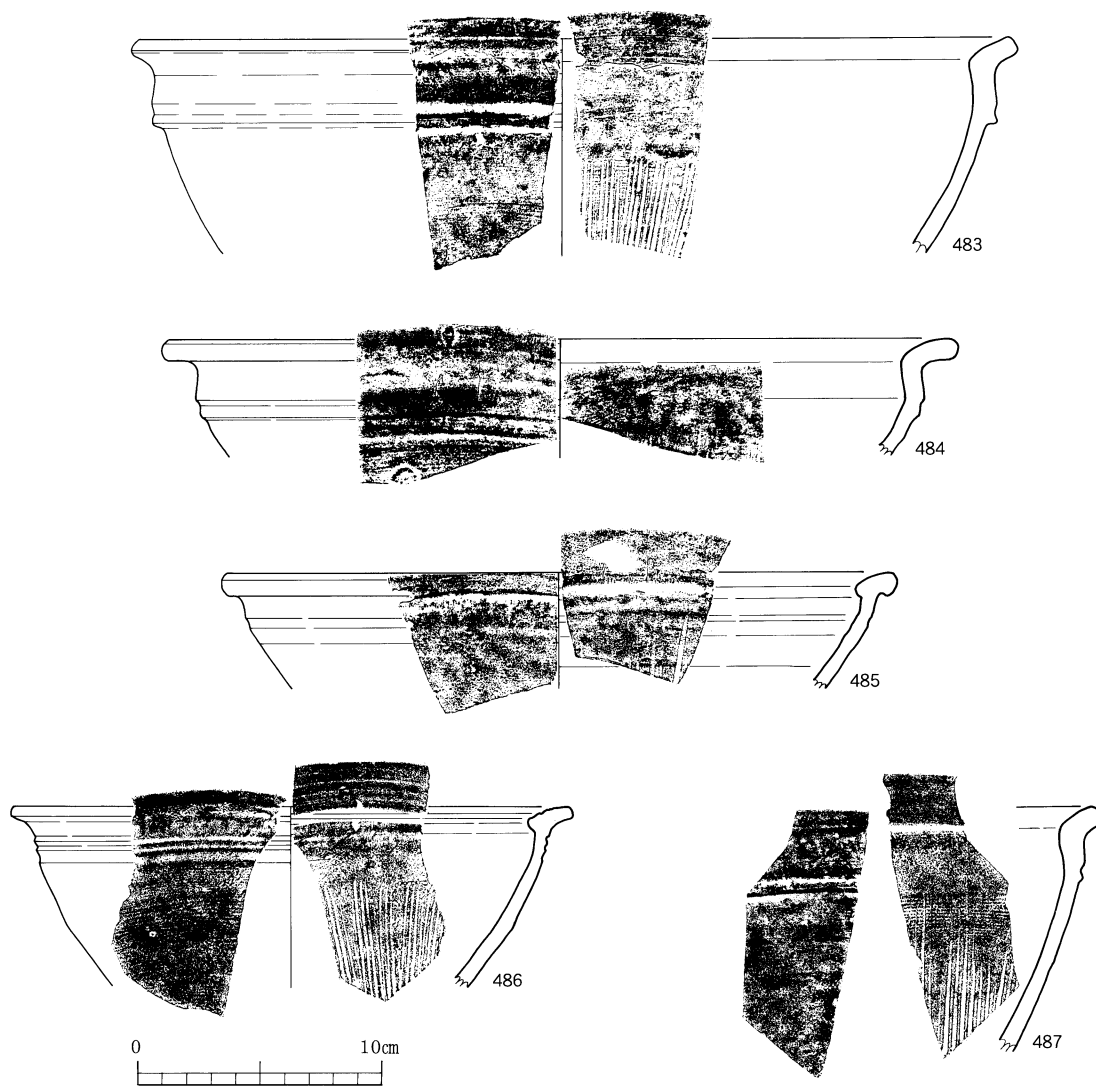
透明釉が総釉で掛けられた仏花器と思われる資料である。481は瓢箪形の水滴で、外面は型打ちで文様が陽刻されているが、不鮮明である。、480は焼成不良の鬘盥である。482は型打ちで作られた仏像で、胸部から上位は欠損する。表面には、剥離剤としての金雲母が塗布されている。

(4) 播鉢 (第103図)

483～487は内外面に黒褐色の鉄釉が掛けられた、在地系の播鉢で、底径に対して口径が開く器形を呈するものである。483は口縁部直下に1条の凸帯を回らすもので、内面は播り目を掻き消さない。484はやや退化した2条の凸帯を口縁部直下に回らし、播り目は内面全体に施さず口縁部内側には余白を残し、末端は掻き消さない。485・496は口縁部がT字状の鏝縁を呈するものである。485は内面に粗い播り目が施され、末端は掻き消さない。486は内面には播り目が密に施され、末端は掻き消さない。487は口縁部直下に退化した2条の凸帯を有し、内面には末端を掻き消さない播り目が施されている。

第27表 II地区出土遺物一覧表・皿・鉢 (陶磁器) ・土製品・播鉢

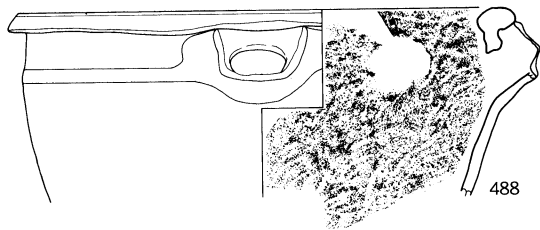
番号	器種	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
466	皿	端反	磁器	12.2	2.4	6.2	中国青花	明	H・I-23836	I d上
467	皿	—	陶器	—	—	9.6	白土刷毛目 透明釉 胎土灰褐色	肥前系	H・I-23697	I d上
468	皿	端反	陶器	20.4	5.4	8.4	鉄釉 胎土黄白色	肥前系	H・I-23944	I d上
469	皿	端反	陶器	11.6	2.9	6.3	透明釉胎土灰色 白磁	在地	H・I-231025	I c上
470	皿か盤	—	磁器	—	—	18.2	焼成不良	明	H・I-3	表
471	鉢	—	磁器	—	—	—	焼成不良	明	H・I-2.3	表
									H・I-231021	I c上
472	土瓶	—	陶器	8.8	—	—	内外面褐釉 胎土黒褐色	在地	H・I-23610	I d上
473	土瓶	—	陶器	—	2.6	—	取っ手部 褐釉 胎土黒褐色	在地	H・I-23797	I d下
474	酒杯	丸形	陶器	5.2	—	2.6	藁灰釉 態度灰白色	在地	一括	0～II
475	德利	—	陶器	6	—	—	鉄釉胎土黒褐色	?	H・I-3859	I d上
476	德利	—	陶器	—	—	—	鉄釉 胎土暗赤褐色	在地	H・I-2.3	I c
477	瓶	—	陶器	—	—	—	胎土灰色外面白化粧土 刷毛目 緑釉	在地	一括	0～II
478	仏飯具	—	陶器	—	—	5.2	透灰釉 見込蛇ノ目釉剥 胎土灰白色	肥前	一括	0～II
479	仏花器	—	陶器	—	横3.5	6.8	透明釉 貫入 胎土白色	在地	H・I-23530	I c
480	鬘盥	—	陶器	縦7.4	横4.1	高3.5	びんだらい 焼成不良 胎土浅黄燈色	在地	881	—
481	水滴	—	磁器	縦8.0	—	高2.8	型打ち陽刻文	在地	E・F・H・I-2.3	—
482	人形	—	土製品	—	—	—	仏像 表面金雲母	在地	H・I-23854	I d上
483	播鉢	—	陶器	36.6	—	—	内外面鉄釉 胎土黒褐色	在地	H-3	I c下
									H・I-231094,1003,937	I d上
484	播鉢	—	陶器	32	—	—	内外面鉄釉 胎土赤褐色	在地	H・I-2.3	I d上
485	播鉢	—	陶器	27.6	—	—	内外面鉄釉 胎土黒褐色	在地	H・I-2.3	I d上
486	播鉢	—	陶器	23	—	—	内外面鉄釉 胎土茶褐色	在地	H・I-2.3	I d上
487	播鉢	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉 胎土赤褐色	在地	H・I-23811	I d上



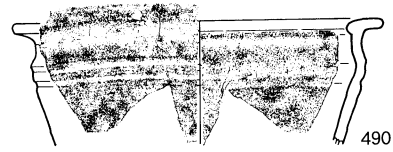
第103図 II地区出土遺物(5) 播鉢

(5) 鉢 (第104図)

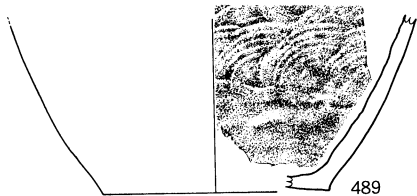
488・489は同一個体と考えられる片口である。内外面に鉄釉が施され、内面には叩き目が残っている。口縁部はT字状を呈した鍔縁を成し、口縁部直下に1条の凸帯を回らす。490は口縁部がT字状の鍔縁を成し、口縁部直下に退化した2条の凸帯を回らす小形の鉢である。491は口縁部がやや内湾する器形の資料で、口縁部外面に2条の沈線が回っている。492は底径に対して口径が開く器形を呈する資料で、口縁部直下に1条の凸帯を回らす。493は口縁部が下がり、T字状に作りだし、鍔縁形を呈する器形で、口縁部外面には波状の装飾が施されている。494・495は胴部から口縁部にかけてハの字に開く器形である。



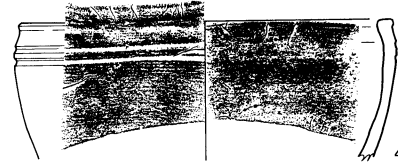
488



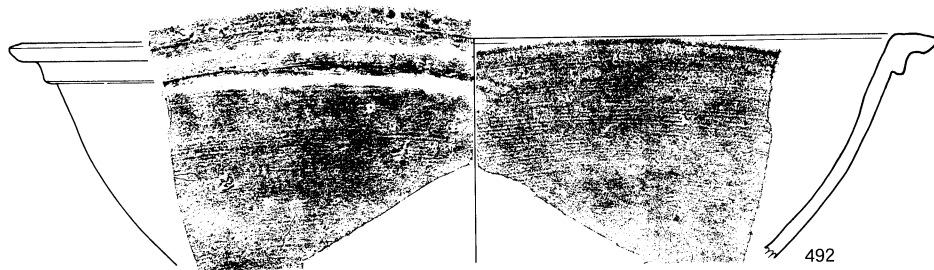
490



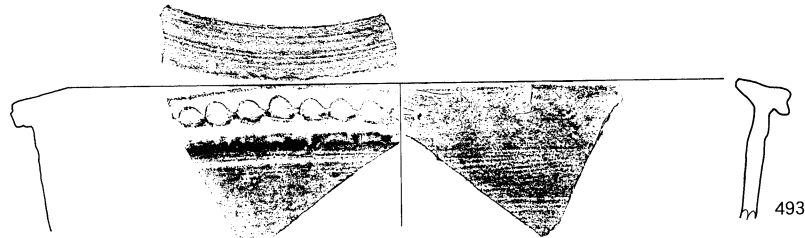
489



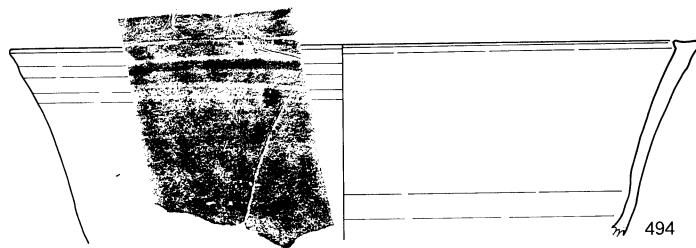
491



492



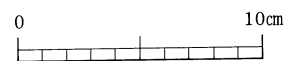
493



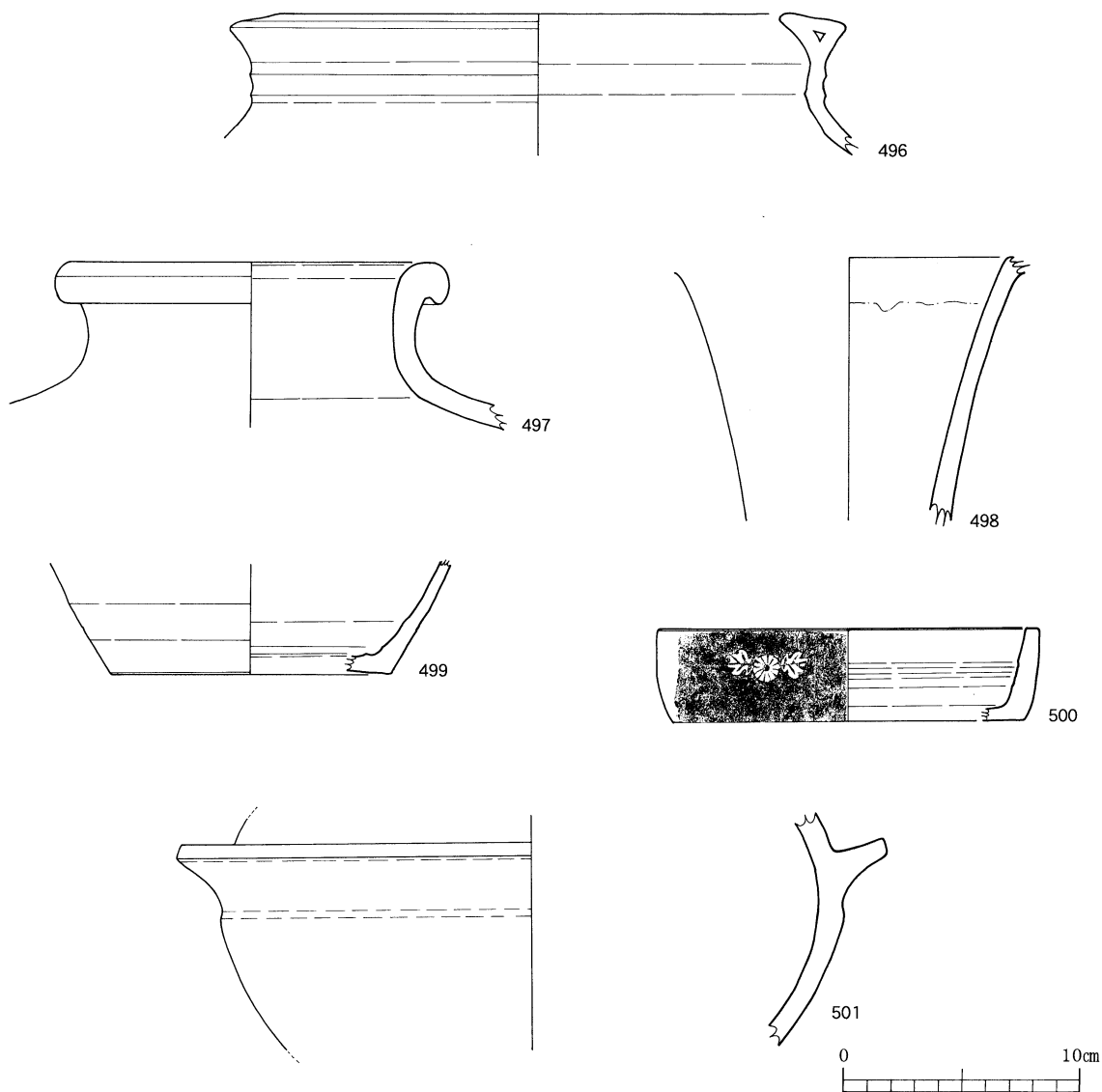
494



495



第104図 II地区出土遺物(6) 鉢



第105図 II地区出土遺物(7) 甕・壺・その他

(6) 甕・壺・その他 (第105図)

496は内外面に鉄釉が掛けられた在地系の甕で、口縁部は折り返して逆三角形を成し、口唇部には目跡が観察される。497は内外面に鉄釉がかかる在地系の壺で、口縁部は折り返して丸く作る。498～500は器種不明の資料で、498は赤褐色の胎土を呈し、外面と内面の一部に黒褐色の鉄釉が掛けられている。499は平底の器形で、焼成不良のため胎土が明赤褐色を呈し、内面と外面底部脇まで熔解不良の鉄釉が掛けられる。500は胎土が灰褐色を呈した炉器である。外面に花文の象嵌が施され、内面には櫛状工具で調整されている。501は羽釜形である。内外面は黒色の釉葉が施されており、鋳部下位から下部は煤が付着している。

第28表 II地区出土遺物一覧表・鉢・甕・壺・その他(陶器)

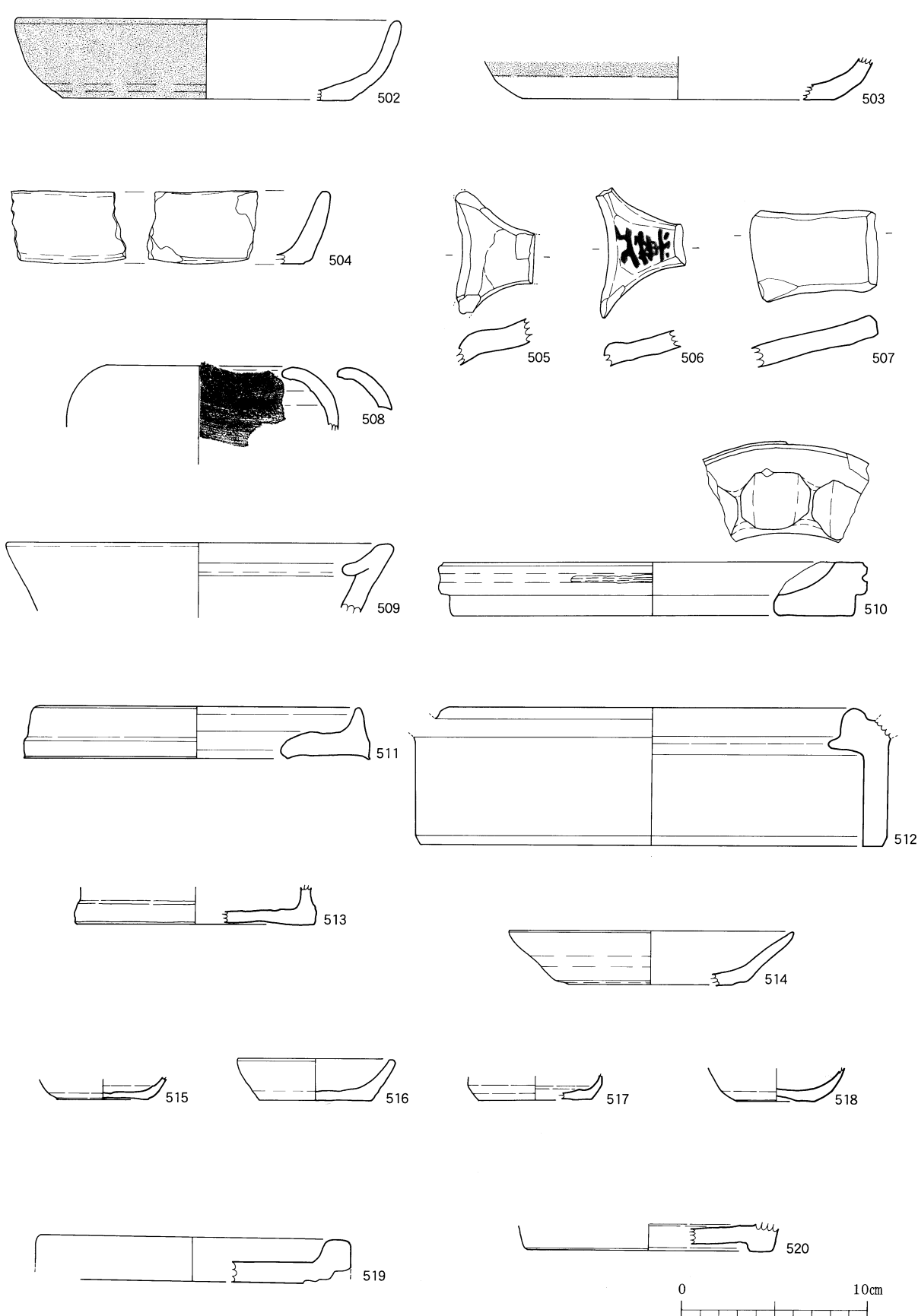
番号	器種	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
488	片口	—	陶器	20	—	—	内外面鉄釉 内面叩き目 胎土灰褐色	在地	I-3H-3	表
489	片口	—	陶器	—	—	9.2	内外面鉄釉 内面叩き目 胎土灰褐色	在地	I-3	表
490	鉢	—	陶器	14.8	—	—	内外面鉄釉 胎土灰黒色	在地	H-I-2379・879	I d上
491	鉢	—	陶器	15.4	—	—	内外面鉄釉 胎土黒灰色	在地	H-I-231026	I c上
									H-I-23614	I d上
492	鉢	—	陶器	36	—	—	灰釉 胎土	在地	H-I-23589	I d上
493	鉢	—	陶器	31.8	—	—	内外面鉄釉 胎土黒褐色	在地	C-4	表
494	鉢	—	陶器	28.3	—	—	内外面鉄釉 胎土赤褐色	在地	H-I-2.3	I c上
									H-I-31014	I c
495	鉢	—	陶器	22.4	—	—	内外面鉄釉 胎土黒褐色	在地	H-I-23976・783	I d上
496	甕	—	陶器	26	—	—	内外面鉄釉 口唇部目跡 胎土赤褐色	在地	H-I-2.3	表
497	壺	—	陶器	15.4	—	—	外面鉄釉 内面灰釉 胎土赤褐色	在地	H-I-3	I c
498	不明	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉 胎土赤褐色	在地	H-I-2.3	表
499	不明	—	陶器	—	—	11.8	内外面鉄釉 胎土明赤褐色	在地	H-3	表
500	不明	—	陶器	16.2	4.0	14.8	花文の象嵌 胎土灰褐色	在地	H-I-23740	I d下
501	羽釜	—	陶器	鏝径30	—	—	鏝部より下煤付着 胎土灰白色	在地	H-I-3	表

(7) 土師質土器 (第106図)

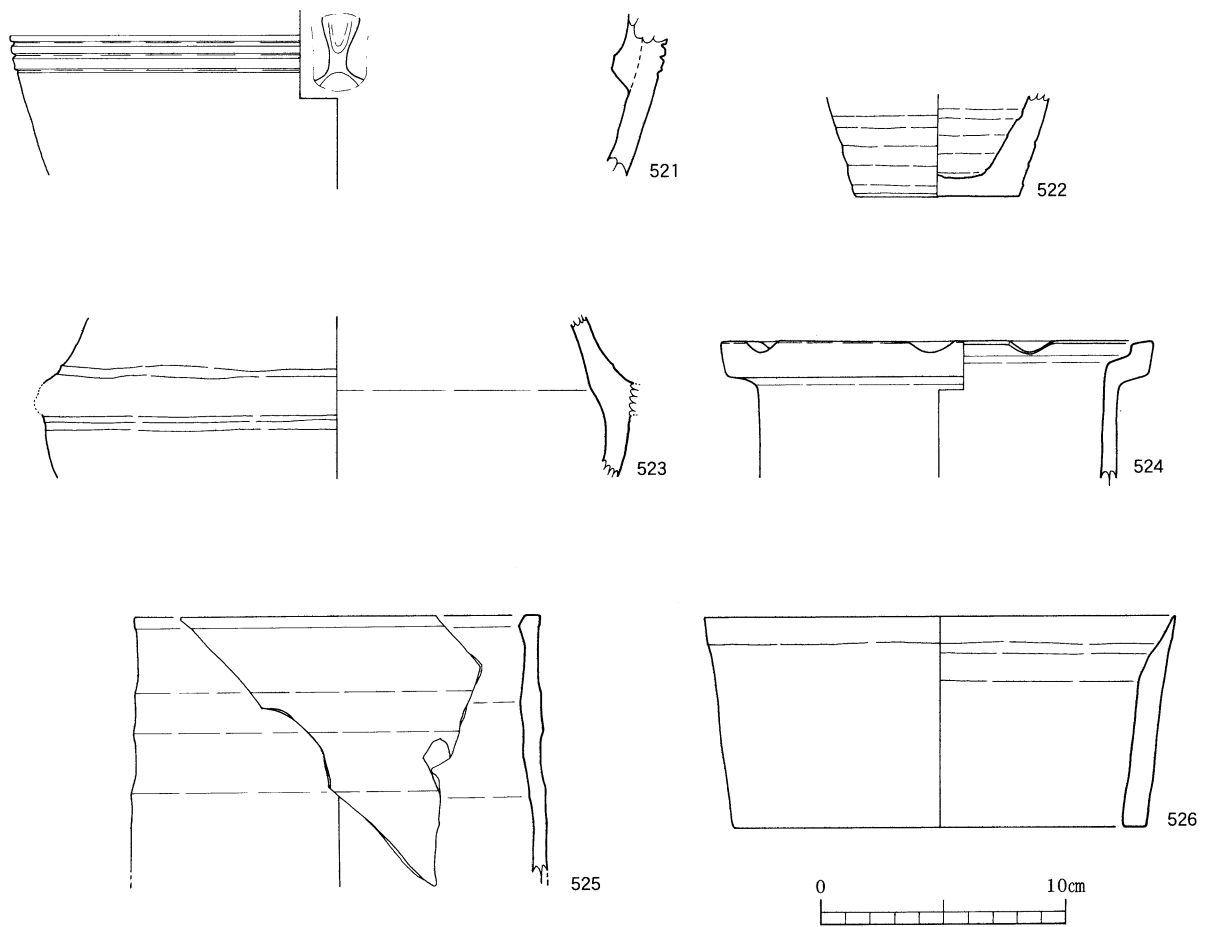
502~520は土師質の土器である。502~504は焙烙で、502・503は外面全体に、504は口縁部の一部に煤が付着している。505~507は焙烙の把手部で、505・506は下面にわずかに煤が付着している。506は把手上部に「北葉」に似た文字が墨書で記されている。508は口縁部が内湾する器形で、火舎と思われる。口縁部外面は研磨されており、内面には煤が薄く付着している。509~513・519・520は火舎等直接火炎に体部をさらす資料で、509・511・513は内面に、510は外面に煤が付着している。514~518は灯明皿と思われるもので、515~517は底面が糸切りされ、518はヘラ切りされている。514は外面に煤が付着し、515・516は外面に薄く付着している。

(8) その他 (第107図)

521~526は用途不明の遺物である。521は外面に3条の不間隔の沈線が見られ、内面には煤が付着している。522は厚手の器壁で底面はナデられ、調整方法が読みとれない。523は内外面に煤が付着する陶器質のもので、羽釜形の鏝に当たる部分が見られる。529・530は低火度で焼成されたため釉薬が熔解しておらず、胎土も淡黄燈色を呈する。526は素焼きの土器で内面には煤が付着している。



第106図 II地区出土遺物(8) 土師質土器



第107図 II地区出土遺物(9)

第29表 II地区出土遺物一覧表・その他(土師質土器・陶器) 1

番号	器種	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
502	焙烙	—	土師質	20.4	4.4	15.6	外面煤付着 胎土灰黄色	—	一括	0~II
503	焙烙	—	土師質	—	—	16.8	外面煤付着胎土灰白色	—	H・I-23851	I d上
504	焙烙	—	—	縦3.9	横5.7	高3.9	外面煤付着	—	一括	0~II
505	焙烙	—	土師質	縦6.5	横3.8	厚1.2	柄部 胎土灰白色	—	C-3	表
506	焙烙	—	土師質	縦7.1	横4.0	厚1.1	柄部内面に「葉」文字有り	—	一括	I~II
507	焙烙	—	土師質	縦4.9	横6.8	厚1.3	柄部 胎土灰白色	—	H・I-2.3	表
508	火舎	—	陶器	10	—	—	口縁部煤付着 胎土明赤褐色胎土	—	一括	0~II
509	火舎	—	土師質	20.6	—	—	灰白色	—	一括	0~II
510	不明	—	土師質	22.6	3	21.4	外面煤付着 胎土明赤褐色	—	H・I-3	I c
511	不明	—	土師質	17.6	2.8	18.6	胎土明灰褐色	—	一括	0~I

第30表 II地区出土遺物一覧表・灯明皿・その他（土師質土器・陶器）2

番号	器種	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
512	不明	—	土師質	22	7.4	25	脚部か? 胎土明赤褐色	—	一括	0~II
513	不明	—	土師質	—	—	12.8	胎土明赤褐色	—	一括	0~II
514	灯明皿	—	土師質	15.2	2.9	8.8	胎土明褐色	—	—	表
515	灯明皿	—	土師質	—	—	5	糸切り底	—	H-I-2.3630	I d下
516	灯明皿	—	土師質	8.6	2.3	6.1	糸切り底 胎土灰白色	—	H-I-2.3762	表
517	灯明皿	—	土師質	—	—	6.1	糸切り底	—	H-I-2.3667-668	I c
518	灯明皿	—	土師質	—	—	4.2	胎土灰白色 底面ヘラ切り	—	H-I-2.3	I d上
519	不明	—	土師質	16.8	2.4	12	—	—	一括	0~II
520	不明	—	土師質	—	—	13.4	胎土明褐色	—	H-I-2.3	I c
521	不明	—	土師質	—	—	—	内面煤付着 胎土明赤褐色	—	一括	0~II
522	不明	—	土師質	—	—	6.8	土師質 胎土明褐色	—	H-I-2.3778-620	I d上
523	不明	—	土師質	—	—	—	羽釜の可能性の有り 土師質 内面煤付着 胎土明褐色	—	H-3	表
524	不明	—	土師質	17.4	—	—	土師質 胎土浅黄燈色	—	一括	0~II
525	不明	—	土師質	16.6	—	—	土師質 胎土浅黄燈色	—	C-3	表
526	不明	—	陶器	19.2	8.7	16.8	内面煤付着 胎土明褐色	—	一括	0~II

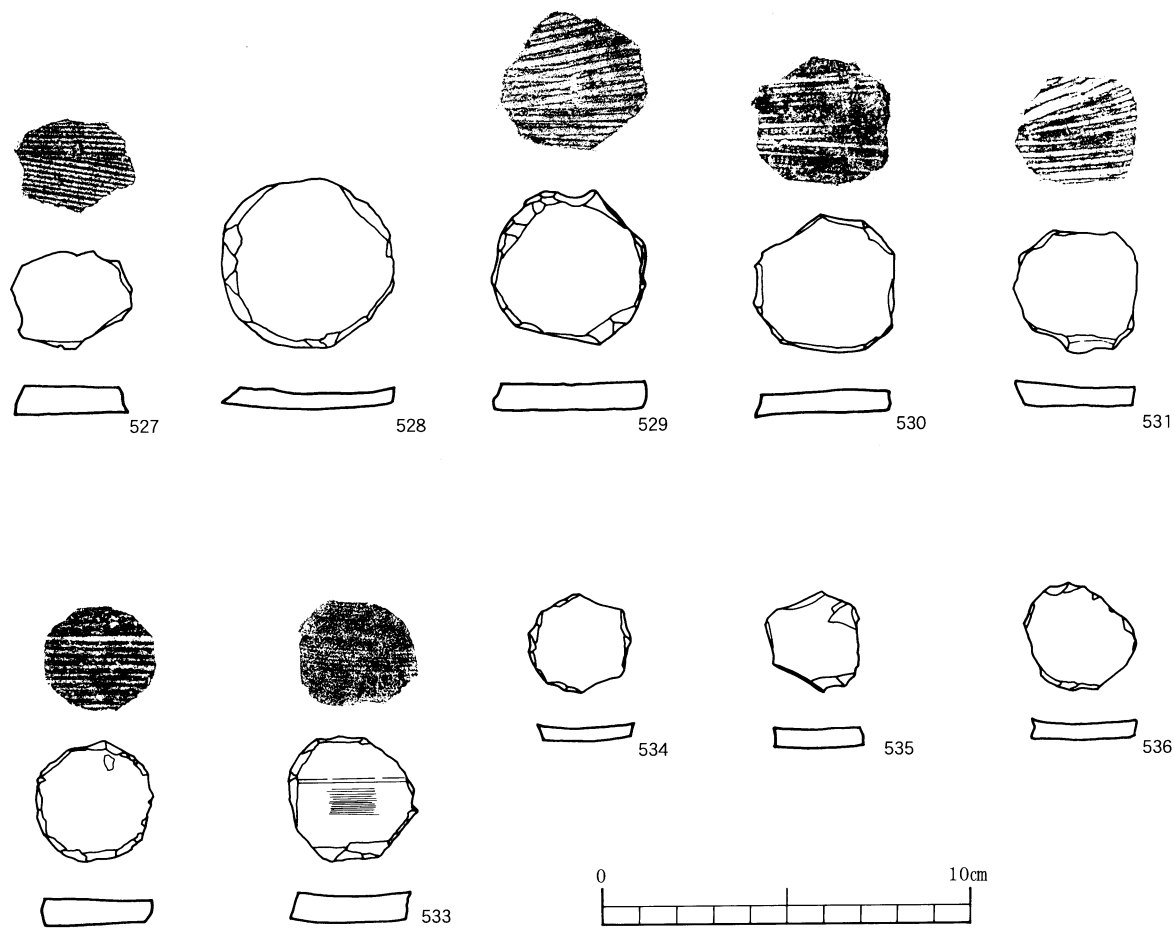
(9) メンコ (第108図)

527~536はメンコとして報告する。掘り鉢や壺等の破片を利用し、破砕面を丸くメンコ状に加工したものである。

527・529~533は、内外面に鉄釉が掛けられた掘鉢を転用したもので、528・534~536は、鉢・甕・壺等からの転用と考えられ、535のみ内面が無釉で、他は内外面とも鉄釉が施されている。

第31表 II地区出土遺物一覧表・メンコ (陶器)

番号	器種	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
527	メンコ	—	陶器	縦3.3	横2.5	厚0.9	胎土赤褐色 掘鉢転用	—	H-I-2.3886	I d上
528	メンコ	—	陶器	縦4.7	横4.6	厚0.6	胎土黒褐色	—	H-I-2.3979	I d上
529	メンコ	—	陶器	縦4.2	横4.1	厚0.8	胎土暗赤褐色 掘鉢転用	—	—	—
530	メンコ	—	陶器	縦3.8	横3.7	厚0.6	胎土暗赤褐色 掘鉢転用	—	H-I-2.31078	I d上
531	メンコ	—	陶器	縦3.3	横3.3	厚0.7	胎土赤褐色 掘鉢転用	—	H-I-2.3735	I d下
532	メンコ	—	陶器	縦3.2	横3.3	厚0.8	胎土赤褐色 掘鉢転用	—	H-I-2.3987	I d上
533	メンコ	—	陶器	縦3.4	横3.5	厚0.8	胎土赤褐色 掘鉢転用	—	H-I-2.3919	I d上
534	メンコ	—	陶器	縦2.8	横2.1	厚0.5	胎土黒褐色 内面無釉	—	H-I-2.3964	I d上
535	メンコ	—	陶器	縦2.7	横2.6	厚0.6	胎土褐色	—	H-I-2.3945	I d上
536	メンコ	—	陶器	縦2.8	横2.9	厚0.5	胎土黒褐色	—	H-I-2.3 682	I c



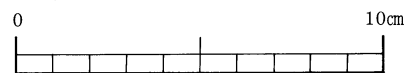
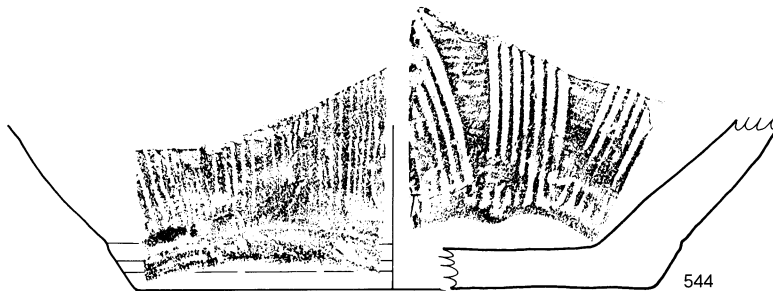
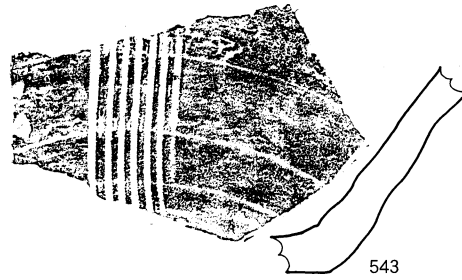
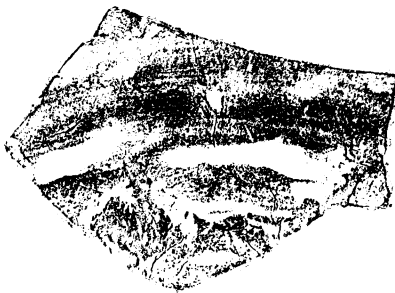
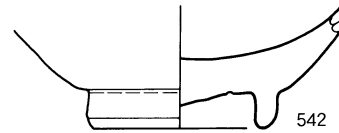
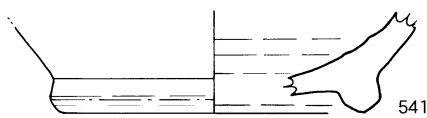
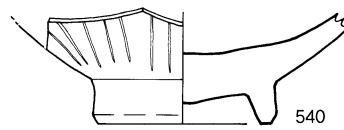
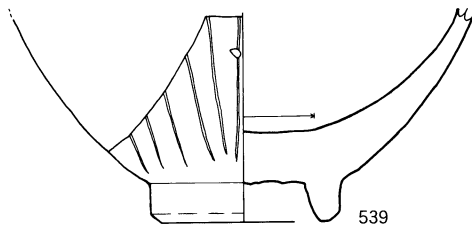
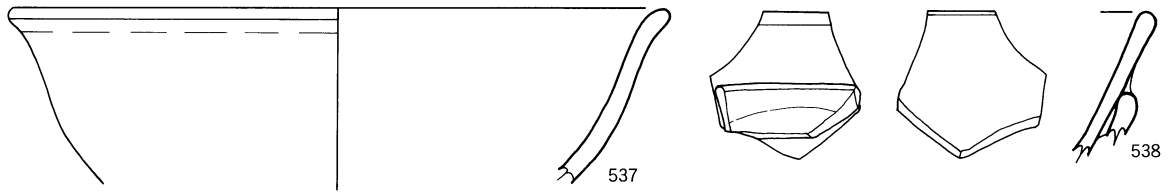
第108図 II地区出土遺物(10) メンコ(陶器)

(10) 中世の遺物 (第109図)

537～544は中世の遺物である。537～542は青磁である。537～540・542は碗で、537は端反形の器形を呈する。538は外面に他の碗の口縁部が熔着した窯傷のある資料である。539・540は外面に細連弁文が施され、542は貫入が大きく入るもので、15世紀後半～16世紀にかけての資料である。539は見込みと高台内が、540・542は高台内が釉剥ぎされている。541は内面が無釉で、袋物と思われる。産地は国内・外不明である。543・544は播鉢である。内外面とも無釉で、内面は摩滅している。

第32表 II地区出土遺物一覧表・碗(磁器)・播鉢

番号	器種	器形	材質	法量(cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
537	碗	—	磁器	17.8	—	—	青磁	明	H-I-3	Ic
538	碗	—	磁器	—	—	—	青磁	明	H-I-23 808	Id上
539	碗	—	磁器	—	—	4.6	青磁 見込高台内無釉	明	H-2 1054	Id上
540	碗	—	磁器	—	—	4.4	青磁 高台内無釉	明	H-I-23 566	Id上
541	不明	—	磁器	—	—	8.2	青磁 内面無釉	?	H-I-23 1009	Ic下
542	碗	—	磁器	—	—	4.6	青磁 高台内無釉 貫入	明	H-I-3	Ic
543	播鉢	—	陶器	—	—	—	胎土暗赤灰色	在地	H-I-23土坑	—
544	播鉢	—	陶器	—	—	14.4	外面櫛目胎土灰黄褐色	在地	H-I-3	表



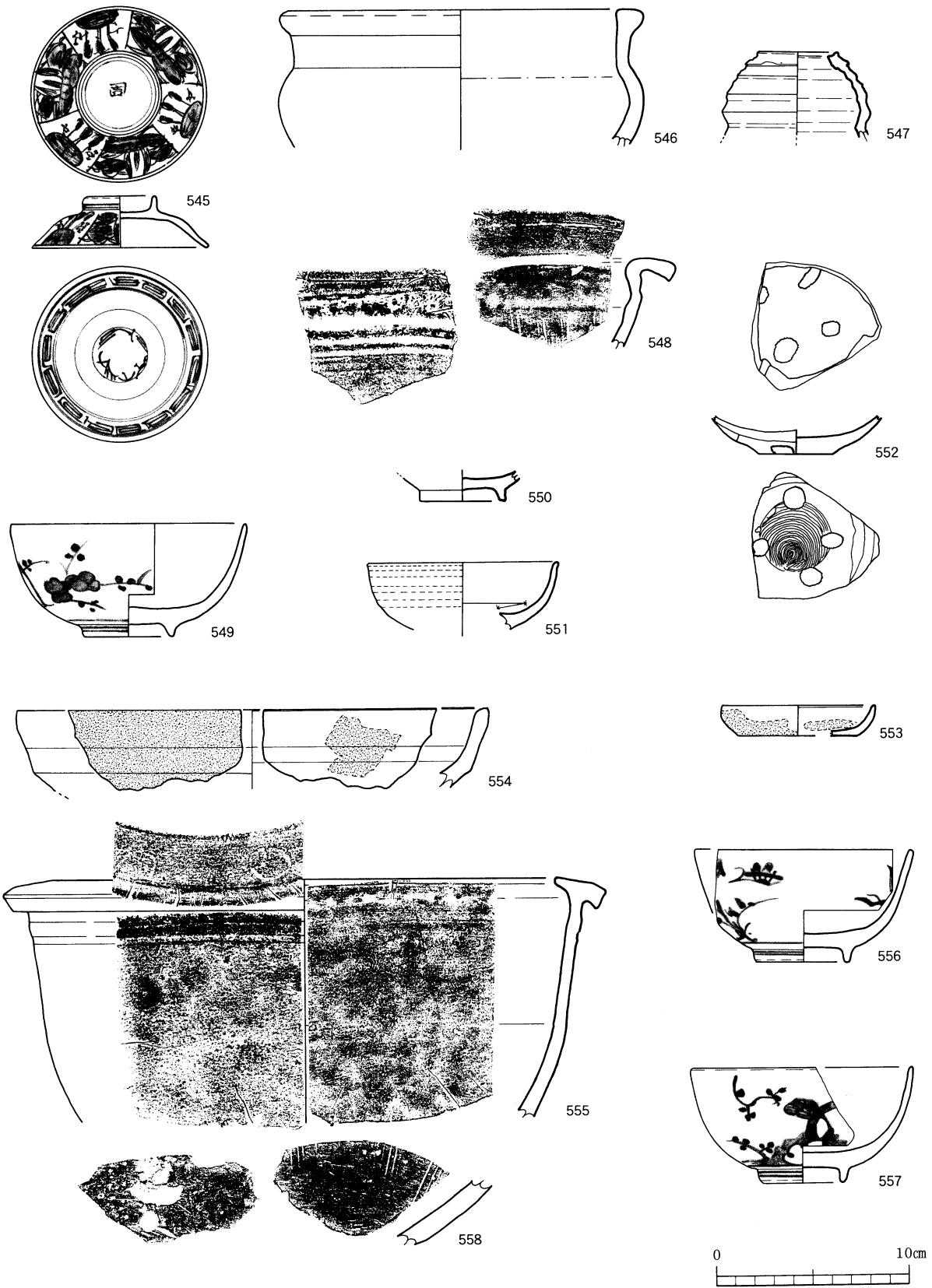
第109図 II地区出土遺物(11) 中世の遺物(青磁・播鉢)

(11) 確認トレンチ内出土の遺物 (第110図)

545～558はトレンチ内出土の遺物である。545・546はトレンチ2内出土の資料で、545は蓋である。546は黄白色の胎土に透明釉が掛けられた、香炉と思われる在地系の資料である。547・548はトレンチ3出土の遺物で、547は焼き締めの小壺であると思われる。548は、内外面鉄釉が掛けられた在地系の擂鉢である。549～555はトレンチ4内出土の遺物である。549は外面に梅文が描かれ、やや黄緑がかった釉調を呈する丸形の碗で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが観察される。550は緻密な灰白色の胎土に、褐釉が総釉で掛けられた碗の底部で、山元窯の製品である。551は灰色の陶胎に内外面緑釉が掛けられた小形の碗で、口縁部はわずかに外反し、見込みには蛇ノ目釉剥ぎがみられる。552は淡茶褐色の陶胎に鉄釉が内面と外面底面脇まで掛けられ、底面は糸切り底を呈する。内面と、外底には4カ所の目跡が看取される。553は土師質の灯明皿で、口縁部内外面には煤が付着しており、胴部下位はヘラ削りで面取りが施されている。外底はヘラ切りである。554は外面全体と内面の一部に煤が付着した焙烙である。555は黒褐色の胎土に内外面鉄釉が掛けられた在地系の鉢で、口縁部は折り返して肥厚させ、T字状を呈する罫縁を作り出している。556～558はトレンチ9出土の遺物である。556は草花文が描かれた丸形の碗である。557は腰部がやや張った器形の丸形碗で、外面には梅雪輪文が描かれている。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが看取される。558は中世の瓦質の擂鉢で内外とも無釉である。

第33表 II地区出土遺物一覧表・確認トレンチ出土遺物

番号	器種	器形	材質	法量 (cm)			備考	産地	出土地点 (取り上No)	層
				口径	器高	底径				
545	蓋	—	磁器	9.1	2.7	つまみ径3.7cm	つまみ内面銘「吉」内面雷文見込松竹梅文	肥前系	T2(16)B-3,4	I b
546	香炉?	—	陶器	19	—	—	内面無釉他透明釉胎土黄白色	在地	T2B-3,4	I b
547	壺?	—	陶器	4.2	—	—	内外面とも無釉胎土茶褐色	肥前系	T3(139)H-2	I b
548	擂鉢	—	陶器	—	—	—	内外面鉄釉	在地	I-3	表
549	碗	丸形	磁器	—	—	4.7	花文(梅?)蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系	T4(227)I-2,3区	I d
550	碗	—	陶器	—	—	—	褐釉胎土灰白色	在地	T4(369)I-2,3区	I f
551	碗	端反	陶器	10	—	—	見込蛇ノ目釉剥胎土灰色 円外面緑釉	在地	T4(255)I-2,3区	I d
552	灯明皿	—	陶器	—	—	3.8	見込、底部に目跡4ヶ所糸切り底胎土淡茶褐色	在地	T4(70)I-2,3区	I b
553	灯明皿	—	土師質	8	—	—	内面口縁部に煤付着ヘラ切り胎土灰白色	—	T4(238)I-2,3区	I f
554	焙烙	—	土師質	24.4	—	—	外面煤付着胎土灰白色	—	T4(232)I-2,3	I d
555	鉢	—	—	31.4	—	—	鉄釉口唇部貝目胎土黒褐色	—	T4(292) I-2,3	I d
556	碗	丸形	磁器	11.4	6	4.7	草花文	肥前系	T9 E-2区	表
557	碗	丸形	磁器	—	—	—	梅雪輪文	肥前系	T9	表
558	擂鉢	—	陶器	—	—	—	胎土灰褐色 (中世)	—	T9(469) E-2区	I b



第110図 II地区出土遺物(12) 確認トレンチ出土遺物

2) 瓦 (第111・112図・図版38・39)

559～561は丸瓦である。559の裏面にはヘラ状工具によるケズリ痕と部分的に布目痕とが、表面には篋切り痕が観察できる。表面中央には刻印があるが、字形は不明である。560は石英もしくは滑石の粉末と思われる鉱物を多量に含んだ瓦である。559より径が若干小さめである。

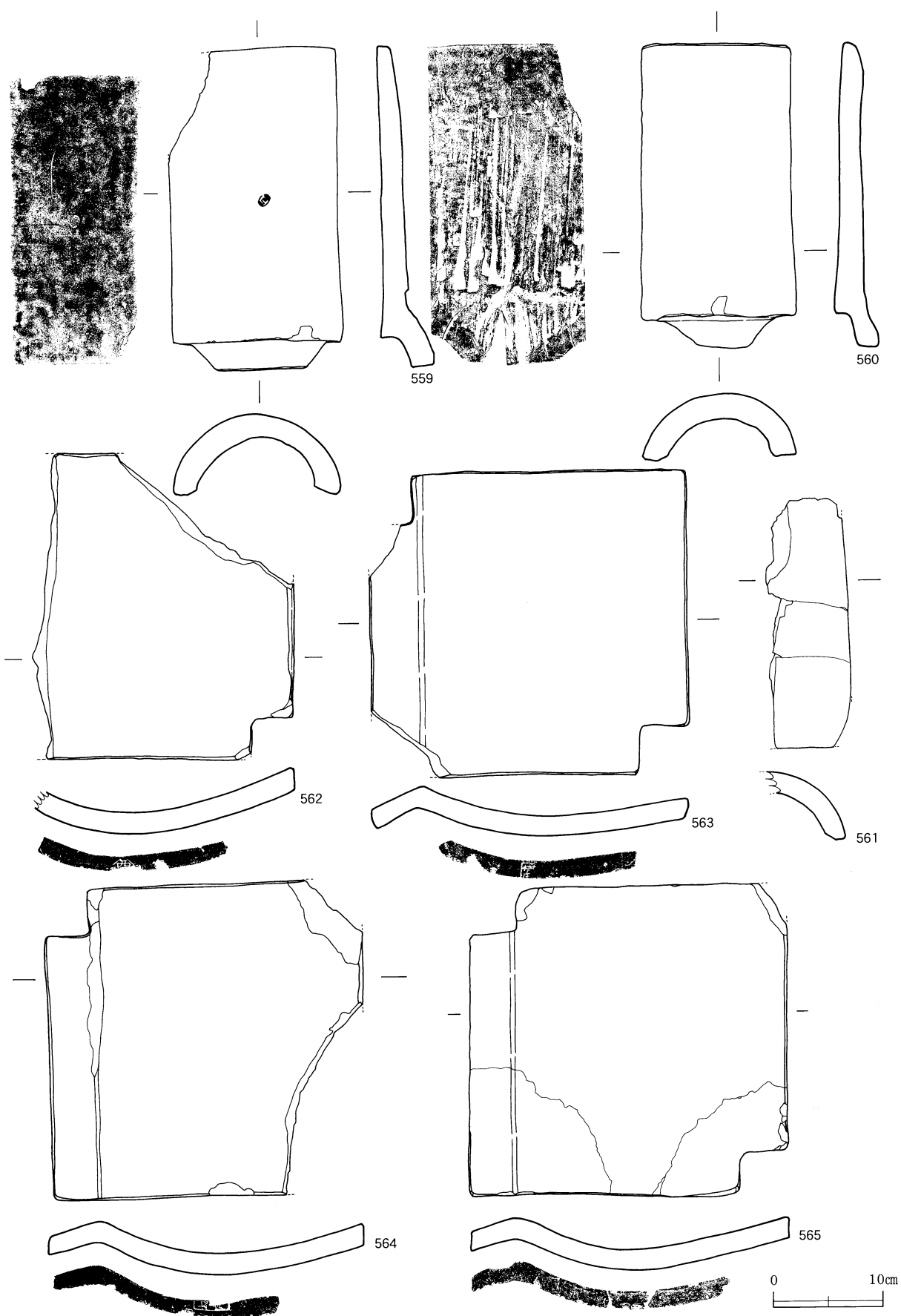
562～565は平瓦である。いずれも裏面には若干ケズリ痕跡が残るものの、全体的に丁寧なナデ調整が行われている。胎土の違いからは、562や564のように礫が混じり空気が抜け切れていないものと、563や565のように胎土が精選され、緻密なものとの2種類がある。また、562～564の側面には刻印が見られる。562は「𠄎」、563は「𠄎」, 564は「𠄎」と判読できる。

566～569は軒平瓦である。いずれも全体的に丁寧なナデ調整が行われている。軒平瓦においても平瓦と同じように胎土の違いから、566や568のように礫が混じり空気が抜け切れていないものと、569のように胎土が精選され、緻密なものとの2種類に分けることができる。この2分類は唐草文の図柄の違いにも現れている。566や568では外から2枚目の花卉の先が2枚に分かれ、3枚目の花卉の先が丸く収まっているのに対して、567や569では2枚目の花卉の先が丸く収まり、3枚目の花卉の先が2枚に分かれている。また、566・567・569の側面には刻印が見られる。566は「⊕」、567は「𠄎」、569は「⊕」と判読できる。

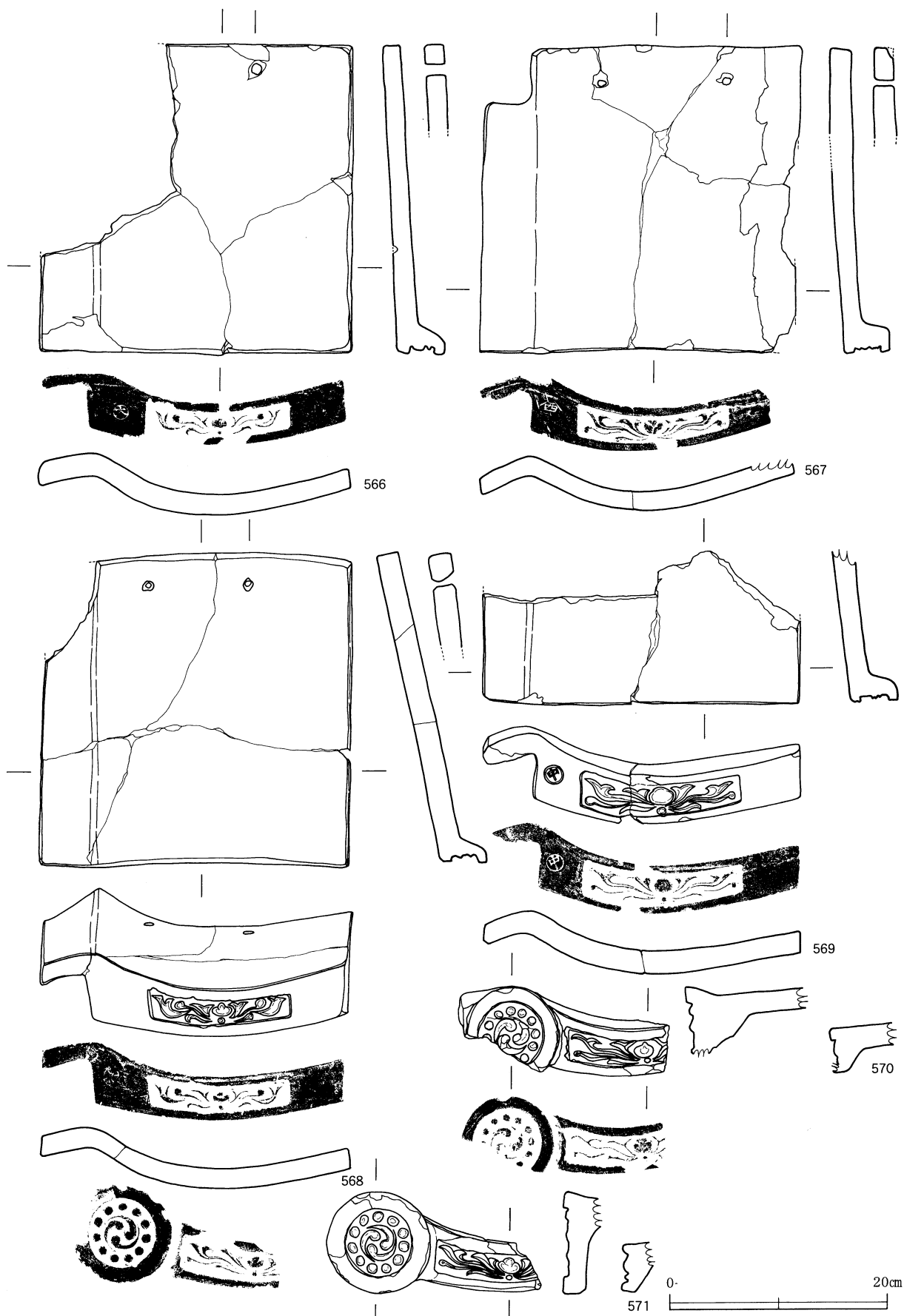
570・571は軒丸瓦と軒平瓦とが一体となった軒棧瓦である。軒棧瓦も平瓦や軒平瓦と同じように、胎土などの違いから2種類に分けることができた。570は精選された緻密な胎土からできた瓦で、重量がある。軒丸部の連珠文は残存で9個を数え、丸味は小さめである。軒平部の唐草文は曲線的に描かれている。I地区で出土した273の軒棧瓦と同種である。571は礫が混じり空気が抜け切れていない瓦で、軽量である。軒丸部の連珠文は11個を数え、丸味は大きめである。軒平部の唐草文は直線的に描かれている。I地区で出土した274・276・277の軒棧瓦と同種である。軒丸部の巴文はいずれも左巻きである。

第34表 II地区出土遺物一覧表・瓦

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
111	559	丸瓦	B	表	(127)	26.90	15.40	2.10	1700
	560	丸瓦	B		(128)	25.00	14.20	2.30	1320
	561	丸瓦	C-3	表	(125)	22.90	7.50	1.90	550
	562	平瓦	B		(135)	27.80	24.00	2.20	1450
	563	平瓦	B		(138)	27.40	28.70	1.90	2250
	564	平瓦	B		(137)	28.50	28.80	2.00	1960
	565	平瓦	B		(133)	28.20	28.90	1.90	1950
112	566	軒平瓦	B		(123)	28.80	28.60	1.90	1650
	567	平瓦	B		(121)	27.80	28.90	2.10	2100
	568	軒平瓦	B		(124)	28.50	28.30	2.10	2400
	569	軒平瓦	B		(122)	14.00	29.10	2.20	1000
	570	軒棧瓦	B		(129)	8.8(径)	18.80	2.10	660
	571	軒棧瓦	B		(130)	9.4(径)	19.70	1.90	450



第111图 II地区出土遗物(13) 瓦(1)



第112图 II地区出土遺物(14)瓦(2)

3) 金属製品 (第113・114図, 図版40・41)

572～574は鉄製農具である。573は鎌の刃先か。574は鎌である。

575～582は四面を持った鉄製の和釘である。

583・584は煙管である。583は鉄製の吸口であるが、口付部が曲がってしまっている。584は銅製の雁首で、火皿と首部の角度が直角に近くなっている。古泉弘氏の形態編年によれば、19世紀にあたる第5段階に比定できる煙管である。

585は砲弾片である。略円錐形を呈すること、内側にねじ山が切つてあることから判断した。外面の残存最大径は7cm, 内面直径約1cm, 残存重量301.7gを測る。

4) 銭貨 (第114図, 図版42)

Ⅱ地区では、土壙に副葬された銭貨の他に、包含層中から6点の銭貨が出土した。ここでは包含層中の銭貨について記述する。副葬品の銭貨については、「土壙」(p.150)の項を参照されたい。

Ⅱ地区の包含層中から出土した銭貨は、寛永通宝5点(586～590)と洪武通宝1点(591)であった。寛永通宝は全て銅銭の一文銭である。586～588はH・I-2・3区に設定した確認トレンチで出土した。586は背面に「文」の字があることから2期(新寛永・文銭)に属し、587・588は3期に属する寛永通宝である。確認トレンチにおいては、3期に属するとされる588が2期に属するとされる586より上層から出土しており、出土状況はこの編年を裏付けている。589・590はB-3区で検出された瓦廃棄土坑から出土した寛永通宝である。いずれも3期に属する寛永通宝である。

591は洪武通宝である。

5) 骨製品 (第114図, 図版41)

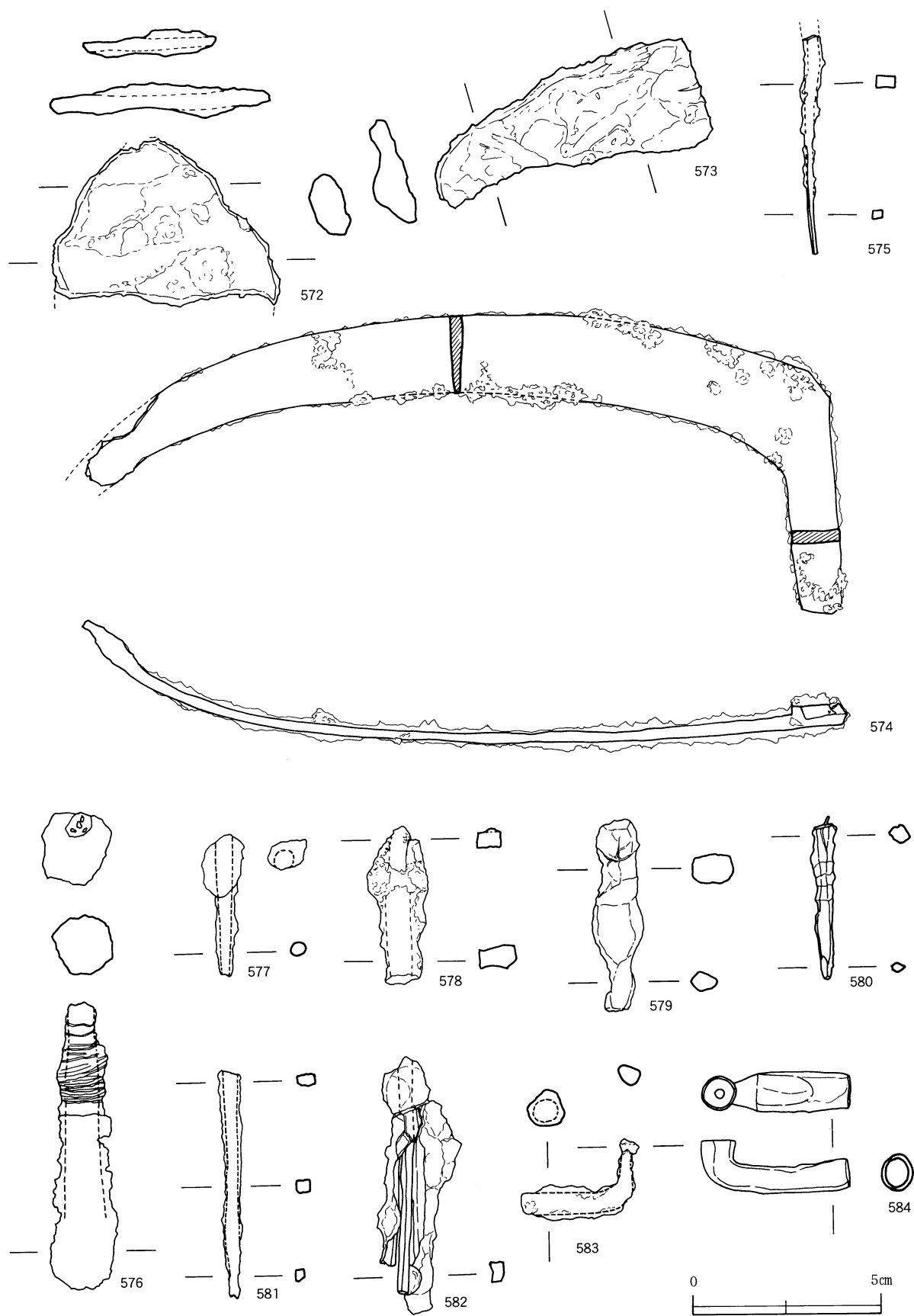
Ⅱ地区で出土した骨製品は、592の1点である。直径7mmの円柱状に加工し、先を斜めに割ることで、尖らしたものである。断面の形状から骨製品と判断した。ペン先とも考えられるが、用途は不明である。

6) 石製品 (第114～116図, 図版41・52)

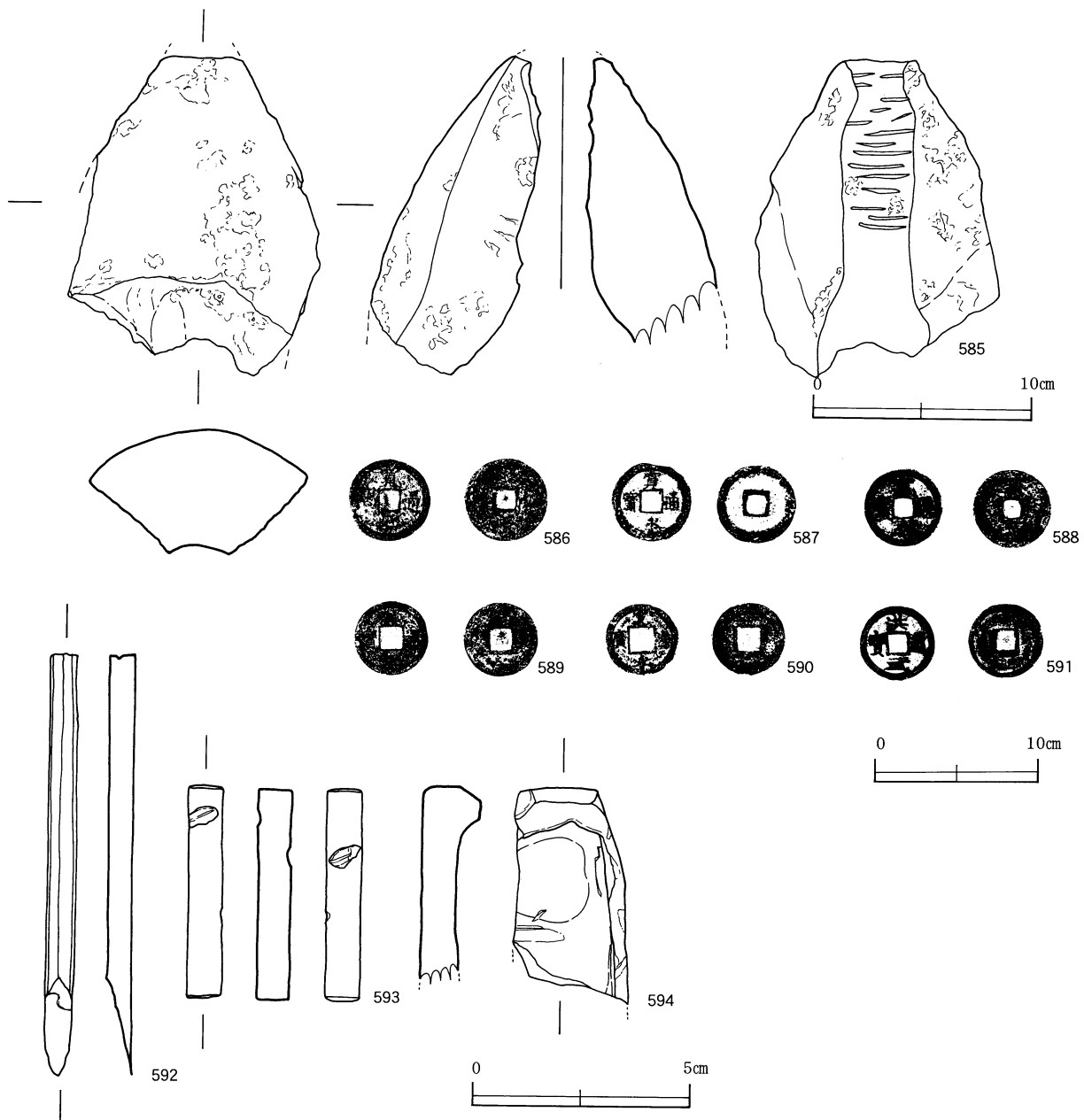
594は砂岩製の硯である。

第35表 Ⅱ地区出土遺物一覧表・鉄製品

挿図番号	レイアウト番号	器種	注記番号	出土地点	出土層位	材質	法量			備考	
							長(cm)	幅(cm)	重量(g)		
113	572	鉄製品	353	4T	I f	鉄	(4.50)	(6.10)	(25.02)		
	573	鉄製品	327	4T	I f	鉄	(3.00)	7.30	(26.07)		
	574	鎌	瓦廃棄遺構	B3	I	鉄	(19.80)	2.50	(60.16)		
	575	釘		H 3	表	鉄	(5.85)	0.35	(2.29)		
	576	釘	866	H 2.3	I d上	鉄	(7.65)	0.17	19.72		
	577	釘	387	4T	I f	鉄	(3.80)	0.45	(2.72)		
	578	鉄製品?	415	4T	I e	鉄	(4.20)	0.65	(7.64)		
	579	釘	331	4T	I f	鉄	(5.10)	1.30	9.09		
	580	釘	448		9T	I b	鉄	8.70	1.30	13.50	
	581	角釘			H 3	表	鉄	(6.10)	0.65	3.87	
	582	角釘			H 2.3	I c	鉄	(6.85)	0.70	(17.45)	2本分の角釘がまとまった物?
	583	釘	326	4T	I f	鉄	(4.10)	0.55	(3.44)		
	584	キセル			C4	表	鉄	(3.90)	0.85	(7.64)	
	114	585	銅製品	22	2T	I b	銅	(7.30)	5.70	(301.70)	
		592	石製品?		C4	表		(9.70)	0.70	(5.74)	
593				C4	表		(4.90)	0.90	(4.85)		
594		硯	694	H 2.3	I d上	石	(4.95)	(2.65)	(19.34)		



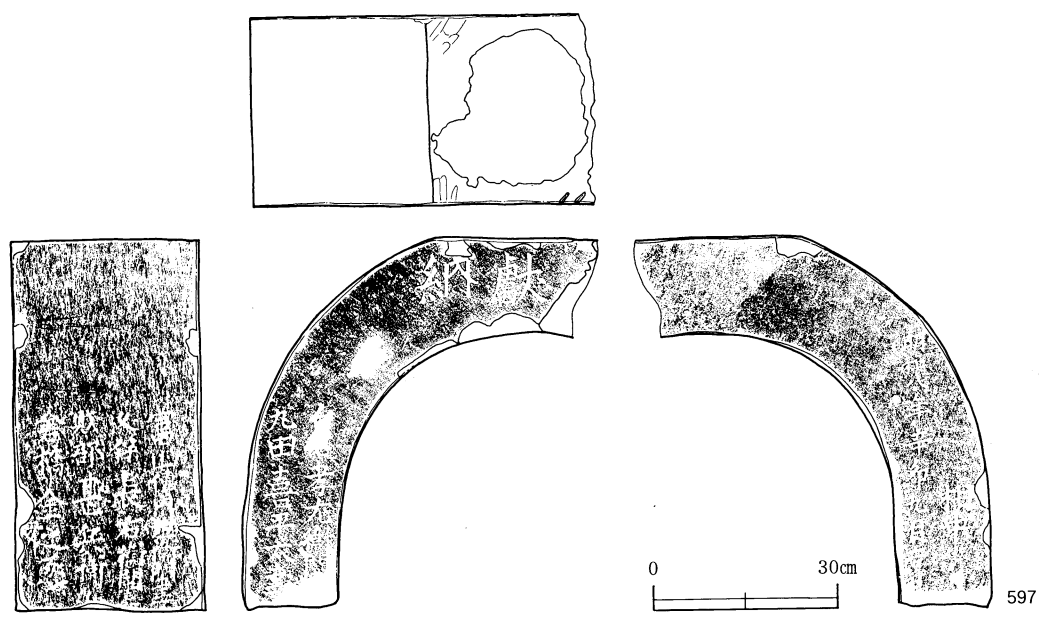
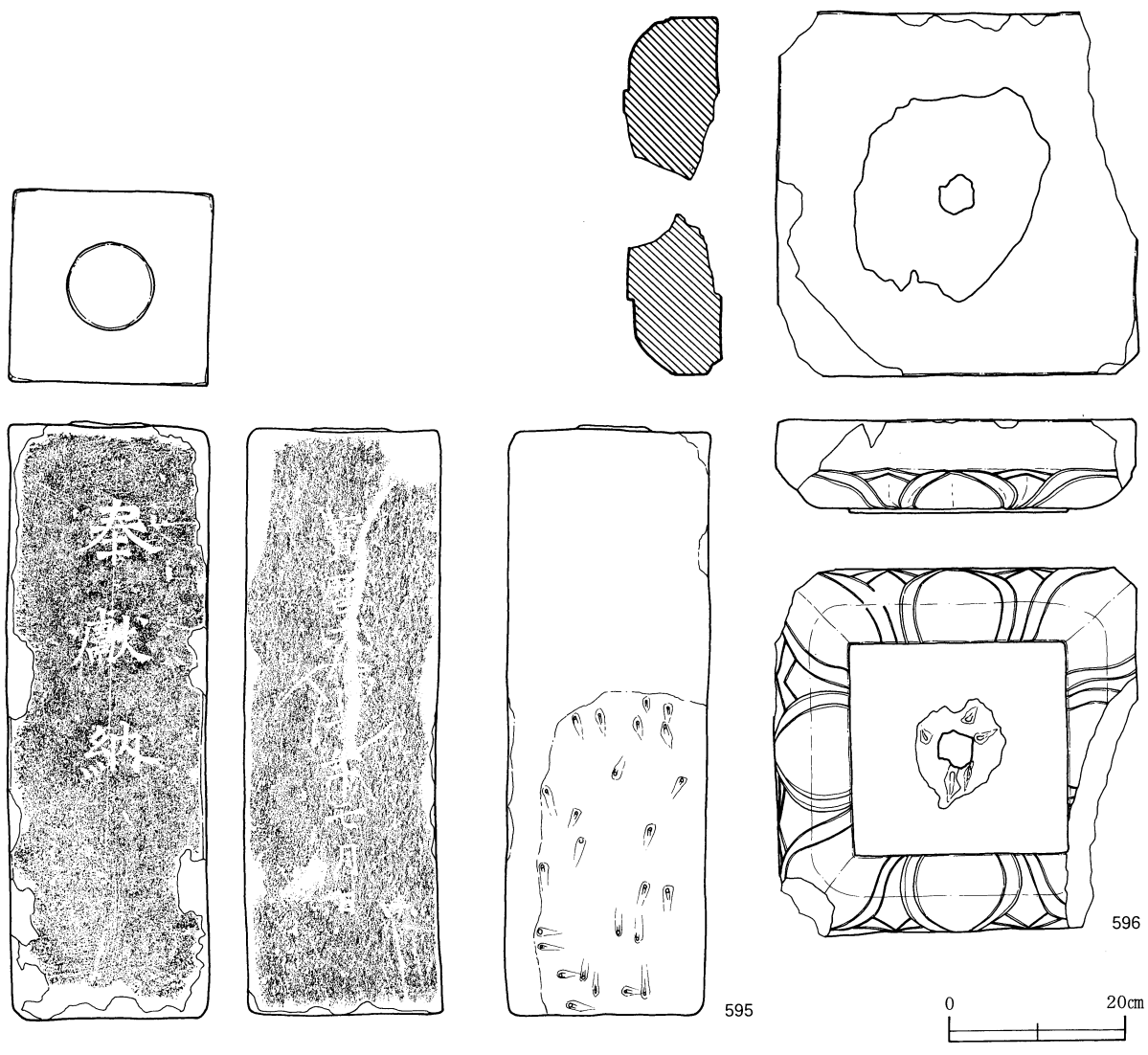
第113図 II地区出土遺物(15) 金属製品(鉄製品・銅製品)



第114図 II地区出土遺物(16) 金属製品・銭貨・石製品

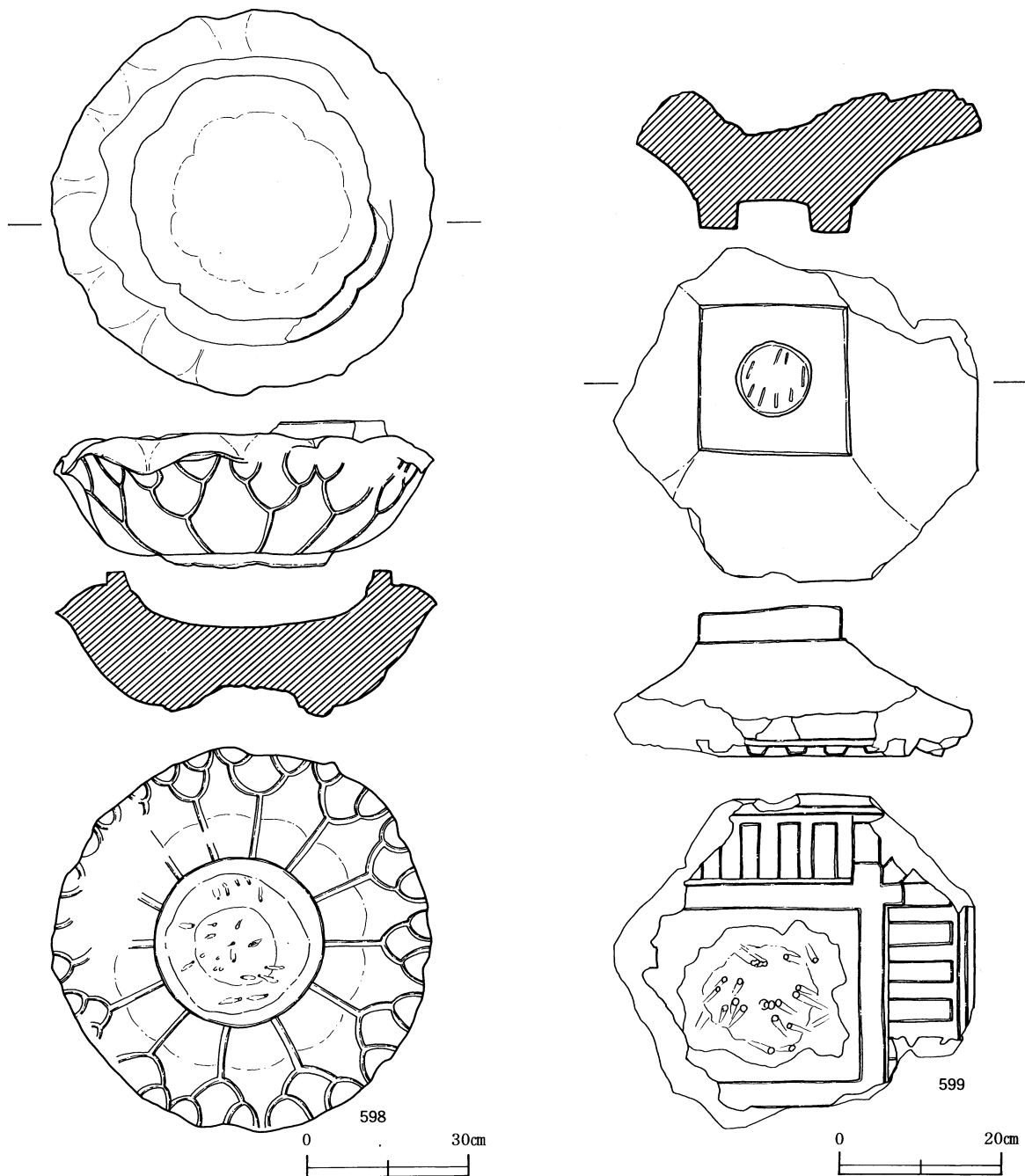
(5) 石製品

595は正面に「奉獻納」、右側面に「寶曆□□□年七月日」の銘が刻まれている角柱である。一辺23cm・高さ68.4cmを測る。背面の下半分は先端が尖った丸鑿による粗削りのままで終わっている。正面の銘の中央には割り付けのための垂線が引かれている。上面の中央には直径9.5cmの柄がみられるので、この上に他の部分ののっていたことが窺える。596は、一辺41.4cm・高さ10.8cmの受け台と考えられる。8枚の蓮花の反り花が表現されている。下面には直径9.6cmの柄穴が穿たれ、上面も粗く窪められて貫通している。上下に何らかの石が組み合わさっていたと推測される。下面の受け面が、一辺24.7cmであり、柄穴の直径を含めて595の角柱の上ののっていた可能性がある。597は高さ60cm、幅90cmに復元できるアーチである。正面上部には右から左へ「□獻納」、左下部には「□□孝尤衛門」「九田喜平太妻」の銘がある。左側面には「富山傳内□衛



第115图 II地区出土遺物(17) 石製品(1)

門妻 久保長右衛門 財部甚兵衛 倉橋金之丞 母」，裏面には「明和八年辛卯九月吉日 相中」の銘が刻まれる。上面は平坦につくられ、直径約27cmの接着に用いた白色の物質が残る。598は蓮の花を形どった手洗鉢である。上面から見ても水をはる部分は8枚の花弁状につくられ、石であっても柔らかな曲線で表現された丁寧なつくりのものである。花卉の境は浮き出しで表現している。下面から見ると13枚の花弁が表現されている。下面は鑿を用いて粗く彫り窪めてあるので、この下に何らかの台があったと考えられる。599は一辺50cm・高さ19cmに復原できる屋根を模した笠石である。屋根部分は厚みはないが反りがはっきりしている。垂木は一辺に6本づつ表現されている。上面は直径9cm・深さ3.6cmの柄穴が開き、下面は鑿による粗彫りを行っている。



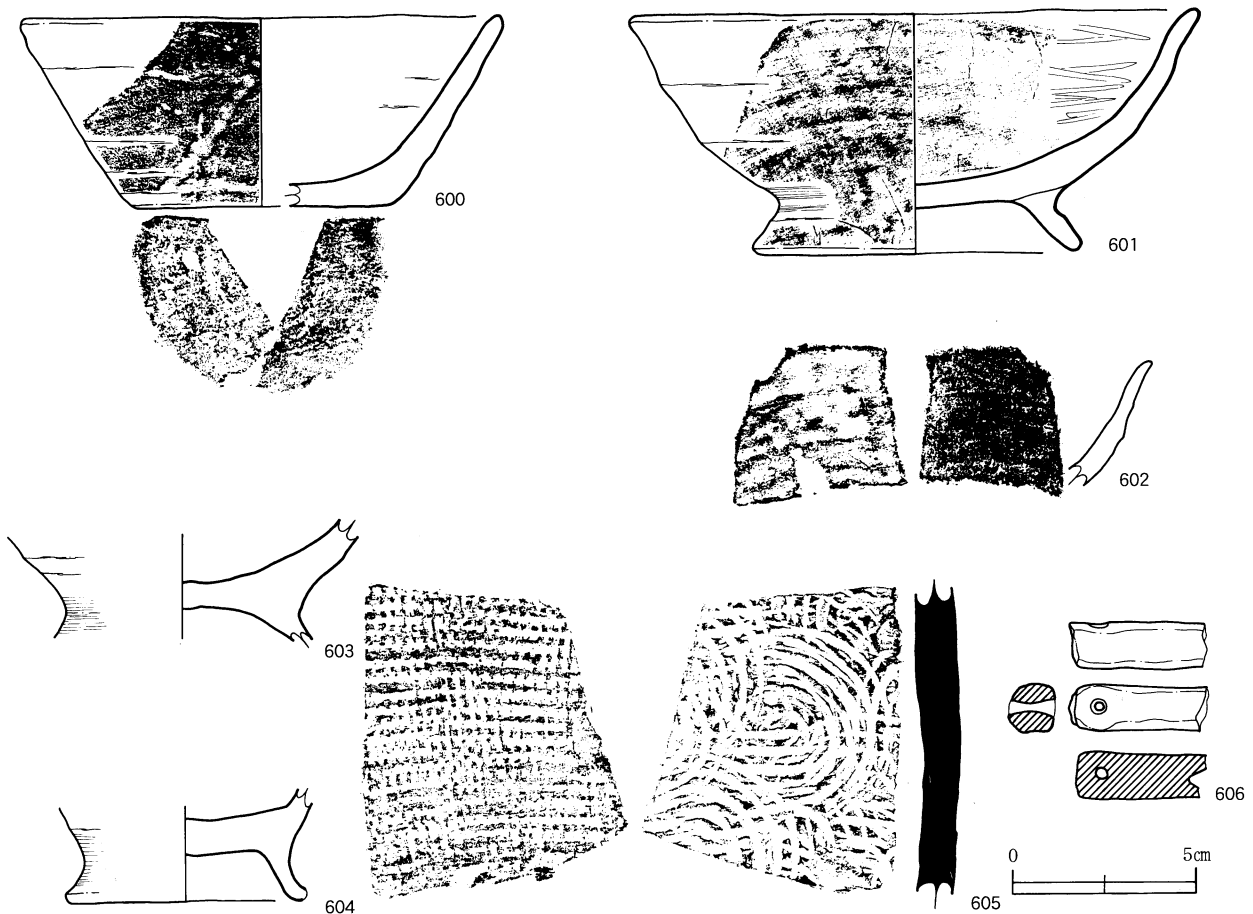
第116図 II地区出土遺物(18) 石製品(2)

(6) 古代の遺物

600は推定復元で、口径13.1cm、底径6.9cm、高さ5.2cmを測る杯形の土師器である。底部の切り離しは、回転ヘラ切りによるものであり、体部はほぼストレートに立ち上がる。内外面とも水挽きの後に、光沢がでるような調整を行っている。外面には火襻状の黒斑がみられる。601は推定復元で、口径15.5cm、底径9cm・高さ6.6cmを測る碗形の内黒土師器である。回転水挽き技法により整形し、体部は丸みを帯びる。内面は研磨し、煤を吸着させて黒色化する。外面は黄白色で水挽き痕を残す。高台の高さは1.4cmで、底部の切り離し方法は確認できない。602は碗形土器の一部と考えられる。回転水挽き技法による整形で、腰部がやや丸みを帯びている。603は碗形の土師器である。

604は碗形の土師器である。高台端部が欠けているので正確な底径ではないが6.7cm測る。腰部で一旦折れるようにして体部へ続く様子が窺える。605は大型の須恵器の一部である。外面は格子状のタタキ目、内面は同心円状のタタキ目が施される。器壁は10mmを測る。胎土は2種類を使用しており、赤紫色のものと黄桃色に分かれる。606は双孔の棒状土錘の半欠品と考えられる。中央部は径11mmの円形であるが、端部の孔に平行する一面はやや平らになっている。

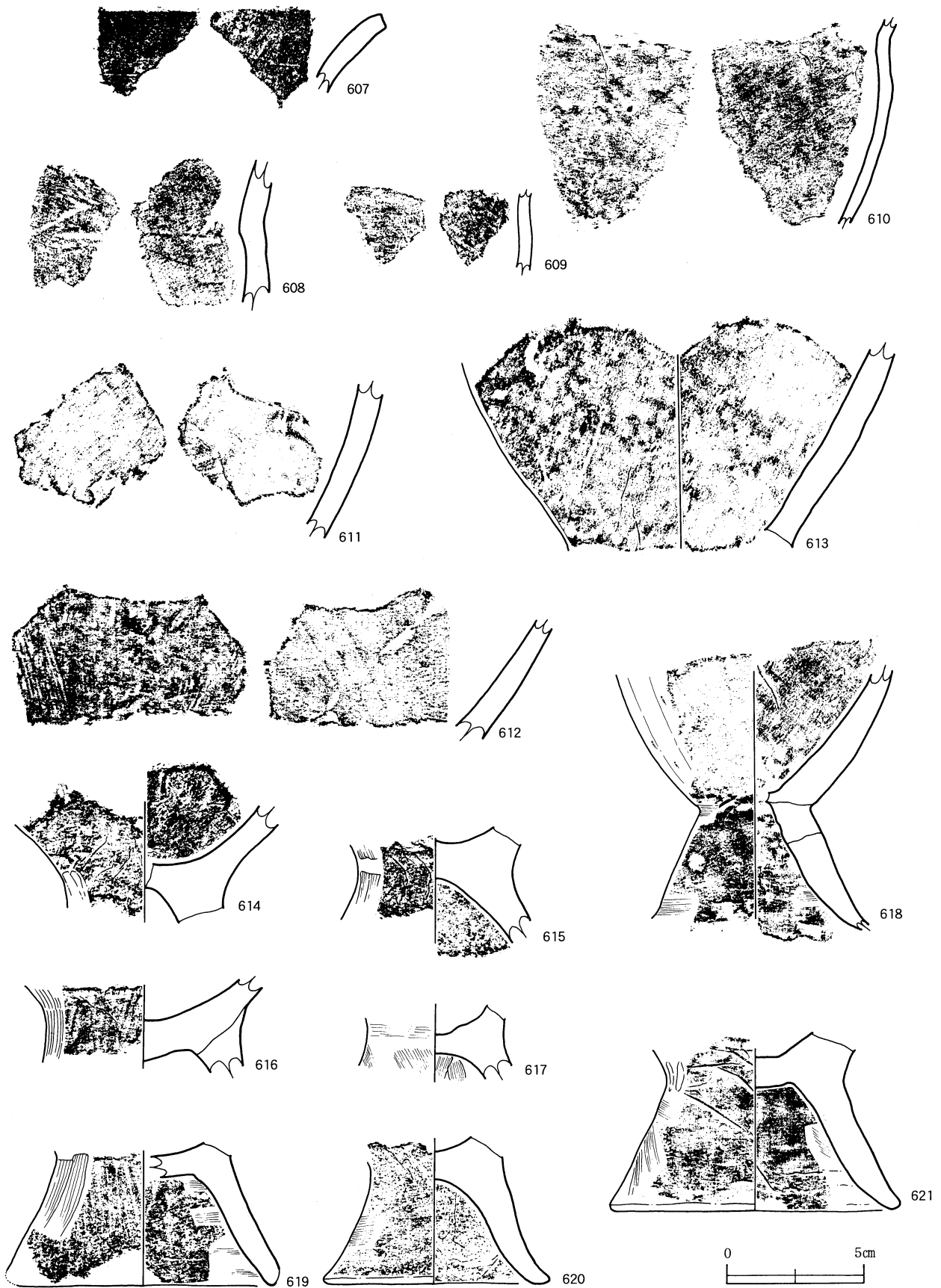
以上の遺物は、土師器の器形の特徴から古代後半の時期に位置づけられよう。



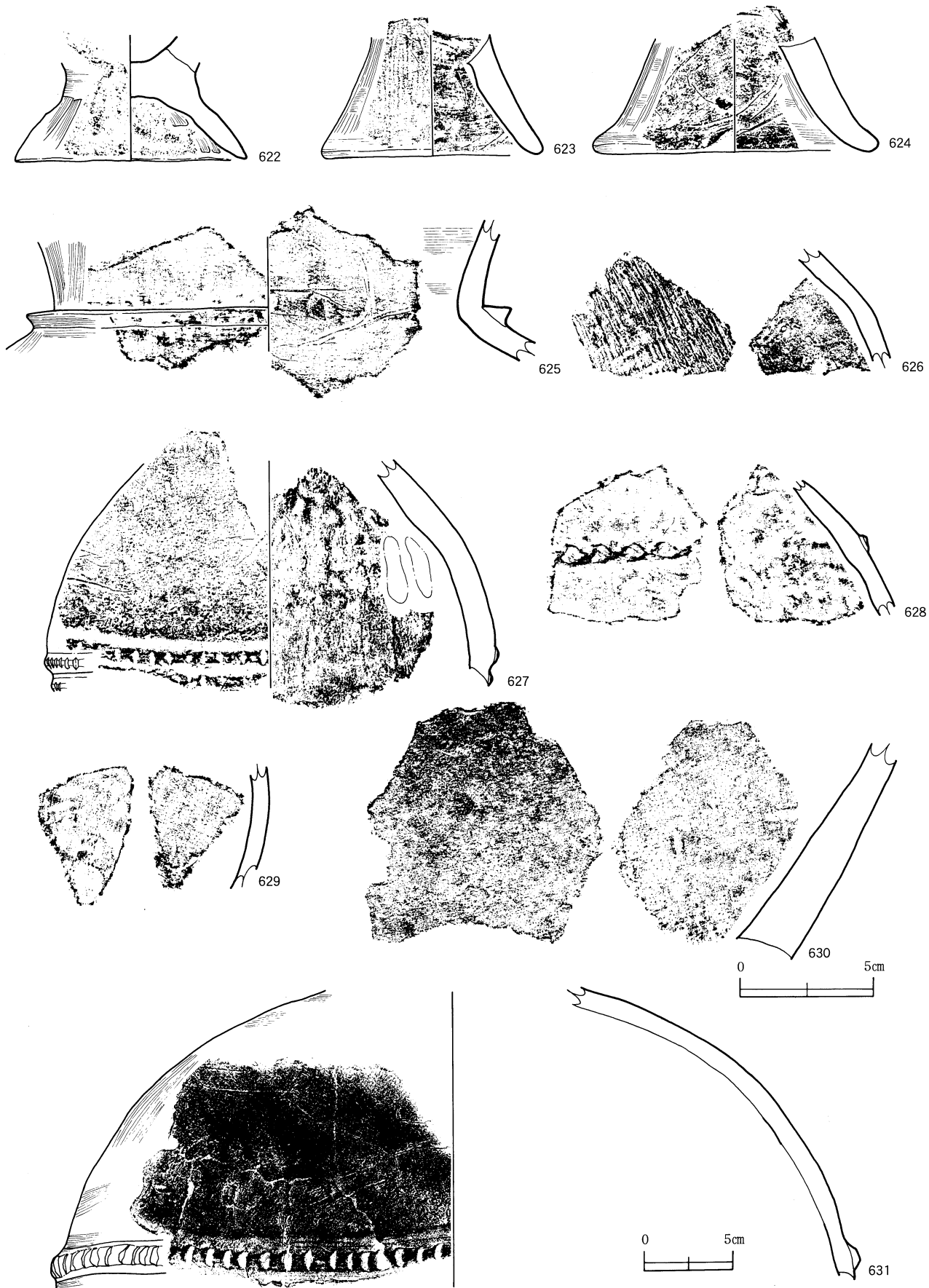
第117図 II地区出土遺物(19) 古代の遺物

(7) 古墳時代の遺物

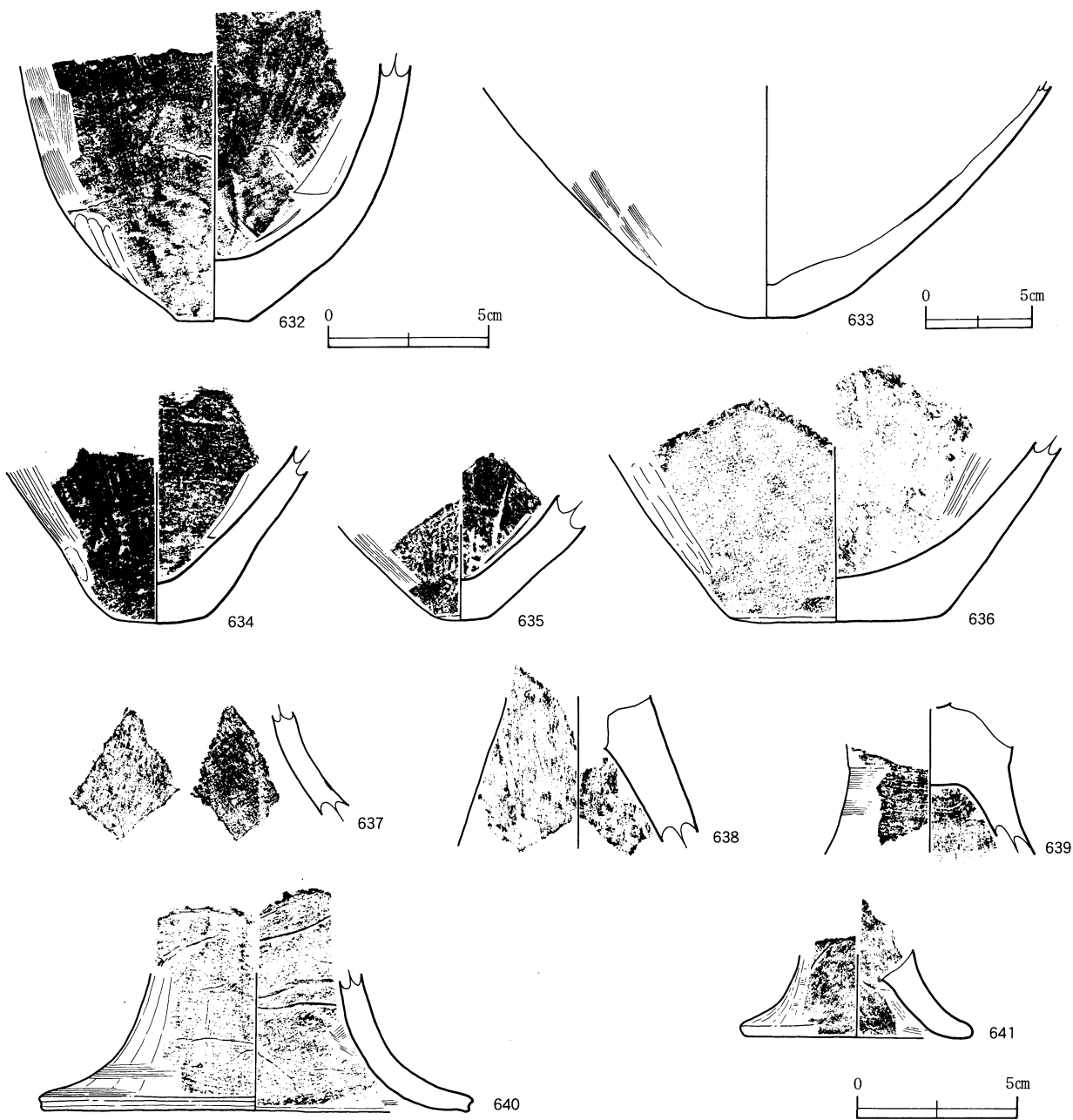
607は甕形土器の口縁部と考えられる。外反するタイプのもので口唇部は平らに面取りする。608は甕形土器の口縁屈曲部である。内面に稜を残し、わずかに外反する口縁部に至ると考えられる。外面には明瞭な稜は残さない。609は甕形土器の一部ではないかと思われる。610は甕形土器の胴上部から口縁屈曲部にかけての破片と考えられる。内面にわずかに稜を残す。器壁の厚さは4mmと比較的薄手のつくりである。611は甕形もしくは鉢形土器の破片と思われる。胎土に2mm大の軽石粒が多く含まれている。612は甕形土器もしくは壺形土器の胴部下半と考えられる。外面の調整は、1cm幅あたり7本の条線をもつ調整具である。613は甕形土器もしくは鉢形土器の底部付近である。内外面とも摩耗して調整痕ははっきりしない。614は甕形土器もしくは鉢形土器の底部から脚部部分のところである。615は甕形土器の底部付近である。脚台をもつものであるが、本体の底中心と脚台内部の中心がずれている。616は甕形土器の底部である。1cm幅あたりに条線が3本入る調整具を用いている。617は甕形土器の底部から脚台にかけての部分である。底部内面には焦げが厚く残っている。618は鉢形土器の底部から脚台付近である。619は甕形土器の脚台部分である。脚台端部が欠けているので正確な底径ではないが、復元すると10cmを測る。底部内部には焦げが付着している。620は甕形土器の脚台である。底部内面には焦げが付着している。621は甕形土器もしくは鉢形土器の脚台である。推定復元した底径は10.6cmである。622は甕形土器もしくは鉢形土器の脚台部であり、底径8.4cmを測る。脚台の高さは3.2cmで、ほぼストレートに開く。623は甕形土器もしくは鉢形土器の脚部である。外面の調整はヨナナデの後、1cm幅辺り7本の条線をもつ調整具により縦方向に行われる。624は甕形土器もしくは鉢形土器の脚部である。直径10.7cmを測る。625は壺形土器の頸部である。直角近くに屈曲する部分に断面三角形の突帯を巡らす。突帯はシャープなつくりで、刻目などは施さない。626は壺形土器の肩部付近と思われる。外面は条線状になる調整具を縦方向に動かしている。627は壺形土器の肩部から胴部にかけての破片である。胴部最大径にあたる部分に少なくとも2条の突帯が巡る。突帯上にはヘラ状の工具により刻目が施される。上下の突帯上の刻目の間隔が一緒であることから同時に刻目が施されたと考えられる。推定復元による胴部最大径は16.9cmである。肩部の内面には指押え痕が明瞭に残る。628は壺形土器の肩部である。一条の突帯を巡らし、丸みをもつ棒状の工具で刻みを施す。629は壺形土器の破片と考えられる。調整は内外とも丁寧なナデによるものである。630は壺形土器の底部付近ではないかと思われる。631は壺形土器の肩部から胴部にかけての破片である。幅1.8cmの突帯を巡らし、ヘラ状工具により左側から差し込んだ様な刻目を施す。外面の器面調整には細かな目を用い、突帯の上下はヨコナデによるものである。内面には剥落や摩耗が著しい。632は直径2.1mmのやや上げ底ぎみの平坦面をもつ、尖底の壺形土器底部である。胴部外面は1cm幅辺り10本の条線をもつ調整具による器壁調整の後、底部付近のみ削って仕上げている。内面は細かな条線をもつ幅2cmの調整具でナデ上げられている。633は壺形土器の底部である。直径2.4cmのわずかな平坦面をもつ尖底の底部である。内面の摩耗や剥落が著しい。634は壺形土器の一部と考えられ、底径3.2cmの尖底に底い丸底である。外面の調整は1cm幅辺り3本の条線が入る調整具によるものである。635は壺形土器の一部と考えられ、底径1.6cmの平坦面をもつ尖底である。636は壺形土器の底部と考えられる。直径6.5cmの安定



第118図 II地区出土遺物(20) 古墳時代の遺物(1)



第119図 II地区出土遺物(21) 古墳時代の遺物(2)



第120図 II地区出土遺物(22) 古墳時代の遺物(3)

した平底をもつ。637は壺形土器の頸部もしくは高坏の脚部の一部と考えられる。外面の一部に粉状の圧痕が認められる。圧痕は5mm×2mmを測る。638は高坏の脚部と考えられる。外面は細かな条線がみられるナデである。639は甕形土器の脚台の一部である。640は高坏の脚部である。端部の口唇面には浅い凹みが入る。推定復元による直径は13.5cmを測る。641は高坏の脚部である。推定復元による底径は7.3cmで、高さは2.8cmを測る。

以上の土器は、甕形土器の口縁部内面に稜が残る点と、壺形土器の胴部に巡る突帯の幅が狭く細かな刻み目を施す点から、成川式土器の中でも古墳時代前半期に位置づけられる「東原タイプ」に該当する。この時期の遺跡が元々この地にあったのか、台地上にあったのが崩れてきたのかは判断つかない。

第36表 II地区出土古銭一覧表

挿図番号	レイアウト番号	出土地点	出土層位	注記番号	重さ(g)	備考
114	586	H/I-2/3	I d下	640	2.81	
	587	4T	I f	395	4.30	
	588	H/I-2/3	I c	538	2.77	
	589	B/3	II	瓦廃棄遺構	1.63	
	590	B/3	II	瓦廃棄遺構	2.18	
	591	C/4			2.30	

第37表 II地区出土石製品一覧表

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
114	592								
	593								
	594								
115	595	角柱	B~IV	表採		67.1	22.3	22.6	60200
	596	受台	D~IV	表採		40.8	41.0	10.5	24000
	597	アーチ	D~III	表採		57.7	60.2	30.3	78600
116	598	手水鉢	D~IV	表採		70.8	70.4	27.0	107000
	599	笠石	D~IV	表採		40.0	44.1	18.3	23400

第38表 古代・古墳時代遺物観察表

挿図番号	レイアウト番号	出土	層位・遺構	器種	部位	分類	調整・文様・色調等		取り上げ番号
							外面	内面	
117	600	A	VII	坏形土師器			橙白色	橙白色	2067
	601	T3	Ib	内黒土師器			白黄色	黒色	171
	602	T4	Ib	碗形土師器			橙色	褐色	72
	603	I3	表	碗形土師器			橙色	褐色	
	604	H12・3	Id上	碗形土師器			橙色	橙白色	961
	605	T3	Ib	須恵器			暗青紫色・格子目夕タキ	暗青紫色・格子目夕タキ	163
118	606	T4	Ib	双孔土錘			橙白色		82
	607	T9	Ib	甕形土器	口縁部		橙白色	橙白色	475
	608	T8	Ib	甕形土器	頸部		黒色	茶褐色	313
	609	T8	Ib	甕形土器			茶褐色	茶褐色	319
	610	T9	Ib	甕形土器	胴上部		橙白色	橙白色	452
	611	T8	Ib	甕or鉢	胴下半分		赤茶色	赤茶色	316
	612	T4	Id	甕or鉢	底部付近		茶白色	橙白色	258
	613	T3	Ib	甕or鉢	底部付近		赤褐色	黒茶褐色	165
	614	H3	Ic	甕or鉢	底部付近		橙色	褐色	
	615	H3	Ic	甕形土器	底部付近		褐色	赤茶色	
	616	E・FH	2・3	甕形土器	底部		橙白色	橙白色	
	617	A	III	甕形土器	底部		赤褐色	黒色	2055
	618	A	VII	鉢形土器	底部		褐色	褐色	2059
	619	A	VII	甕形土器	脚部		褐色	褐色	2049
	620	B	Vb	甕形土器	脚部		白茶色	白茶色	1685
621	A	VII	甕or鉢	脚部		橙白色	橙白色	2073	
119	622	H12・3	土壇	甕or鉢	脚部		明茶色	明茶色	
	623	I3	表	甕or鉢	脚部		褐色	暗褐色	
	624	I3	表	甕or鉢	脚部		暗茶色		
	625	T9	Ib	壺形土器	頸部		暗茶色	茶灰色	482
	626	T8	Ib	壺形土器	肩部		褐色	橙白色	312
	627	T4	Ic	壺形土器	肩部		赤茶色	赤茶色	123
	628	T9		壺形土器	肩部		赤茶色	赤茶色	462
	629	T9	Ib	壺形土器	底部		白茶色	白茶色	466
	630	H12・3	Id下	壺形土器	胴部		赤茶色	赤茶色	725
	631	H12・3	表	壺形土器	胴上半分		茶白色	茶白色	
120	632	H3	表	壺形土器	底部		橙白色	橙白色	
	633	A	VII	壺形土器	底部		黄茶色	黄茶色	2048
	634	H2	Id上	壺形土器	底部		橙白色	橙白色	1065
	635	A	溝一括	壺形土器	底部		暗茶色	茶色	
	636	B3	表	壺形土器	底部		褐色	褐色	
	637	T9	Ib	壺or鉢	頸部		赤茶色	赤茶色	461
	638	T9	Ib	高坏	脚部		赤褐色	褐色	446
	639	EFH2・3	表	甕形土器	脚部		橙白色	橙白色	
	640	B3	表	高坏	脚部		赤茶色	赤茶色	
	641	T4	Ib	高坏	脚部		橙白色	橙白色	77

第V章 科学分析

第1節 寿国寺跡から出土した木製品の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、武D遺跡（寿国寺跡）から出土した木製品11点である。

3. 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

図版1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存

在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州，四国，九州，屋久島に分布する日本特産の常緑高木で，高さ40m，径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で，広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版 3

横断面：中型から大型の道管が，1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属には，アカガシ，イチイガシ，アラカシ，シラカシなどがあり，本州，四国，九州に分布する常緑高木で，高さ30m，径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱，弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

図版 4

横断面：小型でやや角張った道管が，ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ，ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は，異性放射組織型で，ほとんどが1～2細胞幅であるが，まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州，四国，九州，沖縄に分布する常緑の高木で，高さ20m，径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で，建築，器具，楽器，ろくろ細工，櫛，薪炭などに用いられる。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

図版 5・6

横断面：年輪のはじめに，やや小型で丸い道管が，おもに2～4個放射方向に複合して散在し，晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材である。道管の径は，早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が，晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は，異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には，エゴノキ，ハクウンボクなどがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する落葉の小高木で，高さ10m，径30cmである。材は器具，旋作，薪炭などに用いられる。

5. 所見

分析の結果、寿国寺跡から出土した木製品は、マツ属複維管束亜属4、スギ4、エゴノキ属2、コナラ属アカガシ亜属1、イスノキ1と同定された。

マツ属複維管束亜属には、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあり、いずれも水湿によく耐える材である。スギは温帯に広く分布し、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。スギは日本産材のなかでクスノキに次いで大木になり、木理直通であり長材として利用することができ、ヒノキと並ぶ良材である。エゴノキ属は谷などの水際に生育する樹木である。コナラ属アカガシ亜属は一般にカシと総称されるが、イチイガシやアラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。イスノキは照葉樹林の構成要素の一つで、林縁などにも多い。材質は耐朽性にすぐれ、細かい細工にも良好で器具類にも適する。

いずれの樹種も、西南日本の照葉樹林域に普通に生育するものであり、本遺跡でも盛んに利用されていたと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

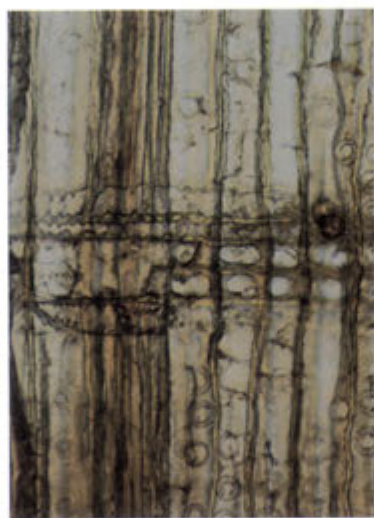
表1 武D（寿国寺跡）遺跡における樹種同定結果

番号	注記番号	器種	結果（和名／学名）
1	なし	胴木1	マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon
2	なし	胴木2	マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon
3	なし	木杭	マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon
4	2017	雨樋の支え	スギ Cryptomeria japonica D.Don
5	-269	木棒	スギ Cryptomeria japonica D.Don
6	1751	提灯の枠？	スギ Cryptomeria japonica D.Don
7	1949	木栓	スギ Cryptomeria japonica D.Don
8	-248	ハマ	コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis
9	1513	木櫛	イスノキ Distylium racemosum Sieb. et Zucc.
10	1955	木椀	エゴノキ属 Styrax
11	1889	漆器	エゴノキ属 Styrax

武D (寿国寺跡) 遺跡の木材 I



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.1mm

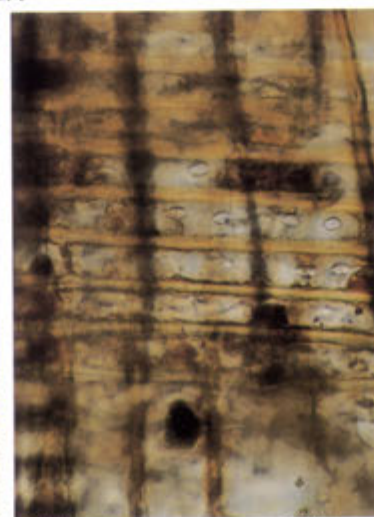


接線断面 : 0.2mm

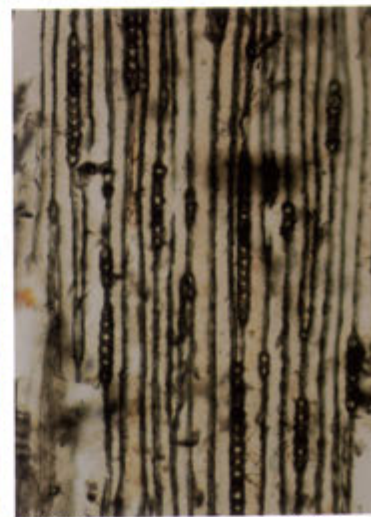
1. 1 桐木1 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

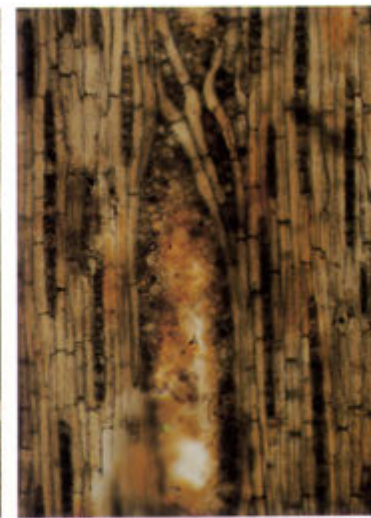
2. 6 1751 堤灯の杵? スギ



横断面 : 0.5mm



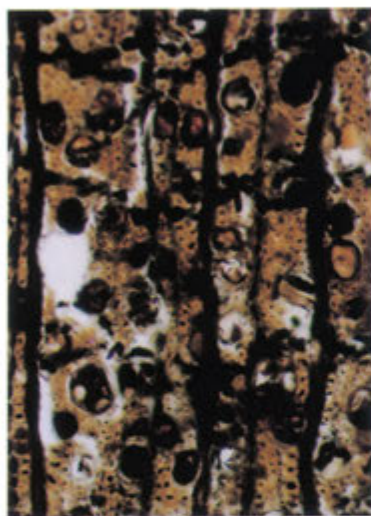
横断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

3. 8 (248) ハマ コナラ属アカガシ亜属

武D (寿国寺跡) 遺跡の木材II



横断面 ————— : 0.5mm
4. 9 1513 木櫛 イスノキ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
5. 10 1955 木椀 エゴノキ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
6. 11 1889 漆器 エゴノキ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

遺存遺存歯にう蝕は認められない。上顎左中切歯の舌側面窩は深い。

5 C-3区土壌3出土人骨（性別不明・成人？）

方形の土壌から出土した。頭蓋と四肢骨の一部が残存するのみである。副葬品は寛永通宝が8枚遺存していた。大腿骨と脛骨の出土状態から膝を立てた状態で埋葬されたことが推測できる。人骨の保存状態は良くない。年齢は脳頭蓋の厚さ、錐体の大きさから20歳を越えていたと推測できる。性別は判定できない。観察できた頭蓋形態小変異を表2に示す。左右の外耳道に骨瘤は認められない。

表1. 鹿児島市武遺跡出土人骨の頭蓋計測値(mm)および示数

	人骨番号	C-3区 土壌1
	性別	女性
	年齢	熟年
M No.	顔高	104
47	上顔高	63
48	眼窩幅(左)	35
51	眼窩高(左)	33
52	鼻幅	25
54	鼻高	48
55	前眼窩間幅	24
50	鼻根横弧長	25
F.	鼻骨最小幅	8
57	上顎歯槽幅	61
61		
	眼窩示数(左)	94.3
52/51	鼻示数	52.1
54/55	鼻根湾曲示数	96
50/F.		
69	オトガイ高	30
	鼻骨弦	7.9
	鼻骨垂線	0.9
	鼻骨平坦示数	11.2

表2. 鹿児島市武遺跡出土人骨の頭蓋形態小変異出現の有無

人骨番号	C-3区 土壌1		C-3区 土壌2		C-3区 土壌3	
	性別	年齢	女性	男性?	?	成人
	右	左	右	左	右	左
前頭縫合残存	-					
口蓋隆起	-					
内側口蓋管骨橋	-	-				
外側口蓋管骨橋	-	-				
ブレグマ骨			-			
外耳道骨瘤	-	-			-	-



图1. C-3区土坑1出土人骨(女性·熟年)



图2. C-3区土坑2出土人骨(男性?·壮年)

第Ⅵ章 まとめ

第1節 遺構

1) I地区について

I地区においては、B地点で切石積みの石組み遺構が検出された。遺物の出土状況や文献史料との比較検討の結果、これらの石組み遺構は近世の寿国寺の洋池にあたる可能性が極めて高いと判断される。今回の調査事例では方形規格の池状の遺構が一部検出されたのみであるが、『三國名勝圖會』にみる天保年間の絵図には中央に中島をもつ左右対称の切石積みの洋池が描かれており、今回の発掘調査の結果と状況が符合する。文献史料にみる近世の寺院を発掘調査によって確認した調査事例として注目される。

B地点において検出された石組み遺構においては、下床に胴木を敷設して基礎の安定をはかり、その上に石組みを行う工法がみられる。この工法は近世の石組み工法としてはすでによく知られたものである。しかし、中央の方形石組み遺構では、胴木の下にさらに枕石が敷設されている状況がみられた。この方形石組み遺構の下床に埋設された切石は、胴木を安定させる工夫としては興味深い。洋池内部の、軟弱な地盤に対応する技術的工夫とみることができよう。

石組み遺構の内部および背面には、多量の礫が胴込め石あるいは裏込め石として投入されており、石組み遺構の構造を強固なものにする役割を果たしている。西側石列遺構で確認された要石の存在も、石組み遺構を築造する際の技術的要素として注目される。

B地点における石組み遺構群の検出は、近世の土木技術を具体的に示す調査事例となった。

一方、A地点では井戸遺構やピット群などが検出された。これらは洋池が検出されたB地点とは全く異なる施設が周囲に存在する可能性を示すものである。今回の調査ではそれぞれの遺構について個別的な機能を具体的に明らかにすることはできなかったが、土地利用の様相はB地点とは明らかに異なる。『三國名勝圖會』には洋池の奥に複数の建造物が描かれており、こうした建物の一部である可能性も考えられる。

今回の発掘調査の成果は、おおむね文献史料にみる記載と符合する。方形石組み遺構や石列遺構の出土状況は『三國名勝圖會』にみる記載と極めて類似しており、発掘調査において明らかになった遺構の機能を考える上で重要な資料となった。しかし、B地点における切石配石遺構や杭列の存在は、文献史料にはないものであり、この点については今後さらなる検討を要する。(馬籠亮道)

2) II地区について

今回の調査では、近世期の最も古い生活面を検出した結果、H・I-2・3区およびA~C-2~5区では、急な段落ちがみられるシラス造成面とそれに伴うスロープ状遺構、人骨が伴う4基の土壇、性格は不明であったが多数のピットや土坑が検出された。特にシラス造成面は、A~C-2~5区では南北方向約70mにわたり検出された大規模な遺構である。また、スロープ状遺構は東西方向に約50mの間隔で見られる遺構である。これらの遺構群だけではその性格などについて明確な解釈を行うことはできない。しかしI地区における遺構検出状況と文献史料との検討結

果と、Ⅱ地区の遺構群の検出状況とを併せて考察すると、Ⅱ地区の遺構はⅠ地区の遺構群に続く寿国寺跡に係わる遺構である可能性が高い。

また、第三章や第四章第2節で述べたように、Ⅱ地区で近世期の生活面と古墳時代や古代の遺物を含んだ層とが交互に見られた状況は、シラス台地斜面部が崩落することにより流入した結果を示したものである。つまり、ここはシラス台地斜面部が崩落し多量のシラス土が流入するたびに、整地作業を行い復旧もしくは復興を行う、という事態が近世から近代にかけて再三再四繰り返された、災害に見舞われ続けた遺跡であったと、考えられる。

さらに今回の調査の成果として、Ⅰ地区部分では石組みによる遺構構築が行われていたのに対して、Ⅱ地区部分ではシラス土を大規模に造成し構築していることを確認した、ことが挙げられる。寺院の基盤をこのように構築する特徴が、薩摩藩もしくは南九州では一般的な状態であるのかは今後の検討課題である。

ところでⅡ地区の各調査区では、建造物の跡を確認するに至っていない。したがって寿国寺の本殿などの本体部分は、調査地区の東側に広がる部分であろうと、想定される。(八木澤一郎)

第2節 遺物

陶磁器について

今回の報告に当たっては遺跡をⅠ地区・Ⅱ地区に分けて行ったが、陶磁器類に関して比較すると、土師質土器(焙烙・火舎等)やメンコの出土量などの違いは認められるが、陶磁器の出土組成は両区とも同様であり、出土地点を区分して考察する必要を見いだせない。よって、ここでは、Ⅰ・Ⅱ地区の陶磁器を総括してまとめを述べることにする。

陶磁器類は、使用目的を重視し用途別に分類したが、碗・皿をはじめとする食器類を中心に、寺院特有の仏具や大鉢(植木鉢)等数多くの器種が出土している。碗・皿に関しては、18世紀後半からのいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる大量生産された雑器が目につく。その多くは、肥前系のものであるが、中には鹿児島県川内市で焼かれた平佐焼などの在地系の製品も含まれる。また19世紀前半頃と考えられる端反形碗や同様の時期と考えられる蛇ノ目凹形高台の皿等も数多く出土している。また、肥前系のみならず在地産資料の増加も特徴的であり、薩摩藩領で磁器生産が安定化したことを示すものであろう。そのほか陶器碗としては、唐津焼、佐賀県内野山窯と思われる碗や皿、関西系の京・信楽焼と思われる資料など、少量ではあるが出土している。しかしながら、それ以上に目につくものは、始良郡加治木町龍門司焼と同郡始良町の西餅田系(元立院・小松窯)と思われる製品である。これらの窯の製品は、仏具や灯明具にも多く見られる。

陶器碗の中で、胎土等の比較から在地系のもと考えられる資料(69)は興味深く、外面に大根とまな板と包丁の文様が描かれている。4足付まな板は当時の薩摩の生活用品の様相を伺い知ることができる。

瓶・播鉢・鉢・甕・壺等の資料も多く出土しており、そのほとんどが苗代川系のものであるが、肥前系の二彩の大甕や琉球産の大鉢(植木鉢)や、荒焼の泡盛酒瓶(長胴瓶)も出土している。

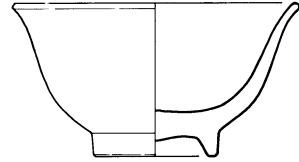
そのほかに、17世紀代と考えられる肥前染付の皿(77)や、1670年頃の山元窯の碗(57)、

17世紀代の苗代川系
と思われる内面に叩
き目の残る薄手の片
口（489）等が出土



しているが、出土品のほとんどは18世紀後半から19世紀代にかけての
ものであり、寿国寺の創建から廃寺までの時期を解明する資料である。

鹿児島城下の発展は、天保年間の初め頃、鶴丸城を中心に今の鹿児
島駅方面と連携してきたと考えられるが、その後、寿国寺が創建され
た天保年間中頃になると、その広がり方が反対側の甲突川を越えて現在
の西鹿児島駅方面まで広がってきたと考えられる。本遺跡から出土する遺物は、これを裏付ける
資料として捉えることができよう。（関明恵）



第3節 総括

今回の寿国寺跡の調査は、文献史料にみえる近世の仏教寺院の痕跡を具体的に確認する事例と
なった。同時に、近世の土木技術を知る数少ない調査事例としても注目に値するものである。

また、同時期の文献史料には寿国寺の他にも多くの寺院が記載されており、一帯が街道筋の寺
町として発展していた様子がうかがえる。今回の調査は、断片的ながらも廃仏毀釈以前の仏教寺
院の痕跡を具体的に示し、近世の薩摩藩における仏教文化の様相を推測させる貴重な事例として
注目される。（馬籠亮道）

【参考文献】

- 始良町教育委員会 1995 『元立院窯跡』
 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 大橋康二 1988 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
 大橋康二・西田宏子 1988 別冊太陽『古伊万里』 平凡社
 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』 理工学社
 大橋康二 1995 「九州における明末～清時代の出土分布とその内容について」『青山考古第12号』
 小川啓司 1974 『そば猪口絵柄辞典』 光芸出版
 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 鹿児島県教育委員会 1978 『薩摩焼古窯竪野（冷水）窯址』
 鹿児島県歴史資料センター黎明館 2000 『世界のさつま』
 鹿児島市教育委員会 1992 『大龍遺跡』
 鹿児島陶磁器研究会 2002 『からから 記念号』
 加治木町教育委員会 1995 『山元窯跡』
 加治木町教育委員会 2001 『弥勒窯跡』
 九州近世考古学会 2000 『九州陶磁の編年』
 古泉弘 2001 「IV江戸の墓と葬制2埋葬形式」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
 古泉弘 2001 「VI江戸の生活文化2喫煙2煙管」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
 古泉弘 2001 「VII江戸の遺物4木製品」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
 川内市歴史資料館 2000 『用と美 平佐焼の世界展』
 中井さやか 2001 「VII江戸の遺物5漆器」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
 中島由美 2001 『蕎麦猪口・酒器1000』 講談社
 波佐見町教育委員会 1999 『波佐見焼400年の歩み』
 波佐見町教育委員会 1999 『波佐見焼青磁展・くらわんか展』
 橋口亘 1999 「薩摩出土の清朝陶器」『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易研究会
 橋口亘 2002 「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器出土様相～鹿児島県地域の近世陶磁器流通～」『鹿児島地域史研究』
 渡辺芳郎 2000 「近世薩摩焼擦鉢考」『鹿児島考古34号』 鹿児島県考古学会



① I 地区 2 T 北壁土层断面状况



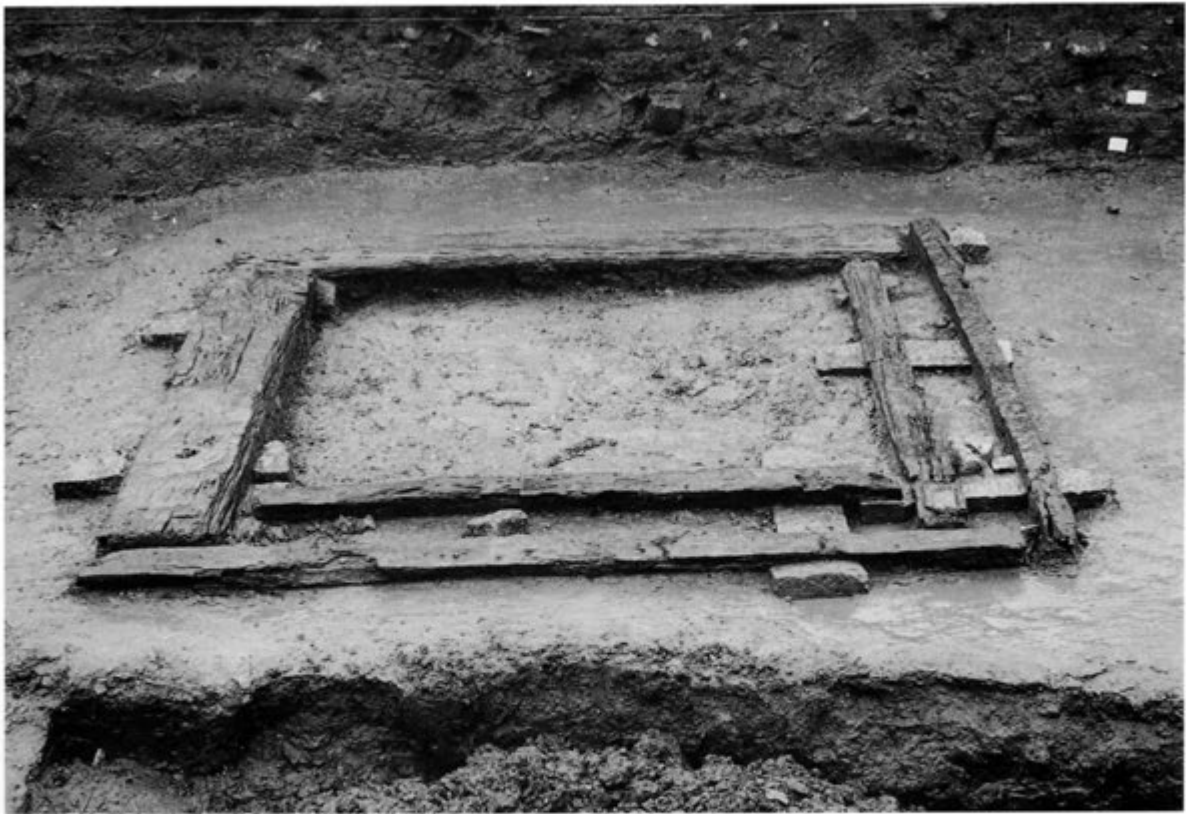
② I 地区 9 T 北壁土层断面状况



① I 地区 B 地点遺構検出状況



② I 地区 B 地点方形石組み遺構および下部胴木検出状況



I 地区 B 地点 方形石組み遺構下部 胴木検出状況



① I地区B地点東側石列遺構下部桐木検出状況 ② I地区B地点南側石列遺構下部桐木検出状況



③ I地区B地点西側石列遺構検出状況



① I 地区 B 地点 杭列遺構検出状況 (杭 2, 14)



② I 地区 B 地点 杭列遺構検出状況 (杭 4)



① I地区B地点杭列遺構検出状況 (杭11)



② I地区B地点杭列遺構検出状況 (杭13)



③ I地区B地点杭列遺構検出状況 (杭7)

图版 7



① I 地区 B 地点杭列遺構検出状況 (杭 1)



② I 地区 B 地点杭列遺構検出状況 (杭 9)



③ I 地区 B 地点杭列遺構検出状況 (杭 10)



① I 地区 B 地点杭列遺構検出状況 (杭12)



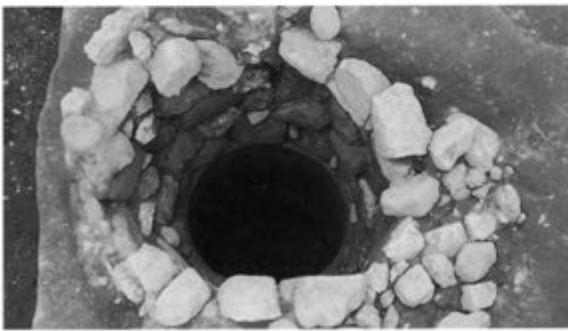
② I 地区 A 地点ピット群遺構検出状況 (ピット11)



① I地区A地点ピット群遺構検出状況（ピット3）



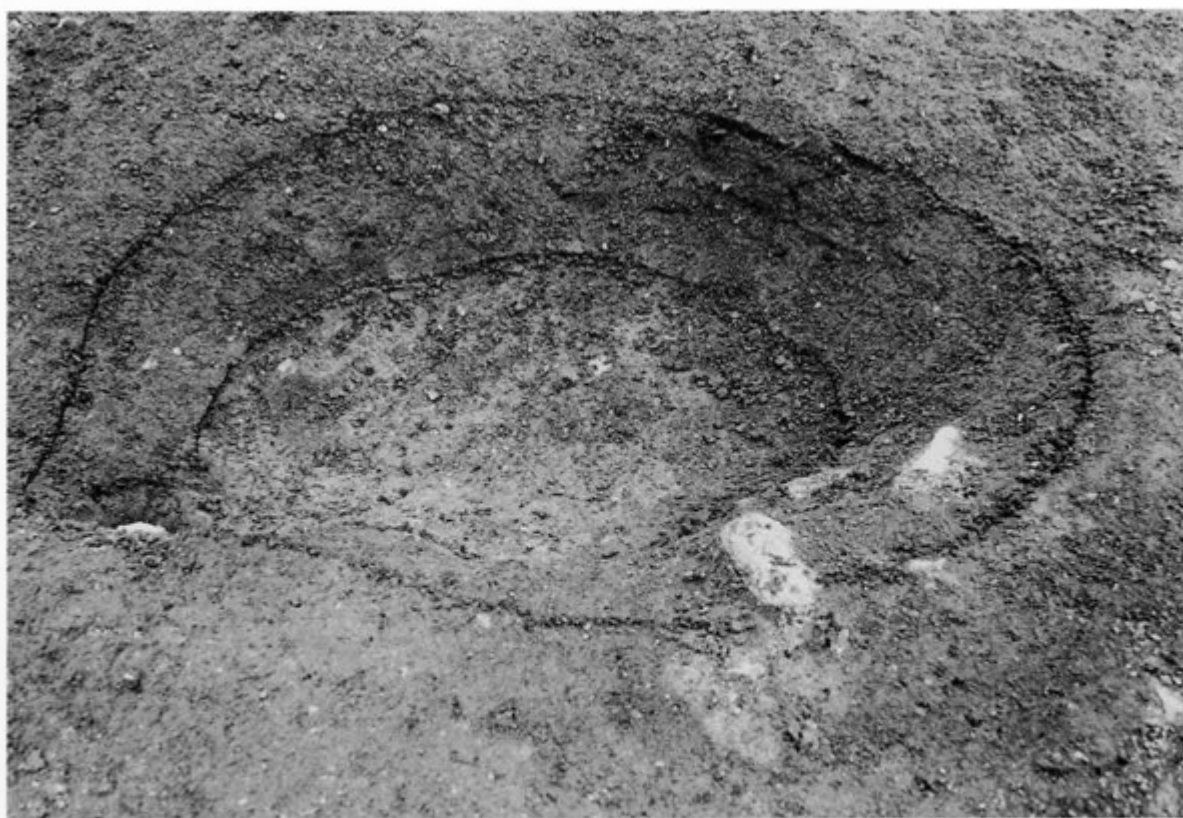
② I地区A地点ピット群遺構検出状況（ピット4）



I 地区A地点井戸検出状況



① I 地区 A 地点礎石遺構検出状況 (礎石 3 号)



② I 地区 A 地点礎石遺構完掘状況 (礎石 3 号)

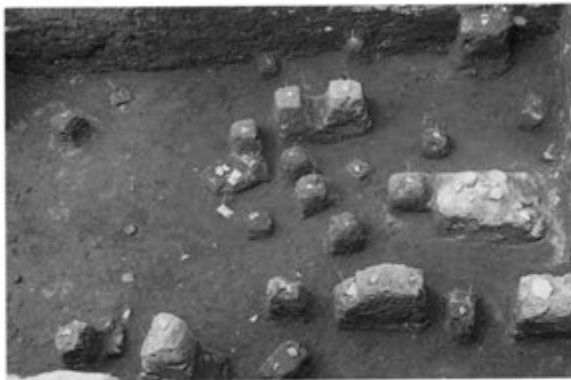


① I地区A地点礎石遺構検出状況（礎石1号）



② I地区A地点礎石遺構完掘状況（礎石4号）

図版 13



① II地区H・1-2・3区遺物出土状況（確認調査T3）



② II地区H・1-2・3区遺物出土状況（確認調査T4）



③ II地区H・1-2・3区北壁土層断面（確認調査T4）



④ II地区H・1-2・3区南壁土層断面状況



① II地区H·1-2·3区完掘状况



② II地区H·1-2·3区沟状遺構検出状况



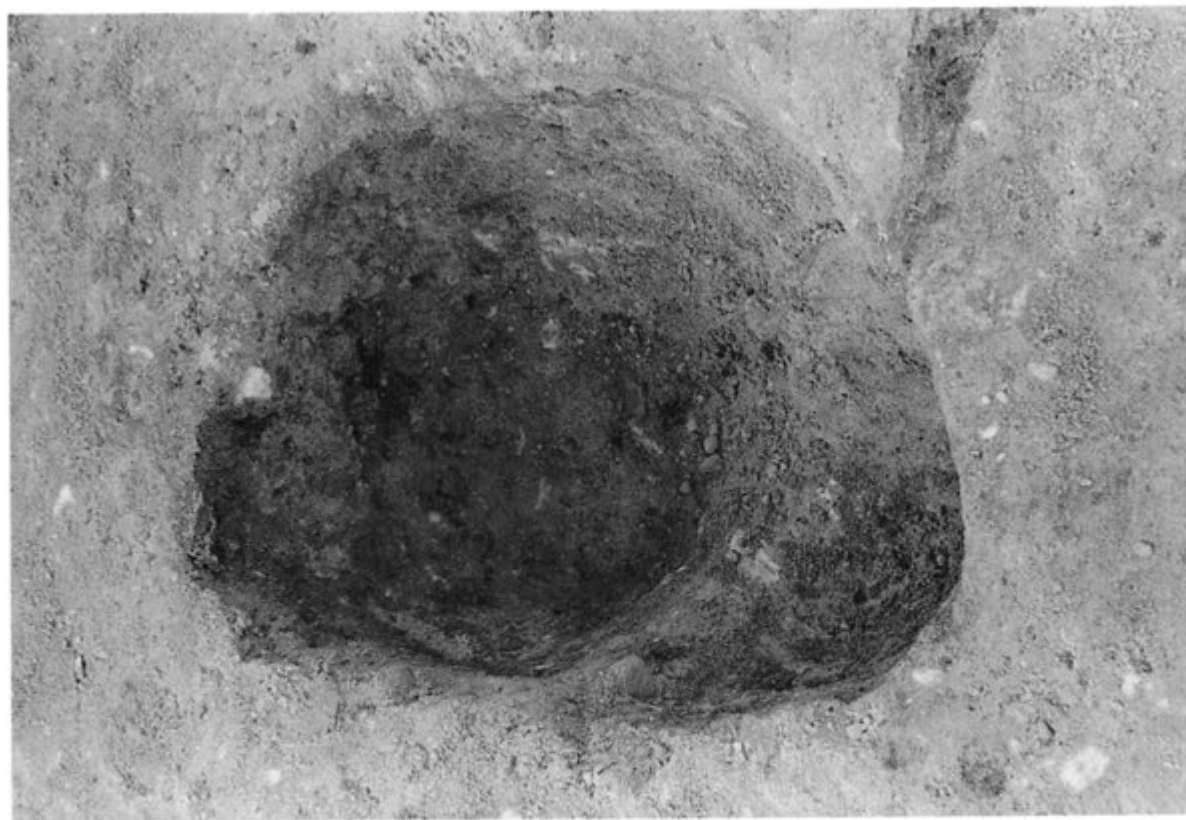
① II地区H・1-2・3区遺構検出状況（西側）



② II地区H・1-2・3区遺構検出状況（西側）



③ II地区H・1-2・3区遺構検出状況（東側）



④ II地区H・1-2・3区井戸跡検出状況



① II地区E・F-3区南壁土層断面状況



③ II地区E・F-2・3区遺物出土状況 (確認調査T7)



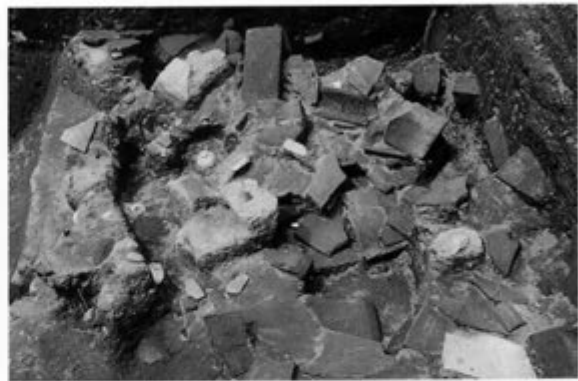
② II地区E・F-2・3区北壁土層断面状況 (確認調査T7)



④ II地区E・F-2・3区遺構検出状況



① II地区B-2区北壁土層断面状況 (確認調査T8)



② II地区B-3・4区遺物出土状況



③ II地区B-3区北壁土層断面状況



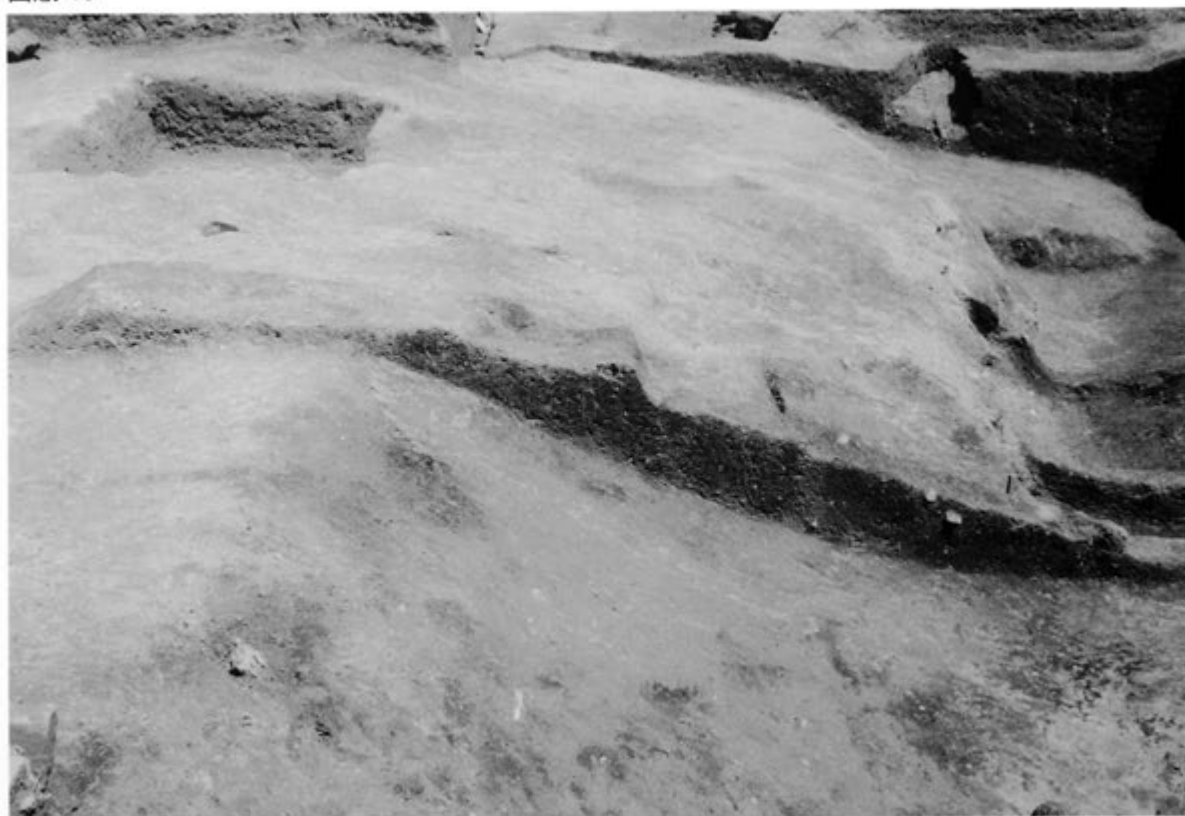
④ II地区B・C-3区北壁土層断面状況



① II地区B・C-3・4区遺構完掘状況（南側から）



② II地区B・C-3・4区遺構完掘状況（北側から）



① II地区B・C-3・4区遺構完掘状況（南側から）



② II地区B・C-2・3区遺構完掘状況（南側から）



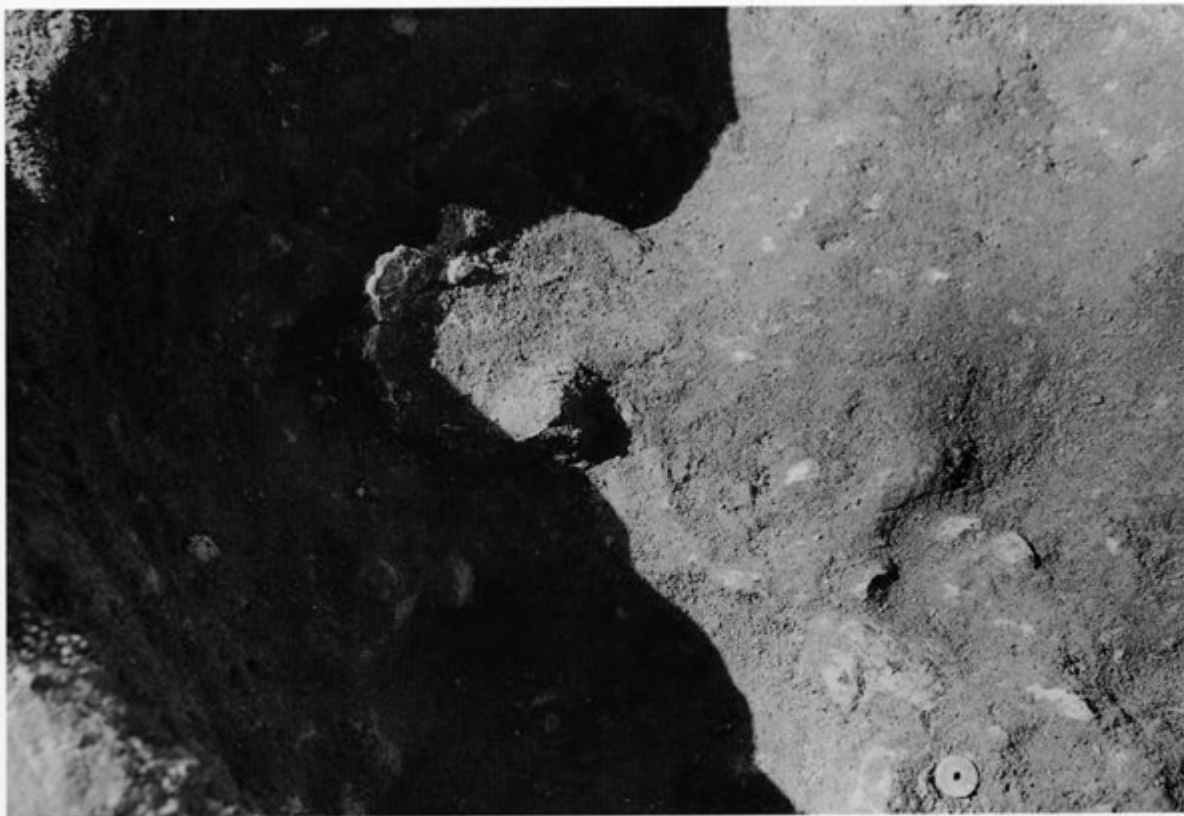
① II 地区 B・C-3・4 区土坑完掘状況 (北側から) ② II 地区 B-5 区土坑完掘状況 (東側から)



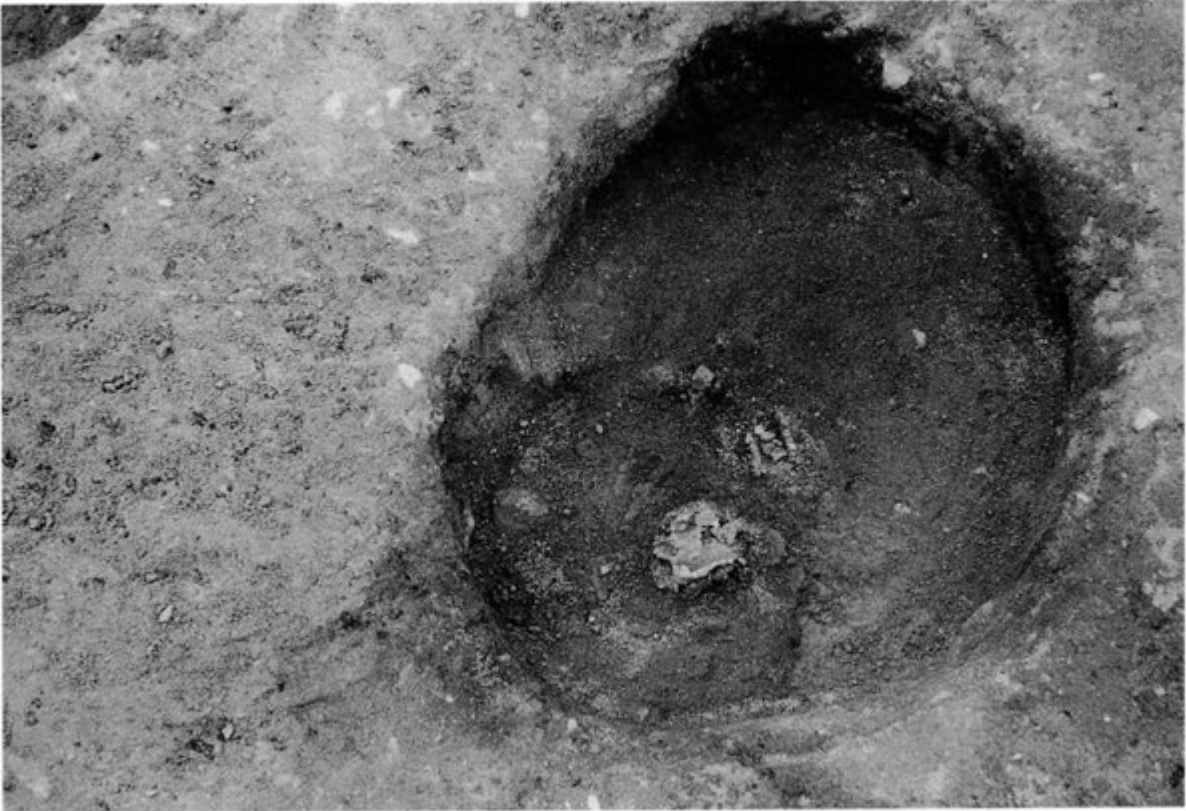
③ II 地区 B-4 区土坑内礎石検出状況



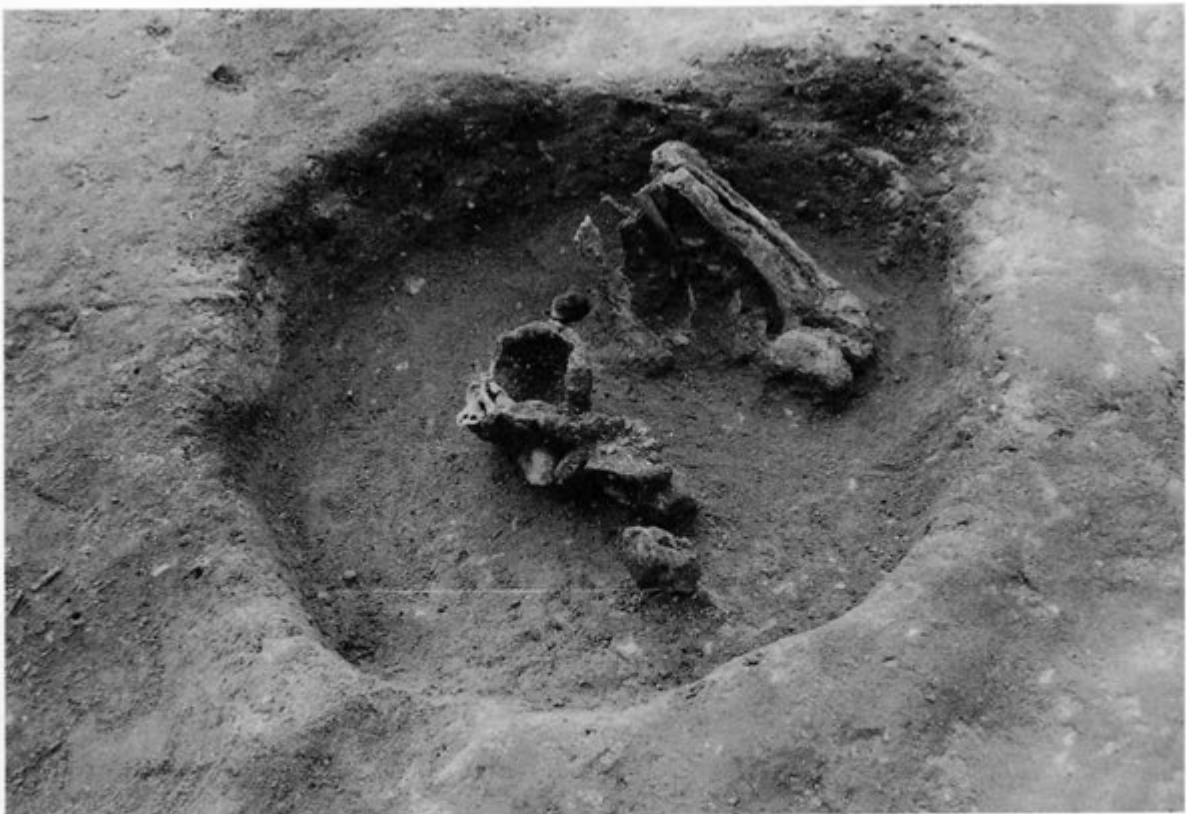
① II 地区 B-2 区土坑 1 半截状况



② II 地区 B-2 区土坑 1 人骨检出状况



① II 地区 C-3 区土坑 1 人骨检出状况



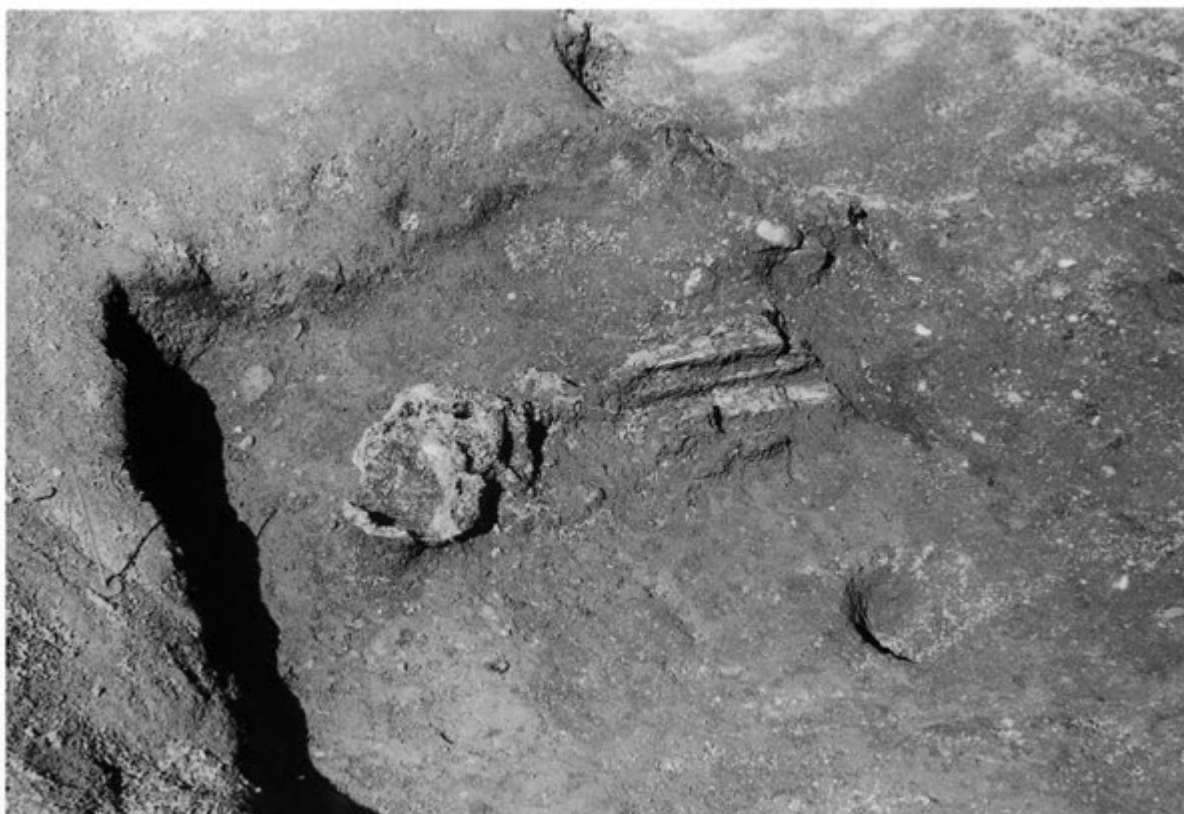
② II 地区 C-3 区土坑 2 人骨检出状况



①Ⅱ地区C-3区土壙3 半截狀況



②Ⅱ地区C-3区土壙3 人骨検出狀況



① II地区C-3区土壤3 人骨検出状況



② II地区C-3区土壤3 人骨検出状況



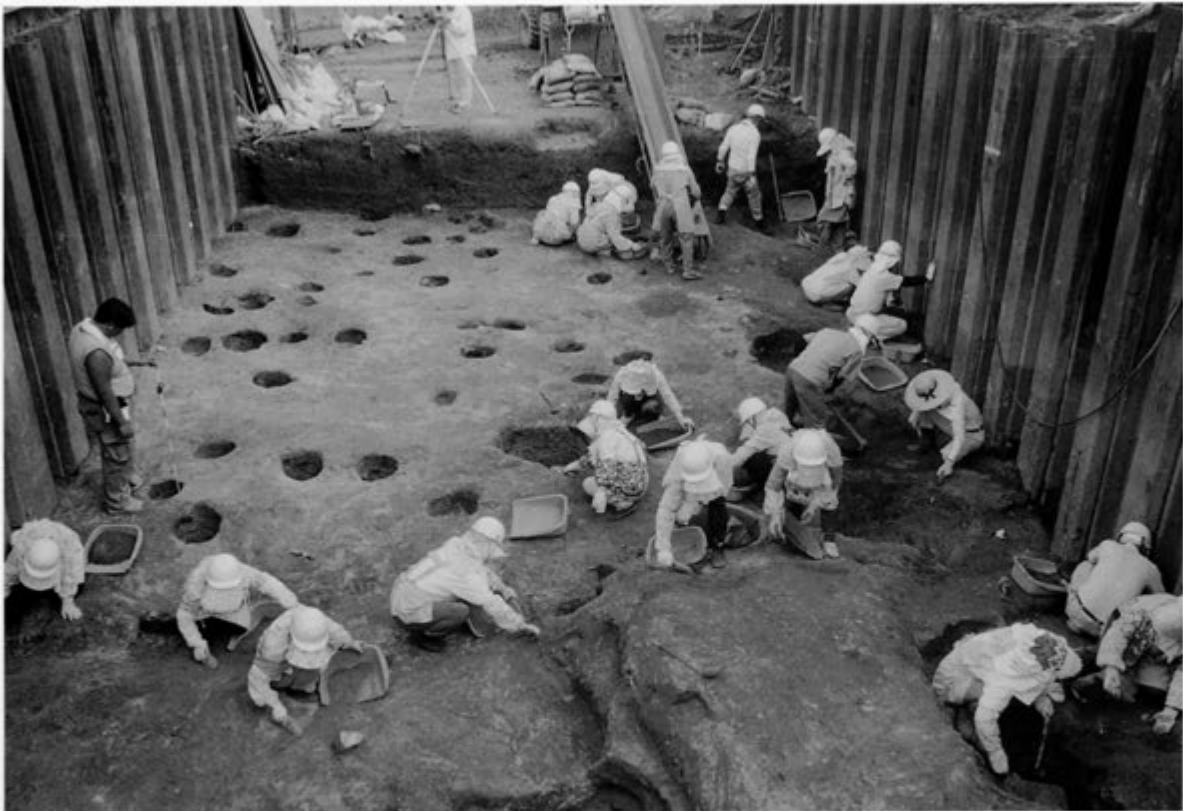
① II 地区 B - 3 区土坑検出状況



② II 地区 B · C - 3 · 4 区土坑検出状況



(214) ①確認調査風景



②緊急発掘調査風景 (Ⅱ地区H・1-2・3区)



① I 地区 B 地点土製品出土状況 (445)



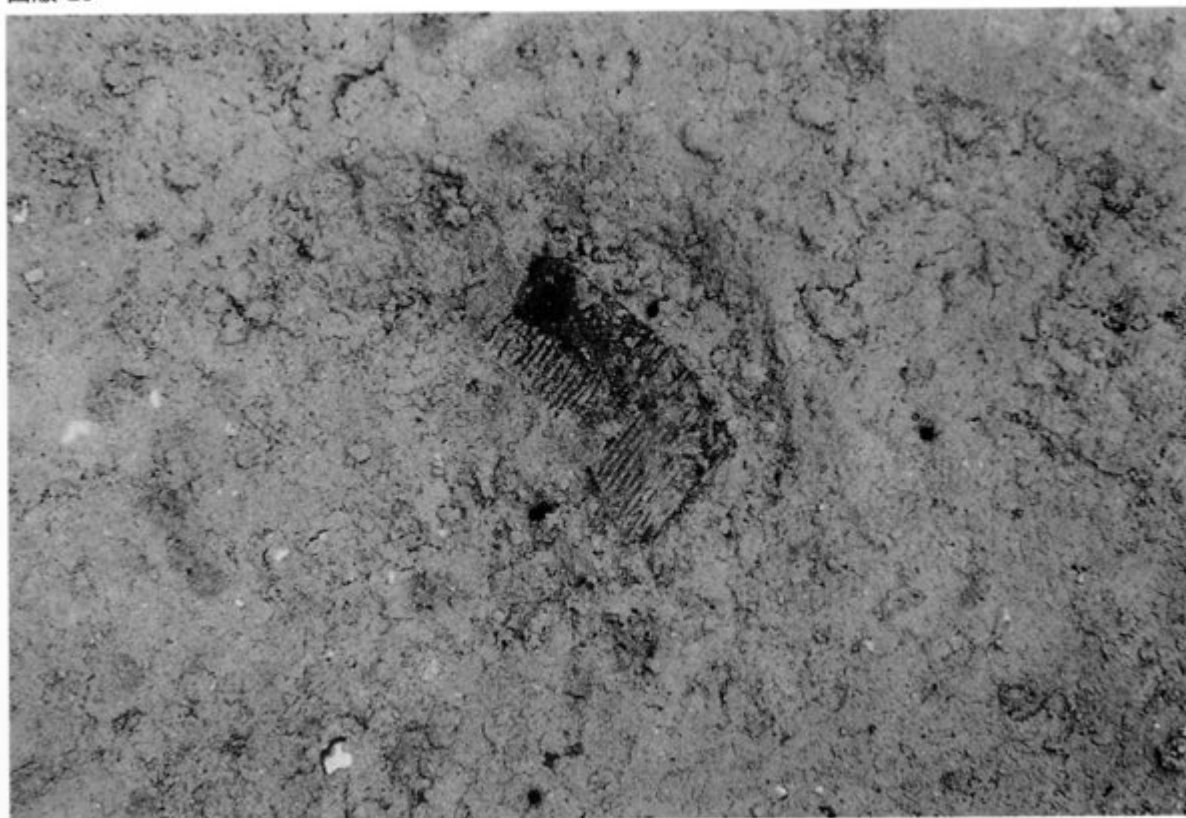
② I 地区 B 地点木製品・横槌出土状況 (395)



① I 地区 B 地点木製品・板状製品出土状況 (374)



② I 地区 B 地点木製品・雑器出土状況 (375)



① I 地区 B 地点漆製品出土状况 (340)



② I 地区 B 地点木製品・下駄出土状况 (414)



① I 地区 B 地点漆製品出土状况 (339)

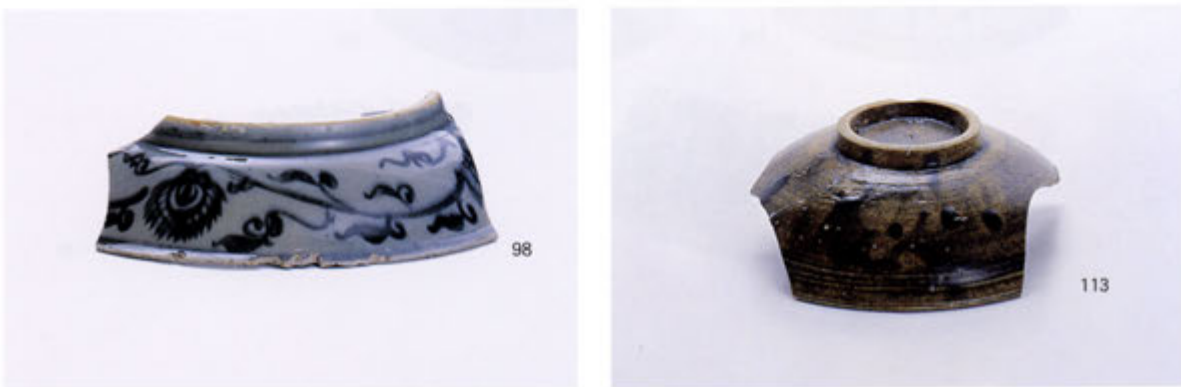
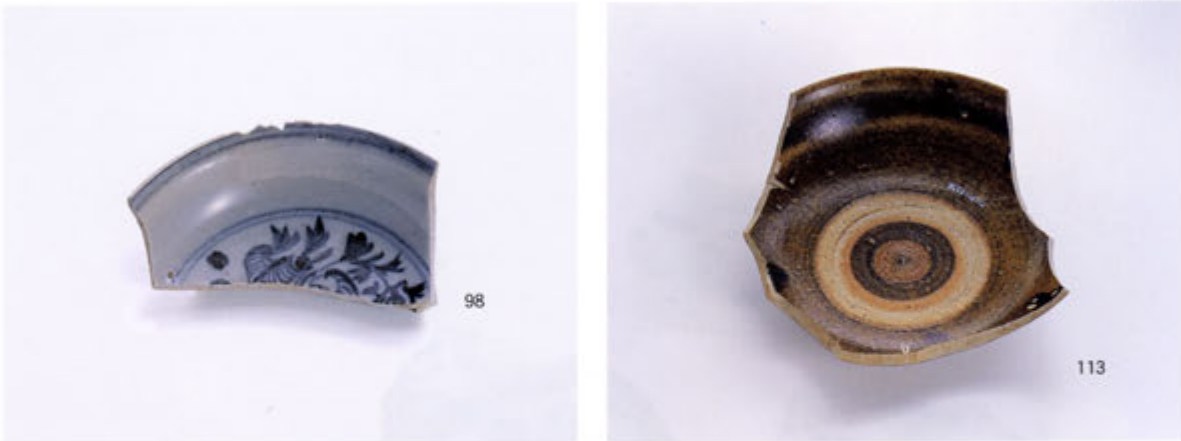


② I 地区 B 地点陶磁器出土状况

图版 31



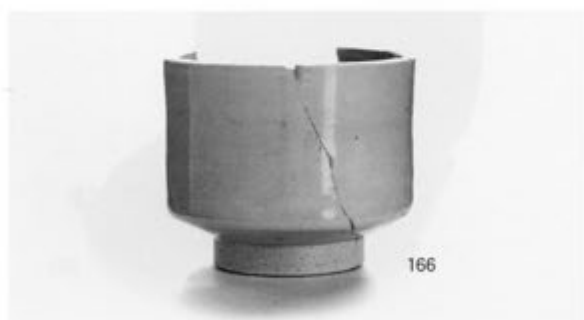
I 地区出土遺物 (陶磁器・他)



I 地区出土遗物 (陶磁器・他)



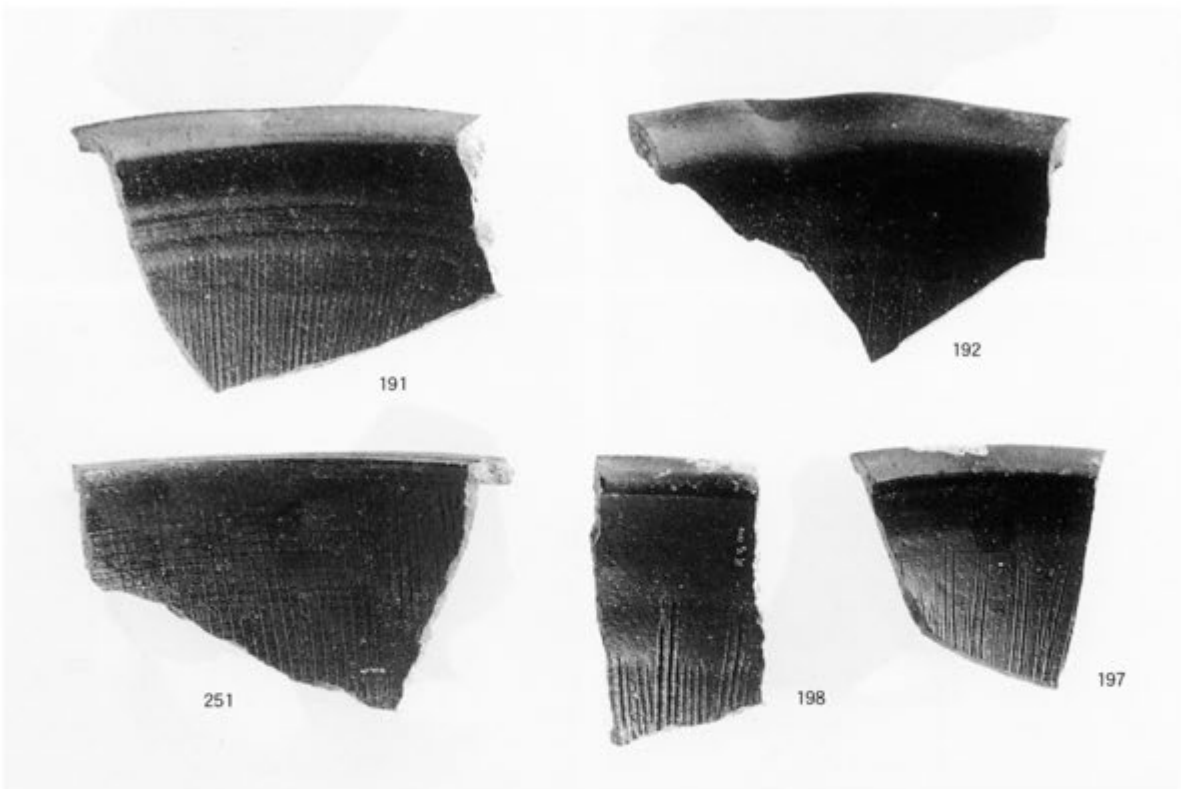
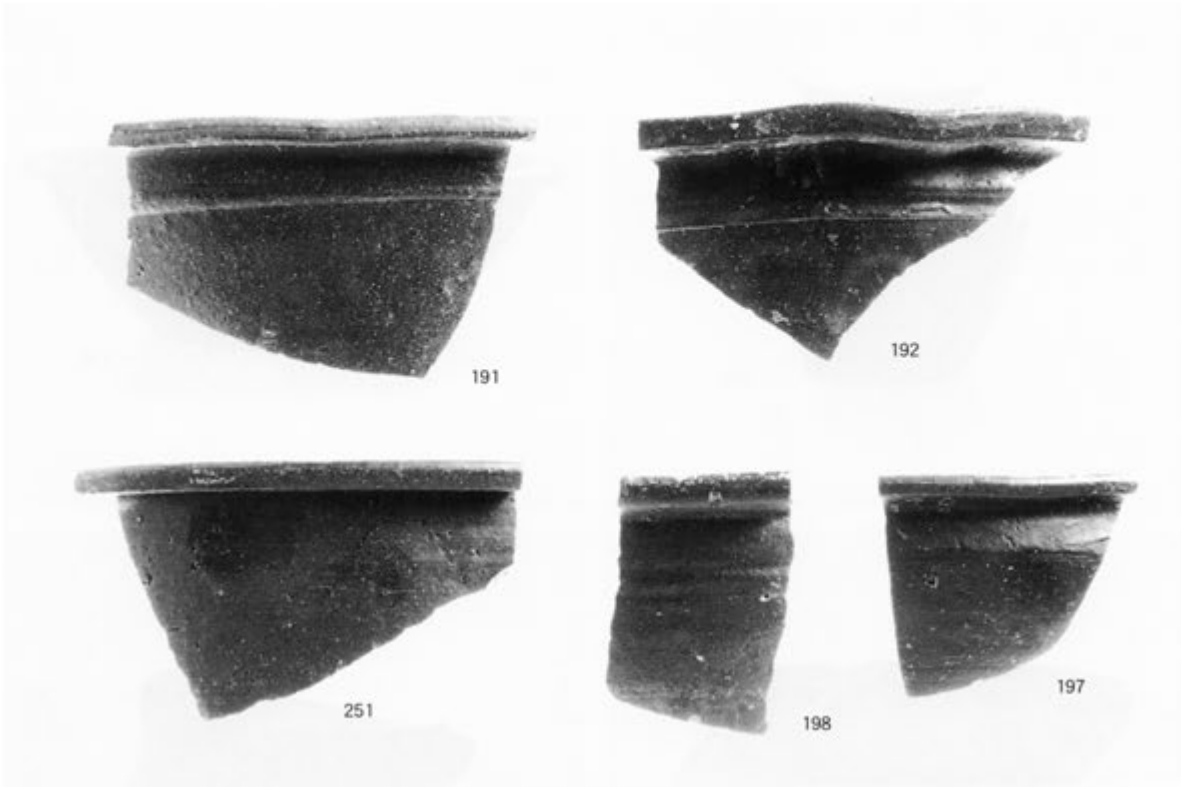
I 地区出土遗物 (磁器)



I 地区出土遺物 (陶磁器)



I 地区出土遺物 (陶器・灯明具・鉢・その他)



I 地区出土遺物 (陶器・播鉢)



I 地区出土遗物 (陶磁器)



265

① I 地区出土遺物 (土製井戸枠)



443

444

482

② I・II 地区出土遺物 (土製人形)



271



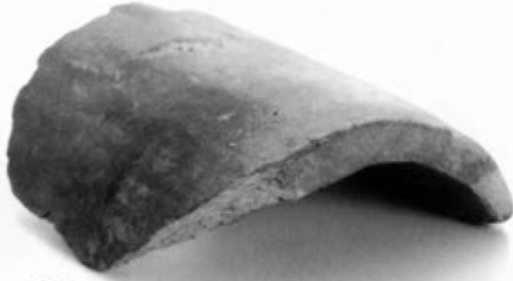
565

③ I・II 地区出土遺物 (瓦・平瓦・軒平瓦)



568

④ I・II 地区出土遺物 (瓦・軒平瓦)



269



560

① I · II 地区出土遗物 (瓦 · 丸瓦)



277



270



276



273



274

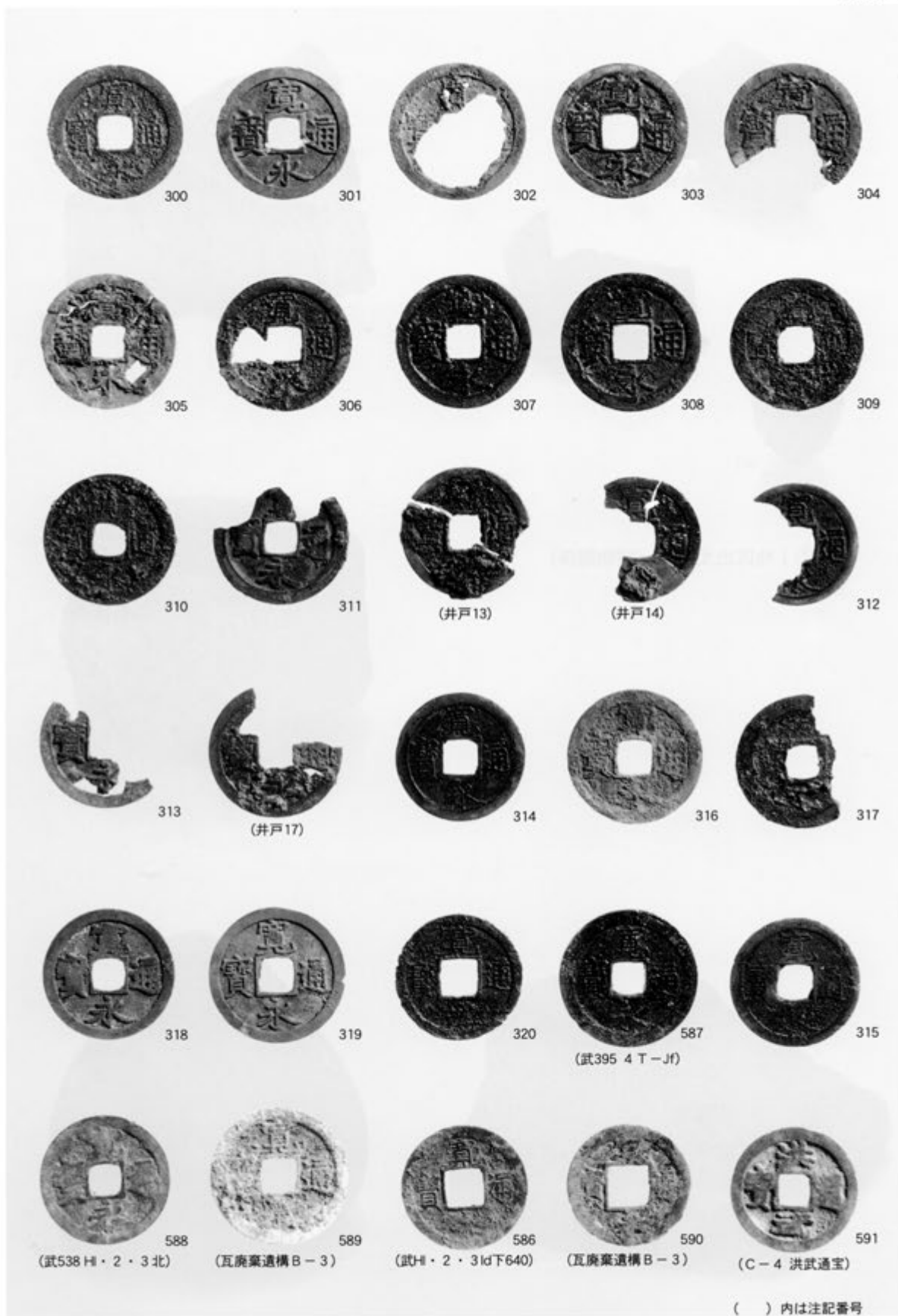
② I 地区出土遗物 (瓦 · 軒丸瓦 · 軒浅瓦)



I・II地区出土遺物（金属製品1）



I·II地区出土遗物（金属製品2）



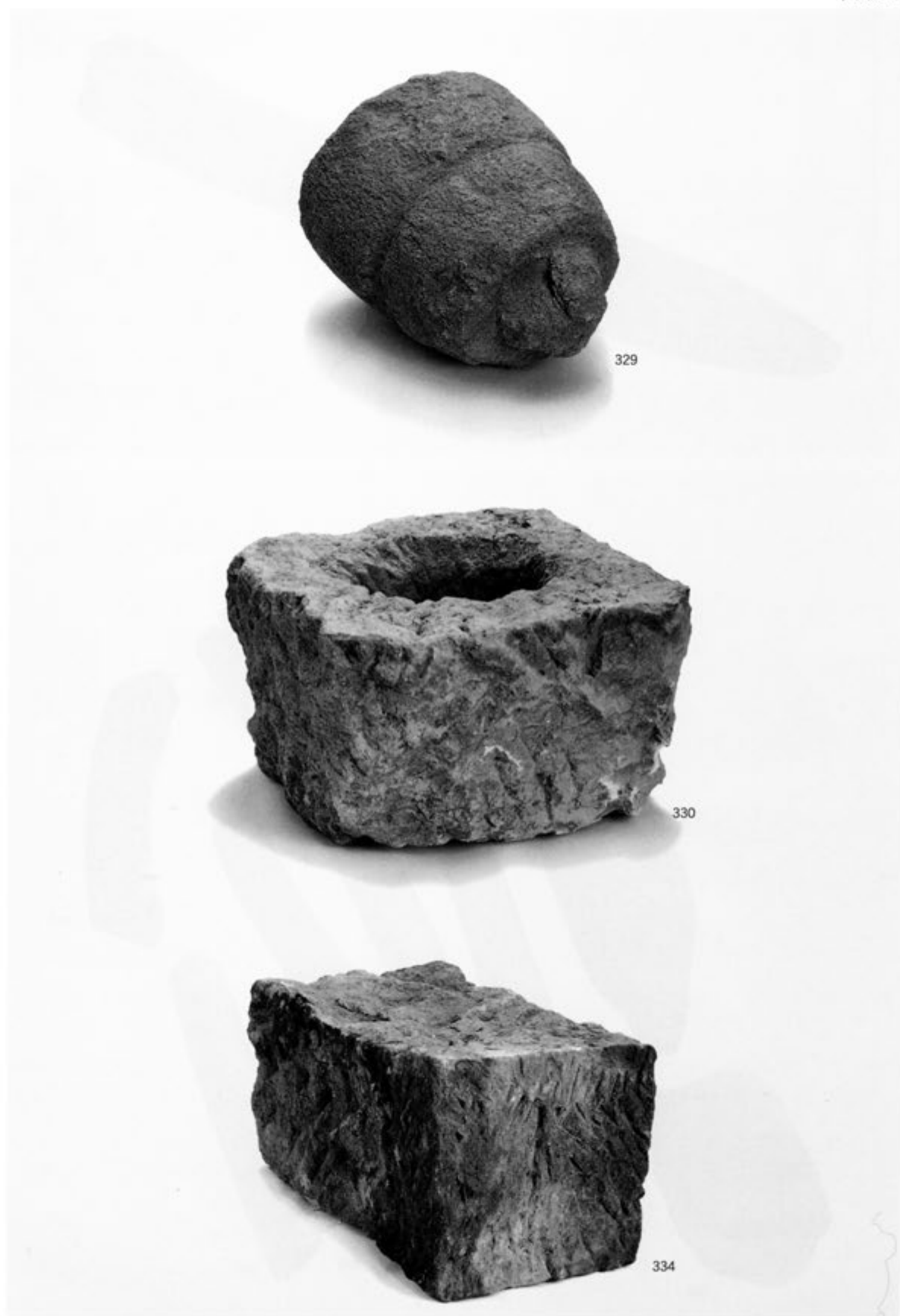
I・II地区出土遺物(銭貨)



① I 地区出土遺物（鋳物関係）



② I 地区出土遺物（石製品 1）



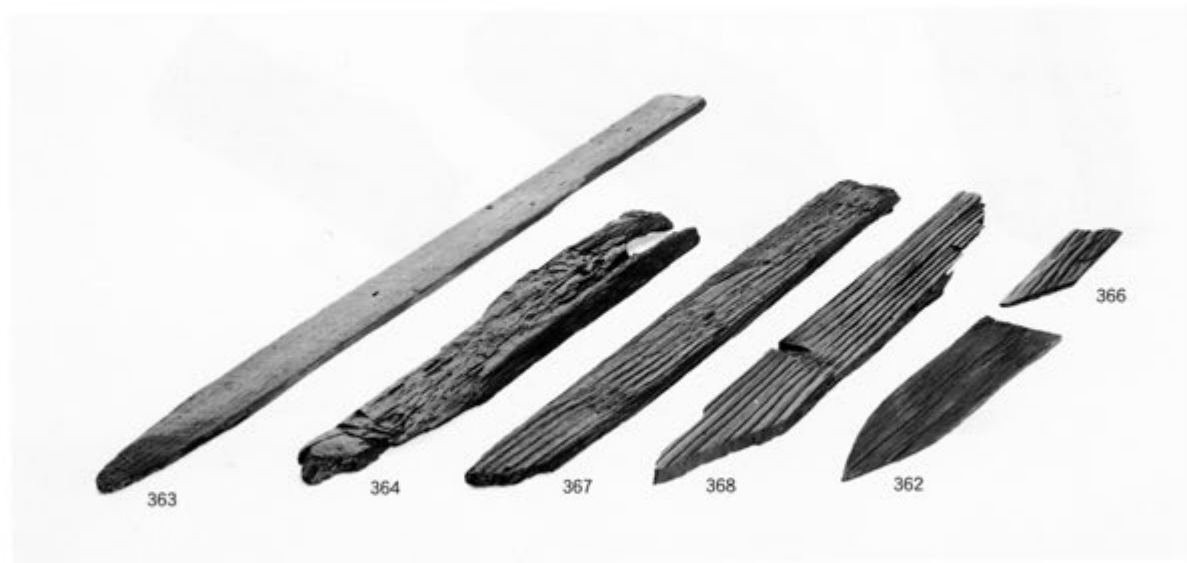
I 地区出土遺物 (石製品)



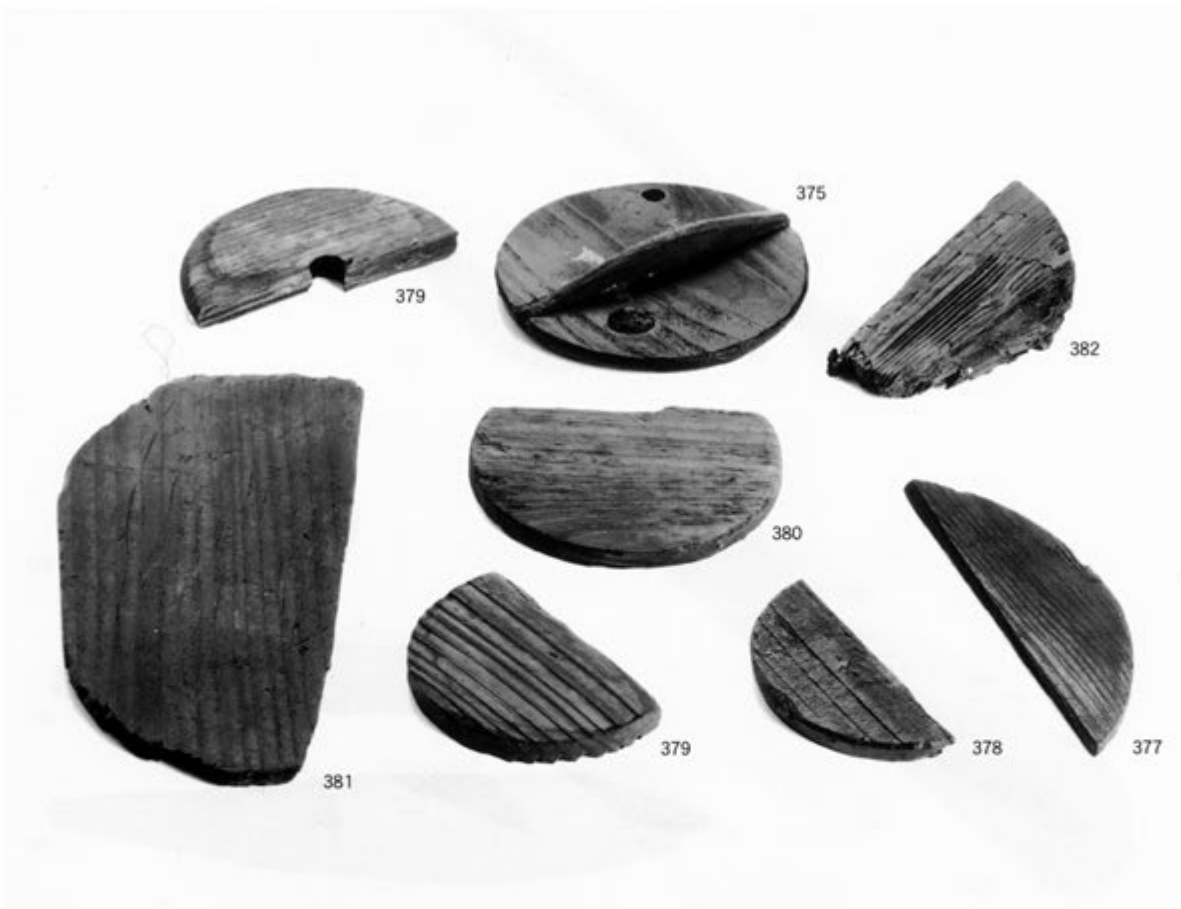
I 地区出土遺物 (木製品・杭状製品)



I 地区出土遺物 (木製品・棒状製品)

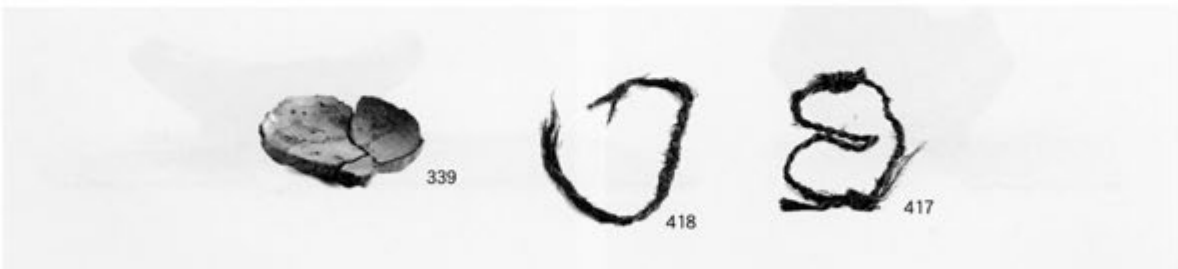
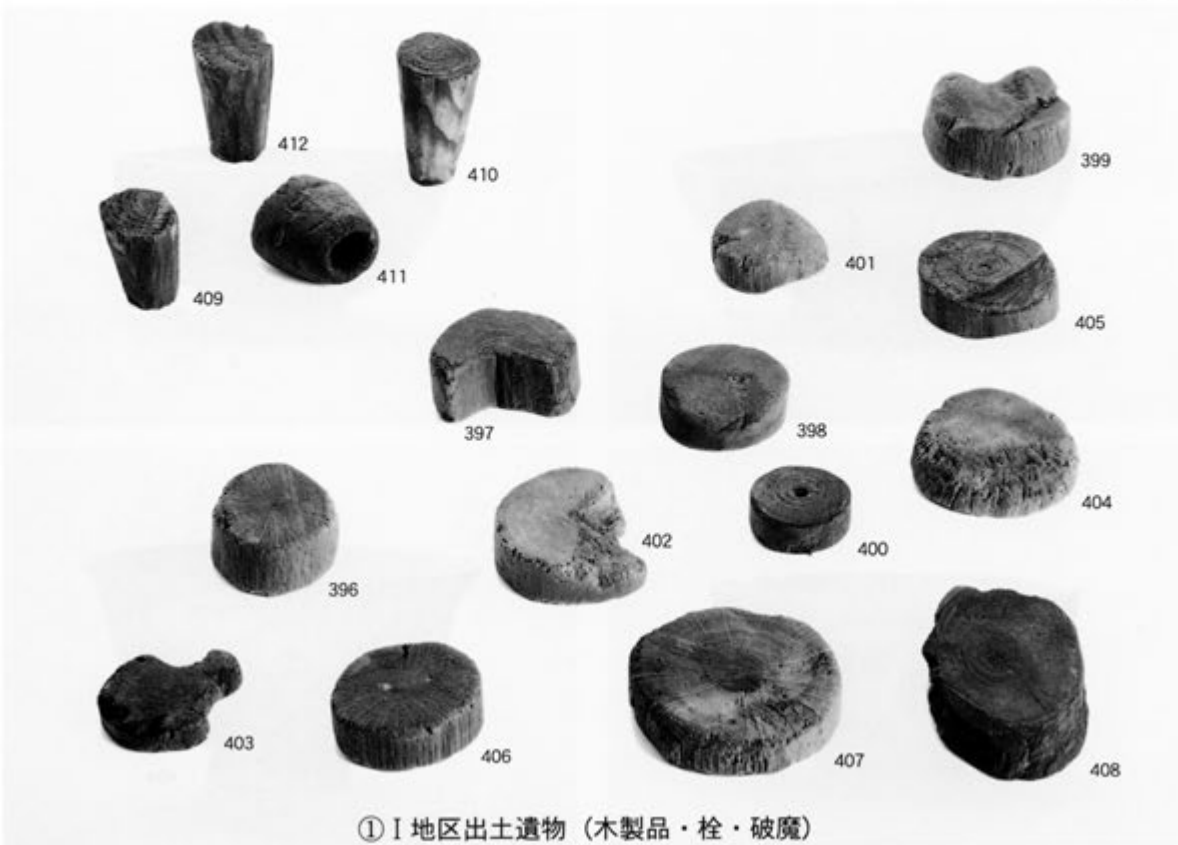


I 地区出土遺物 (木製品・板状製品)





I 地区出土遺物 (木製品・板状製品・雑器)



图版 51



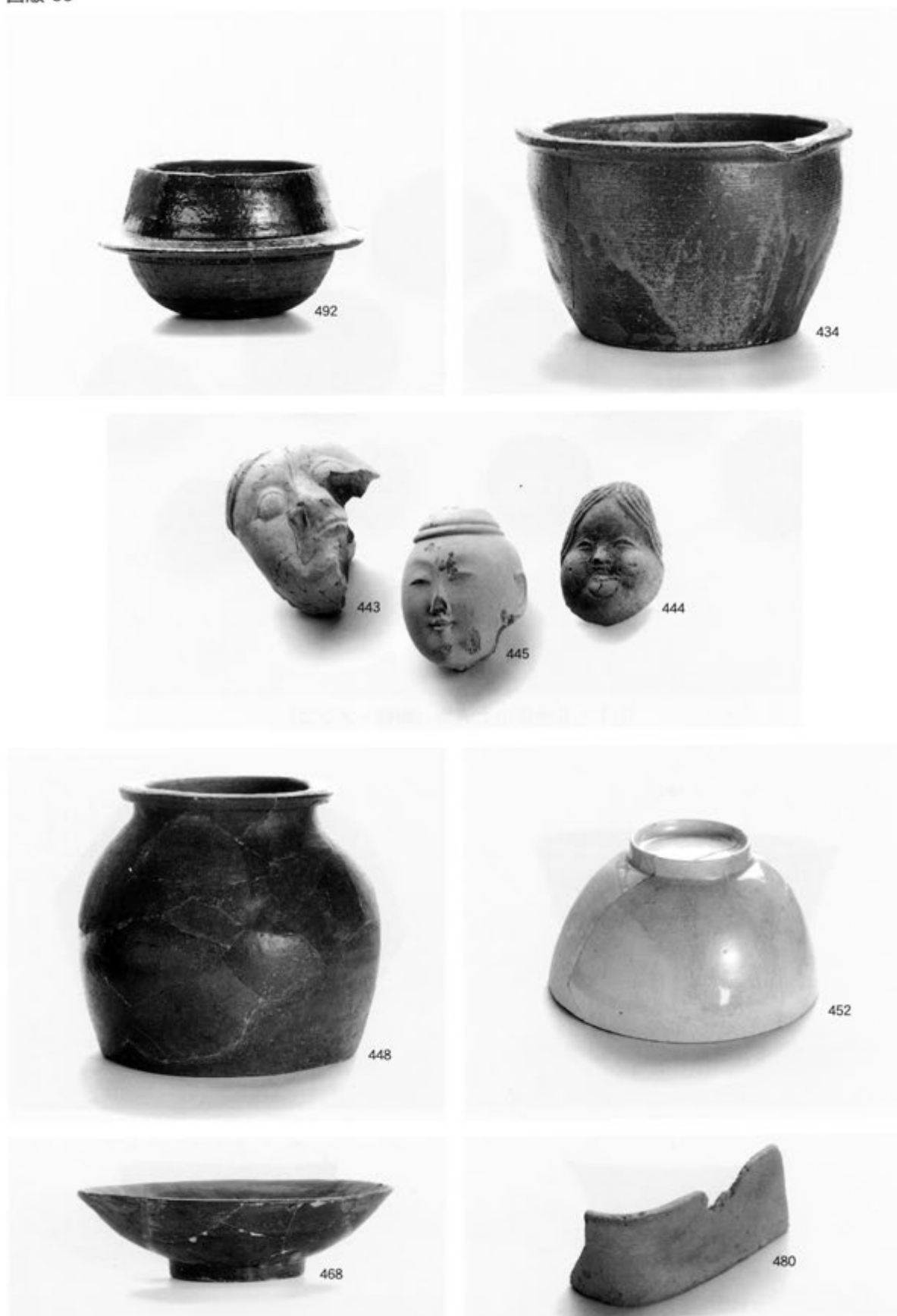
II地区出土遺物（磁器・碗）



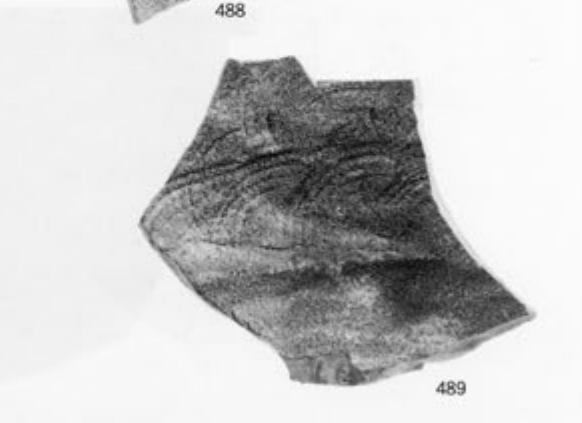
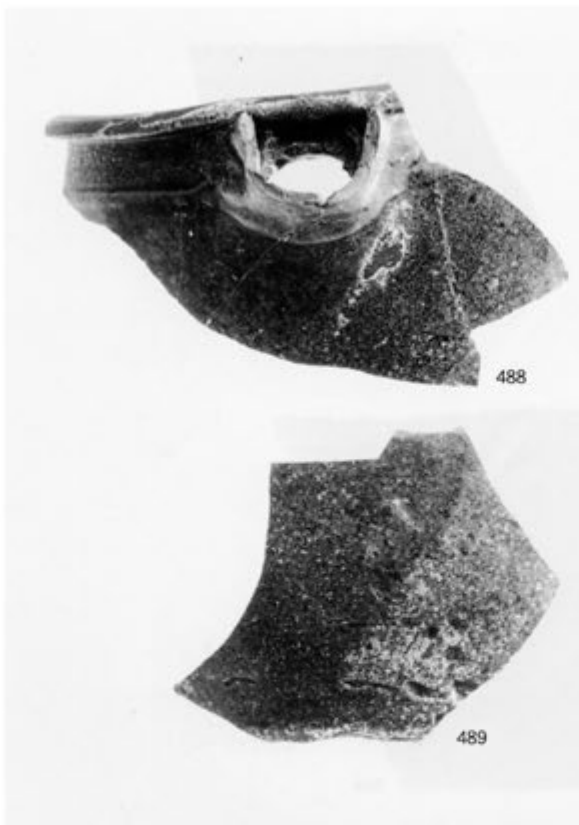
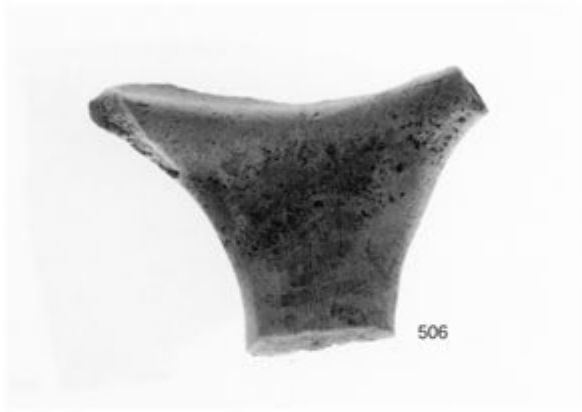
① I・II地区出土遺物（陶器・メンコ）



② II地区出土遺物（染付）



II 地区出土遺物 (陶器・薩摩焼・人形)



II地区出土遺物（陶器・搗鉢・片口・土師鍋把手）



II地区出土遺物（陶器・鉢）





II 地区検出獣骨

梅落遺跡

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は、九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業予定区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。それを受けて文化課は、平成4年12月に予定地内の分布調査を実施し、21か所の遺跡を確認した。また、西鹿児島駅舎予定地内の武A・B・C遺跡については協議の結果、それぞれ確認調査、緊急発掘調査が進められた。

その後、分布調査に基づいて、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局、県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センターの三者で新幹線ルート内の各遺跡の取り扱いについて協議し、平成8年度から用地取得等条件が整った遺跡から確認調査、緊急発掘調査を実施することとなった。

平成8年度は、出水市鳥越平遺跡の確認調査と川内市大原野遺跡の確認調査を実施し、大原野遺跡で上下2枚の遺物包含層が確認され、着工前に緊急発掘調査が必要となった。

平成9年度は、川内市大原野遺跡の緊急発掘調査を実施した後、川内市前畑遺跡の確認調査と部分的な緊急発掘調査とを実施した。

平成10年度は、川内市前畑遺跡のうち前年度未調査部分の緊急発掘調査と、ほか12か所の遺跡について確認調査及び緊急発掘調査を実施した。

平成11年度は、伊集院町内の梅落遺跡ほか4遺跡と鹿児島市寿国寺跡の確認調査及び一部緊急発掘調査を実施した。

平成12年度は、前年度未調査であった部分と、新たに用地確保がなされた部分とについて緊急発掘調査を実施した。

平成13年度は、寿国寺跡・梅落遺跡の整理・報告書作成作業を県立埋蔵文化財センター内で実施した。

第 2 節 調査の組織

事業主体者 日本鉄道建設公団九州新幹線建設局

調査主体者 鹿児島県教育委員会

調査企画調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所	長	吉永 和人 (平成11年度)
	々	所	長	井上 明文 (平成12～13年度)
調査企画者	々	次	長	黒木 友幸 (平成11～13年度)
	々	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋 (平成11年度)	
	々	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一 (平成12～13年度)	
	々	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一 (平成11年度)	
	々	主任文化財主事兼課長補佐	立神 次郎 (平成12～13年度)	
	々	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎 (平成11年度)	
	々	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志 (平成12～13年度)	

	県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	彌榮 久志 (平成11年度)
調査担当者	々	文化財主事	上之園建二 (平成11～13年度)
	々	文化財主事	八木澤一郎 (平成11・13年度)
	々	文化財研究員	馬籠 亮道 (平成12年度)
	々	文化財調査員	徳田有希乃 (平成12年度)
調査事務担当	々	総務係長	有村 貢 (平成11～12年度)
	々	総務係長	前田 昭信 (平成13年度)
	々	主 査	今村孝一郎 (平成11～13年度)
	々	主 事	溜池 佳子 (平成11～12年度)
	々	主 事	池 珠美 (平成13年度)

第3節 調査の概要と調査経過

1 調査の概要

(1) 平成11年度の調査（梅落遺跡の確認調査）

5月6日から調査条件の整った伊集院町山ノ脇遺跡から確認調査を開始した。梅落遺跡の確認調査は、5月19日からに着手した。未買収地や未撤去家屋があり、思うようなトレンチ設定が困難であったものの、用地交渉が成立した部分から確認トレンチを設定し、調査を実施した。途中、緊急度が高くなった鹿児島市武二丁目に所在する寿国寺跡の確認調査を優先したため、梅落遺跡の調査を中断することとなったが、6月17日までに、梅落遺跡内に遺物や遺構が存在することを確認したので、他の地点への確認調査に移行した。

(2) 平成12年度の調査（梅落遺跡の確認調査及び緊急発掘調査）

寿国寺跡の緊急発掘調査終了後、昨年度確認調査の未実施部分と、遺物包含層が確認された部分の緊急発掘調査を6月19日以降併行して実施した。確認調査で遺物等が確認され次第、出土状況に応じて範囲を拡大しながら調査を進めた。

その結果、縄文時代早期から近世までの遺物の出土が見られ、7月14日調査が完了した。

(3) 平成13年度の調査（整理・報告書作成作業）

県立埋蔵文化財センター内において、4月から寿国寺跡・梅落遺跡の整理・報告書作成作業を実施し、3月末埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行した。

2 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄より略述する。

(1) 平成11年度の調査

a 梅落遺跡の確認調査 <5月19日～6月11日, 6月14日～6月17日>

5月6日 梅落遺跡近くの山ノ脇遺跡より確認調査を開始する。

5月19日 梅落遺跡の確認調査を開始する。1T～4T掘り下げ。

遺物出土状況写真撮影。

～21日 1, 2, 4T掘り下げ。遺物取り上げ。

※ 緊急度が高いと判断された鹿児島市武二丁目に所在する寿国寺跡内の確認調査を優先したため、梅落遺跡の確認調査を中断することとなった。

6月14日 梅落遺跡確認調査再開。1, 2, 5, 6 T掘り下げ。

～17日 土層断面図作成。各トレンチ埋め戻し。未買収地等の調査を残して終了

(2) 平成12年度の調査

a 梅落遺跡の確認調査及び緊急発掘調査 <6月19日～7月14日>

6月19日 B-3～4, C～D-5～6, B～C-9～10区掘り下げ。

～28日 B～C-10～11区重機による表土除去。グリッド杭設定。

7月3日4地区掘り下げ。1号集石実測。遺物取り上げ。土層状況写真撮影。

～14日周辺地図作成。土層断面図作成。発掘地埋め戻し。

3 発掘調査及び報告書作成作業従事者

(1) 発掘調査作業従事者(平成11年度, 平成12年度)

有村克己 有村ひろみ 池田伊智子 今村良子 川路秋江 楠原操 佐伯イツ子 坂田重盛 坂元みどり 芝原ハルエ 末吉裕子 瀬戸正文 武田末武 西ノブ子 田中真由美 永野里枝子 橋口晶子 花山尚子 原之園笑子 東絹子 東鶴子 平岡栄子 外園三千代 外園ミネ子 前村昭己 屋地暁子 山内正子 山口ふみ 増満みき子 益山ヨリ子 松岡三郎 弓削一枝 天野豊子 有馬幸子 今村妙子 吉富みどり 吉村より子 宇都妙子 仮屋郁夫 川路秋江 岸上正子 久保紀子 園田辰夫 尾堂佳代美 大内山秋子 高倉孝子 堀内朗子 松尾スミエ 南ノブ子 宮下巧 宮下マキ子 森田辰夫 山口節子 茶屋道良子 松山敬子 脇マス子 馬場園七百子

(2) 報告書作成作業従事者(平成13年度)

川畑明子 木佐貫いく子 久保マリ子 竹下美和子 藤田ひとみ 堀口由美子 福重恵子 山之内美和子 山下道代

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

梅落遺跡が所在する伊集院町は、鹿児島県本土のほぼ中心にあたる鹿児島市の西隣りに位置する。周囲を山地に囲まれ、北には重平山、南には矢筈岳・諸正岳を望む東西150m前後のシラス台地となっている。大部分は丘陵地帯で、シラスをはじめとしていろいろな火山噴出物が堆積している。特に伊集院町の西南部と東部には標高150m前後の台地が続き、中央部はこれらの諸丘陵に囲まれた標高70～80mの盆地帯となっている。町の中心部を北から南西部に流れる神之川の本流やその支流の野田川・下谷口川・長松川の流域には河岸段丘が形成され平地が開けている。その開けた平地部に市街地が形成されている。

梅落遺跡は、伊集院町のほぼ中央部、神之川により形成された河岸段丘上の標高約100m部分に位置する。

第2節 歴史的環境

伊集院町における先史時代の遺跡は、旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物や縄文時代早期前葉の竪穴住居跡や連穴土坑等が見つかった永迫平遺跡や、旧石器時代や縄文時代の良好な遺構・遺物が見つかった瀬戸頭遺跡や竹之山遺跡等の古い時代の遺跡が多く存在する。伊集院町には、古代には、租税の物品を収納し管理する倉庫（倉院または院）が置かれたといわれ、その町名の由来にもなっている。梅落遺跡の周辺には、諏訪免遺跡、西原・山ノ脇・石坂遺跡、上ノ平遺跡などがあり、縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世など各時代の遺構・遺物が数多く見ついている。新幹線建設に伴い発掘調査が実施された山ノ脇遺跡では大規模な掘立柱建物跡が数多く検出され、越州窯青磁や龍泉窯青磁など、古代から中世にかけての遺物が多く出土している。

ここ伊集院は、中世から近世にかけて、島津氏をはじめとして多くの有力者たちが各々の土地を所有し、また、その所有をめぐる、幾たびかの抗争を繰り返していたようである。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考 (遺物他)
1	小竹下遺跡	桑畑字小竹下	古墳	土器片
2	上ノ平遺跡	下神殿四区	縄文, 中世	縄文土器, 石器, 青磁, 須恵器
3	宮田遺跡	下神殿字宮田	古墳	土器片
4	平等寺跡	麦生田字山下42	中世	入定窟・石塔
5	石坂遺跡	郡字石坂	縄文, 古代	石器, 土師器, 須恵器, 青磁
6	山ノ脇遺跡	郡字山ノ脇	縄文, 中世	深浦式土器, 掘立柱建物跡, 青磁
7	西原遺跡	郡字西原	縄文, 中世	石器, 青磁, 土師器, 溝跡
8	諏訪免遺跡	郡字諏訪免	縄文	
9	後宮田遺跡	郡字後宮田	古代	土師器片
10	黒木田遺跡	郡字黒木田	古代	土師器片
11	郡遺跡	郡		石器, 壺形土器, 坏
12	一字治城跡	大田	鎌倉初期	伊集院郡司紀四郎時清が館を構えたのが始まり
13	柳原遺跡	下谷口字柳原	古代, 中世	土坑, 溝, 土師器, 須恵器
14	下永迫A遺跡	下谷口字下永迫	古代, 中世	土師器, 須恵器
15	永迫平遺跡	下谷口字永迫平	旧石器, 縄文早期	竪穴住居跡, 石器, 土器片
16	猪鹿倉遺跡	猪鹿倉141-1		磨製石斧 (大・小石斧)
17	鍋倉遺跡	清藤鍋倉	縄文時代	角形土器 (前平式?)
18	碓ノ谷遺跡	下土橋	古代	



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅲ章 調査概要

第1節 発掘調査の概要

平成11年度の調査は、用地交渉が成立した場所から確認トレンチを設定し、実施した。その結果、縄文時代早期から中・近世の時期に至る、遺物・遺構の存在することが確認された。平成12年度の調査では、前年度に確認調査ができなかった部分の調査を進めつつ、遺物等の出土状況に応じて、範囲を拡張して、緊急発掘調査を実施した。

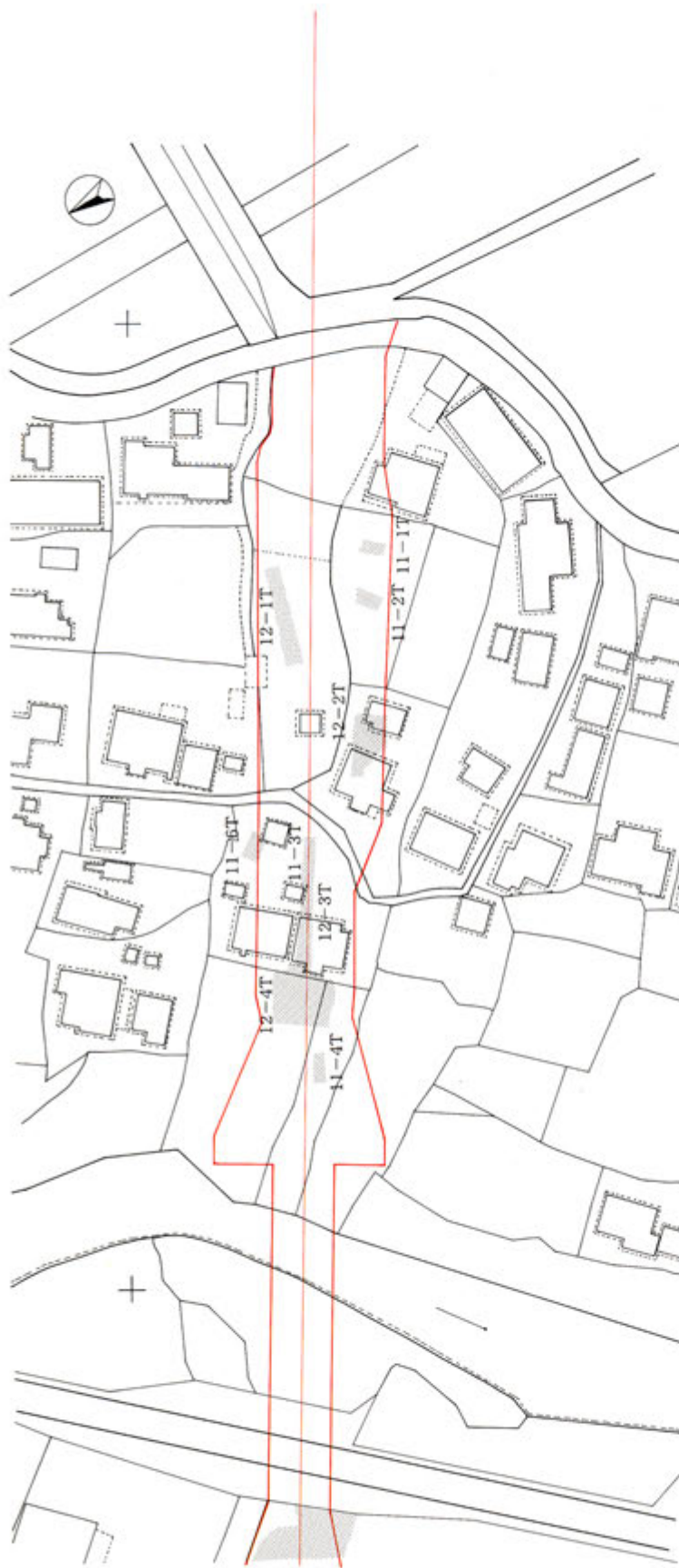
発掘調査は、対象区域に10mグリッドを設定して実施した。グリッドは調査区の最も東側をA-1区とし、北西へ1～12区、南西へA～D区の名称を付した。調査の結果、住宅建設などの造成工事による削平や、タケノコ栽培での攪乱が、遺物包含層にまで達しているところが多いことが明らかとなり、良好に遺物が残存しているところはあまり見られなかった。

第2節 層位

遺跡内の地層は、場所によって層序に若干の相違があるが、基本的には。層耕作土からⅧ層シラスまで第3図のように8層に区分できる。

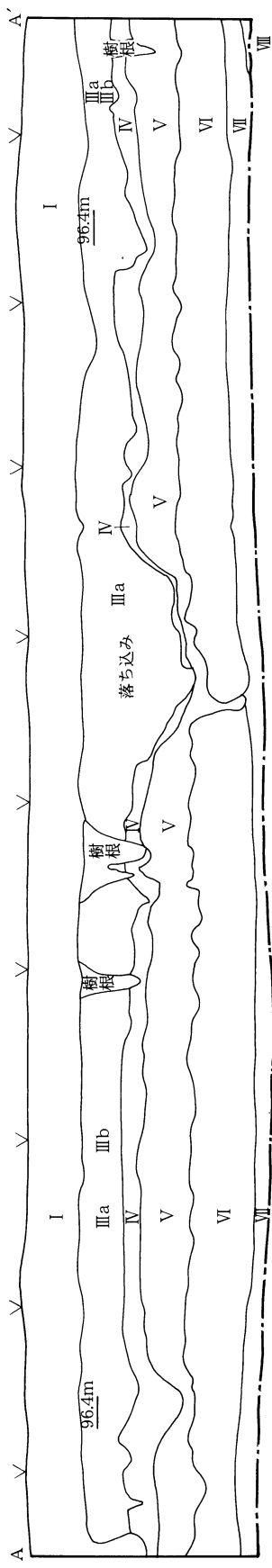
I	I層 表土。暗茶褐色の耕作土や造成土。
II	II層 黒色腐植土。I層の下にすぐⅢ層が堆積しているところが多く、ほとんど観察できなかった。
III	III層 暗黄白色火山灰土。鬼界カルデラ火山噴出物（アカホヤ火山灰）。下部に黄橙色軽石が見られる。
IV	IV層 暗黄褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で、比較的細粒である。
V	V層 黒褐色火山灰土。黒色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。
VI	VI層 暗黄橙色火山灰土。
VII	VII層 暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強い。
VIII	VIII層 シラス。

第2図 基本土層図



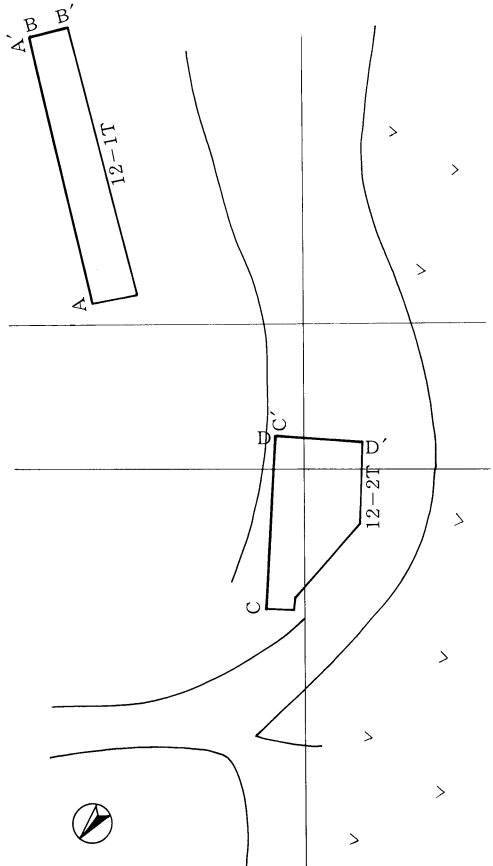
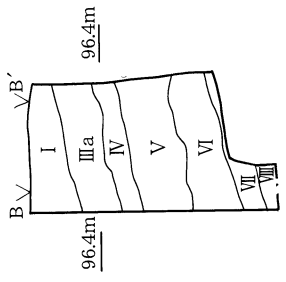
凡例
 ・11-OT...平成11年度トレンチ名
 ・12-OT...平成12年度トレンチ名

第3図 梅落遺跡調査区全体図

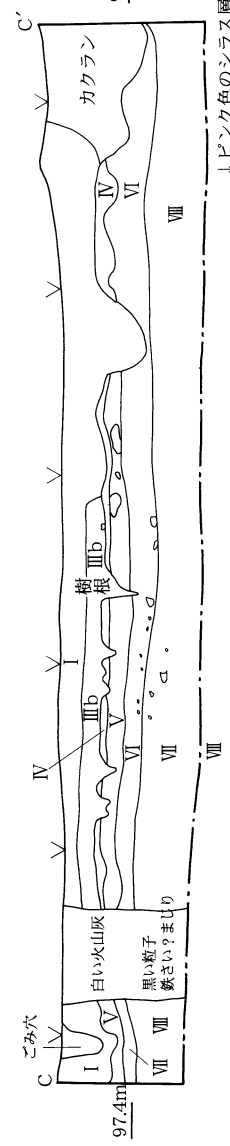


12-1 トレンチ北東壁土層断面図

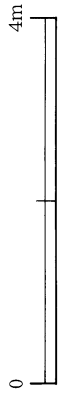
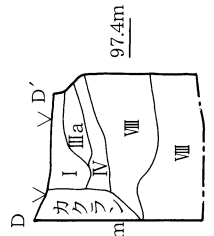
- I 層：暗茶褐色砂質土層 (表土)
- IIIa 層：暗黄褐色土層 (アカホヤ)
- IIIb 層：明茶褐色バズ (IIIa層下面で観察できる)
- IV 層：暗黄褐色～暗茶褐色土層
- V 層：黒色～黒褐色土層
- VI 層：黄褐色～明茶褐色土層 (桜島薩摩バミス)
- VII 層：黒褐色粘質土層 (チョコ層)
- VIII 層：シラス



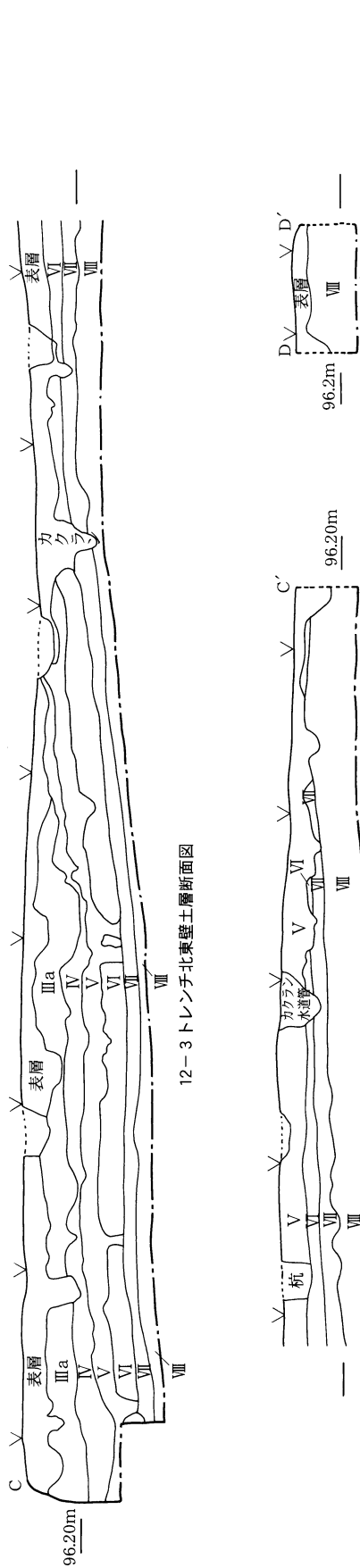
- I 層：暗茶褐色砂質土層 (表土)
- IIIa 層：暗黄褐色土層 (カクラン土)
- IV 層：暗黄褐色土層
- V 層：黒黄褐色土層
- VI 層：黒茶褐色土層 (チョコ相当層)
- VII 層：明黄灰色土層
- VIII 層：シラス



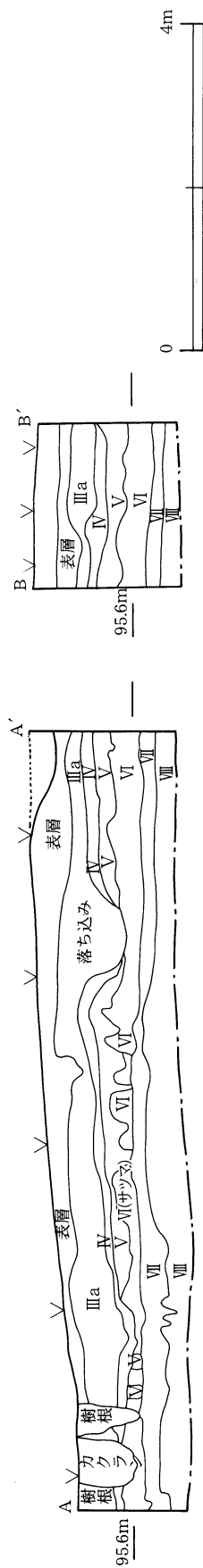
12-2 トレンチ北東壁土層断面図



第4図 1 T・2 T土層断面図

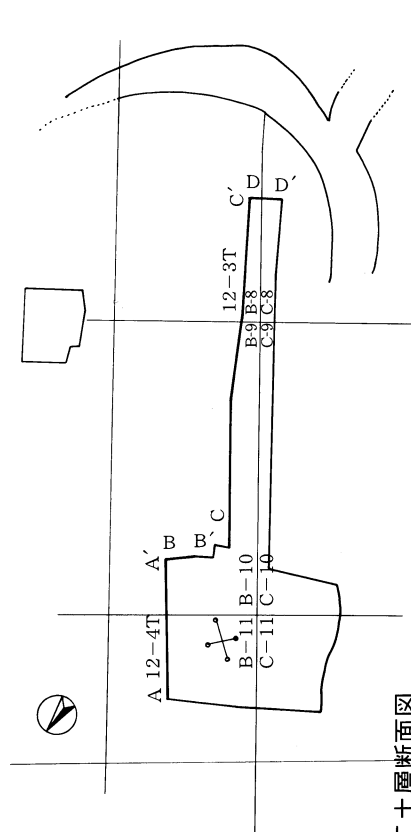


12-3 トレンチ北東壁土層断面図



12-4 トレンチ北東壁土層断面図

表層：ガレキまじり
 IIIa層：少し濁った黄褐色土層（アカホヤ）
 IV層：暗黄色土層
 V層：黒黄褐色土層
 VI層：明黄褐色～暗黄褐色砂質土層（桜島薩摩バミス）
 VII層：黒褐色粘質土層（チヨゴ層）
 VIII層：シラス



第5図 3T・4T土層断面図

第3節 発掘調査の成果

1 検出遺構（第6図，図版3）

集石遺構は，神之川河岸の頂上近くにあたる，B-11区で1基検出された。大きさは，長径70cm，短径50cmの楕円形状に礫が集中して検出され，さらに長径2.5m，短径2mの範囲に散らばった礫が広がっていた。掘り込みは検出できなかった。集石遺構を構成していた礫は100個以上あり，大きさはほとんどが拳大ほどであった。石材は安山岩が大部分で，熱を受けたとみられる礫もあった。

2 出土遺物（第7図，図版4）

1は第6トレンチの第V層から出土した石器である。大きさは，長さ6.5cm×幅5.5cm×厚さ4.5cm重さ214gを測るものである。石材は安山岩である。色調は半面が明茶褐色，半面が灰色をなしている。灰色の面には，ひびや一部破砕痕がみられる。使用痕は幅の狭い面に叩き痕と，一部に磨かれた面がみられる。このことから，この遺物は敲石と磨石に使用されたものと考えられる。なお，この石器は集石の石として使用されたらしく，火を受けた痕跡がみられる。

2はB-10区第IV層から出土した土器である。部位は胴部にあたり，若干，外に開く器形である。外面には，幅の広い菱形（1.0×0.5cm）をした押型文を施す。内面には文様がみられず，篋状工具でナデ調整をしている。色調は，外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。胎土には石英・長石がみられ，質が良い。焼成は良く，硬質に仕上がっている。

3はB-4区第IV層から出土した土器である。部位は底部近くで丸味をもっている。文様はみられない。調整は外面が丁寧で，内面が荒い調整をしている。色調は，外面が赤褐色で内面が茶褐色である。胎土には石英・長石がみられ，質がよい。

4はB-11区第Ⅲb層から出土した土器である。部位は胴部で，若干，外に開く器形である。文様は縦位に施した結節縄文である。色調は，外面が明茶褐色を，中は黒茶褐色を呈している。胎土は石英・長石がみられ，質が良い。焼成は良い。

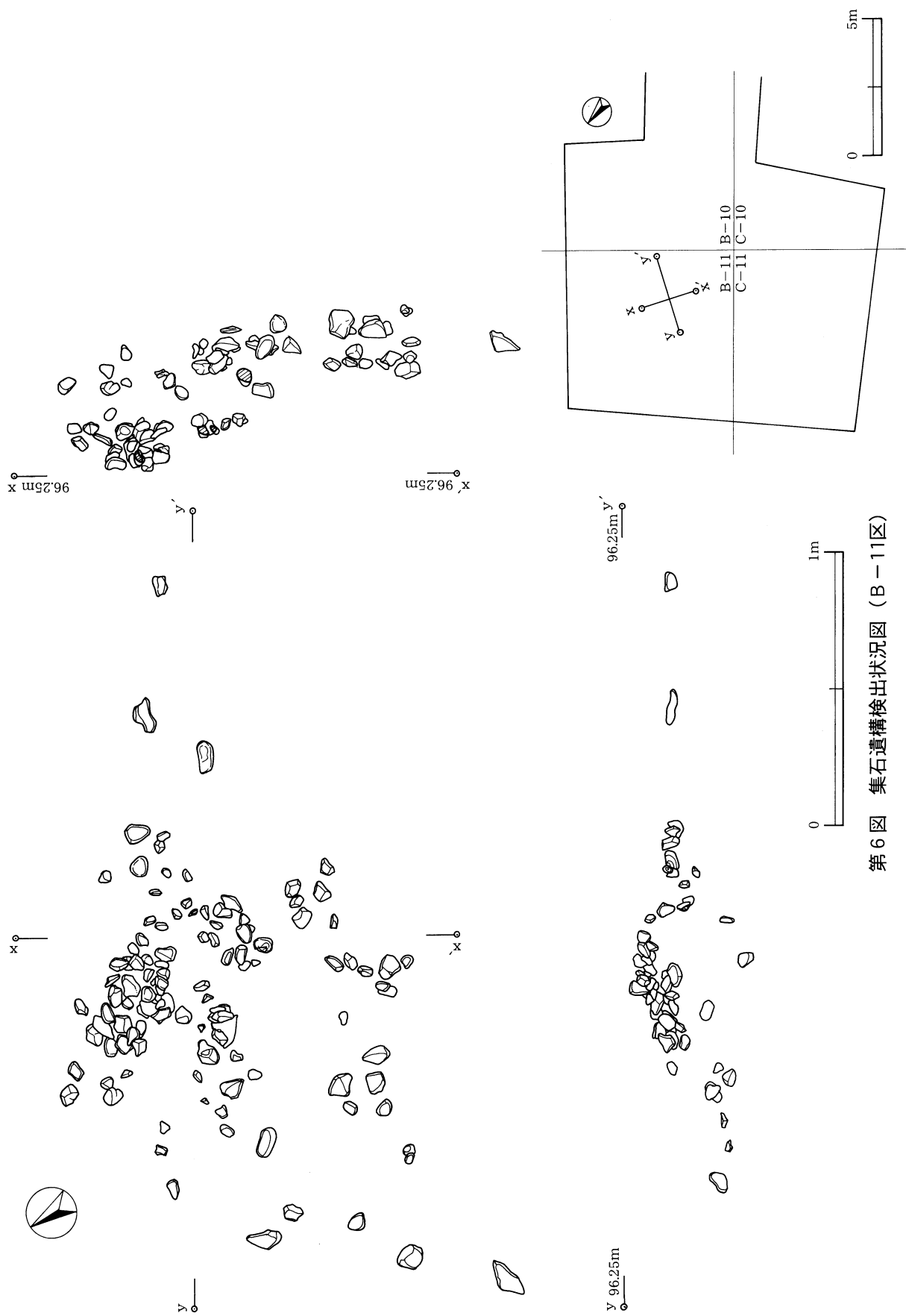
5はC-10区第Ⅲb層から出土した土器である。部位は胴部で，若干，上に開いている器形である。文様は縦位に施した結節縄文である。色調は，外側が黄茶褐色で内面が黒褐色を，中は褐色を呈している。胎土は石英・長石がみられ，質は良い。焼成も良い。5と同一個体の可能性がある。

6はB-6区第Ⅲ層から出土した石器である。大きさは，最大長5cm・最大幅8cm・最大厚1cmである。片面を3回位で大きく剥離して厚さを調整し，両縁を整え，鋭利な刃部は交互剥離を施している。石材は，灰色の不純物が混入している玻璃質安山岩と思われる。スクレイパーと考えられる。

7は第5トレンチの表層から出土した陶器である。器形は径16.8cmの小型の甕である。形は内側に傾き，口縁部は蓋を受けるように大きく外側に閉じている。色調は中は赤茶褐色で，表面は灰釉がかかっており，焼成は良い。

8は第2トレンチ第Ⅱ層から出土した近世の土師質土器である。器面はロクロ調整痕がみられる。色は黄白色で無施釉である。器形は蓋あるいは底部とも考えられる。折り返し反しがみられる。

9は第5トレンチの表層から出土した，角張った高台をもつ青磁碗である。釉の色調は緑茶褐色で，高台内側以外にかかっている。高台内側の露胎は灰褐色で，胎土の質は細かい。時期は13世紀前半と思われる。



第6図 集石遺構検出状況図 (B-11区)

第2表 梅落遺跡出土遺物観察表

挿図番号	レイアウト番号	器種	出土地点	出土層位	注記番号	法 量			備考
						長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	
7	1	磨石・敲石	Tb	V	18	6.20	5.80	214.00	
	2	土器	B10	IV	20	(4.20)	0.90	13.31	押型文
	3	土器	B4	IV	23	(3.00)	1.00	7.82	縄文晩期
	4	土器	B11	IIIb	24	(3.00)	0.80	7.78	平椀式
	5	土器	C10	IIIb	26	(3.00)	0.80	14.48	平椀式
	6	スクレイパー	B6	III	22	5.00	7.80	37.69	
	7	土器	T5	表		(口)7.2	(4.40)	25.72	
	8	土器	2T	II	15	(口)6.1	(1.70)	2.73	
	9	土器	T5	表		(底)6.0	(2.45)	55.18	青磁

第4節 まとめ

今回、調査した梅落遺跡は小台地（河岸段丘）の頂上部分にあり、地形的に良好な地であったので期待しての発掘調査であった。その結果、遺物は出土するものの極めて少量であり、しかも宅地造成時に遺物包含層のほとんどが削平されたと考えられ、顕著な遺構の検出や遺物包含層の大きな広がりには確認できなかった。しかし、周辺の畑地から土器片や石鏃などの石器類が見つかることから、周辺部に遺構・遺物包含層が存在する可能性は高いと考えられる。

1 遺構について

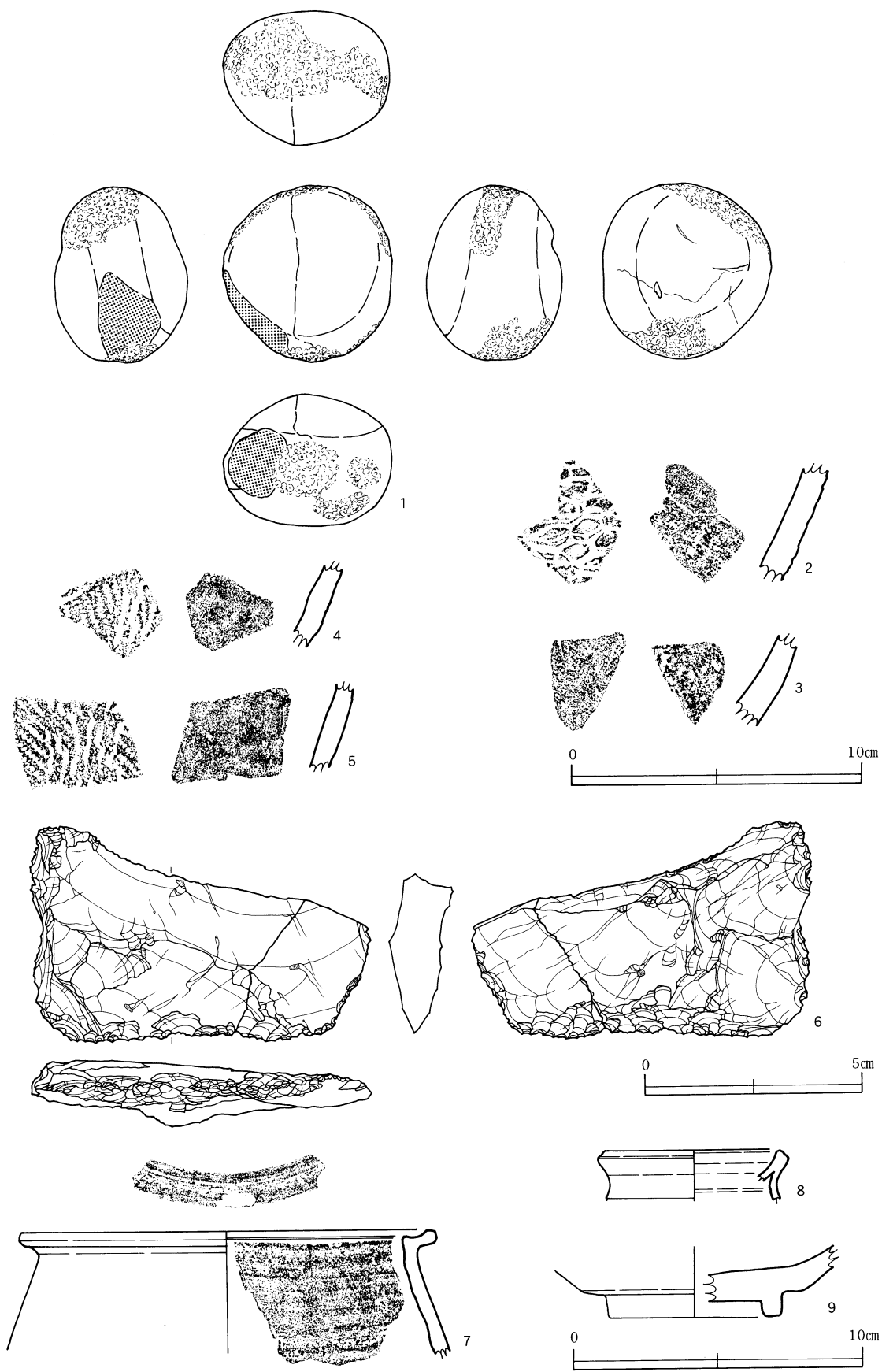
今回の調査では、集石遺構が1基のみ検出された。竹の根にからまった状態で検出されたため、層位を確認することは困難で、所属時期は不明瞭である。周辺から、縄文時代早期の平椀式土器や押型文土器が出土していることから縄文時代早期の時期のものと考えられる。

2 遺物について

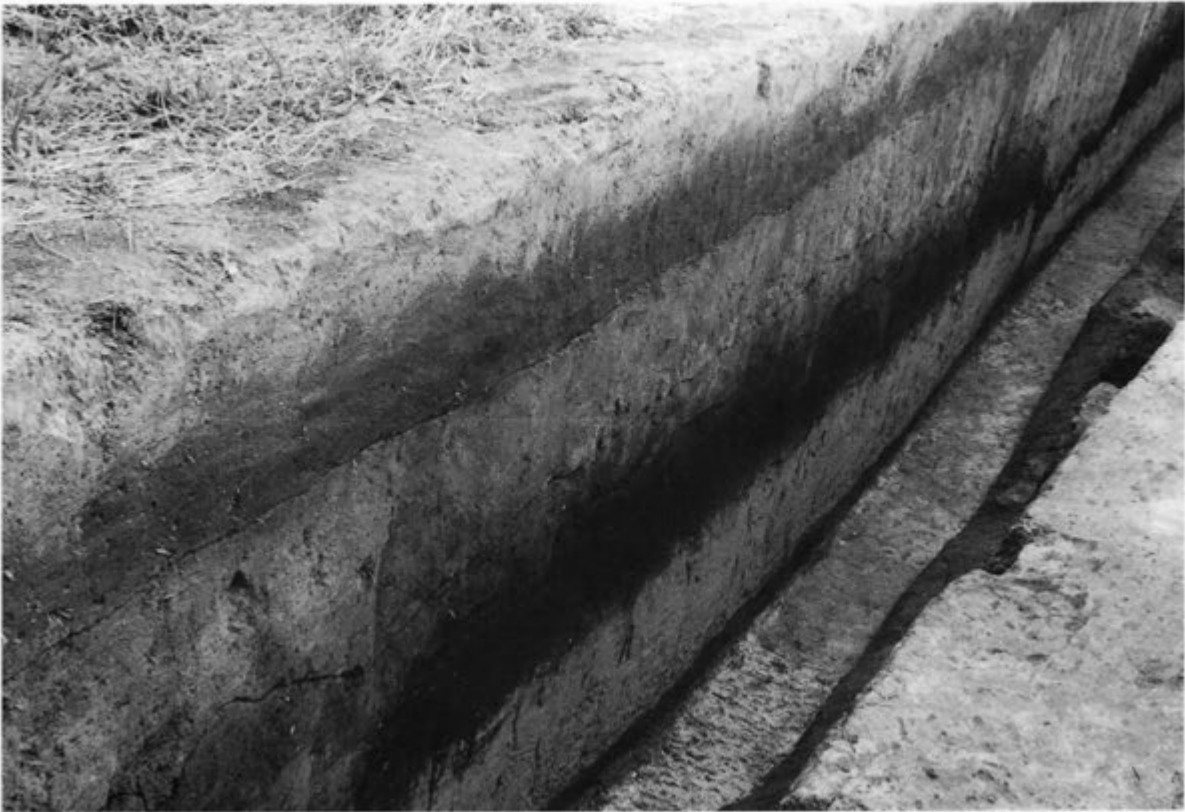
出土した遺物は、9点と点数は少なかったが、縄文時代早期、縄文時代晩期、中世、近世の様々な時代・時期の遺物が観察できた。

縄文時代の遺物は、平椀式土器、押型文土器、黒曜石製のスクレイパー、縄文晩期の時期に属する土器などが出土した。

中世の遺物は、青磁の底部が出土している。近隣の山ノ脇遺跡では同時期の遺物が多く出土していることから、両遺跡は密接な関係にあったと想定できよう。



第7图 梅落遺跡出土遺物 土器・石器・陶磁器



① 1 T 土層断面状況



② 3 T 土層断面状況

図版 2



① 2 T 西壁土層断面状況



② 3 T 西壁土層断面状況



③ 3 T 遺物出土状況



④ 梅落遺跡完掘状況



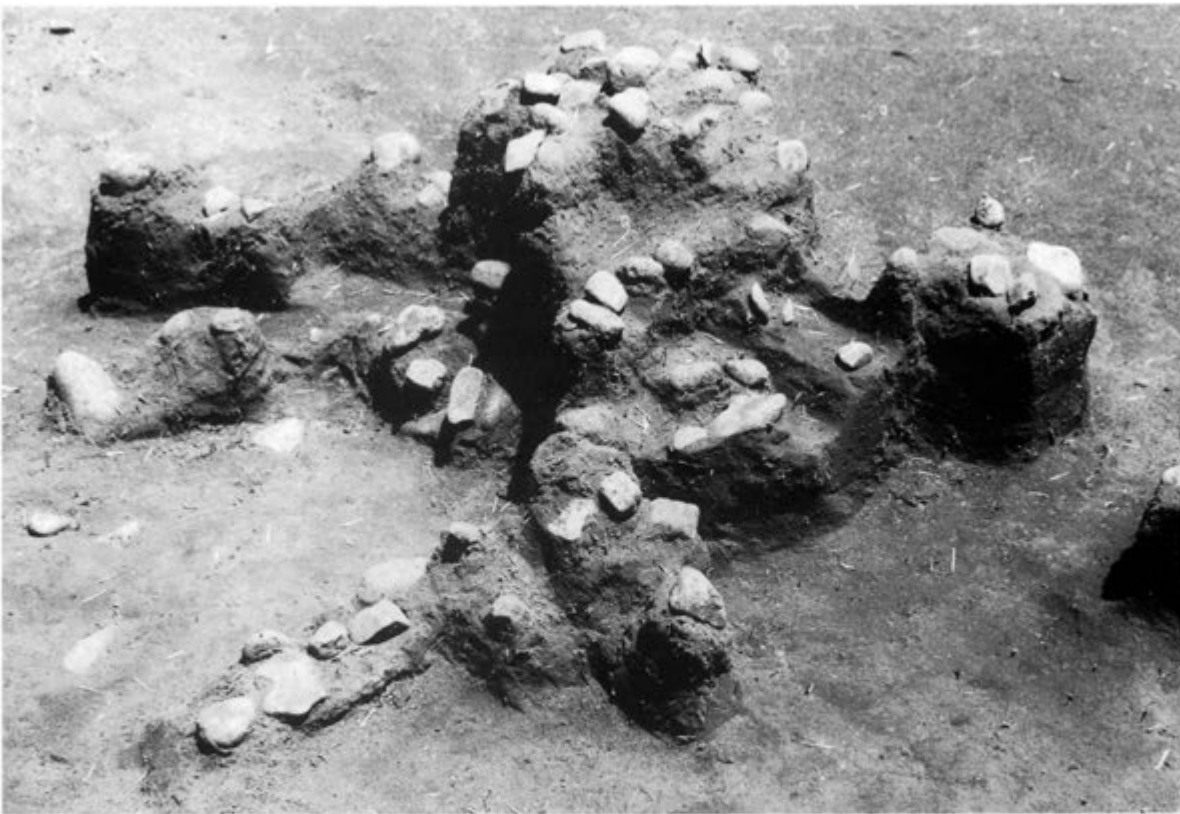
① 5 T 北壁土層断面状況



② 6 T 北壁土層断面状況



③ 6 T 西壁土層断面状況



④ 集石遺構検出状況 (B-11区)



梅落遺跡出土遺物 (石器・土器・陶磁器)

あ と が き

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って実施した『寿国寺跡・梅落遺跡』発掘調査の報告書を新幹線開通に先立って、刊行することができました。

西鹿児島駅の西側に、江戸時代、わが薩摩藩において、最大規模であったという寿国寺に係る門前池が眠っていました。石積みの見事さは、後生の私たちの目を驚かせました。また、その周囲から出土した遺物の数々は、当時の生活の様子を垣間見るに貴重な資料となるのではないでしょうか。

これらの貴重な資料の数々は、直接、発掘調査あるいは報告書作成作業に携わってくださった方々の努力と、日本鉄道建設公団をはじめ、多くの方々の協力の賜物であると思います。

限られた期間内での発掘調査及び報告書作成作業であったため、十分に研究・検討ができず、不足する部分が多いと思いますが、この報告書の刊行が少しでも古代生活解明の一助となれば、幸いです。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(40)
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

寿国寺跡・梅落遺跡

発行日 平成14年3月29日
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地
☎(0995)65-8787
印刷所 濱島印刷株式会社
〒891-0122 鹿児島市南栄3丁目1番地
☎(099)268-6191